

下総町名木天神台遺跡

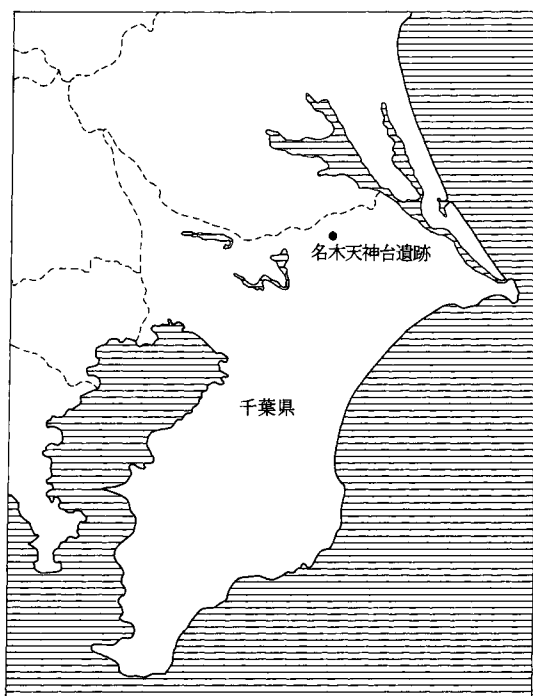
—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅷ—

平成 11 年 3 月

千 葉 県 土 木 部
財団法人 千葉県文化財センター

しもふさ なぎ てんじん だい
下総町名木天神台遺跡

—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅷ—





名木天神台遺跡南半部

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第371集として、千葉県土木部の一般県道成田下総線建設事業に伴って実施した香取郡下総町名木天神台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良時代の集落跡や中世の掘立柱建物跡群の一端が発掘されるなど、この地域の古代及び中世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護のために広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡下総町名木字向山752-6ほかに所在する名木天神台遺跡（遺跡コード341-002）である。調査区を横断する町道以北は調査当時、鍛冶内遺跡と称されていた。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長鈴木道之助（昭和61）、同堀部昭夫（昭63～平成元）、班長矢戸三男（昭和61、63）、同藤崎芳樹（平成元）、東部調査事務所長石田廣美（平成8～9）、同三浦和信（平成10）の指導のもと、発掘調査は主任調査研究員宮重行、同岡田誠造、同鳴田浩司、調査研究員麻生正信、同海老原充、主任技師今泉潔、同上守秀明が、整理作業は副所長宮重行、同雨宮龍太郎が下記の期間に実施した。なお、主要土器の実測は整理課主任技師高梨俊夫・同整理技術員大久保奈奈が行った。

発掘調査 昭和61年11月4日～昭和61年11月25日

昭和63年10月27日～平成元年3月30日

平成元年7月6日～平成元年11月15日

整理作業 平成8年5月16日～平成10年8月31日

- 5 本書の執筆は、副所長雨宮龍太郎が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、下総町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐原西部」(N-54-19-9-2)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 本書で使用した遺構番号の一部は、編集の都合上調査時の番号と異なる。
- 10 挿図に使用したスクリーントーンの用例は、次のとおりである。

カマド



土 器



本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	遺跡の位置と環境	1
第3節	調査の概要	3
第2章	検出された遺構と遺物	4
第1節	概要	4
第2節	旧石器時代	4
第3節	竪穴住居跡と出土遺物	10
第4節	掘立柱建物跡と出土遺物	93
第5節	土坑類と出土遺物	104
第6節	溝跡・柵跡と出土遺物	127
第7節	遺構外出土遺物	136
第3章	まとめ	139
第1節	周辺地域の考古学的成果	139
第2節	竪穴住居跡の土器編年	141
第3節	竪穴住居跡の形態の変遷	146
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図	遺跡周辺の遺跡分布図	2	第12図	SI 2 遺構実測図	21
第2図	旧石器確認グリッド配置図	5	第13図	SI 2 遺物実測図	22
第3図	第1石器集中地点遺物分布・実測図	6	第14図	SI 3 遺構実測図	24
第4図	第1石器集中地点遺物実測図(2)	7	第15図	SI 3 遺物実測図	25
第5図	第2石器集中地点遺物分布・実測図	8	第16図	SI 3 遺物実測図(2)	26
第6図	遺構配置図	11	第17図	SI 4 遺構・遺物実測図	26
第7図	竪穴住居跡配置図	12	第18図	SI 5 遺構実測図	29
第8図	SI 1 遺構実測図	13	第19図	SI 6 遺構実測図	29
第9図	SI 1 遺物実測図	16	第20図	SI 6 遺物実測図	30
第10図	SI 1 遺物実測図(2)	18	第21図	SI 7 遺構・遺物実測図	32
第11図	SI 1 遺物実測図(3)	20	第22図	SI 8 遺構・遺物実測図	33

第23図	SI 9 遺構・遺物実測図	34	第60図	SI 43A 遺構実測図	83
第24図	SI 10 遺構・遺物実測図	36	第61図	SI 43A 遺物実測図	85
第25図	SI 11 遺構・遺物実測図	37	第62図	SI 43B 遺構実測図	85
第26図	SI 12 遺構・遺物実測図	39	第63図	SI 44 遺構実測図	87
第27図	SI 13 遺構・遺物実測図	40	第64図	SI 44 遺物実測図	89
第28図	SI 14 遺構・遺物実測図	41	第65図	SI 45 遺構・遺物実測図	89
第29図	SI 15 遺構・遺物実測図	43	第66図	SI 46 遺構・遺物実測図	90
第30図	SI 15 遺物実測図(2)	44	第67図	SI 47 遺構・遺物実測図	92
第31図	SI 16 遺構・遺物実測図	46	第68図	SI 48 遺構・遺物実測図	92
第32図	SI 17A・SI 17B 遺構・遺物実測図	47	第69図	掘立柱建物跡配置図	94
第33図	SI 18 遺構・遺物実測図	49	第70図	SB 1・SB 2 遺構実測図	95
第34図	SI 19 遺構・遺物実測図	49	第71図	SB 3 遺構・遺物実測図	96
第35図	SI 20 遺構・遺物実測図	51	第72図	SB 4 遺構・遺物実測図	97
第36図	SI 20 遺物実測図(2)	52	第73図	SB 5 遺構実測図	98
第37図	SI 21 遺構・遺物実測図	54	第74図	SB 6 遺構実測図	100
第38図	SI 22 遺構実測図	55	第75図	SB 10 遺構実測図	100
第39図	SI 22 遺物実測図	56	第76図	SB 11 遺構実測図	101
第40図	SI 23 遺構・遺物実測図	58	第77図	SB 12・SB 13 遺構・遺物実測図	102
第41図	SI 24 遺構実測図	60	第78図	SB 14 遺構実測図	103
第42図	SI 25 遺構・遺物実測図	60	第79図	SB 15 遺構実測図	103
第43図	SI 26 遺構・遺物実測図	61	第80図	土坑類・溝等配置図	105
第44図	SI 27 遺構・遺物実測図	62	第81図	SK 1 遺構実測図	106
第45図	SI 28 遺構実測図	63	第82図	SK 2・SK 3 遺構実測図	107
第46図	SI 29 遺構・遺物実測図	64	第83図	SK 4 遺構実測図	107
第47図	SI 30 遺構・遺物実測図	66	第84図	SK 4 遺物実測図	108
第48図	SI 31 遺構・遺物実測図	67	第85図	SK 5 遺構・遺物実測図	109
第49図	SI 32 遺構・遺物実測図	67	第86図	SK 6 遺構実測図	109
第50図	SI 33 遺構・遺物実測図	69	第87図	SK 7 遺構実測図	111
第51図	SI 34 遺構・遺物実測図	69	第88図	SK 8 遺構実測図	111
第52図	SI 35 遺構・遺物実測図	71	第89図	SK 9 遺構実測図	112
第53図	SI 36 遺構・遺物実測図	73	第90図	SK 10 遺構実測図	112
第54図	SI 37 遺構・遺物実測図	75	第91図	SK 11 遺構・遺物実測図	113
第55図	SI 38 遺構・遺物実測図	76	第92図	SK 12 遺構実測図	113
第56図	SI 39 遺構・遺物実測図	77	第93図	SK 13・SK 14・SK 15 遺構実測図	114
第57図	SI 40 遺構・遺物実測図	79	第94図	SK 16・SK 17 遺構実測図	116
第58図	SI 41 遺構・遺物実測図	81	第95図	SK 18 遺構実測図	116
第59図	SI 42 遺構・遺物実測図	82	第96図	SK 19 遺構実測図	117

第97図 SK 20 遺構実測図……………	117	第112図 SD 3 遺構実測図……………	128
第98図 SK 21 遺構実測図……………	118	第113図 SD 4 遺構実測図……………	128
第99図 SK 22 遺構実測図……………	118	第114図 SD 5～SD 10 遺構・遺物実測図…	130
第100図 SK 23 遺構実測図……………	120	第115図 SD 11 遺構実測図……………	132
第101図 SK 24 遺構実測図……………	120	第116図 SD 12～SD 14 遺構実測図……………	132
第102図 SK 25 遺構実測図……………	121	第117図 SD 15 遺構実測図……………	132
第103図 SK 26 遺構実測図……………	121	第118図 SD 16 遺構実測図……………	134
第104図 SK 27・SK 28 遺構実測図……………	122	第119図 SD 17・SD 18 遺構・遺物実測図…	134
第105図 SK 29 遺構実測図……………	122	第120図 SD 19 遺構実測図……………	134
第106図 SK 30 遺構・遺物実測図……………	124	第121図 SD 20・SD 21 遺構実測図……………	135
第107図 SK 31 遺構実測図……………	125	第122図 グリッド出土遺物実測図……………	137
第108図 SK 32 遺構実測図……………	125	第123図 主要器種編年図(1)……………	142
第109図 SK 33 遺構・遺物実測図……………	126	第124図 主要器種編年図(2)……………	144
第110図 SD 1 遺構実測図……………	128	第125図 竪穴住居跡編年図……………	148
第111図 SD 2 遺構実測図……………	128		

表 目 次

第1表 石器属性表……………	9	第3表 石器組成表……………	9
第2表 竪穴住居跡平面プランの時期別分布…	146		

図 版 目 次

巻首図版 名木天神台遺跡南半部	図版10 SI 20、SI 20出土遺物、SI 21
図版1 旧石器包含層第1石器集中地点、同第2石器集中地点	図版11 SI 21出土遺物、SI 22、SI 23
図版2 SI 1、SI 1出土遺物、SI 2	図版12 SI 23出土遺物、SI 24、SI 25
図版3 SI 3、SI 4、SI 5	図版13 SI 26、SI 27、SI 28
図版4 SI 6、SI 6出土遺物、SI 7	図版14 SI 29、SI 29竈出土遺物、SI 30
図版5 SI 8、SI 9・SI 10、SI 10竈出土遺物	図版15 SI 32、SI 33、SI 34
図版6 SI 11、SI 12、SI 13	図版16 SI 34出土遺物、SI 35、SI 36
図版7 SI 14、SI 14出土遺物、SI 15	図版17 SI 37、SI 38、SI 39
図版8 SI 15出土遺物、SI 15竈出土遺物、SI 16	図版18 SI 39出土遺物、SI 39竈出土遺物、SI 40
図版9 SI 17、SI 18、SI 19	図版19 SI 41、SI 42、SI 43
	図版20 SI 44、SI 45、SI 45出土遺物

- 図版21 SI 46、SI 47、SB 1・SB 2
図版22 SB 4、SB 5、SB 6
図版23 SB 10、SB 11、SB 12・SB 13
図版24 SB 14、SB 15、SK 1、SK 2・SK 3
図版25 SK 4出土遺物、SK 6、SK 7、SK 8、
SK 9、SK 10、SK 11、SK 12
図版26 SK 13・SK 14・SK 15・SK 16、SK 17・
SK 21、SK 24、SK 26、SK 30
図版27 SK 31、SK 33、SD 1、SD 2、SD 3、
SD 4
図版28 SD 5、SD 6、SD 7・SD 8
図版29 SD 10、SD 12~14、SD 20・SD 21
図版30 第1石器集中地点出土石器、第2石器集中
地点出土石器
図版31 SI 2~SI 3出土土器
図版32 SI 3・6・7・10・12・14・15出土土器
図版33 SI 15~SI 21出土土器
図版34 SI 22・23・25・26・29・30・31・33・34
出土土器
図版35 SI 34・35・36・37・39・40・42・43出土
土器
図版36 SI 43・44・45・46・48、SB、SK、グ
リッド出土土器
図版37 土玉・石製品、紡錘車、銅銭、鉄製品
図版38 椀形滓

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、主要地方道成田下総線建設事業の実施に当たり、千葉県教育委員会に対して、計画路線内に所在する埋蔵文化財の有無について照会を行った。現地踏査の結果、名木天神台遺跡を初めとして、数多くの遺跡の所在が確認された。このため、県教育庁文化課は、県土木部道路建設課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

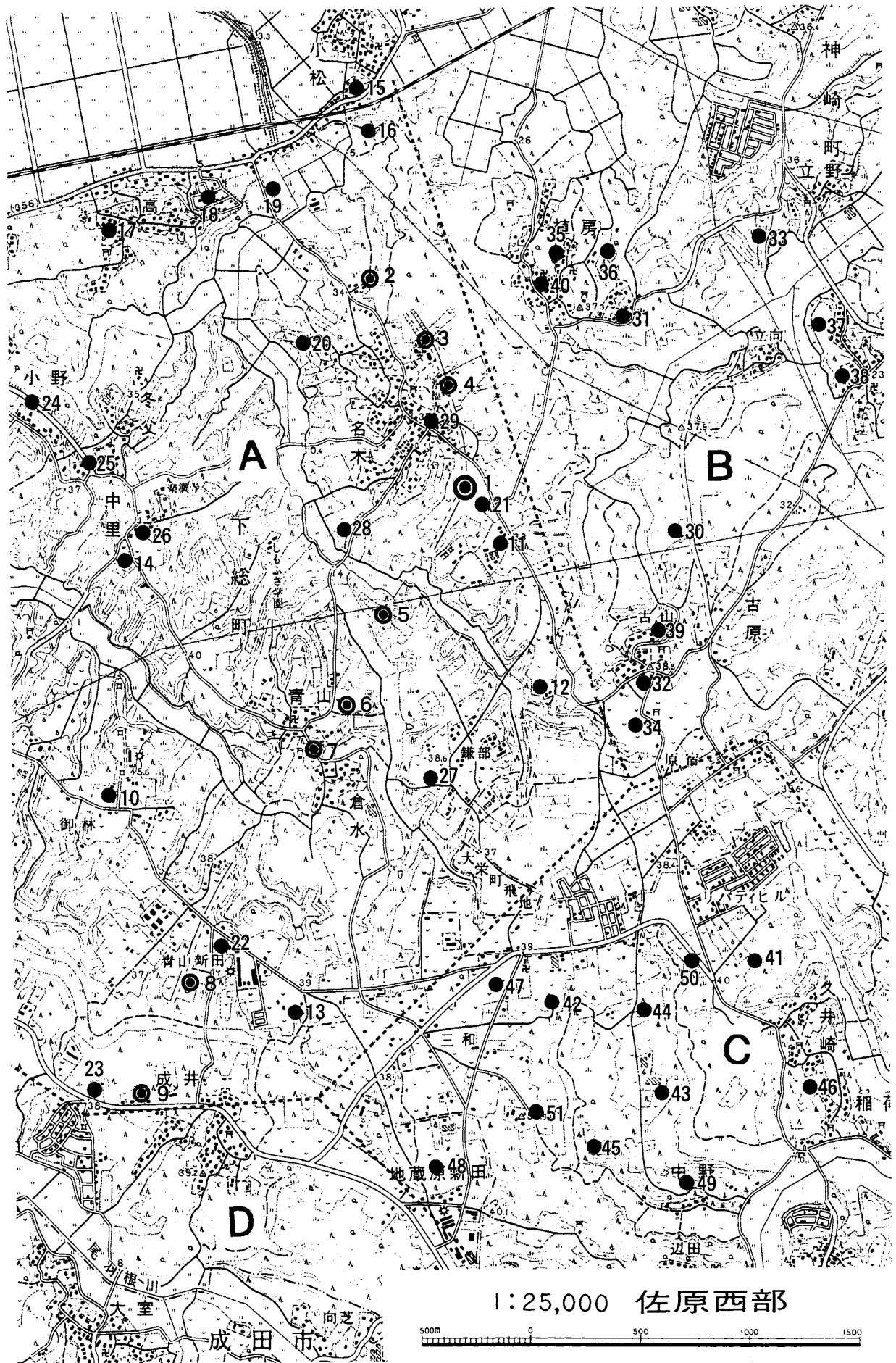
名木天神台遺跡の調査は、昭和61年度・昭和63年度・平成元年度の3年度にわたって実施された。このうち、昭和63年度と平成元年度は同一地点の継続調査である。昭和63年度は旧称鍛冶内遺跡の範囲で、上層確認調査は11月4日から11月5日まで、また、上層本調査は11月10日から11月25日まで実施した。下層確認調査は11月6日から11月18日まで、下層本調査は11月10日から11月19日まで実施した。昭和63年度は、上層確認調査は10月27日から12月6日まで、上層本調査は、12月7日から平成元年3月30日まで実施した。また、下層確認調査は平成元年3月13日から3月20日まで実施した。平成元年度は、下層確認調査（継続分）は11月1日から11月15日まで実施した。また、上層本調査（継続分）及び下層本調査は7月6日から11月22日まで実施した。

第2節 遺跡の位置と環境（第1図）

名木天神台遺跡¹⁾は香取郡下総町名木字向山752-6ほかに所在する。下総町は香取郡の西辺に属し、北に利根川を望み、東は印旛郡の旧長沼と境を接している。名木天神台遺跡は、名木集落の東南に位置し、遺跡範囲としては名木集落と隣接している。遺跡は利根川に向かって北西方に延びている標高39mの舌状台地の中央部を占めている。

本事業関連の下総町内分の遺跡調査は、平成5年度をもってすべて終了している。

本事業関連遺跡中最北端の長稲葉遺跡²⁾は、古墳時代後期の集落跡を中心に、縄文時代早期遺物包含層や当地では僅少な弥生時代後期竪穴住居跡が2軒出土した。名木大台遺跡³⁾は、下総町教育委員会調査分、財団法人香取郡市文化財センター調査分と合わせて、古墳時代後期から奈良時代にかけての大集落跡であることが判明した。名木不光寺遺跡⁴⁾では、財団法人香取郡市文化財センター調査分と合わせて、古墳時代後期から平安時代にわたる集落跡の存在が明らかになった。以上の諸遺跡は、現在の名木集落を中心に、同一支台上にある遺跡群として一括することができる。この西南方支台には鎌部長峯遺跡⁵⁾があり、縄文時代早期の遺物包含層と2軒の平安時代竪穴住居跡が検出されている。さらにその西の支台には、青山富ノ木遺跡⁶⁾が所在し、奈良平安時代竪穴住居跡35軒、中世を主体とする掘立柱建物跡12棟、地下式墳1基等が検出されている。青山地区では、このほかに青山宮脇遺跡⁷⁾が所在し、旧石器時代石器ブロックが調査報告された。この西南に隣り合う支台では、青山中峰遺跡⁸⁾が調査され、平安時代竪穴住居跡群が検出された。さらにその南の成井地区では、新シ山・柳和田台遺跡⁹⁾から旧石器時代の石器ブロック、貴重な弥生時代中期の土器棺墓、奈良平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物群などが検出されている。



第1図 遺跡周辺の遺跡分布図

第3節 調査の概要

名木天神台遺跡は、下総町名木集落の南東の舌状台地上の遺跡で、その北限は下総町道とされている。今回の調査範囲は、町道を跨いで台地中央部をほぼ南北に縦貫する区域が設定された。調査区内の最高海拔は38.2mで、台地上の平坦地が大部分を占めるが、調査区の北端は名木集落に接し、北東から入り込む谷頭に達している。また、調査区の南部は南西から入り込む谷津に降りている。このため、調査区の南北両端は斜面部にかかり、関東ローム層の堆積状況も不安定である。

調査対象区には、公共座標に基づいて40mピッチで基準杭を打ち込み、グリッドを設定した。大グリッドは40m×40mで、それを4m×4mの小グリッドに100分割した。

発掘調査は、昭和61年度が調査対象面積2,062m²で、確認調査の結果、上層本調査については、調査面積280m²を発掘調査した。また、下層本調査については、調査面積50m²を発掘調査した。昭和63年度・平成元年度は調査対象面積6,300m²で、確認調査の結果、上層本調査については、5,350m²を発掘調査した。また、下層本調査については、調査面積100m²を発掘調査した。

確認調査の結果確定された本調査区域は、旧石器時代では調査区の南北両端、すなわち、D2区とB13区に所在する2か所であり、縄文時代以降については町道北側のE4区、及びE6区南部以南の全域である。

本調査の成果は、旧石器時代石器ブロック2か所、古墳時代後期～奈良時代竪穴住居跡49軒、掘立柱建物跡12棟、土坑類33基、溝・柵跡22条を検出し、このほか、表土中からも遺物を採集している。

参考文献

- 2) 萩原恭一ほか 1994『下総町長稲葉遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書IV－』(財千葉県文化財センター)
- 3) 江尻和正 1982『名木大台遺跡－名木小学校移転新築に伴う埋蔵文化財調査－』下総町教育委員会
江尻和正 1994「名木大台遺跡」『事業報告Ⅲ』(財香取郡市文化財センター)
雨宮龍太郎 1998『下総町名木大台遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書VI』(財千葉県文化財センター)
- 4) 萩原恭一ほか 1993『下総町不光寺遺跡－一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』(財千葉県文化財センター)
- 5)・6) 雨宮龍太郎ほか 1999『下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書VII－』(財千葉県文化財センター)
- 7)～9) 宮重行ほか 1995『下総町新シ山・柳和田台遺跡 青山中峰遺跡 青山宮脇遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書V－』(財千葉県文化財センター)

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 概要 (第2図、第6図)

調査区域は長さ500m余りの路線予定地で、北部において名木集落の東端と接している。天神台遺跡が立地する台地を南北に縦貫しており、西側には調査区と名木集落とを隔てるように、一筋の開析谷が南から入り込んでいる。標高は調査区中央部が最も高く、北端及び南端では台地傾斜面にかかっている。地山ローム層の層序も、中央では当該地域の通常の堆積状況を示しているが、南端部では上層が流失し、北端部ではローム層に代わって粘土層が堆積している。

2か所の旧石器時代石器集中地点は、調査区域の北端及び南端付近から検出された。いずれも斜面部にかかる立地で、立川ロームの層序は乱れている。いずれも剥片が主体的に出土している。

竪穴住居跡の分布は本調査区全域に広がっているが、北から順に、E7区からE8区にかけて所在する北Ⅰ群、E8区からD9区にかけて所在する北Ⅱ群、D10区以南に展開する南群の3つのグループに分類できる。このうち、最も多数の住居跡から構成されるのは南半部を占める南群で、台地上における集落中心部の所在が示されていると考えてよかろう。なお、住居跡間の重複は極めて少なく、竈は北西壁に設置される事例が多い。

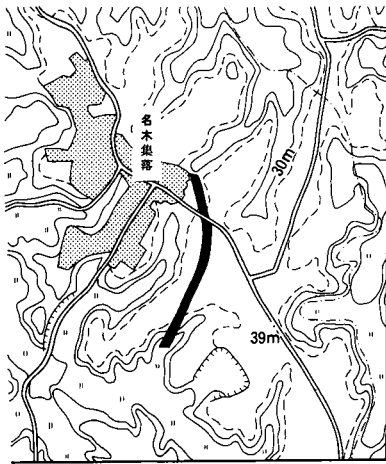
掘立柱建物跡は12棟中11棟が北部に集中している。この一群はさらに、E7区に所在し、密集度の高い北群とE8区に分布する、散漫な南群に細分できる。北群は竪穴住居跡群とはまったく重複しないが、南群は一部で重複が見られる。

土坑類には井戸跡1基、陥し穴1基が含まれている。これらは総じて本調査区北半のC11区以北に偏在している。幅の狭小な調査区内で分布傾向を把握することは困難であるが、D9区からD10区にかけての土坑群は竪穴住居跡とは重複していない。土坑の形態は方形、ないし長方形プランを呈するものが多い。遺物量は概して少ない。

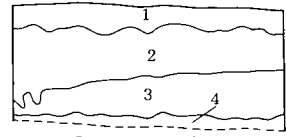
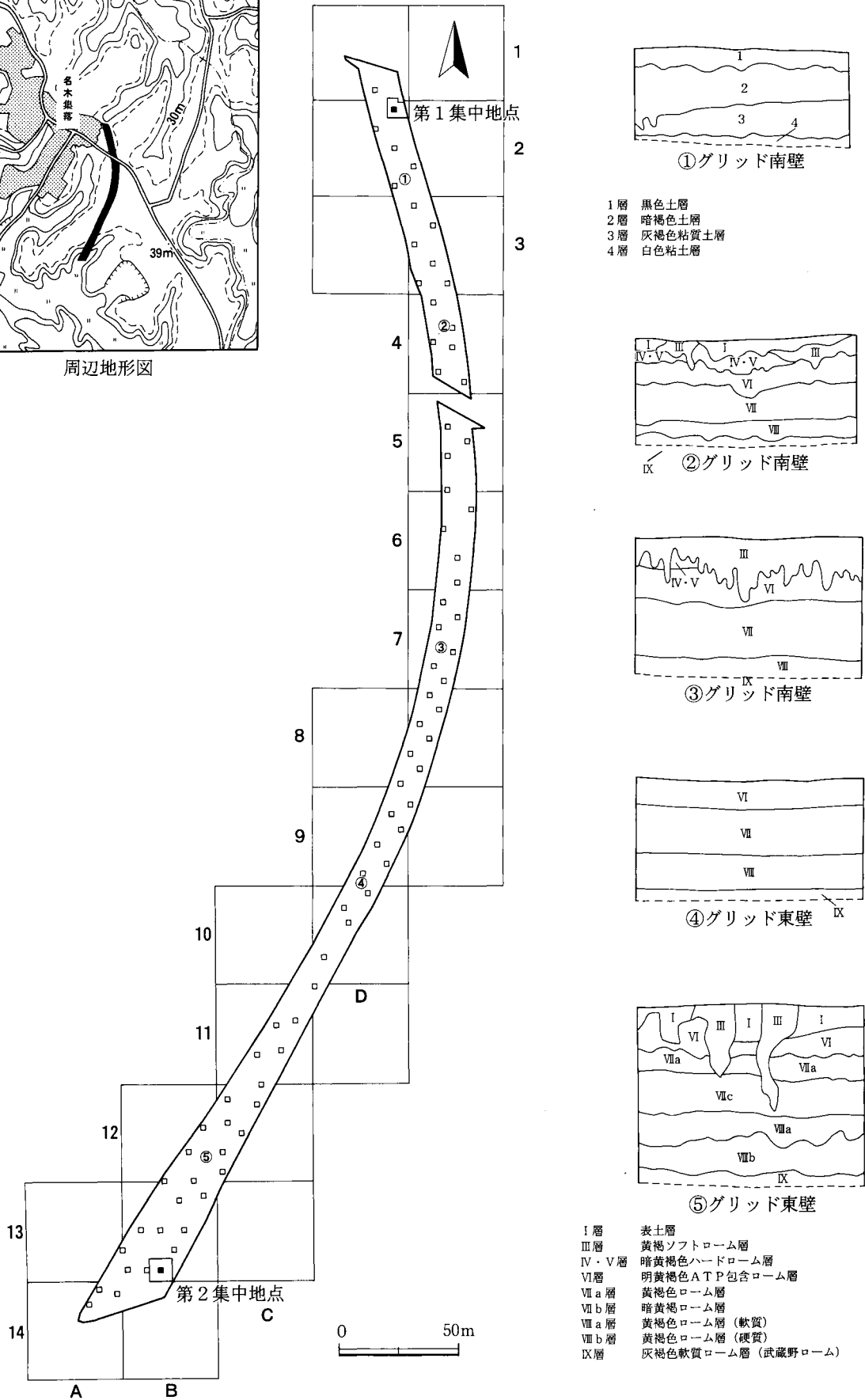
溝・柵跡も土坑類同様に、本調査区北半に偏在する傾向がみられる。東西方向に延びるものが多い。竪穴住居跡を攪乱している遺構が多く、年代観の手がかりになっている。柵跡の中には、隣接する溝跡と併走しているものがある。南北両端の遺構は既に斜面にかかっており、周囲の地形を考慮すると猪垣の可能性が高い。

第2節 旧石器時代 (第2図)

今回調査区からは旧石器時代の石器集中地点を2か所で検出した。石器集中地点は調査区の南北端に位置し、いずれも小支谷に面した台地縁辺部に立地する。第1石器集中地点の周囲はローム層の堆積が通常と異なり、茶褐色に変色したいわゆる「水付きローム」から石器群が検出され、層位的な確証を得られていない。出土石器は23点を数え、安山岩製の剥片を主体とする。ほかには、石核、楔形石器剥片が少量出土している。第2石器集中地点はⅧ層上部を主体に検出され、出土石器も8点と小規模な石器集中地点である。

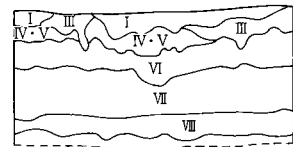


周辺地形図

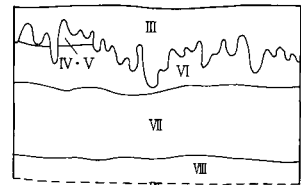


①グリッド南壁

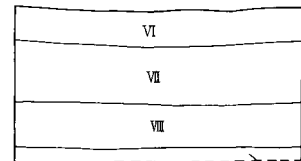
- 1層 黒色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 灰褐色粘質土層
- 4層 白色粘土層



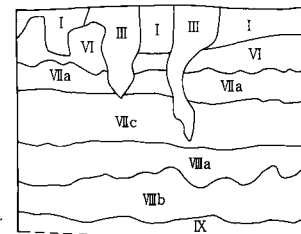
IX ②グリッド南壁



IX ③グリッド南壁



IX ④グリッド東壁

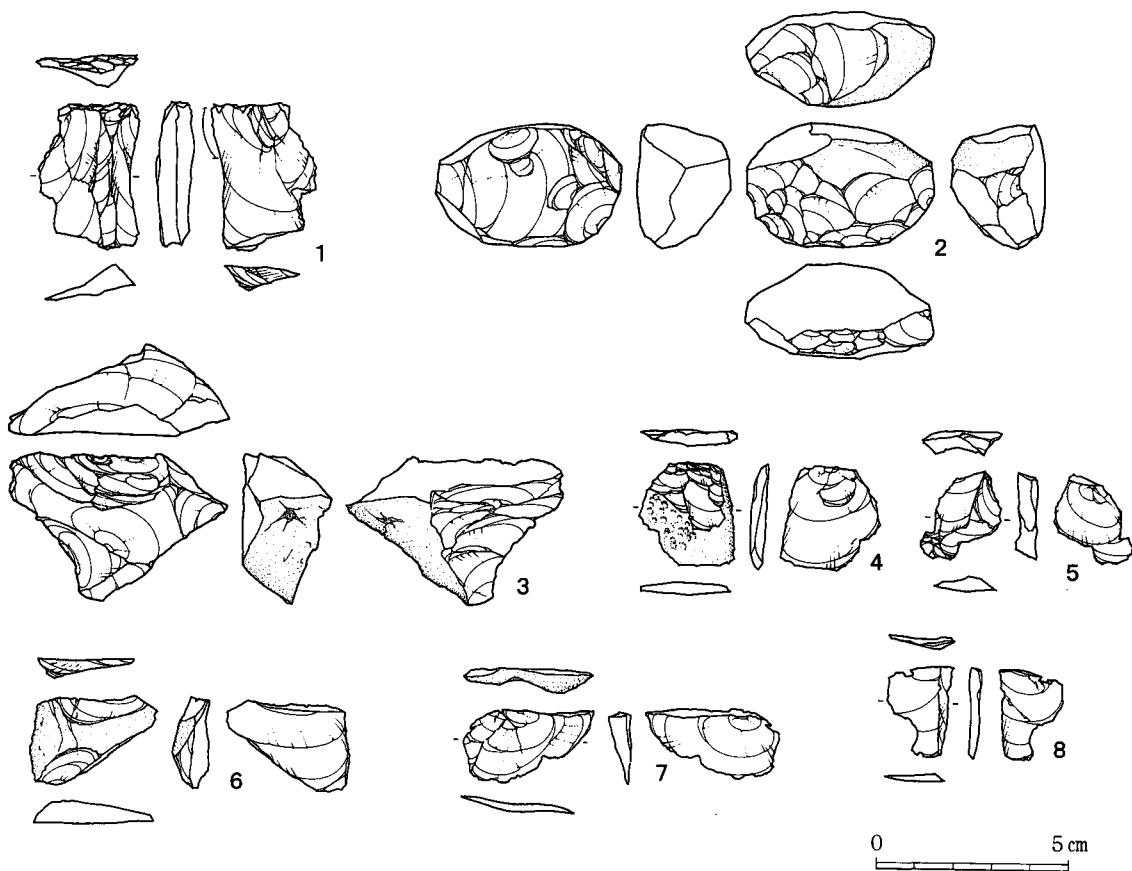
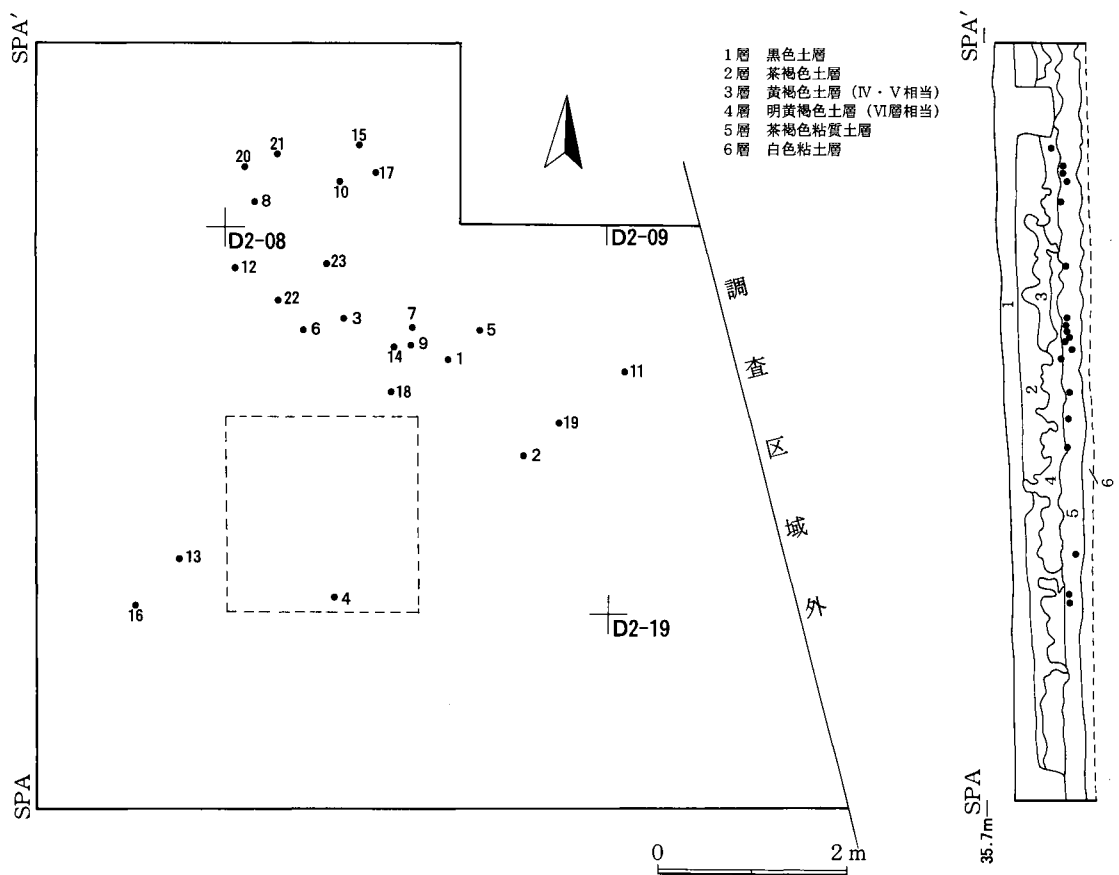


⑤グリッド東壁

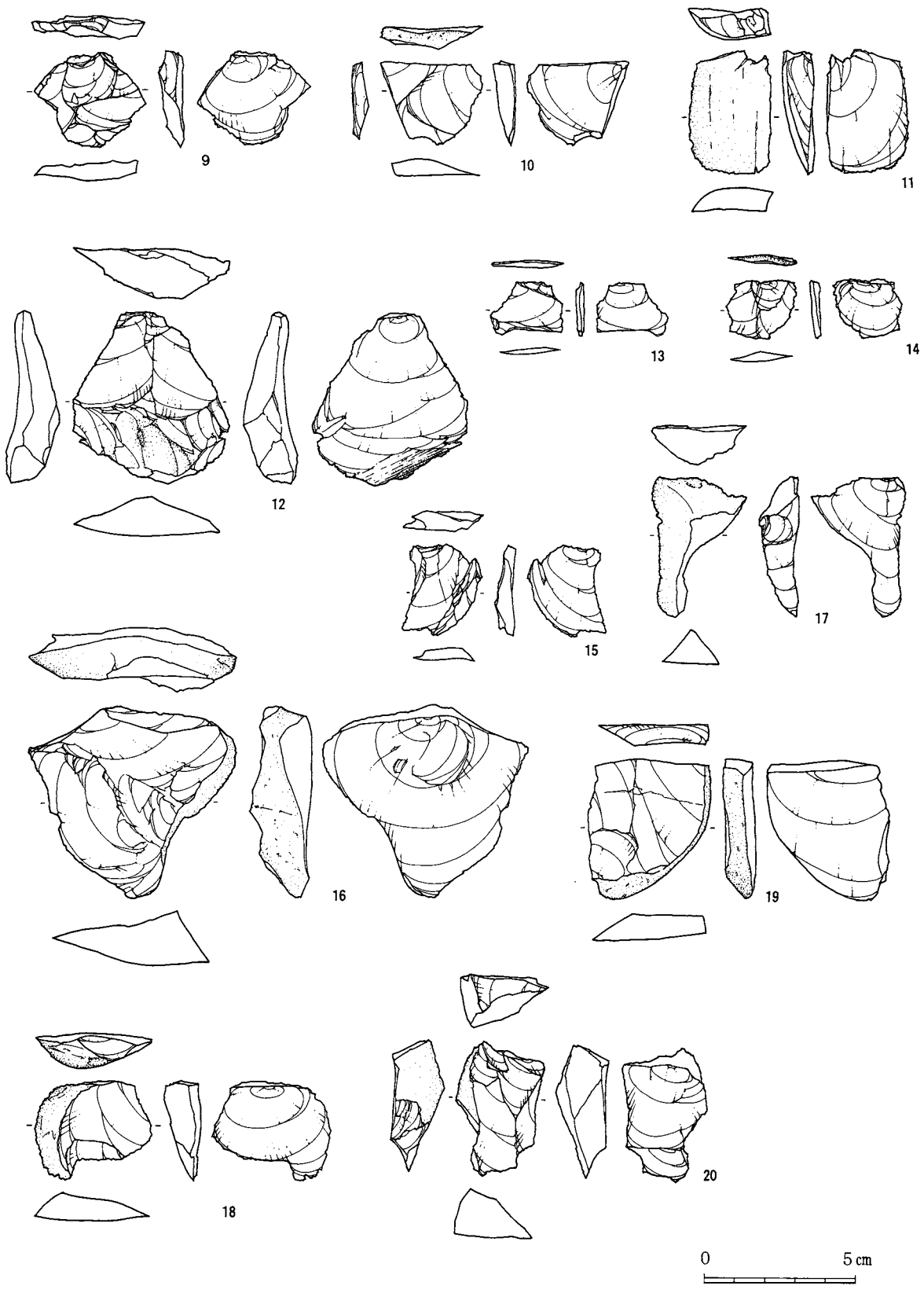
- I層 表土層
- III層 黄褐色ソフトローム層
- IV・V層 暗黄褐色ハードローム層
- VI層 明黄褐色ATP包含ローム層
- VII a層 黄褐色ローム層
- VII b層 暗黄褐色ローム層
- VII a層 黄褐色ローム層 (軟質)
- VII b層 黄褐色ローム層 (硬質)
- IX層 灰褐色軟質ローム層 (武蔵野ローム)



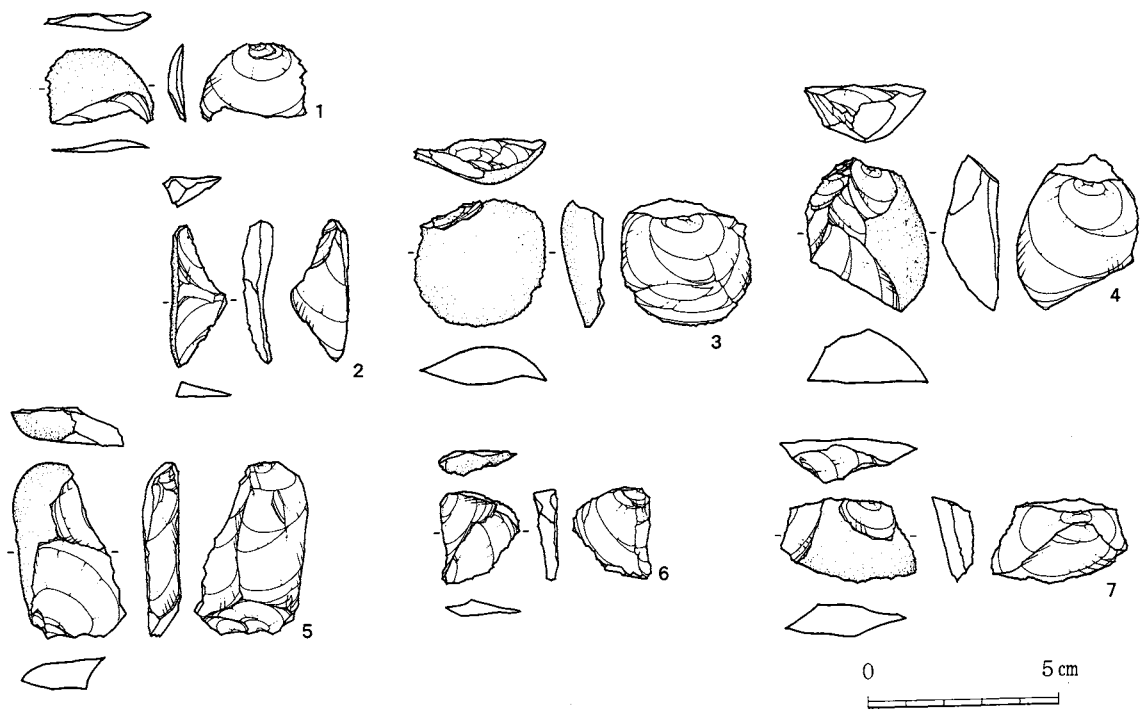
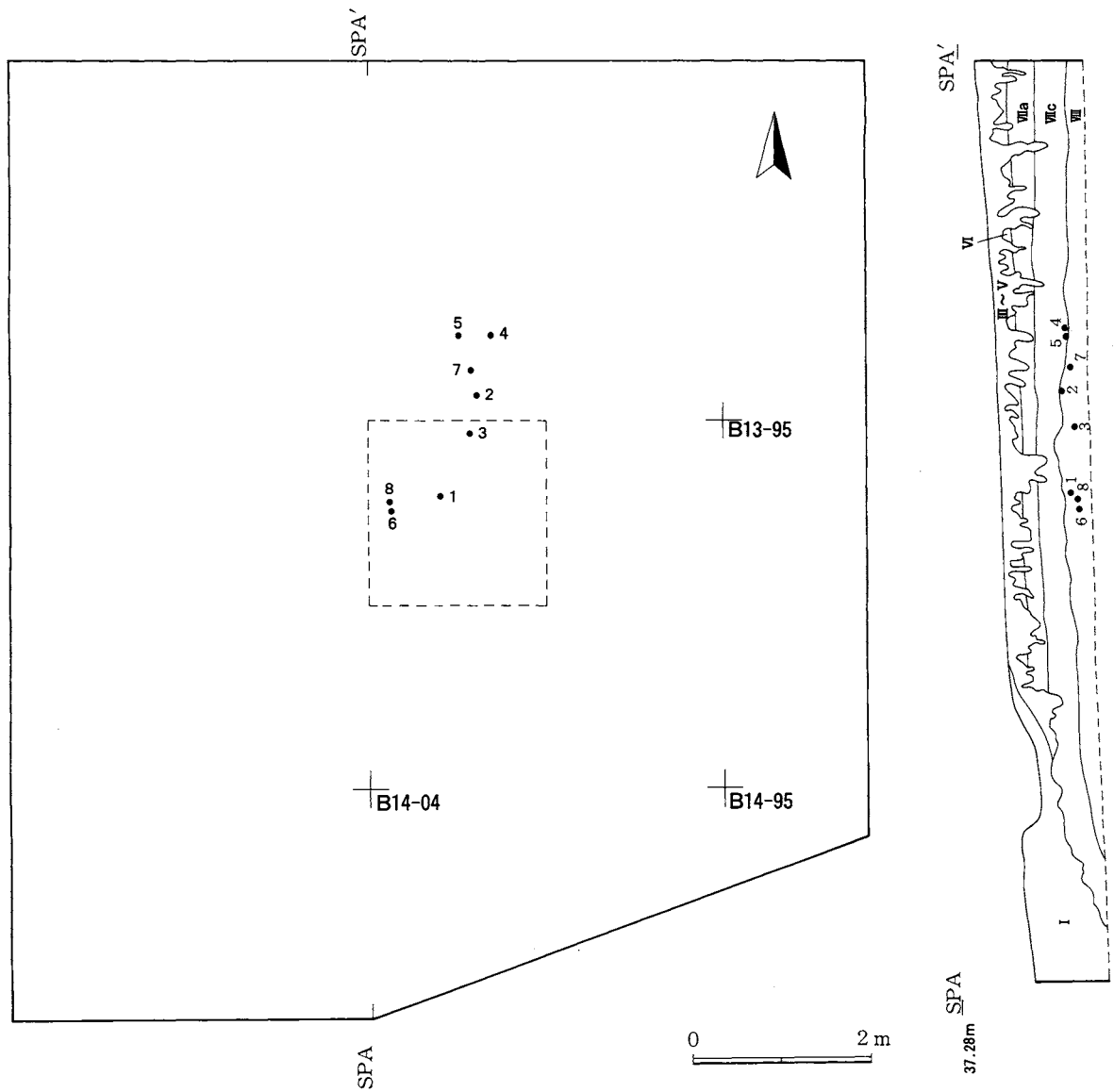
第2図 旧石器確認グリッド配置図



第3図 第1石器集中地点遺物分布・実測図



第4图 第1石器集中地点遗物实测图(2)



第5図 第2石器集中地点遺物分布・実測図

第1石器集中地点石器属性表

挿図No	遺物No	器種	長さ [mm]	幅 [mm]	厚さ [mm]	重量 [g]	石材
第3図 1	D2-08-03	微細剥離痕のある剥片	38.1	25.5	7.3	6.66	メノウ
第3図 2	D2-08-02	石核	30.7	49.0	23.6	52.41	凝灰岩
第3図 3	D2-08-07	石核	34.8	57.6	23.7	33.06	安山岩C
第3図 4	D2-08-13	剥片	26.4	25.5	4.0	2.32	頁岩
第4図 5	D2-08-04	剥片	21.7	21.3	6.0	1.83	メノウ
第4図 6	D2-08-09	剥片	21.7	34.2	9.5	5.79	安山岩C
第4図 7	D2-08-05	剥片	18.5	34.6	5.2	2.38	安山岩C
第4図 8	D1-98-02	剥片	23.2	16.7	2.6	0.82	安山岩C
第4図 9	D2-08-06	剥片	31.5	37.3	7.2	8.06	安山岩C
第4図10	D1-98-04	剥片	27.4	34.3	5.8	5.76	安山岩C
第4図11	D2-09-01	剥片	40.8	28.3	10.6	13.97	安山岩C
第4図12	D2-08-12	剥片	56.7	52.3	15.2	35.08	安山岩C
第4図13	D2-07-02	剥片	16.4	24.0	2.8	1.26	安山岩C
第4図14	D2-08-11	剥片	19.1	23.0	3.9	1.57	安山岩C
第4図15	D1-98-05	剥片	29.3	26.0	6.2	3.71	安山岩C
第4図16	D2-07-01	剥片	43.3	68.6	19.4	73.14	安山岩C
第5図17	D1-98-06	剥片	45.5	31.4	11.6	9.19	安山岩C
第5図18	D2-08-08	剥片	32.6	38.4	11.9	13.31	安山岩C
第5図19	D2-08-01	剥片	46.3	40.1	9.1	22.75	安山岩C
第5図20	D1-98-01	剥片	44.0	28.0	17.1	18.84	安山岩C
分布No21	D1-98-03	剥片	34.8	18.1	10.8	3.45	安山岩B
分布No22	D2-08-10	剥片	19.8	33.3	4.0	2.77	粘板岩
分布No23	D2-08-14	剥片	20.3	8.2	3.0	0.53	粘板岩

第2石器集中地点石器属性表

挿図No	遺物No	器種	長さ [mm]	幅 [mm]	厚さ [mm]	重量 [g]	石材
第6図 1	B13-94-02	剥片	19.1	28.1	4.3	2.06	安山岩A
第6図 2	B13-84-01	剥片	35.6	14.3	6.8	2.27	安山岩A
第6図 3	B13-94-01	剥片	33.0	34.5	11.3	12.87	安山岩A
第6図 4	B13-84-04	剥片	41.5	31.1	15.2	17.13	安山岩A
第6図 5	B13-84-03	剥片	45.0	30.2	9.2	13.06	安山岩A
第6図 6	B13-94-03	剥片	23.0	20.7	5.8	2.52	安山岩A
第6図 7	B13-84-02	剥片	22.2	35.7	8.7	7.19	安山岩A
分布No 8	B13-94-04	剥片	8.0	14.7	1.6	0.17	安山岩A

第1表 石器属性表

第1石器集中地点石器組成表

	剥離痕のある剥片	剥片	石核	合計	%
安山岩C		15	1	16	69.6
		215.63	33.06	248.69	78.0
安山岩B		1		1	4.3
		3.45		3.45	1.1
メノウ	1	1		2	8.7
	6.66	1.83		8.49	2.7
粘板岩		2		2	8.7
		3.3		3.3	1.0
頁岩		1		1	4.3
		2.32		2.32	0.7
凝灰岩			1	1	4.3
			52.41	52.41	16.4
合計	1	20	2	23	100.0
	6.66	226.53	85.47	318.66	100.0
%	4.3	87.0	8.7	100.0	
	2.1	71.1	26.8	100.0	

〔上段：点数、下段：重量(g)〕

第2石器集中地点石器組成表

	剥片	合計	%
安山岩A	8	8	100.0
	57.27	57.27	100.0
合計	8	8	
	57.27	57.27	
%	100.0	100.0	
	100.0	100.0	

〔上段：点数、下段：重量(g)〕

第2表 石器組成表

第1石器集中地点（第3図、第4図、第1表、第2表、巻首図版2、図版1、図版30）

D2区の北東端に所在する。石器集中は径6mの範囲に広がる。出土層位は「5層」が主体であるが、ローム層の堆積が不良であるため、通常の層序との比較が困難となっている。調査所見では「4層」中からATがブロック状に検出されているとの指摘があることから、出土層位の中心は第2黒色帯中とみられるが、確証はない。

器種構成は微細剥離痕のある剥片1点、楔形石器剥片1点、剥片19点、石核2点の総点数23点を数える。第3図4は両極技法により剥離された楔形石器剥片である。背面には自然面を残し、敲打痕(?)が観察される。このような両極技法の特徴を有する剥片は本資料のみであり、ほかの資料はいずれも幅広で、打面は平坦もしくは自然面を呈している。第3図2・3は石核である。2は円礫を素材として、打面を移動させながら剥片剥離を行っている。3は分厚い剥片を素材とし、主要剥離面側に作業面を設けている。

石材は、安山岩B1点、安山岩C16点、メノウ2点、粘板岩2点、頁岩1点、凝灰岩1点で構成され、安山岩が主体を占める。安山岩Cとした資料はすべて同一母岩に属すると思われる。

今回の調査で検出された安山岩は3種に分類され、それぞれが同一母岩で構成される。安山岩Aは、風化剥離面は黒味がかかった灰色を呈し、自然面はざらついてはいるが、爪形状の皺は見られない。安山岩Bはいわゆるトロトロ石のことであるが、今回の調査例では通常見られるものとは異なり、多孔質のもので

ある。安山岩Aとの峻別は容易であり、原石の大きさも、安山岩Cの方がかなり大きい。

第2石器集中地点（第5図、第1表、第2表、図版1、図版30）

B13区の南部に所在する。石器集中は径2mの範囲に広がる。出土層位はⅧ層中である。近年用いられている層名では「X層」に相当する。

器構成は剥片のみで、総点数は8点と小規模な石器集中地点である。石材は安山岩Aで占められ、すべて同一母岩に属する。剥片は自然面を有し、幅広のものが主体を占める。本格的な剥片剥離を行う前の整形段階で、原石から剥離されたものと思われる。

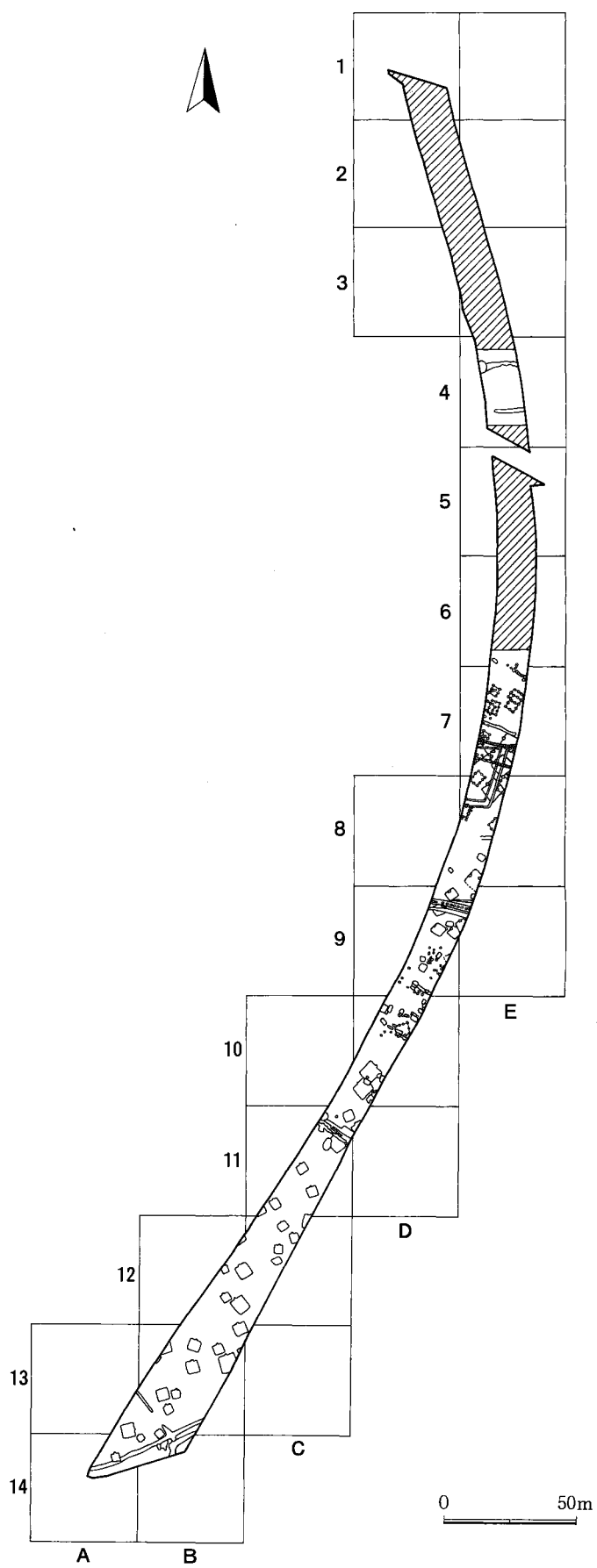
第3節 竪穴住居跡と出土遺物

調査区内で明らかにされた竪穴住居跡は古墳時代末から奈良時代にかけて築造されたものであるが、この時代の竪穴住居跡の基本的な平面プランは普通「方形」・「隅丸方形」と表現されることが多く、まれに「長方形」が見出されることがある。さらに「略方形」なる表現もしばしば目にするところである。ところが今回検出された竪穴住居跡の各辺を計測すると、上記リストからは客観的にはずれてしまう事例が多々摘出された。それは「台形」住居跡の存在である。この類型を「略方形」で括ってしまえば、竪穴住居跡の分析や集落構造の復原に際して、重要な手がかりの一つを見落としてしまうおそれもある。そのため本書では、方形・長方形に加えて「台形」も竪穴住居跡の基本プランとして採用している。台形住居跡の計測部位は上辺（竈のある壁）・下辺（竈対向壁）・幅（上辺・下辺間の距離の最大値）である。これは正台形または逆台形の場合であり、横転台形の場合は、短辺（側辺の一方）・長辺（側辺の他方）・幅（側辺間の距離の最大値）を採用した。

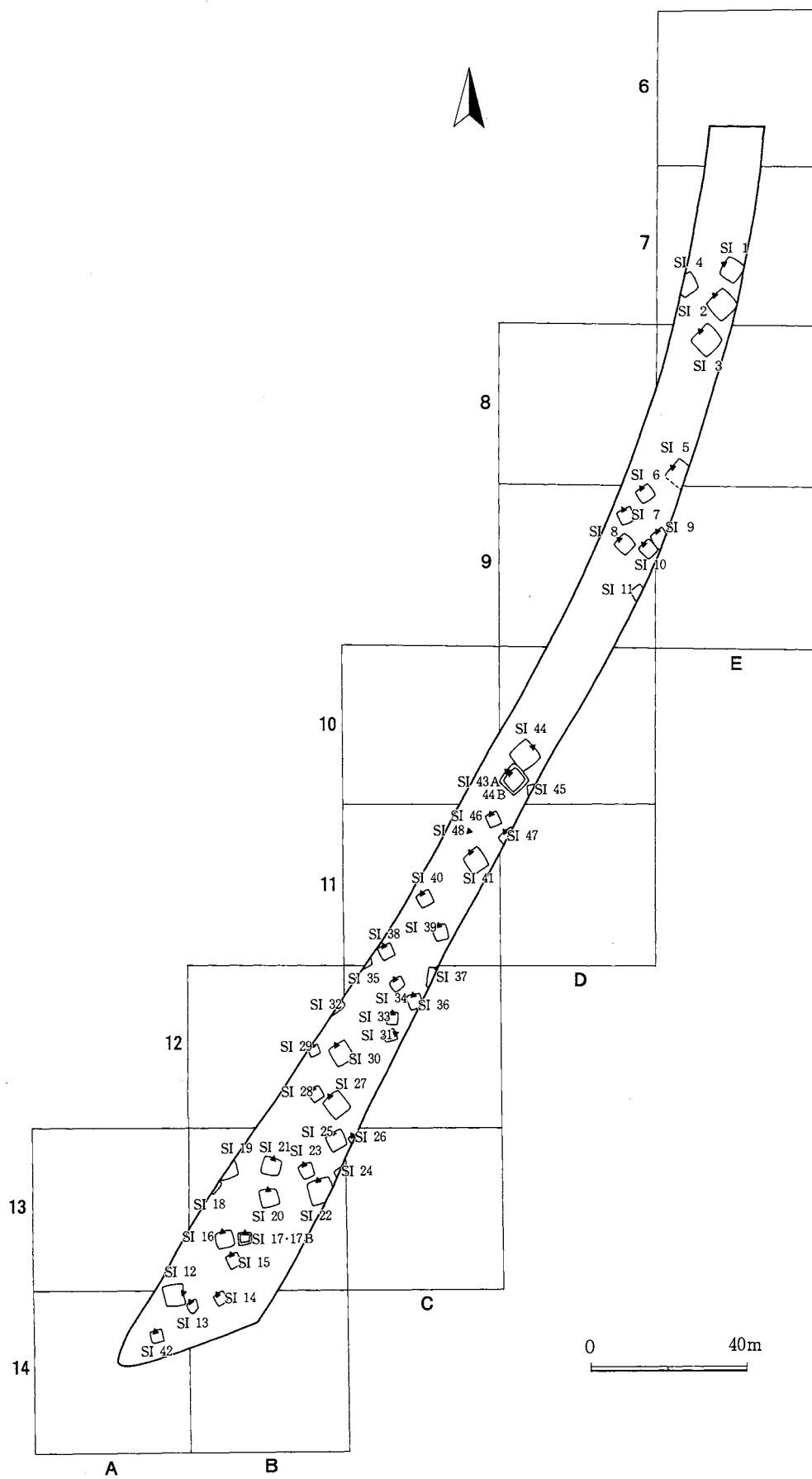
SI 1（第8～11図、図版2、図版31、図版37）

遺構 竪穴住居跡群中、最も北に位置する北I群の中でも、北端に占地している住居跡である。確認調査の結果では、これより北部の谷頭に至る台地上には、竪穴住居跡は検出されていない。したがって、北I群及びその北方の掘立柱建物跡群が、集落限界になっている可能性が高い。

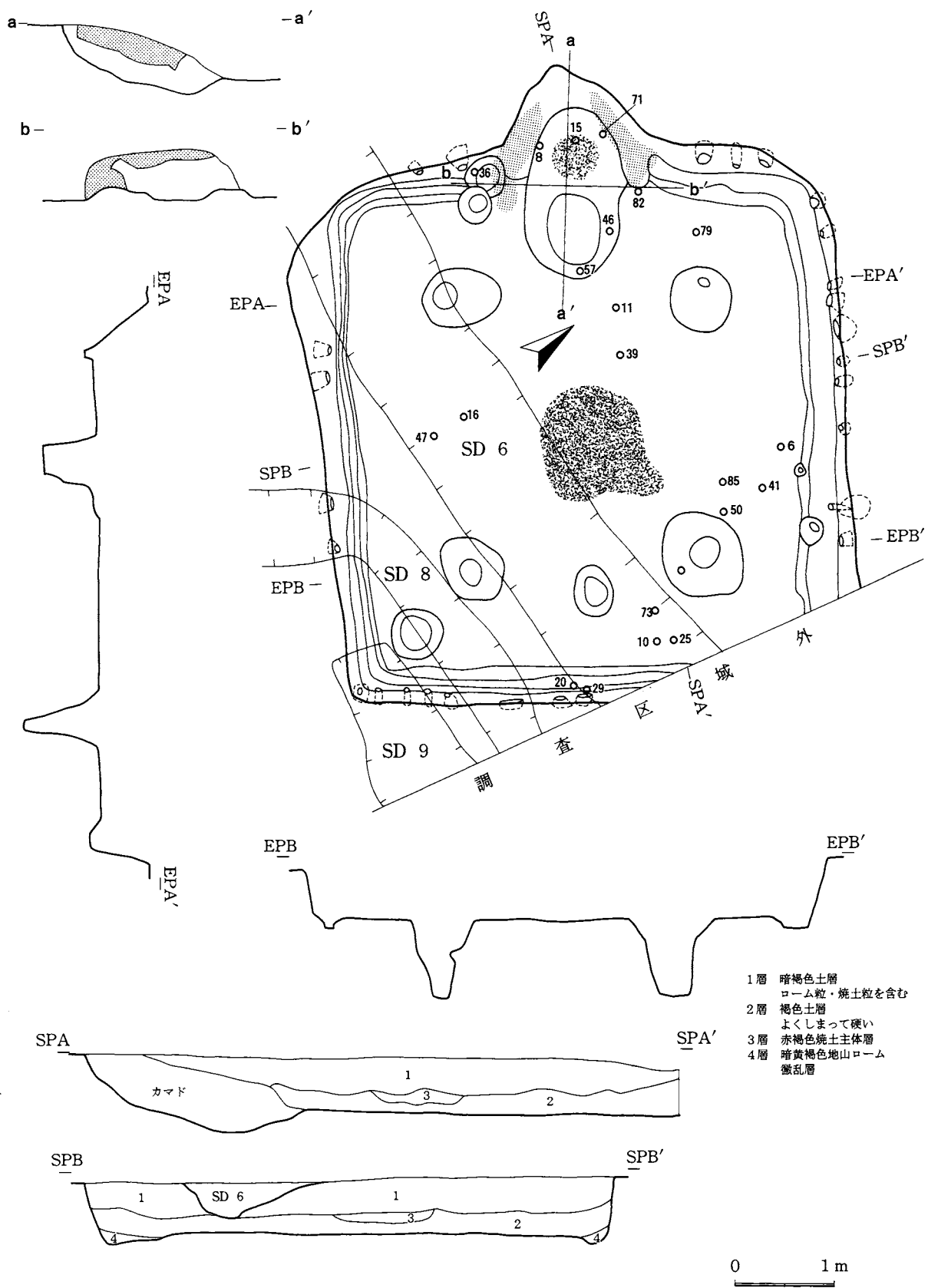
遺構はE7区の中央付近に位置し、東コーナーが調査区外に出ており、調査不能である。また、SD6・SD8・SD9によって、南側の上半部が攪乱されている。掘り方の西側は斜めから掘り込まれているので、北・西コーナーは丸みを帯びる。周溝上端を基準にすれば、4.9m×5.0mの長方形プランを呈する。竈は北西壁中央に作られている。周溝は全周していると思われる。北東壁の周溝は他壁のそれに比べて著しく幅広い。柱穴は各コーナー寄りに4基揃っている。竈の対向壁側には、柱穴間にはしご穴が検出された。このほかには、南コーナーに浅い円形ピットが存在する。各壁の下方には直径7～8cmの小孔が斜め方向に多数穿たれていた。土止め用の板材を固定するための支持杭を差し込んだ痕跡であろう。床面の中央部は焼けて変色していた。柱穴の内側の床面は、硬く填圧を受けている。竈の遺存状態は良好である。長めの船型ピットをしつらえているが、竈の袖は短くとどまっておき、実際の火焚きも、煙道部に近い奥の方で行われている。右袖の下には、心棒を差し込んだ心棒ピットが掘られていた。煙道部の張り出しは、住居跡の規模に比較すれば大きい。竈の覆土中には、焼土塊は見られなかった。



第6図 遺構配置図



第7図 竪穴住居跡配置図



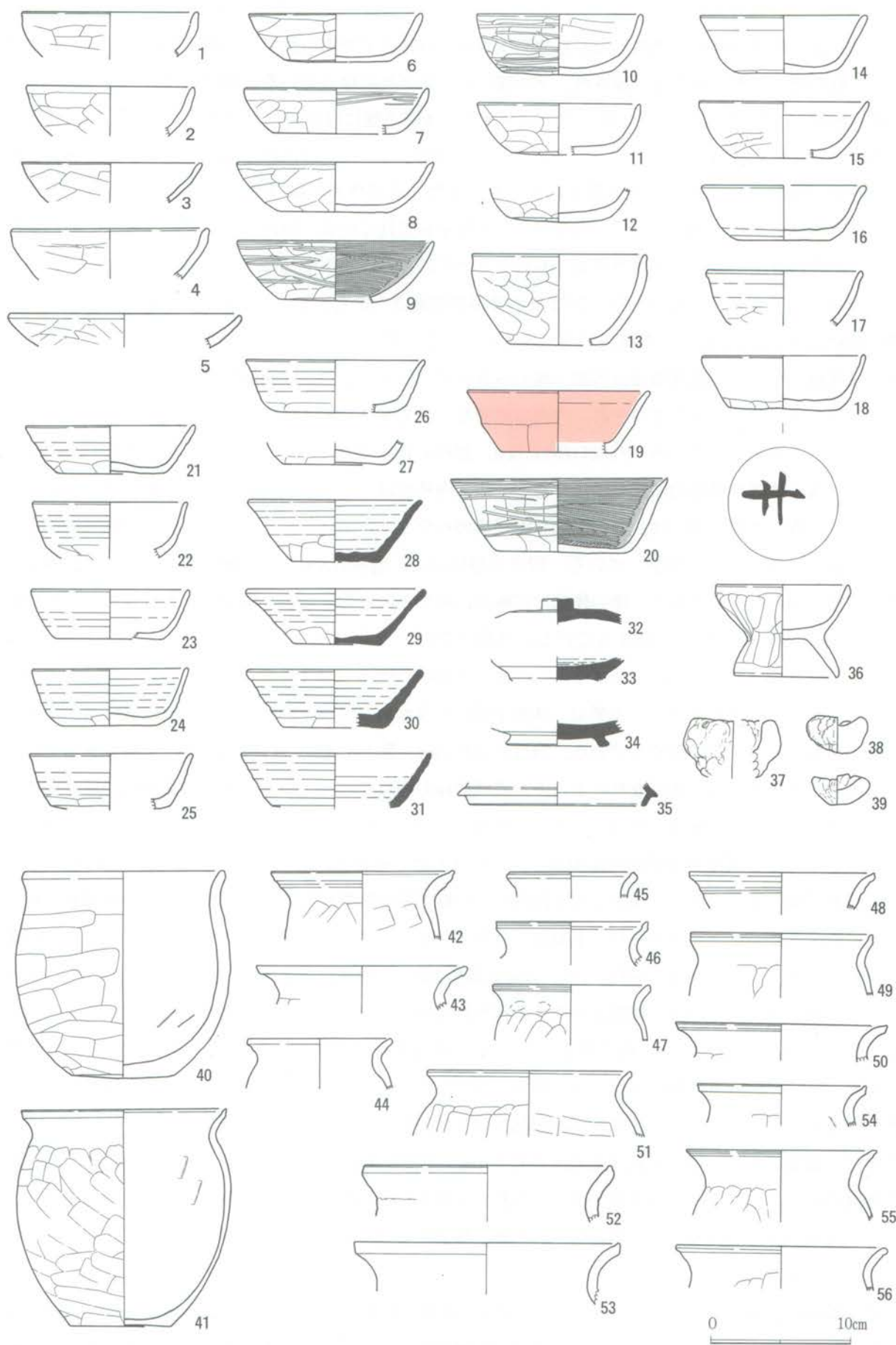
第8図 SI 1 遺構実測図

遺物 1軒の住居跡としては、かなり大量の遺物が出土した。

1～36は杯類である。1は口径12.2cm、現高3.3cmを計り、赤褐色を呈する。内湾しつつ立ち上がる体部は、口縁で僅かに外反している。体部外面は横方向のヘラケズリの後、ナデられている。内面は横ナデで調整される。2は口径11.8cm、現高3.5cmで、暗褐色を呈する。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁はそのまま単純に処理されている。体部外面はヘラケズリの後、ナデが加えられ、内面はナデ調整である。3は口径12.6cm、現高3.0cmで、赤褐色を呈する。体部から口縁にかけての器形、内外面の調整法は、2とほとんど同じである。4は口径13.7cm、現高3.5cmで、赤褐色を呈する。体部は直線的に立ち上がり、口縁で若干内屈している。口縁直下に粘土紐輪積痕を残す。体部外面はヘラケズリの後、ナデ、内面はナデで調整されている。5は推定口径16.4cm、現高2.3cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾しながら大きく開く皿形で、口縁には成形仕上げの際の稜が見られる。体部調整は外面ヘラケズリである。6は北東壁際の覆土下層から出土した。口径12.1cm、器高3.5cm、底径7.3cmで、赤褐色を呈する。広い底部から体部が内湾気味に立ち上がる器形で、口唇部は成形仕上げの際に、小さく面取りされている。体部外面はヘラケズリの後、ナデが加えられる。底部外面は手持ちヘラケズリで処理されている。7は口径12.8cm、現高3.3cm、推定底径8.6cmで、赤褐色を呈する。広い底部から浅い体部が内湾気味に立ち上がる器形で、口縁は成形仕上げの際に絞られて先細りしている。体部外面はヘラケズリ、内面は粗いヘラミガキが加えられる。底部外面は手持ちヘラケズリの痕跡が観察される。8は竈内から出土した。口径13.8cm、器高3.7cm、底径7.8cmで、外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈する。広い底部から浅い体部が内湾気味に大きく開く器形で、口唇部で僅かに外反する。体部外面はヘラケズリの後、ナデが入る。底部外面は手持ちヘラケズリで処理されている。9は口径13.8cm、器高4.2cm、底径7.7cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部が内湾しながら開く器形で、口縁は単純である。体部外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキされ、内面は緻密にヘラミガキされている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整される。10は南西壁寄りの床面直上から出土した。口径11.7cm、器高4.4cm、底径7.9cmで、赤褐色を呈する。若干膨らんだ底部から、深い体部が内湾しながら立ち上がる器形で、口縁は単純である。体部外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキが加えられ、底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。11は竈前面の床面付近から出土した。口径11.4cm、器高3.6cm、底径7.6cmで、赤褐色を呈する。やや膨らんだ底部から体部が内湾しながら立ち上がる器形で、口縁は単純である。体部外面はヘラケズリ、底部内面は手持ちヘラケズリで調整される。12は現高2.5cm、底径7.0cmで、赤褐色を呈する。底部外面は面取りされ、体部は内湾気味に立ち上がっている。体部外面はヘラケズリ、底部内面は手持ちヘラケズリである。13は体部が深い小鉢形である。口径12.2cm、器高6.3cm、推定底径7.0cmで、赤褐色を呈する。体部は若干内湾し、口縁は横ナデで絞られて先細りになる。体部外面はヘラケズリされ、底部外面は手持ちヘラケズリされている。14は口径11.8cm、器高4.2cm、底径6.0cmで、赤褐色を呈する。底部は周縁部が面取りされ、体部は直線的に開いている。体部内外面とも、ロクロナデでロクロ目が消されている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。15は竈内から出土した。口径11.8cm、器高4.0cm、推定底径6.8cmで、赤褐色を呈する。底部周縁は面取りされず、体部は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁は若干外反している。体部外面はヘラケズリの後、ナデられているが、粘土紐輪積痕が観察される。底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。16は南西寄りの床面付近から出土した。口径11.3cm、器高4.0cm、底径6.6cmで、明褐色を呈する。底部は周縁の面取りが行き届き、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は肥厚して外反している。体部内外面はロクロナ

デ調整され、底部外面は回転ヘラケズリがかかっている。17は推定口径10.8cm、現高3.8cmで、赤褐色を呈する。深い体部は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁直下で絞られて、口縁は肥厚している。体部外面は口縁の横ナデが上半部まで施され、下半部はヘラケズリになっている。18は口径11.4cm、器高3.8cm、底径7.8cmで、赤褐色を呈する。底部は厚みを持ち、体部下端には弱いヘラケズリが入り、僅かに面取りされている。体部は直線的に立ち上がるが、上半で内湾している。体部内外面はロクロナデで調整され、底部外面は手持ちヘラケズリで処理されている。また、底部外面には「サ」の墨書銘がある。19は口径12.8cm、器高4.3cm、底径8.0cmで、内外面とも赤色塗彩されている。体部は下半部は直線的に立ち上がるが、上半部は外反する。体部は内外面ともロクロナデの後、外面下半部はヘラケズリされている。底部外面は手持ちヘラケズリの痕がある。20は南東壁際の床面直上から出土した。口径14.4cm、器高5.1cm、底径9.4cmで、明褐色を呈し、内面は黒色処理されている。広い底部から体部が直線的に立ち上がるが、口縁では外反している。底部周縁は体部下端のヘラケズリによって僅かに面取りされている。体部外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキされ、内面は緻密なヘラミガキが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリによって調整されている。21は口径11.8cm、器高3.4cm、底径7.6cmで、赤褐色を呈する。上げ底の底部から、浅い体部が直線的に開く器形である。体部内外面はロクロナデ調整だが、外面にはロクロ目が強く残っている。体部下端には、底部面取りのためのヘラミガキが見られる。底部外面は回転糸切り後、周辺を手持ちヘラケズリで調整している。22は口径10.4cm、現高3.3cmで、暗褐色を呈する。底部周縁は面取りが行き届き、丸みを持ち、深い体部は直線的に穏やかに立ち上がる。体部内外面はロクロナデ調整だが、外面には強くロクロ目が残っている。体部下端はヘラケズリされている。23は口径11.1cm、器高3.5cm、底径7.7cmで、赤褐色を呈する。上げ底の底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁で僅かに外反している。体部調整はロクロナデで、外面下端にヘラケズリが施される。底部外面は回転糸切り後、周辺を手持ちヘラケズリで調整している。24は口径10.8cm、器高3.9cm、底径7.0cmで、赤褐色を呈する。体部下端のヘラケズリによる面取りによって、底部周縁の面取りは行き届き、体部は直線的に穏やかに立ち上がっている。体部内外面には強いロクロ目が残っている。底部外面は回転糸切り後、周辺を手持ちヘラケズリしている。25は南東壁際の床面直上から出土した。推定口径11.4cm、現高3.9cmで、暗褐色を呈する。底部周縁は丸みを持ち、体部は若干内湾し、口縁で僅かに外反している。体部はロクロ調整されているが、外面は強いロクロ目が残り、下端はヘラケズリされている。底部外面は手持ちヘラケズリの痕跡が見られる。26は口径12.6cm、現高3.7cm、推定底径8.2cmで、明褐色を呈する。浅い体部は直線的に立ち上がり、口縁で外反している。体部はロクロ調整されるが、外面には強いロクロ目が残っている。体部下端は、ヘラケズリによって十分面取りされている。底部外面は手持ちヘラケズリされている。27は現高1.5cm、底径7.4cmで、灰褐色を呈する。体部下端がヘラケズリされて、底部周縁が面取りされている。体部調整はロクロナデである。底部外面は回転糸切り後、周辺が手持ちヘラケズリされている。36は高台付き杯で、竈脇の覆土上層から出土した。口径9.4cm、器高6.5cm、台径7.3cmで、赤褐色を呈する。杯体部は直線的に立ち上がり、口縁は横ナデで絞られ、先細りしている。台部は厚みがあり、裾部で先細りしている。接地面は特に面取りはしていない。外面は体部から台部にかけて縦方向のヘラケズリを施し、内面は杯部・台部ともにナデられている。

28～35は須恵器である。28は口径12.1cm、器高4.3cm、底径6.1cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母・長石・石英が含まれる。小さい底部から体部が直線的に大きく開き、口縁は外反している。体部内外面に

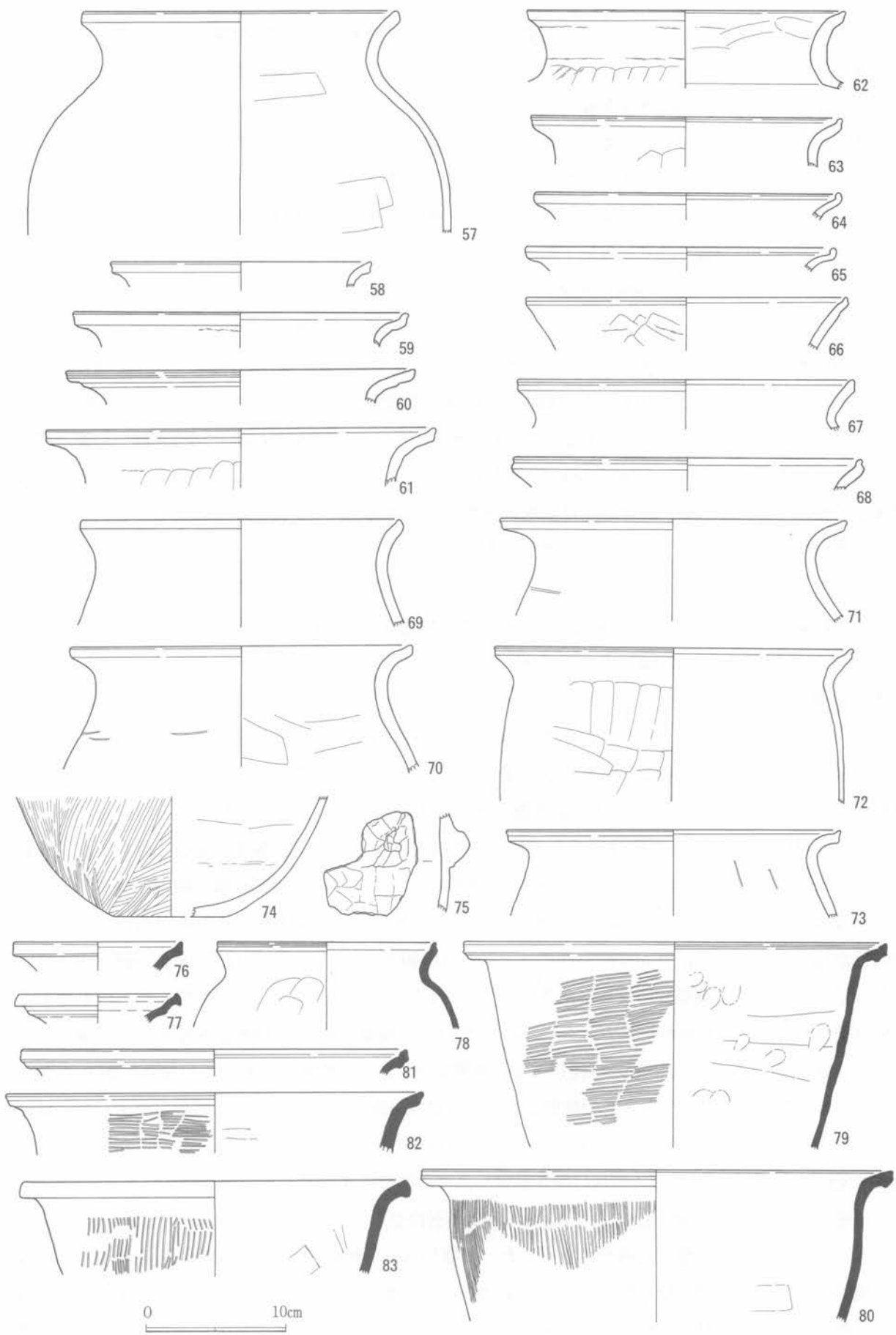


第9図 SI 1遺物実測図

はロクロ目がよく残っており、外面下端はヘラケズリされている。底部外面は回転ヘラ切り後、周辺を手持ちヘラケズリで調整している。また、底部外面には、ヘラ描きで「+」が陰刻されている。29は南東壁際の覆土中層から出土した。口径12.6cm、器高3.9cm、底径6.2cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母・長石・石英が含まれる。体部は外反気味に大きく開き、口縁は肥厚している。体部内外面にはロクロ目が強く残されている。ロクロから切り離れた後に、体部下端をヘラケズリして厚みを削いでいる。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリを加えている。30は口径12.4cm、器高4.0cm、底径7.3cmで、暗灰色を呈する。胎土には雲母・長石・石英が混入している。体部は直線的に大きく開き、口縁で肥厚する。体部内外面にはロクロ目が強く残り、外面下端はヘラケズリされている。底部外面は手持ちヘラケズリの痕跡が見られる。31は推定口径13.4cm、現高3.8cmで、青灰色を呈する。体部は直線的に大きく開いている。内外面にはロクロ目が強く残されている。32は杯蓋である。現高1.8cmで、灰色を呈する。ツマミの形状はほぼ円柱状で、擬宝珠状の張り出しはまったくなく、頂心部周囲のへこみも極めて浅い。残存部の外面には回転ヘラケズリがかけられている。33は高台付きの底部破片である。現高1.7cmで、明灰色を呈する。底部は丸みを持ち、椀形の可能性がある。外面は回転ヘラケズリで調整される。34は底部から高台にかけての破片である。現高1.8cm、台径7.5cmで、明灰色を呈する。高台は短く、台裾が肥厚している。接地面は幅広く面取りされている。底部外面は回転ヘラケズリで調整される。35は杯蓋端部破片で、青灰色を呈する。カエリはかなり長く、蓋となす角度も大きい。端部は丸く処理されている。

37～39は手捏ね土器である。37は現高4.0cmで、赤褐色を呈する。成形の際の皺が随所に見られ、口縁周辺には指頭痕が観察される。口縁端は比較的丁寧に調整され、凹凸は少ない。38は器高2.6cmで、赤褐色を呈する。器高に対して容積は小さく、分厚い粘土円盤の中央を、指頭で圧迫して成形している。39は中央付近竈寄りの覆土下層から出土した。器高2.3cmで、暗褐色を呈する。成形法は38と同じである。

40～74は甕である。40は口径14.0cm、器高14.5cm、底径7.4cmで、赤褐色を呈する。頸部のくびれは弱く、口縁は穏やかに立ち上がる。胴部の張りは少ない。口縁は調整の際に稜が形成されている。胴部外面は横方向にヘラケズリされる。41は北東壁際の床面直上から出土した。口径14.4cm、器高15.2cm、底径7.1cmで、赤褐色を呈する。口縁は屈折してから口唇部が外反している。胴部は僅かに肩が張り、底部は上げ底になっている。胴部外面は上半部が縦から斜めのヘラケズリ、下半部は横方向のヘラケズリが施される。42は口径12.8cm、現高4.0cmで、赤褐色を呈する。頸部から口縁にかけて厚みがあり、口縁には浅い凹線が巡っている。胴部外面は縦方向のヘラケズリが観察される。43は口径15.0cm、現高2.6cmで、赤褐色を呈する。口縁は調整時に稜が形成されている。44は口径10.2cm、現高3.5cmで、赤褐色を呈する。口縁は稜を形成する。器面が荒れている。45は口径8.8cm、現高1.8cmで、暗褐色を呈する。口縁は肥厚している。46は竈上から出土した。口径10.6cm、現高3.0cmで、赤褐色を呈する。口縁は屈折して立ち上がっている。胴部外面はヘラケズリの痕跡がある。47は中央部北西寄りの覆土上層から出土した。口縁には沈線が巡り、胴部は肩の張らない器形となる。外面は縦方向のヘラケズリが施される。48は口径13.0cm、現高2.9cmで、赤褐色を呈する。口縁は開きが弱く、口唇部で肥厚している。49は口径12.8cm、現高4.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は屈折して直立し、胴部の肩は張らない。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。50は東柱穴脇の覆土上層から出土した。口径14.8cm、現高3.2cmで、赤褐色を呈する。口縁は大きく開いて肥厚し、下端に稜を持つ。胴部外面にはヘラケズリが見られる。51は口径14.4cm、現高4.4cmで、赤褐色を呈する。胴部最大径が口径を大きく上回る器形で、口縁は肥厚して稜をなしている。胴部外



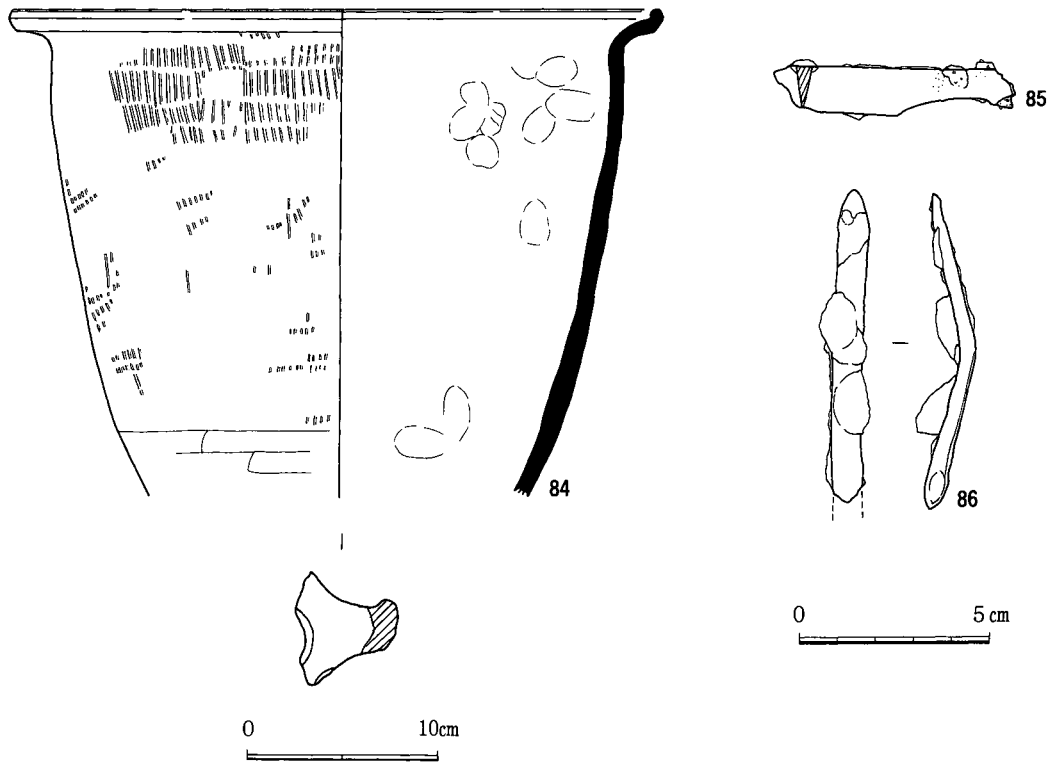
第10図 SI 1 遺物実測図 (2)

面は縦方向のヘラケズリが見られる。52は口径17.9cm、現高4.0cmで、赤褐色を呈する。分厚い口縁の口唇部はつまみ出されて直立している。53は口径19.0cm、現高3.4cmで、赤褐色を呈する。口縁下端部は稜をなし、口唇部は直立している。54は口径11.8cm、現高2.8cmで、暗褐色を呈する。53と同様な口縁形態である。55は口径13.0cm、現高4.8cmで、赤褐色を呈する。口唇部が段をなして、水平に引き出されている。胴部外面は縦方向のヘラケズリが観察される。56は口径14.8cm、現高2.9cmで、赤褐色を呈する。口縁は肥厚して、玉縁風となっている。胴部外面はヘラケズリされる。57は口径22.2cm、現高16.0cmで、暗褐色を呈する。胴部最大径が口径を大きく上回る器形である。口縁は調整の際に稜が形成され、口唇部は丸みを持つ。器面は荒れていて、調整法は観察不能である。58は推定口径18.4cm、現高1.8cmで、明褐色を呈する。胎土には雲母・長石を含んでいる。肥厚した口縁を横ナデで締め付け、下端部に稜を形成している。常総型甕である。59は口径23.7cm、現高2.4cmで、暗褐色を呈する。胎土には雲母・長石を含んでいる。口縁は屈折してから口唇部が外反している。常総型甕である。口縁直下に接合痕が観察される。60は口径24.8cm、現高2.4cmで、暗褐色を呈する。口縁は大きく開き、口縁下に突帯を巡らせている。端部は横ナデで締め付け、下端に稜を形成している。61は口径27.7cm、現高4.1cmで、暗褐色を呈する。口唇部はつまみ出されて、口縁下端に稜を形成している。頸部にはヘラケズリの痕跡が見られる。62は口径22.8cm、現高5.5cmで、赤褐色を呈する。頸部は分厚く、口縁直下に稜を形成している。胴部外面は縦ヘラケズリされている。頸部には接合痕が見られる。63は口径22.0cm、現高3.5cmで、暗褐色を呈する。頸部は直立し、口縁は屈折してから口唇部が外反する。頸部にはヘラケズリが観察される。64は推定口径21.7cm、現高1.9cmで、暗褐色を呈する。口縁は屈折して直立している。65は推定口径22.0cm、現高1.7cmで、赤褐色を呈する。口縁形態は64と類似する。66は口径23.0cm、現高3.7cmで、赤褐色を呈する。口縁はラップ状に大きく開き、口唇部は直立する。口縁部は直下からヘラケズリが観察される。67は口径23.8cm、現高3.5cmで、暗褐色を呈する。口唇部がつまみ出されて、浅い沈線が巡っている。68は推定口径24.8cm、現高2.2cmで、暗褐色を呈する。口縁に粘土紐を貼付して口唇部を形成し、口縁・口唇間は沈線化している。69は口径22.4cm、現高7.2cmで、明褐色を呈する。口縁は穏やかに開き、口唇部がつまみ出されている。胴部は肩の張らない器形になる。胴部外面はヘラケズリの後、ナデられている。70は口径24.5cm、現高8.6cmで、明褐色を呈する。胎土に雲母・長石を含んでいる。口縁直下に稜線を持ち、口唇部は直立する。胴部外面はナデられている。常総型甕である。71は竈内から出土した。口径25.0cm、現高7.2cmで、胎土に雲母・長石を含んでいる。口縁形態や調整法は70と酷似している。常総型甕である。72は口径25.6cm、現高10.8cmで、明褐色を呈する。口唇部の成型法は68に等しい。胴部は肩が張らず、外面は上位が縦方向、中位が横方向のヘラケズリが施される。73は東寄りの床面直上から出土した。口径23.8cm、現高6.1cmで、明褐色を呈する。胎土に雲母・長石を含んでいる。口縁は大きく外反し、稜を形成して口唇部は直立する。常総型甕である。74は現高8.6cm、推定底径7.8cmで、明褐色を呈する。胎土に雲母・長石が含まれている。胴部外面には斜めの緻密なヘラナデが施されている。常総型の甕である。

75は甑の把手で、赤褐色を呈する。円錐形の粘土塊を胴上部に貼付し、ヘラナデによって固定している。

76・77は須恵器長頸壺である。76は口径11.8cm、現高2.0cmで、明灰色を呈する。二重口縁の側面はほぼ直立し、口唇部は丸みを持つ。77は口径11.3cm、現高1.9cmで、青灰色を呈する。二重口縁の下端部は外側に開いている。口縁内外面にはロクロ目が残っている。

78は須恵器甕である。口径15.4cm、現高6.0cmで、暗褐色を呈する。口縁頂に粘土紐を貼付して口唇部

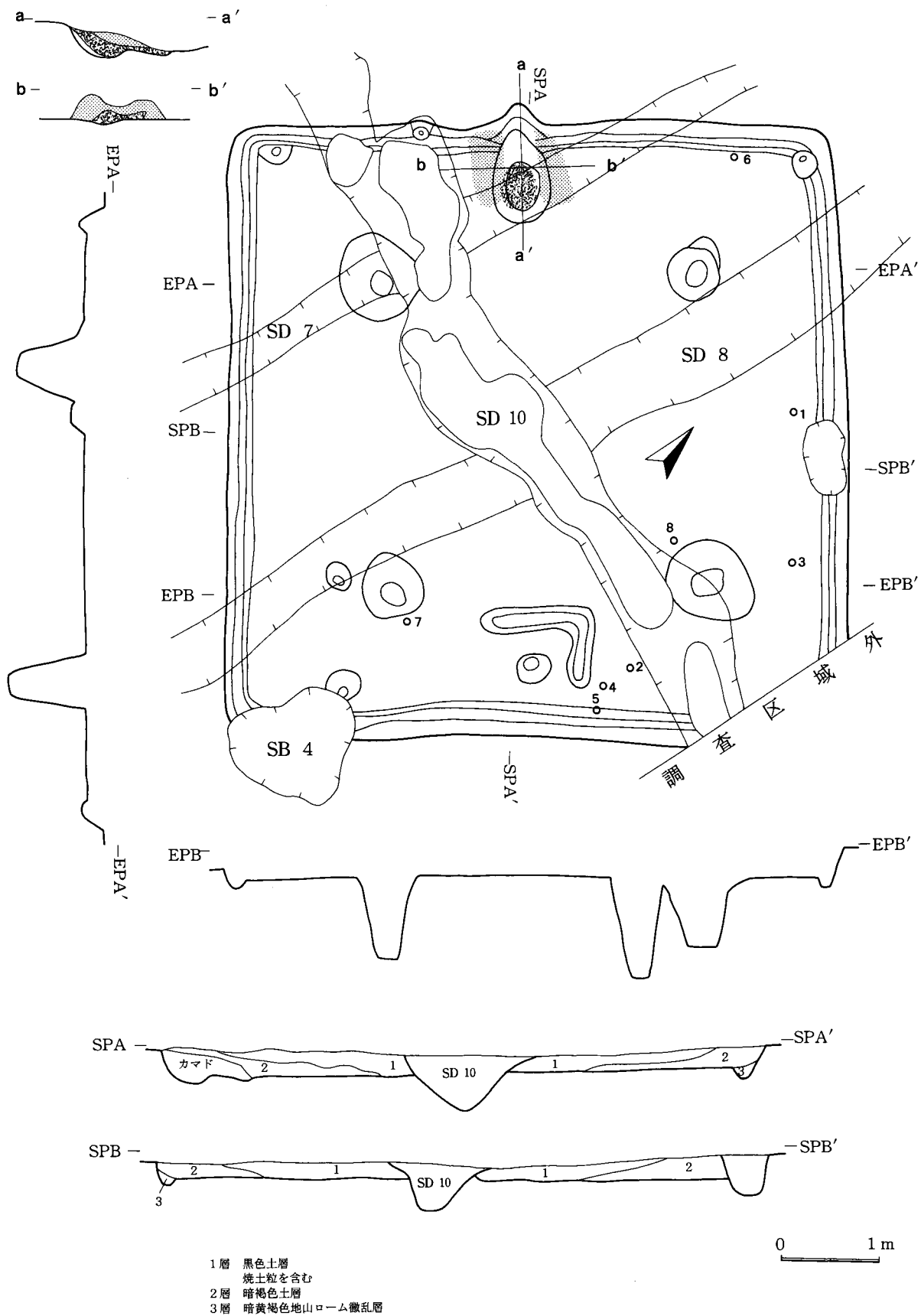


第11図 SI 1 遺物実測図 (3)

を形成している。胴部最大径が口径を上回り、肩の張る器形となる。胴部はヘラケズリの後、ナデられている。

79～83は須恵器甕または甑である。79は北コーナー付近の覆土中層から出土した。口径30.2cm、現高14.4cmで、青灰色を呈する。二重口縁の中央には小突帯が巡っており、口唇部はつまみ出されて先細りしている。胴部外面には粗く平行タタキ目が施され、内面には指頭痕が残っている。80は口径17.0cm、現高10.7cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母・長石が含まれている。口縁は大きく外反し、直下に粘土紐が貼付されて二重口縁を形成する。胴部には縦方向の平行タタキ目が施されている。81は推定口径27.7cm、現高1.8cmで、明灰色を呈する。口縁直下に粘土紐を貼付して二重口縁を形成してから、頂部に粘土紐を巡らせて口唇部を形成している。82は竈左袖上から出土した。推定口径29.7cm、現高4.3cmで、明灰色を呈するが、胴部は明褐色の部分があり、生焼け製品である。外反する口縁の下側に粘土紐を貼付して二重口縁を形成している。胴部外面は横方向の平行タタキ目が施されている。83は推定口径27.4cm、現高6.5cmで、青灰色を呈する。口縁下側に粘土紐を貼付して二重口縁を形成しているが、側面は平滑に仕上げている。胴部外面には縦の平行タタキ目が施されている。

84は須恵器甑である。口径33.0cm、現高25.5cmで、明灰色を呈する。外反する口縁に粘土紐を載せて口唇部を形成している。胴部外面は平行タタキ目の上からナデ調整している。下位は横方向にヘラケズリされている。内面は当て具痕や輪積痕が観察される。底部は五孔式となる。



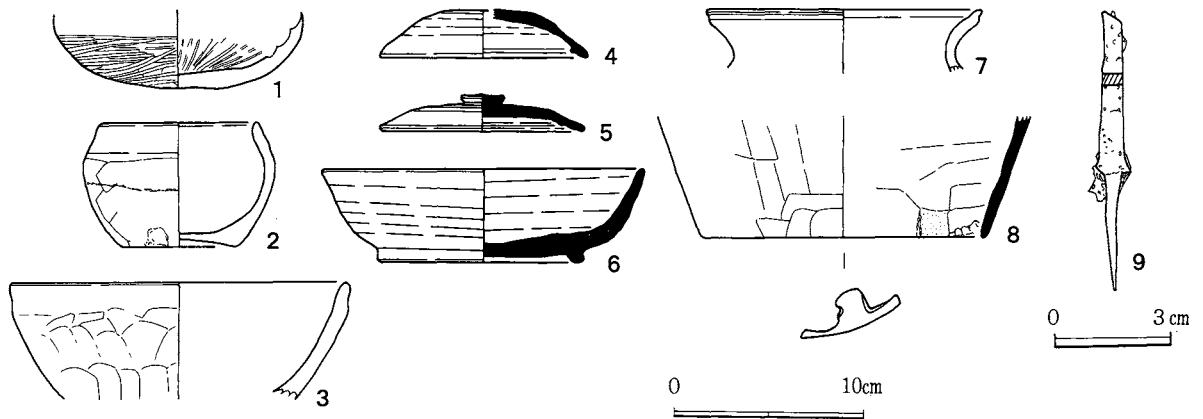
第12図 SI 2 遺構実測図

85・86は鉄製品である。85は刀子で、北東寄りの床面直上から出土した。長さ6.3cmで、11.5gを量る。刃部が大きく磨滅している。86は鉄鏃で、東柱穴上の覆土上層から出土した。長さ8.3cm、8.4gを量る。三角形の切っ先部分は残されており、断面は扁平な長方形である。

SI 2 (第12図、第13図、図版2、図版31、図版37)

遺構 E7区の南端に位置し、SI 1の南に隣り合う住居跡である。SD 7・SD 8・SD 10に攪乱されており、東コーナーが調査区外に出ている。1辺6.1mの正方形プランを呈する。周辺の他住居跡に比べて各コーナーが角張って掘られている。北西壁中央に竈が設置されている。周溝は全周している。柱穴は各コーナー寄りに4か所完備している。竈対向壁際中央にははしご穴があり、周囲にL字状の区画溝が検出された。このほか、北・西コーナーや、北西壁際、さらに南柱穴脇や南東壁際に小ピットが点在している。柱穴で囲まれた床面は硬くしまっていた。竈遺存状態はやや不良である。両袖部はよく残り、燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られていた。煙道部の張り出し方はやや小さい。

遺物 1は杯で、北東壁際の覆土中から出土した。現高3.9cmで、明褐色を呈する。底部は丸底で厚みがある。体下部から底部外面にかけて緻密なヘラミガキが見られ、内面は放射状にヘラミガキされている。2は広口壺で、はしご穴付近の覆土中から出土した。口径8.2cm、器高6.3cm、底径6.0cmで、明褐色を呈する。底部は強い上げ底で、胴部は上位で内屈して口縁に至る。胴部外面は粗いヘラケズリが施され、底部外面には木葉圧痕が残されている。3は鉢で、北東壁際の覆土中から出土した。口径17.4cm、現高6.0cmで、明褐色を呈する。口縁は強く横ナデされ、体部外面は細かいヘラケズリが入る。4～6は須恵器杯類である。4は杯蓋で、はしご穴付近の覆土中から出土した。口径10.8cm、現高2.4cmで、灰褐色を呈する。ツマミを欠失しているが、小口径で高さのある器形である。口縁内面には痕跡程度のカエリが存在する。天井部外面は半ば以上にヘラケズリが及んでいる。5は杯蓋で、はしご穴付近の覆土中から出土した。口径10.4cm、器高1.8cmで、青灰色を呈する。小口径で扁平な器形である。ツマミは扁平擬宝珠状で、口縁内面の高い位置に痕跡程度のカエリが付されている。天井部外面のヘラケズリは半分程度に及んでいる。6は高台付きの杯で、北西壁際の床面直上から出土した。口径16.8cm、器高4.8cm、台径10.6cmで、黄灰色を呈する。広い底部から浅い体部が直線的に立ち上がる。高台は短く、接地面は十分面取りされている。体部内外面はロクロ目が強く残っている。底部外面は回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリして



第13図 SI 2 遺物実測図

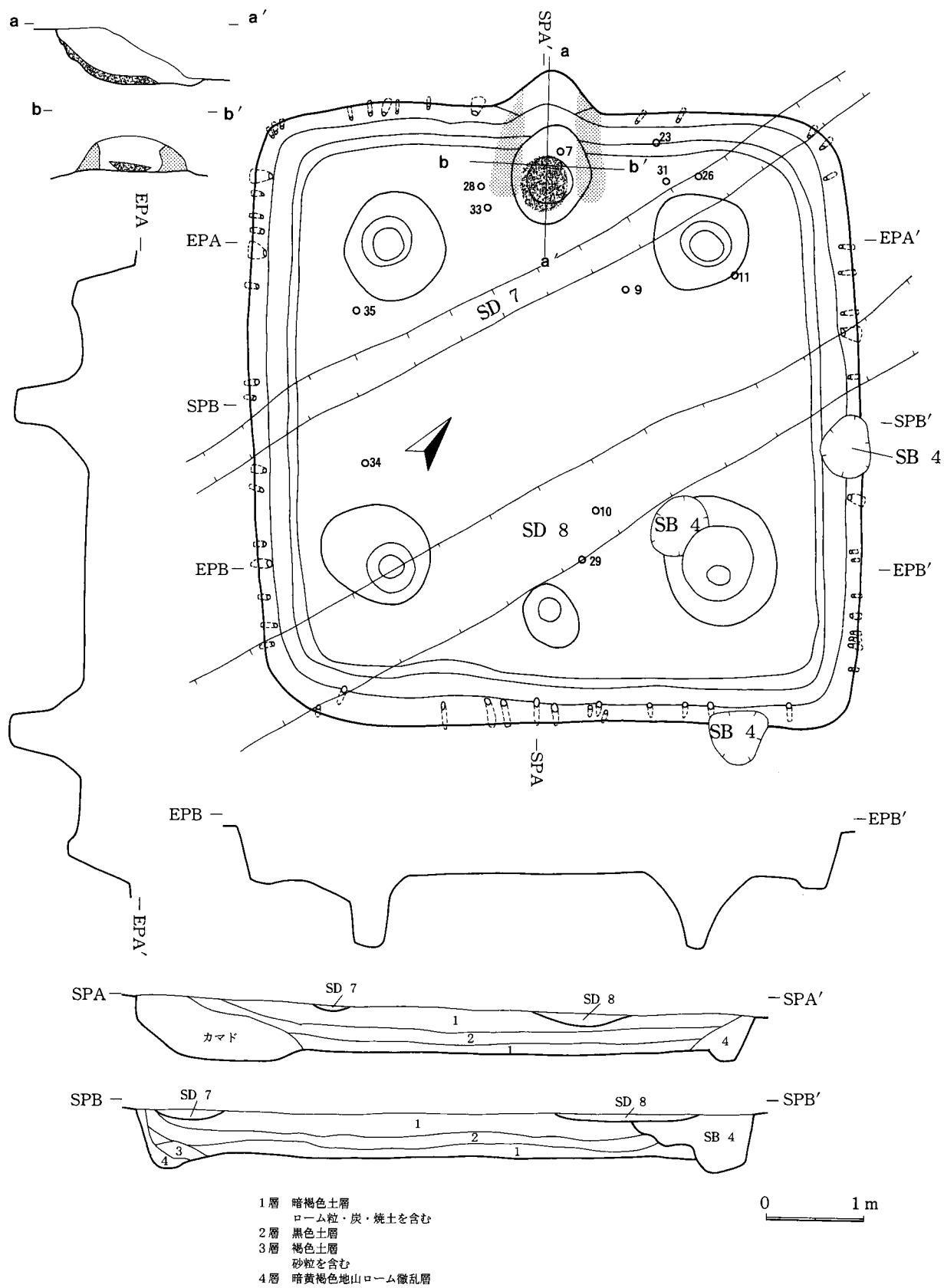
いる。7は甕で、南柱穴脇の覆土中から出土した。推定口径14.3cm、現高3.1cmで、赤褐色を呈する。口縁頂に粘土紐を巡らせ、口唇部を成形し、接合部は沈線化している。8は須恵器甗で、東柱穴脇の覆土中から出土した。五孔式で、胴部外面はヘラケズリされている。

9は鉄鏝で、長さ7.2cm、5.1gを量る。切っ先が欠失する有茎鏝である。

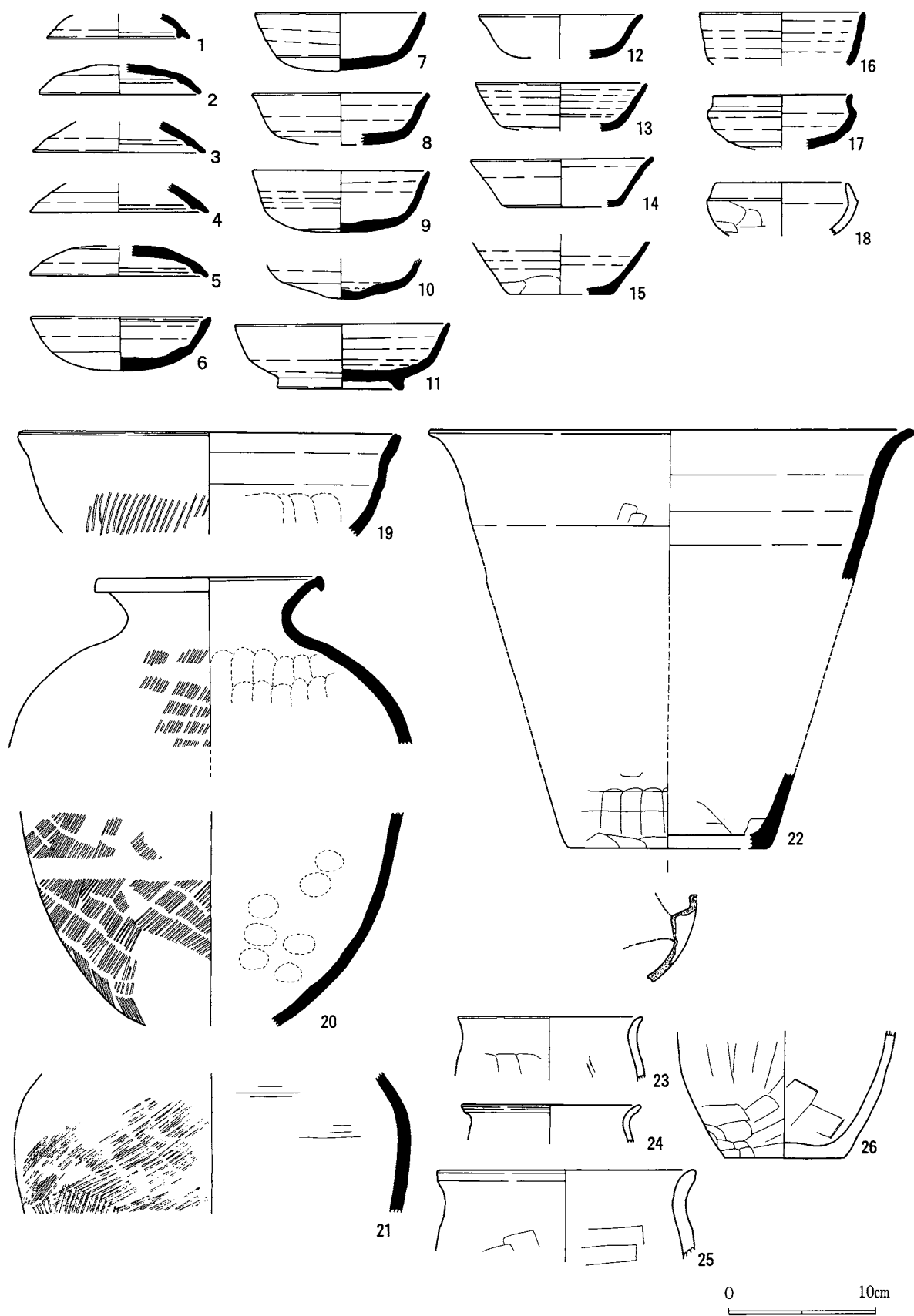
SI 3 (第14図、第15図、第16図、図版3、図版31、図版32、図版37)

遺構 E8区の北端に位置し、SI 2の南に隣り合い、北I群の南端に位置する。上層をSD 7・SD 8・SB 4に攪乱されている。1辺6.0mの正方形プランを呈する。各コーナーはやや丸みを帯びている。竈は北西壁中央に設置されている。周溝は全周している。柱穴は大型で、コーナー寄りに4か所完備している。また、はしご穴が竈対向壁際中央に掘られている。各壁の下半部には、SI 1で見られたような土止め用板材の支持杭痕が多数穿たれている。床面硬化範囲は広く、四柱穴を越えて各壁手前まで及んでいた。竈の遺存状態は良好で、両袖部はよく残っている。周溝が竈下を貫通している。船型ピットが壁に接して掘られており、燃焼部は袖部よりもはみ出している。

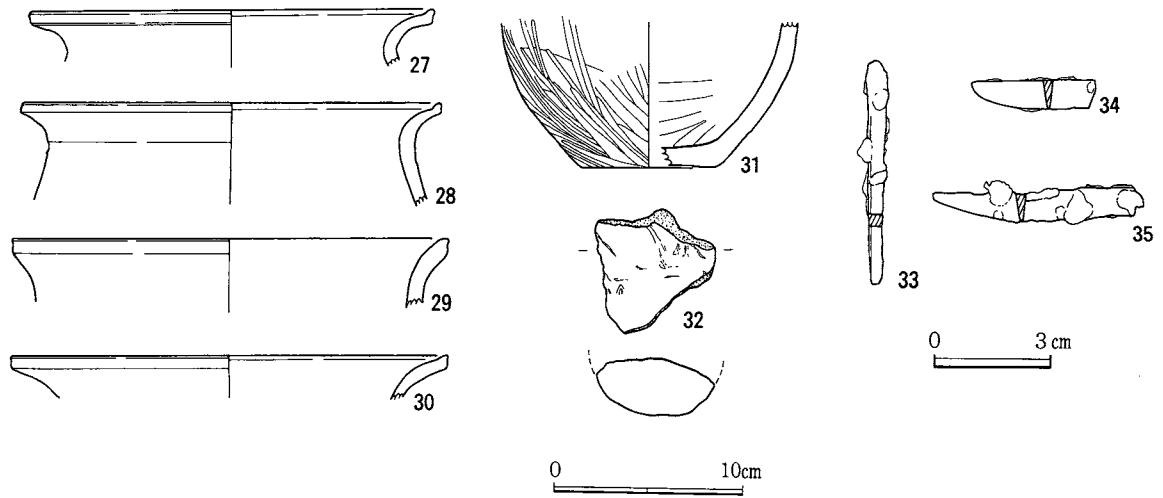
遺物 1～18は杯類である。1～5は須恵器杯蓋である。1は推定口径9.6cm、現高1.7cmで、暗灰色を呈する。天井部は高く、カエリは口唇部より僅かに引っ込んでいる。2は口径10.8cm、現高2.1cmで、暗灰色を呈する。扁平な器形で、口縁付近で軽く屈曲し、全体にロクロ調整されている。カエリは痕跡程度で、口縁内面のかなり高位置に巡っている。3は推定口径11.5cm、現高2.0cmで、赤褐色を呈する生焼け製品である。天井部から口縁にかけて直線的に成形し、全体にロクロ調整されている。口縁内面の高位置に痕跡程度のカエリが付されている。4は推定口径12.0cm、現高1.9cmで、明灰色を呈する。残存部分では口縁まで直線的に成形され、外面上端には天井部からの回転ヘラケズリが及んでいる。カエリの断面は三角形である。5は口径11.8cm、現高2.0cmで、明灰色を呈する。器形は2と類似する。天井部外面の平坦面に回転ヘラケズリが見られる。カエリは痕跡程度で、断面は低頭三角形である。6～17は須恵器杯である。6は口径12.0cm、器高3.5cmで、明灰色を呈する。底部は丸底で、体部が直線的に大きく開いている。体部内外面は弱いロクロ目が残り、底部外面は回転ヘラケズリで調整されている。この面には自然釉がかかっている。7は竈内から出土した。口径11.4cm、器高4.1cmで、明灰色を呈する。底部は僅かに丸底で、深い体部が直線的に立ち上がる。体部外面には強いロクロ目が残り、底部外面は回転ヘラケズリされている。8は口径11.8cm、現高3.4cmで、青灰色を呈する。底部は丸底気味で、口縁は外反している。体部はロクロ調整で、底部外面はヘラケズリ後、ナデられている。9は竈前面の覆土下層から出土した。口径11.8cm、器高4.2cmで、外面は黄灰色、内面は赤褐色を呈する生焼け製品である。底部は丸底気味で、回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリされ、体部は深く、ロクロ調整されている。内外面ともに磨滅している。10は東寄りの覆土下層から出土した。現高2.7cmで、暗灰色を呈する。底部は突出して、外面は回転ヘラ切り痕が観察される。11は高台付きの杯で、北柱穴脇の床面直上から出土した。口径14.8cm、器高4.3cm、台径8.7cmで、黄灰色を呈する。広い底部はほぼ平底で、体部は下位で屈折して立ち上がる。高台は接地面で細くなり、丸みを帯びる。体部はロクロ調整、底部外面は回転ヘラケズリされている。12は口径11.0cm、現高3.0cmで、黄灰色を呈する。底部は丸底に近く、体部はS字状に大きく開く。体部はロクロ調整が行き届き、表面が滑らかである。13は口径11.7cm、現高3.3cm、推定底径7.9cmで、赤褐色を呈する生焼け製品である。体部は直線的に開き、内外面ともロクロ目が残っている。底部外面には手持ちヘラケ



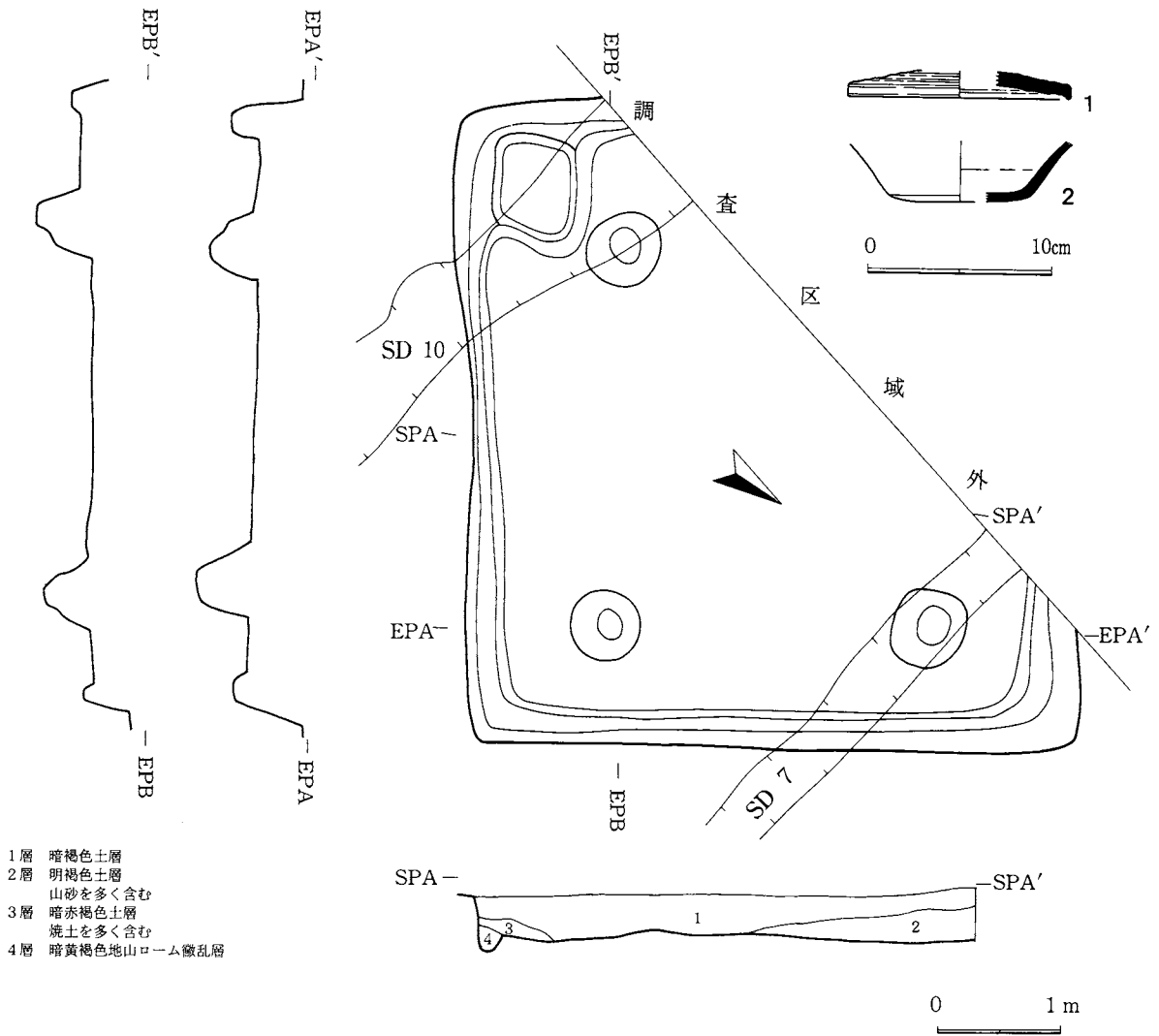
第14図 SI 3遺構実測図



第15図 SI 3遺物実測図



第16図 SI 3 遺物実測図 (2)



第17図 SI 4 遺構・遺物実測図

ズリの痕跡がある。14は口径12.2cm、器高3.2cmで、暗灰色を呈する。体部は直線的に開き、口縁で外反する。ロクロ調整されている。15は現高3.5cm、推定底径7.0cmで、明灰色を呈する。体部は直線的に開き、内外面はロクロ目が強く残る。底部外面は手持ちヘラケズリされている。16は口径11.0cm、現高3.6cmで、黄灰色を呈する。体部は直線的で、内外面にロクロ目が強く残っている。17は合子形の杯身である。口径9.2cm、現高3.7cmで、褐色を呈する生焼け製品である。底部は丸底で、受け部は直立し、端部が丸みを帯びる。外面調整は回転ヘラケズリによる。18は土師器杯である。口径8.8cm、現高3.5cmで、暗褐色を呈する。高い受け部は内屈し、体部が深くなる器形である。体部外面は横方向にヘラケズリされている。

19は須恵器鉢である。口径25.0cm、現高6.8cmで、黄褐色を呈する生焼け製品である。口縁は若干外反し、体部は丸みを帯びて底部に至る器形である。体部外面は平行タタキ目が残り、内面には当て具痕が観察される。

20・21は須恵器細頸甕である。20は口径15.0cmで、暗灰色を呈する。口縁部は二重口縁で、下方に開いている。胴部は肩が張り、最大径が上位にくる腰高の器形である。外面には平行タタキ目が施される。内面には当て具痕が観察される。21は現高9.3cmで、灰褐色を呈する。外面には平行タタキ目が施される。

22は須恵器甑である。口径32.6cm、底径13.4cmで、明灰色を呈する。口縁は外反して端部は水平化する。胴部は単純なバケツ形で、底部は五孔式である。胴上部はナデ、下部はヘラケズリが見られる。

23～31は土師器甕である。23は竈北脇の床面直上から出土した。口径12.4cm、現高4.0cmで、赤褐色を呈する。短い口縁は外反し、頸部のくびれは弱く、胴は肩の張らない器形である。胴部外面は縦にヘラケズリされている。24は口径12.0cm、現高2.4cmで、赤褐色を呈する。口縁頂に粘土紐を載せ口唇部を成形するタイプで、接合部が沈線化している。25は口径17.4cm、現高5.9cmで、赤褐色を呈する。厚みのある甕で、頸部のくびれは弱く、口縁には横ナデの際に稜が形成される。胴部には粗いヘラケズリが見られる。26は北柱穴脇の床面直上から出土した。現高8.5cm、底径8.0cmで、赤褐色を呈する。胴部は中位は縦の、下位が横のヘラケズリで調整される。器面が荒れている。27～31は常総型の甕で、いずれも胎土に雲母・長石を含んでいる。27は口径21.0cm、現高3.0cmで、明褐色を呈する。口縁成形は水平に外反した口縁頂に口唇部を作り出すもので、形態の相違に関わらず、24と等しい。28～30の口縁成形法も同じである。28は竈南脇の覆土中から出土した。口径21.8cm、現高5.0cmで、明褐色を呈する。29は東よりの床面直上から出土した。口径22.6cm、現高3.7cmで、明褐色を呈する。30は推定口径23.0cm、現高2.6cmで、明褐色を呈する。31は北柱穴脇の床面直上から出土した。現高7.7cm、底径7.0cmで、暗褐色を呈する。胴部外面は斜位の緻密なヘラナデが加えられる。

32は土製支脚で、赤褐色を呈する。

33～35は鉄製品である。33は鉄鏃で、竈南脇の覆土下層から出土した。長さ5.9cm、2.9gを量る。篋被部の破片である。34・35は刀子で、いずれも切っ先部分の破片である。34は南寄りの床面直上から出土した。長さ3.3cm、2.1gを量る。35は西柱穴脇の床面直上から出土した。長さ5.6cm、2.9gを量る。

SI 4 (第17図、図版3)

遺構 E7区の南西部に所在し、北I群中の西端に位置し、SD 7・SD 10に上層を攪乱され、西側は調査区外に出ている。南東壁が南側で広がっているため、下辺2.5m、幅2.5mの逆台形プランになると思われる。各コーナーは明確な稜を作っている。南東壁は中央がやや内側にくぼんでいる。竈は北西壁に設置さ

れているものと思われる。周溝は確認範囲では全周している。柱穴は3か所検出されたが、おそらく西側にもう1か所存在する。南コーナーには床面下5～6cmの深さの方形の浅い掘り込みが見られる。床面は全体によくしまっている。

遺物 1は須恵器杯蓋で、口径12.0cm、現高1.9cmで、明灰色を呈する。厚みがある蓋で、端部にカエリが付されている。天井部3分の1程が回転ヘラケズリされている。2は須恵器杯で、現高3.2cm、底径7.6cmで、暗灰色を呈する。底部から体部にかけて厚みは一樣である。体部は外反して開き、丁寧にロクロナデされている。底部外面はナデ調整で処理される。

SI 5 (第18図、図版3)

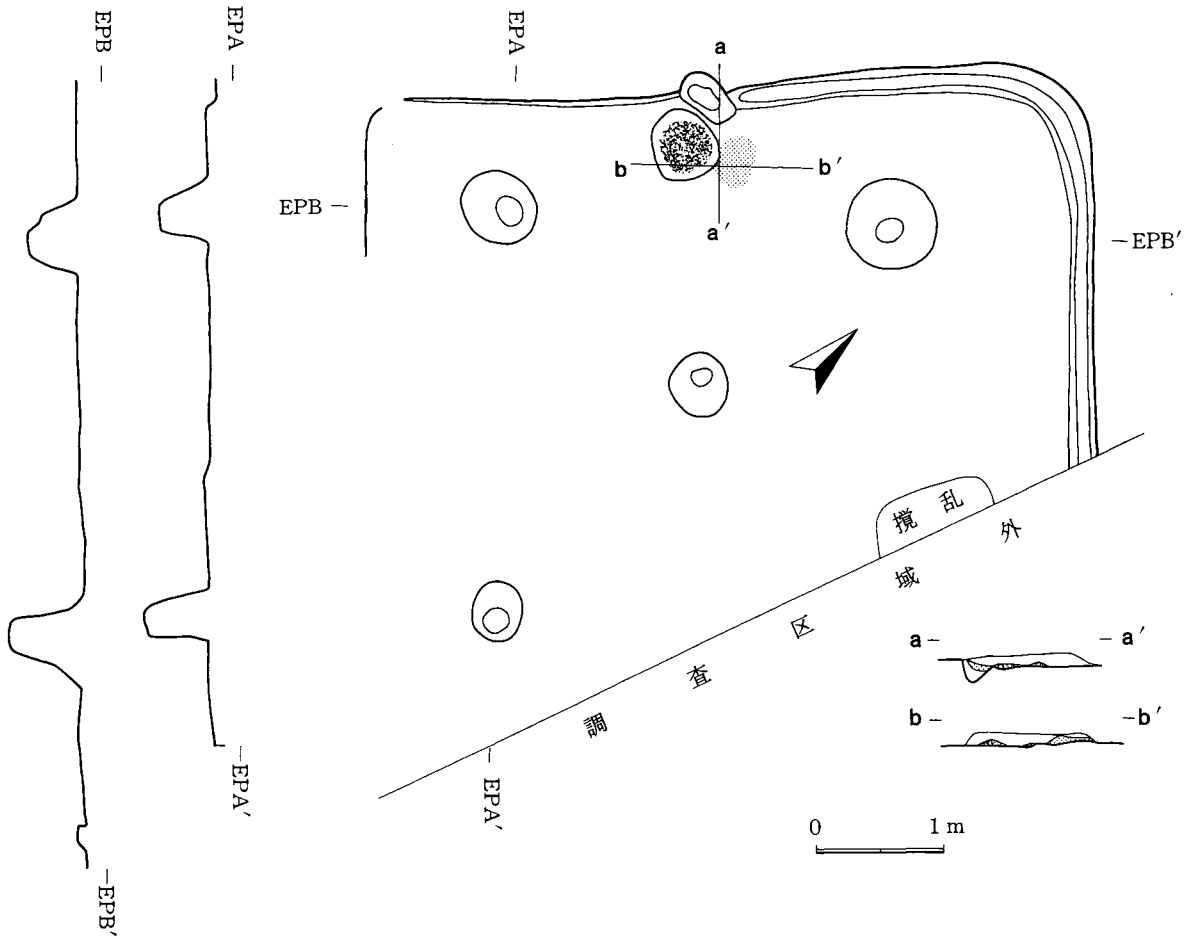
遺構 E7区の南西端に所在し、北Ⅱ群の北端に位置する。東側が調査区外に出ている。浅い住居跡で、南西壁は検出できなかった。北コーナーはかなり丸みを帯びている。竈は北西壁中央に設置されている。北西壁は竈付近に比べて、北コーナー側が張り出している。周溝は北側のみが確認された。柱穴は調査区外を除いて3か所検出された。このほかに、小ピットが中央に存在する。床面は軟質で、僅かに竈前面が硬化している。竈の遺存状況は不良である。壁面に接近して船型ピットが掘られ、煙道部は小さい。遺物は出土しなかった。

SI 6 (第19図、第20図、図版4、図版32)

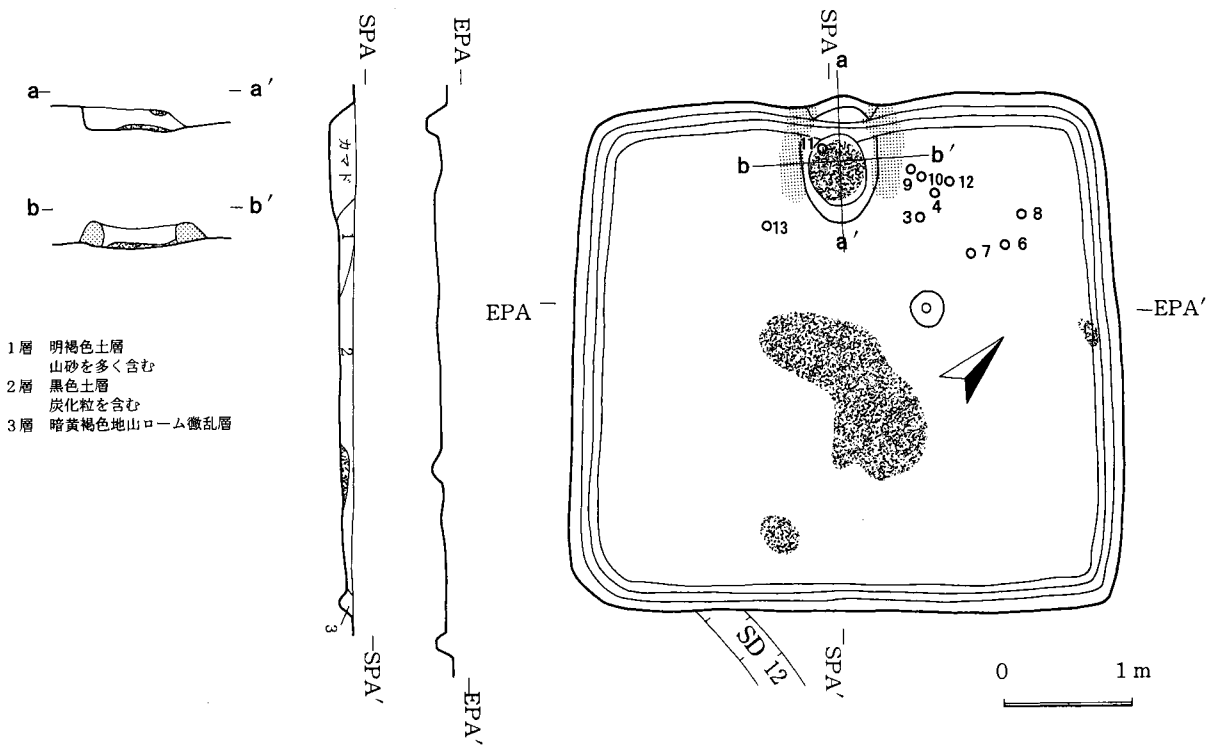
遺構 D9区の北東端に位置し、SI 5の南西に隣り合う。上辺3.9m、下辺4.3m、幅4.0mの台形プランを呈する。西・北・東コーナーは角張っているが、南コーナーは丸みを帯びている。北西壁中央に竈が設置されている。北西壁は竈の両側が外側へ若干張り出している。周溝は全周している。柱穴は存在しないが、中央付近に床面下6cmの深さの小ピットがある。竈の遺存状態は不良で、両袖基部付近が残存していた。燃焼部は壁面に接して船型ピットが掘られ、煙道部は極めて未発達である。周溝が竈下を貫通していた。床面中央には焼土が広がり、北部から中央にかけて炭化材が散乱していた。

遺物 1～8は杯である。1は口径11.6cm、現高3.7cmで、暗褐色を呈する。口縁はやや外反する。体部外面はヘラケズリ後、粗いヘラミガキ、内面にも粗いヘラミガキが加えられる。2は口径11.8cm、現高3.7cmで、暗褐色を呈する。口縁は僅かに外反している。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。3は竈北脇の床面直上から出土した。口径12.0cm、器高4.8cmで、赤褐色を呈する。口縁は僅かに外反する。外面はヘラケズリされ、内面はヘラミガキされている。4は竈北脇の床面直上から出土した。口径13.4cm、現高4.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は内面は直立するが、外側は内傾している。調整法は1と等しい。5は口径11.7cm、現高3.1cmで、明褐色を呈する。外面はヘラケズリ、内面は粗くヘラミガキされている。6は北寄りの床面直上から出土した。口径12.0cm、器高4.1cmで、明褐色を呈し、内面は黒色処理されている。口縁は内傾する。外面はヘラケズリの後、粗いヘラナデ、内面はヘラミガキされている。7は北寄りの床面直上から出土した。口径12.9cm、器高4.4cmで、褐色を呈し、内面は黒色処理されている。厚みのある土器で、口縁は直立する。調整法は6と等しい。8は大型杯で、北寄りの床面直上から出土した。口径16.6cm、器高8.9cmで、明褐色を呈する。厚みのある土器で、口縁は内傾して、端部は外反する。外面はヘラケズリされている。

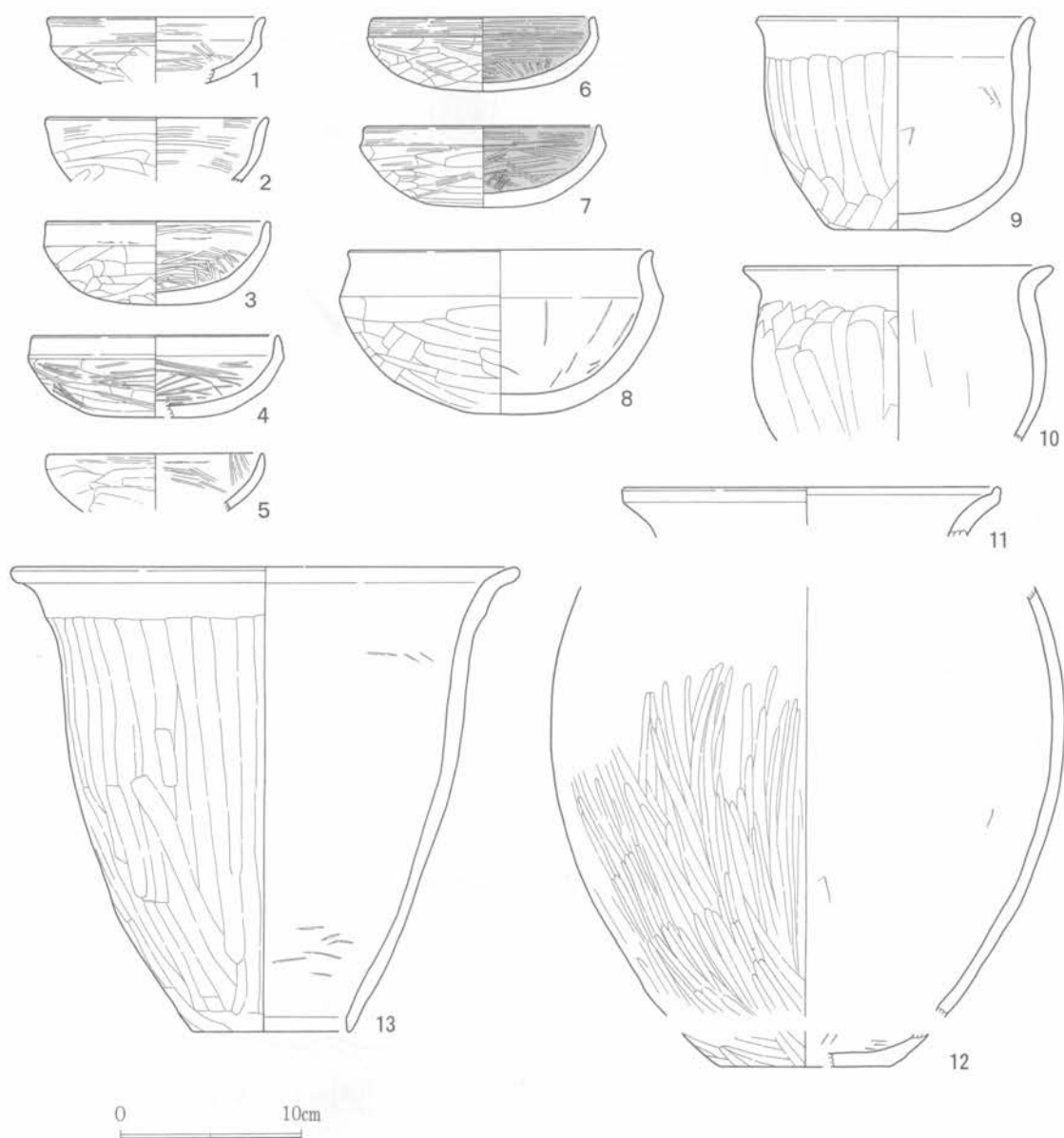
9～12は甕である。9は竈北脇の床面直上から出土した。口径14.8cm、器高11.9cm、底径6.3cmで、赤



第18図 SI 5遺構実測図



第19図 SI 6遺構実測図



第20図 SI 6 遺物実測図

褐色を呈する。頸部のくびれは弱く、外面は縦方向の、下端のみ斜めのヘラケズリが入る。10は竈北脇の床面直上から出土した。口径16.8cm、現高9.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は大きく開く。11は竈内から出土した。常総型の甕で、推定口径20.5cm、現高2.8cmで、明褐色を呈する。胎土には長石・石英が含まれる。口縁頂に口唇部を成形するタイプである。12は竈北脇の床面直上から出土した。常総型の甕で、現高約25cm、底径9.3cmで、明褐色を呈し、胎土には雲母・長石が含まれる。胴下半部はヘラミガキが施される。

13は甕で、竈南脇の床面直上から出土した。口径27.8cm、器高25.3cm、底径8.5cmで、赤褐色を呈する。口縁は外反し、底部内面は削がれている。

SI 7 (第21図、図版4、図版32)

遺構 D9区の北東部に所在し、北Ⅱ群の中央、SI 6の南西に位置する。SD 13・SD 14に攪乱されている。上辺3.8m、下辺3.4m、幅3.8mの各コーナーが丸みを帯びる逆台形プランを示す。竈は北西壁に設置されている。北西壁の竈袖が取り付けられている部分は、やや内側にせり出しており、そこから西コーナーに至る部分は逆に外側にやや張り出している。周溝は確認された範囲では全周する。柱穴は4か所完備しているが、北・西柱穴のプランは不整形である。竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。竈の遺存状態は不良で、両袖部の基部が残存していた。袖部は短く、燃焼部には壁面に接して円形のピットが掘られているが、使用頻度が少ないためか、坑底は余り焼けていない。煙道部は未発達である。

遺物 1・2は杯である。1は口径13.6cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。2は須恵器で、口径15.8cm、現高5.2cmで、明灰色を呈する。体部は直線的で、内外面にロクロ目が残る。3は須恵器長頸壺で北コーナー付近の覆土中から出土した。現高9.7cm、台径6.7cmで、明灰色を呈する。胴部上下の寸法が合わず、接合部で突線化している。太く、短い高台が付され、その接地面は内傾している。胴部上位は自然釉がかかり、下部下半は回転ヘラケズリされている。4は常総型の甕で、口径20.0cm、現高5.5cmで、明褐色を呈する。外反した口縁頂に粘土紐を廻して、さらに突出した口唇部を成形している。

SI 8 (第22図、図版5、図版37)

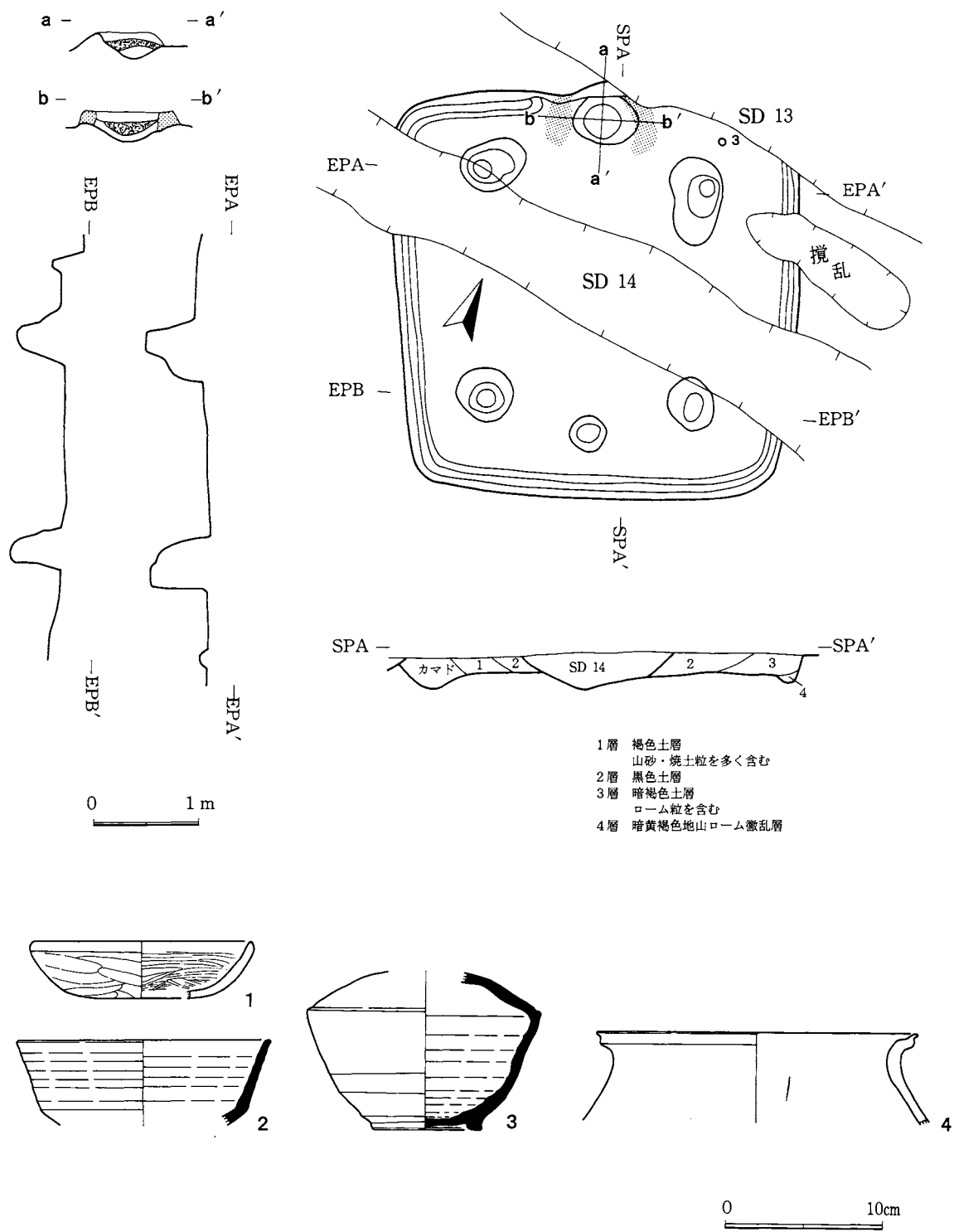
遺構 D9区の北東部に所在し、SI 7の南に隣り合う。短辺3.9m、長辺4.2m、幅4.4mの横転台形プランを呈する。各コーナーは比較的角張っている。竈は北西壁中央に設置されている。竈のある北西壁は全体的にやや外側に張り出している。周溝は全周している。柱穴は各コーナー寄りに4か所存在し、そのほか、竈対向壁側にはしご穴が検出された。床面は周溝手前まで硬化面が広がっている。竈の遺存状態はやや不良で、両袖の下部が残存していた。燃焼部には船型ピットが壁面に接近して掘られているが、使用頻度が少ないためか、坑底は余り焼けていない。煙道部は未発達である。

遺物 1は杯で、南西壁際の覆土中から出土した。口径12.9cm、現高3.5cmで、明褐色を呈し、内面は赤色塗彩されている。外面はヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキされている。2は常総型甕で、南西壁際の覆土中から出土した。現高15.0cm、底径9.8cmで、赤褐色を呈し、胎土には雲母・石英を含む。外面はヘラナデされ、底部外面には木葉圧痕が観察される。3は南西壁際の覆土中から出土した。鉄鏝の篋被破片である。長さ4.5cm、3.5gを量る。

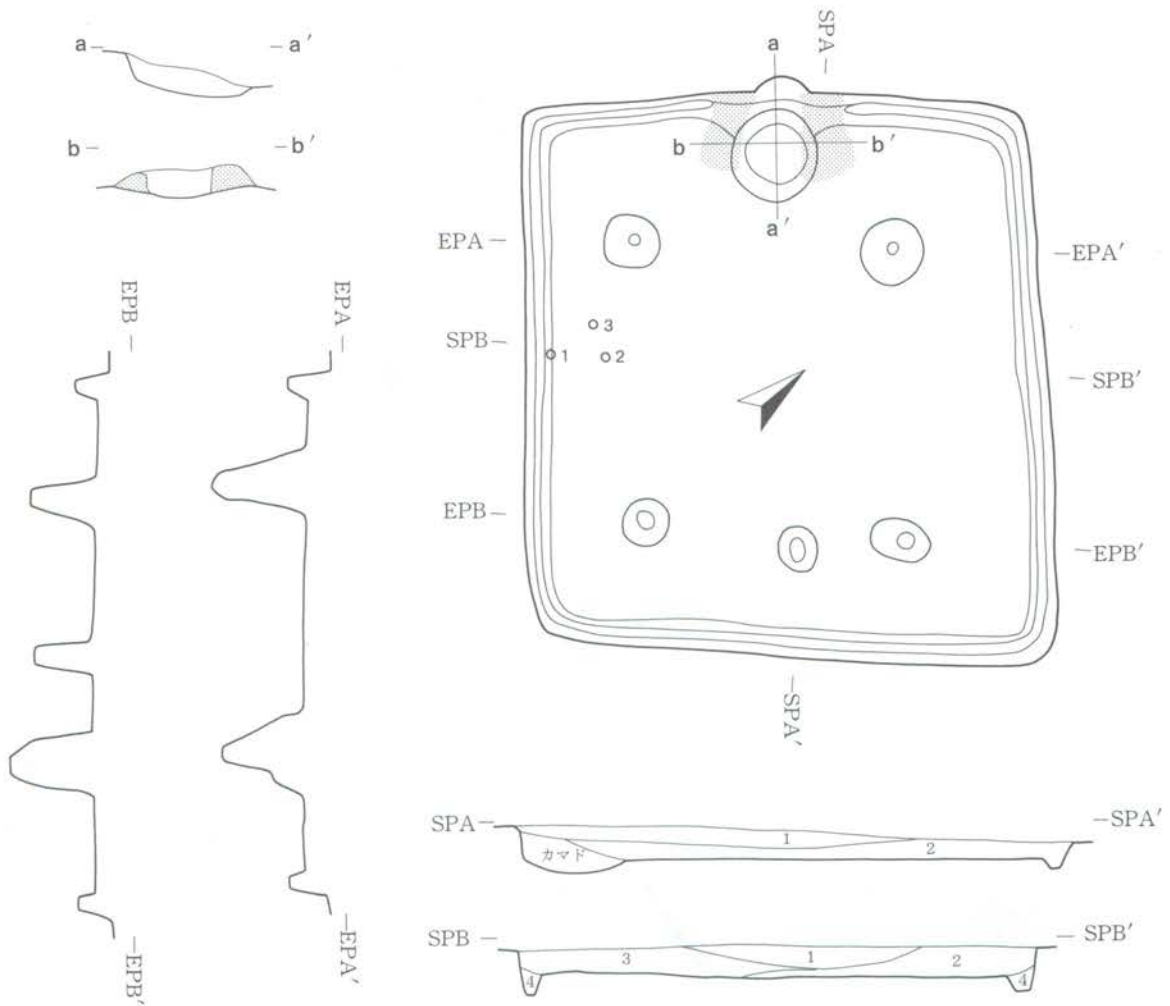
SI 9 (第23図、図版5、図版32)

遺構 D9区からE9区にかけて所在し、SI 8の西隣に位置し、SI 10を切っており、東側は調査区外に出ている。短辺3.8m、長辺4.4以上の隅丸長方形プランを呈する。確認された北・西コーナーはかなり丸みを帯びている。竈は北西壁中央に設置されている。竈のある北西壁は全体的に外側へ張り出している。周溝は西側に限定されている。柱穴は3か所検出されたが、おそらく調査区外にもう1か所存在するであろう。柱穴の内側は床面が硬化している。竈の遺存状態は不良である。船型ピットは両袖よりも長く、煙道部は未発達である。

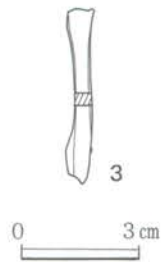
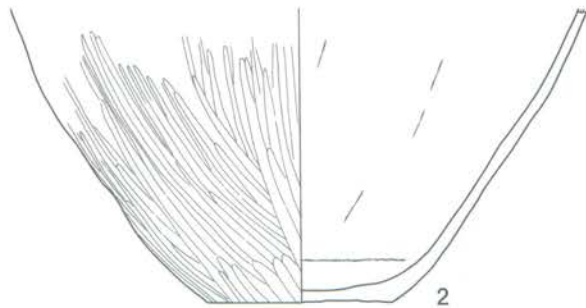
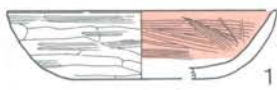
遺物 1・2は杯である。1は口径12.2cm、現高5.7cmで、暗褐色を呈し、内面は黒色処理されている。



第21図 SI 7遺構・遺物実測図

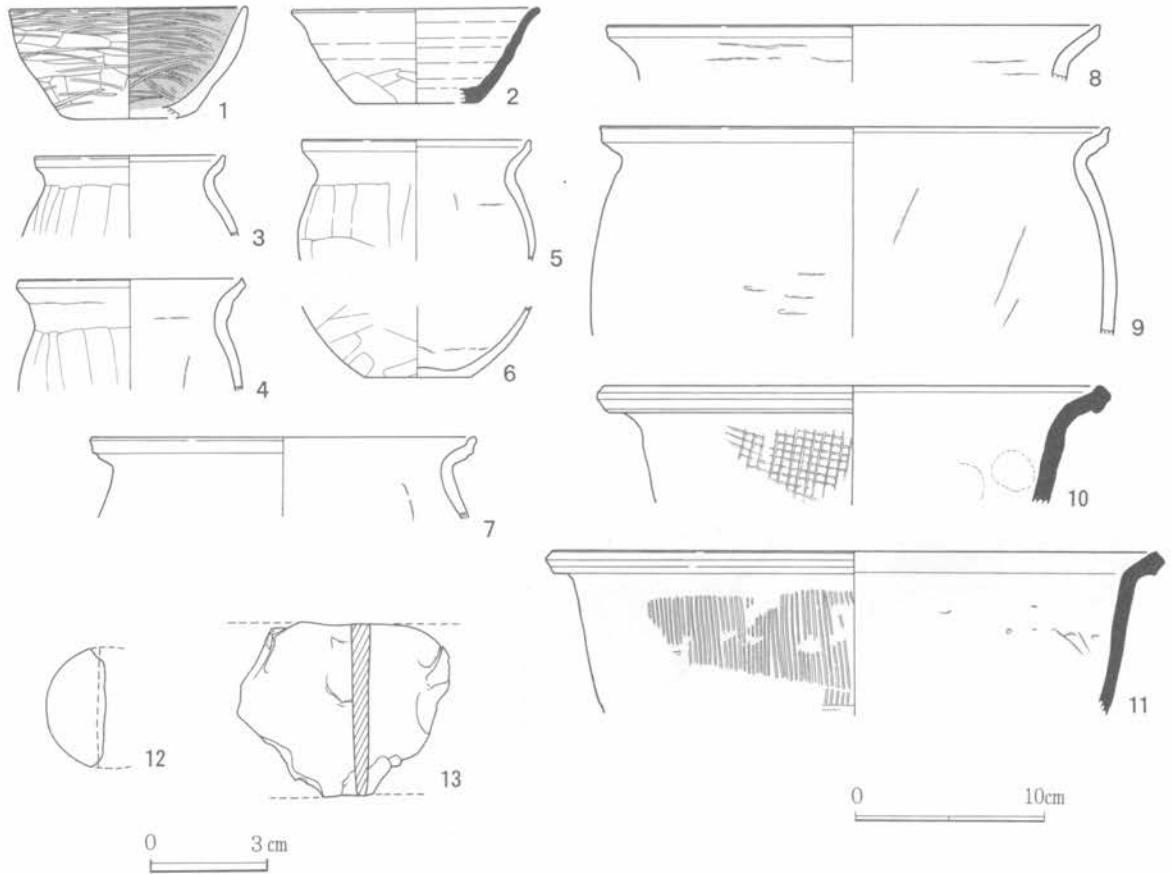
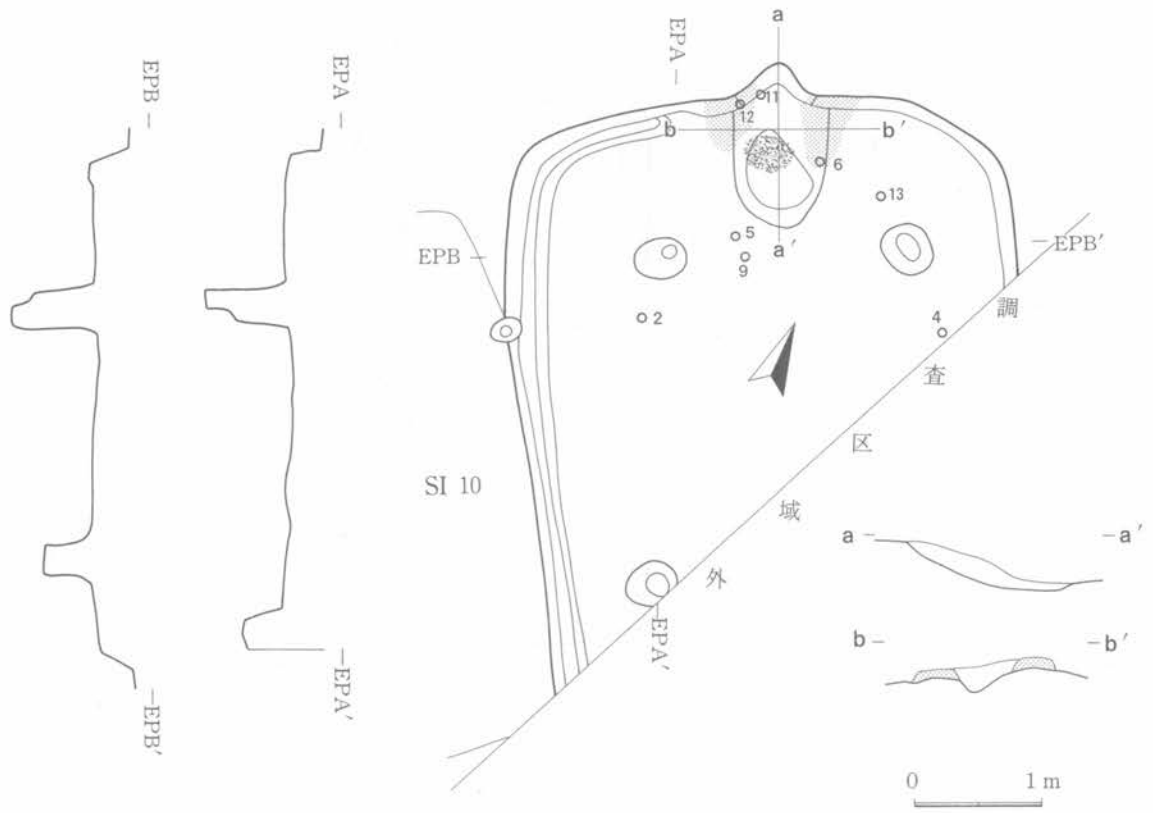


- 1層 灰褐色土層
山砂を多く含む
- 2層 暗褐色土層
焼土粒・ローム粒を多く含む
- 3層 黒色土層
炭化粒・ローム粒を含む
- 4層 暗黄褐色地山ローム攪乱層



0 10cm

第22図 SI 8遺構・遺物実測図



第23図 SI 9遺構・遺物実測図

体部は内湾気味に立ち上がるが、厚みが一定しない。外面はヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。2は須恵器で、西柱穴付近の覆土中から出土した。口径12.8cm、器高4.9cm、底径6.5cmで、暗灰色を呈する。胎土には長石・石英が含まれる。体部は緩いS字状を呈し、ロクロ目がよく残り、下端はヘラケズリされている。3～9は甕である。3は口径9.7cm、現高4.2cmで、赤褐色を呈する。口縁は屈折して立ち上がり、胴部は余り肩が張らない。胴部外面は縦のヘラケズリが見られる。4は調査区境界際の覆土下層から出土した。口径11.6cm、現高5.8cmで、暗褐色を呈する。口縁の外反は弱く、口唇部で直立するが、外側は内傾し、鋭い稜を作っている。胴部外面は縦にヘラケズリされている。5は竈手前の床面直上から出土した。口径12.0cm、現高6.2cmで、赤褐色を呈し、胎土には長石・石英を含む。口縁は屈折して直立している。胴部ヘラケズリは上位が縦、中位が横方向である。6は竈内から出土した。現高3.7cm、底径5.5cmで、赤褐色を呈し、胎土に長石・石英を含む。胴部には粗いヘラケズリが施されている。5と同一個体であろう。7～9は常総型の甕である。7は口径19.7cm、現高4.2cmで、明褐色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。口縁は外反し、直下に沈線が巡り、口縁頂に口唇部を成形している。8は推定口径25.8cm、現高2.9cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。口縁の外反は弱く、外側は直立して稜を形成している。9は竈手前の床面直上から出土した。口径26.5cm、現高10.7cmで、明褐色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。頸部直下から膨らみだす器形で、口縁頂に口唇部が成形される。胴部外面はナデ仕上げである。10・11は須恵器甕または甑である。10は口径26.1cm、現高6.1cmで、明灰色を呈する。口縁下側に粘土紐を貼付して、二重口縁を成形している。胴部外面には格子状タタキ目が施され、内面には当て具痕が残る。11は竈上から出土した。口径32.0cm、現高8.4cmで、黄褐色を呈する生焼け製品である。口縁成形は10と同様で、胴部外面には平行タタキ目が付される。

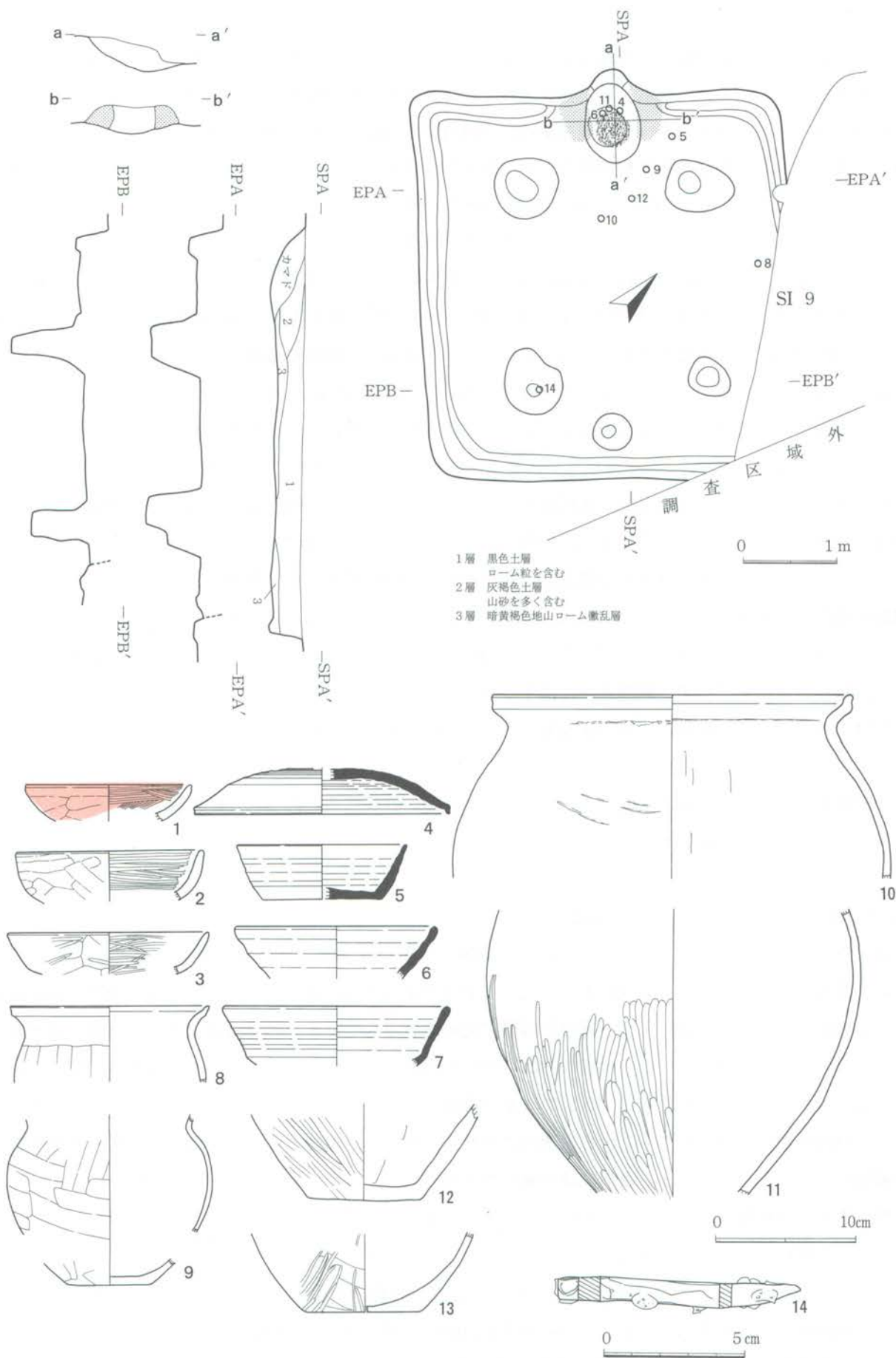
12は土玉で、赤褐色を呈し、10.9gを量る。中央の貫通孔が一部残っている。表面はナデ調整されている。

13は鉄製品で、北柱穴脇の床面直上から出土した。長い鉄板状の一部で、片側が薄くなっているが、刃は付いていない。27.6gを量る。

SI 10 (第24図、図版5、図版32、図版37)

遺構 D9区からE9区にかけて所在し、SI 8の東隣で、SI 9に東側が切られている。各コーナーはやや丸みを帯び、西コーナーはやや突出している。その分だけ南西壁が延びているので、南西壁4.0mを長辺とする横転台形プランを呈しよう。竈は北西壁中央に設置されている。周溝は確認された範囲では全周している。床面の形状は西コーナーは掘り方に合わせて突出しているが、南コーナーでは丸みを帯びている。柱穴は各コーナー寄りに不整形なプランで4か所検出された。また、竈対向壁際中央にはしご穴がある。柱穴の内側の床面は硬くしまっている。竈の遺存状態は普通で、両袖は短く、燃焼部には壁面を掘り込んで船型ピットが作られている。煙道部は未発達である。

遺物 1～7は杯類である。1は口径11.4cm、現高2.5cmで、赤褐色を呈し、内面は赤色塗彩されている。浅い丸底の器形で、仕上げの際に、口唇部が口縁から僅かに区別されている。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。2は口径13.0cm、現高3.3cmで、暗褐色を呈する。体部は内湾し、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。3は口径14.0cm、現高2.9cmで、暗褐色を呈する。体部は下位で内屈して直線的に立ち上がる。外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキ、内面はヘラミガキされている。



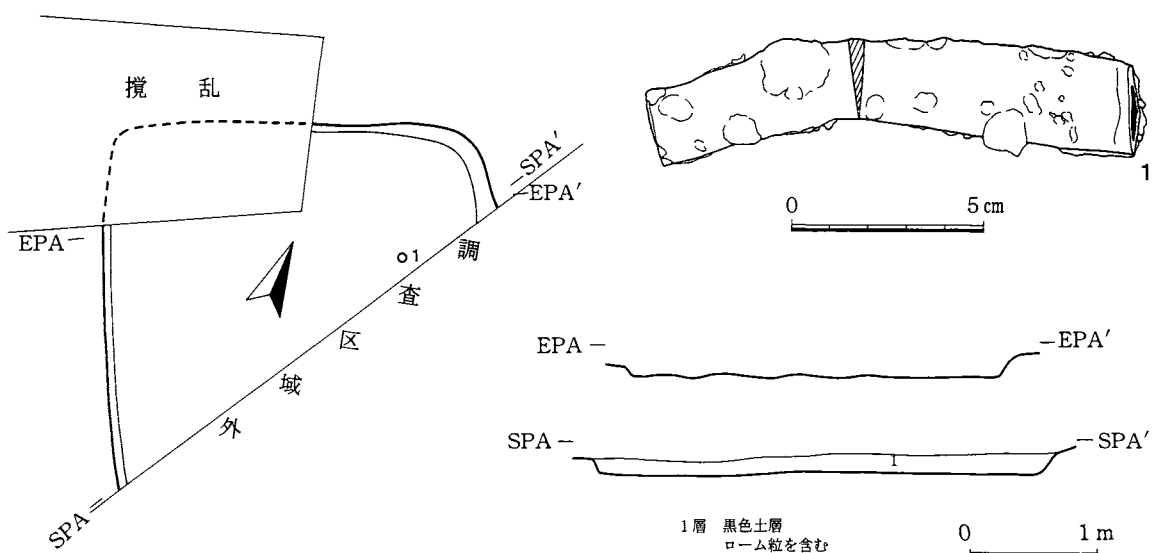
第24図 SI 10 遺構・遺物実測図

4～6は須恵器である。4は杯蓋で、竈内から出土した。口径18.0cm、現高3.2cmで、暗灰色を呈する。口縁端のカエリは外反し、天井部の回転ヘラケズリは3分の2に及んでいる。5は竈脇の覆土下層から出土した。口径11.8cm、器高3.8cm、底径8.3cmで、青灰色を呈する。体部は直線的に立ち上がり、内外面にロクロ目を残す。下端部はヘラケズリで調整される。底部外面は回転ヘラケズリされている。6は竈内から出土した。口径14.0cm、現高3.7cmで、明灰色を呈する。内外面にロクロ目が強く残っている。7は口径15.6cm、現高4.2cmで、明灰色を呈する。大ぶりの器形で、体部は直線的に開いている。内外面にロクロ目が残る。8～13は甕である。8はSI 9に近い覆土中から出土した。口径13.9cm、現高5.3cmで、赤褐色を呈する。口縁は直下で稜線を作りながら外反し、胴部は肩の張らない器形になる。外面には縦のヘラケズリが観察される。9は竈手前の床面直上から出土した。底径6.0cmで、赤褐色を呈する。胴部は球形に近い器形で、上位は縦、中位は横のヘラケズリが施される。10～13は常総型の甕である。10は竈手前の覆土上層から出土した。口径25.3cm、現高12.8cmで、明褐色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。外反する口縁頂に口唇部が成形され、胴部はナデ仕上げされる。11は竈内から出土した。現高19.8cmで、暗褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。胴部はナデの後、下半部が縦にヘラナデされている。12は竈手前の覆土上層から出土した。現高6.8cm、底径8.0cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。胴部は縦にヘラミガキされている。13は現高5.4cm、底径10.4cmで、明褐色を呈し、胎土に長石を含む。外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキされている。

14は鉄製品で、南柱穴直上から出土した。長さ8.7cm、16.9gを量る。断面方形の棒状を呈する。次第に薄くなり、端部は鈍く尖っている。

SI 11 (第25図、図版6、図版37)

遺構 D9区の南東部に所在し、北Ⅱ群の南端に位置している。本来竈があるべき北西側は攪乱されており、東側は調査区外に出ている。浅い住居跡で、周溝・柱穴は確認されなかった。3m弱の長方形プランと思われる。北コーナーは丸みを帯びている。



第25図 SI 11 遺構・遺物実測図

遺物 1は鎌で、調査区境界際の床面付近から出土した。長さ13.0cm、34.2gを量る。切っ先を欠失し、山形に屈折した形状を呈する。

SI 12 (第26図、図版6、図版32)

遺構 A14区の北東端に所在し、南群の南端付近に位置する。上辺5.0m、下辺4.8m、幅5.0mの正方形に近い逆台形プランで、各コーナーは角張っている。竈の位置はほかの住居跡と異なり、東壁のやや南寄りに設置されている。周溝は全周する。柱穴は4か所あり、そのほかに、小ピットが点在する。ところが、床面精査後に掘り方を露出したところ、波線で図示したような柱穴状ピットと周溝状の細溝が検出された。現在の周溝はこの細溝を境にして、その西側では幅が細くなり、床面も外に張り出す形状を呈する。これらの位置関係からみて、住居の建て替えとは考えにくく、一旦建築に着手したものの、途中で設計を変更した住居跡と思われる。床面中央は硬くしまっている。竈の遺存状態はやや不良で、両袖の下部が残存していた。壁面に接して船型ピットがあり、煙道部は未発達である。

遺物 1～5は杯である。1は北壁際の覆土上層から出土した。口径13.1cm、現高3.3cmで、赤褐色を呈する。底部はやや膨らみ、体部の厚みは一定していない。外面は下半部にヘラケズリが入っている。2は南壁際の床面直上から出土した。盤状を呈し、口径14.1cm、現高2.0cmで、明褐色を呈する。ナデ仕上げだが、外面下位にヘラケズリされる。3は北壁際の床面直上から出土した。2と同様な盤状を呈する。口径13.5cm、器高2.0cmで、明褐色を呈する。器形・調整も2に準ずる。4は竈内から出土した。口径13.0cm、器高3.2cmで、赤褐色を呈する。体部から底部外面はヘラケズリされ、内面は底部がヘラミガキされている。底部外面中央に「二」字の墨書銘がある。5は須恵器で、北壁よりの覆土上層から出土した。口径11.8cm、現高4.0cmで、暗灰色を呈する。体部は直線的に開き、内外面にロクロ目が残る。

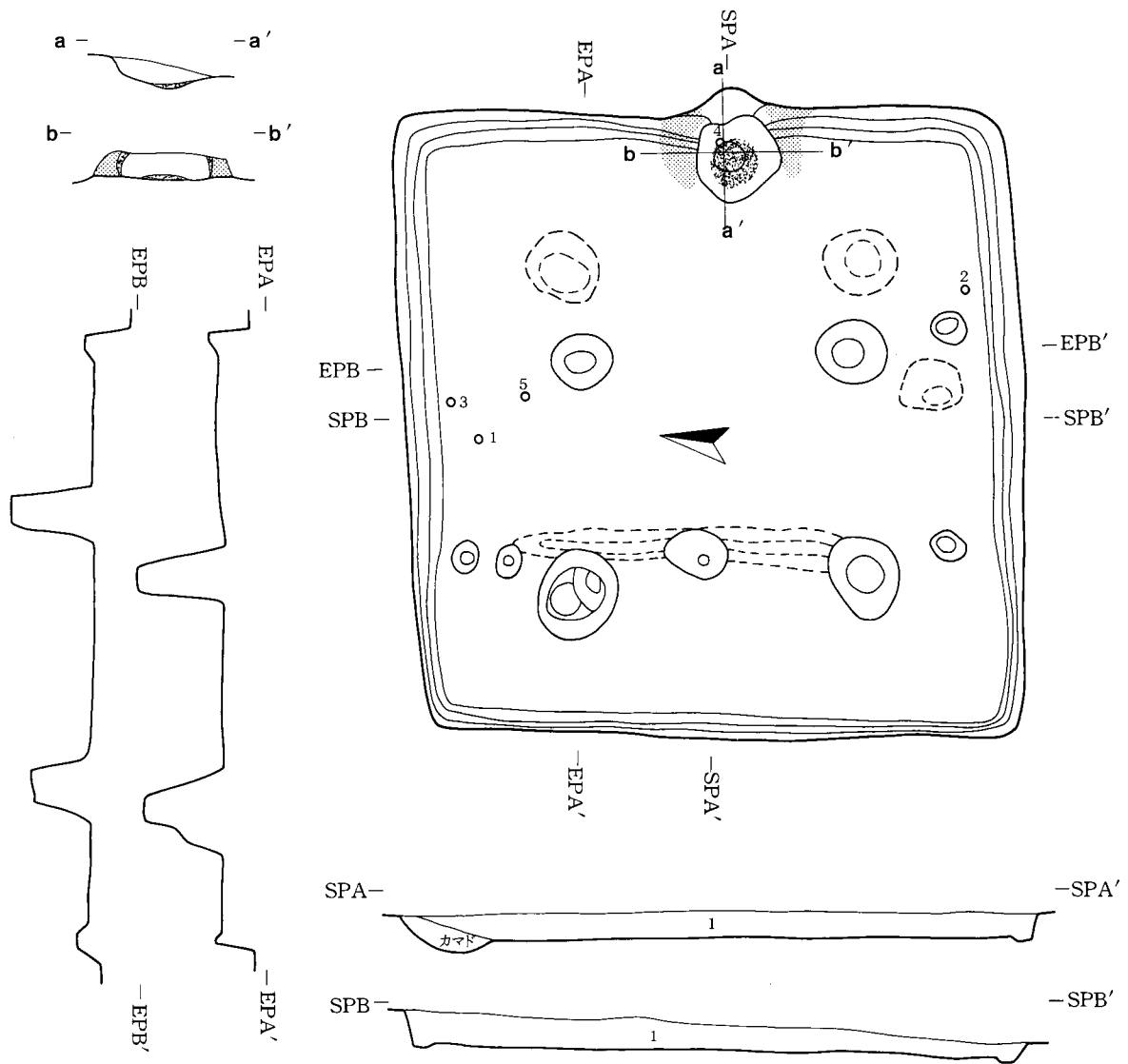
SI 13 (第27図、図版6)

遺構 B14区の北西端に所在し、SI 12の東隣に位置する小型住居跡である。横転台形プランで、短辺2.3m、長辺2.8m、幅2.6mを計る。明らかに鈍角をなす東コーナーは明確な稜を持つにもかかわらず、鋭角をなす南コーナーは逆に丸みを帯びている。床面の形状もこれと一致している。北西壁のやや南寄りに竈が設置されている。周溝は全周する。柱穴は検出されなかった。床面は軟質である。竈の遺存状態はやや不良で、両袖の基部が残存していた。両袖部は短く、壁面を掘り抜いて船型ピットが掘られている。煙道部は僅かに張り出しが認められる。

遺物 1は須恵器甕または甑で、口径29.8cm、現高8.8cmで、明灰色を呈する。口縁下側に粘土紐を貼り付けて二重口縁を作り、口縁頂に口唇部を成形している。胴部外面には平行タタキ目が残る。

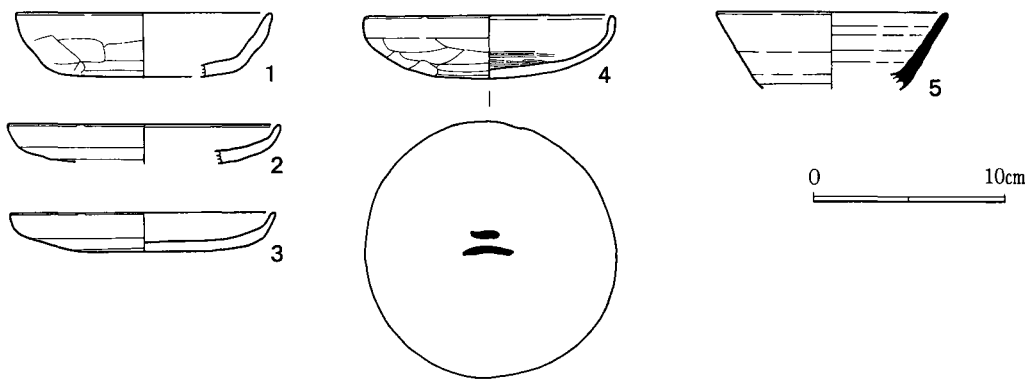
SI 14 (第28図、図版7、図版32)

遺構 B14区の北西端付近に所在し、SI 13の東に隣り合う。2.9m×3.1mの横長長方形プランを持つ。西コーナーは丸みを帯びているが、ほかの3コーナーは稜をなし、南コーナーは突出している。また、北西壁と北東壁は全体的に外に張り出しているが、南東壁は内側にくぼんでいる。これに対して、床面の形状はほぼ長方形を呈するが、北東辺の中央は内側にくぼんでいる。北西壁の北コーナー寄りに偏在して竈が設けられている。周溝は全周しているが、柱穴は検出されなかった。竈の遺存状態は良好で、両袖部は

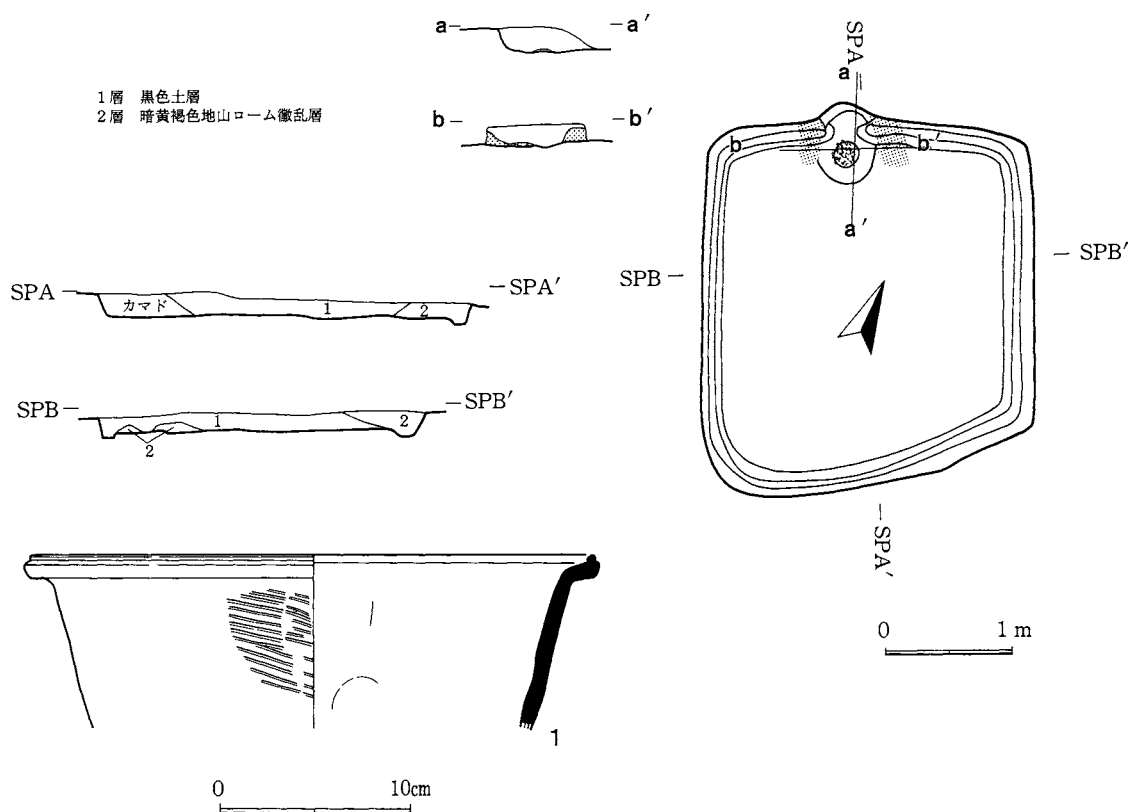


1層 暗黄褐色地山ローム微乱層

0 1 m



第26図 SI 12 遺構・遺物実測図

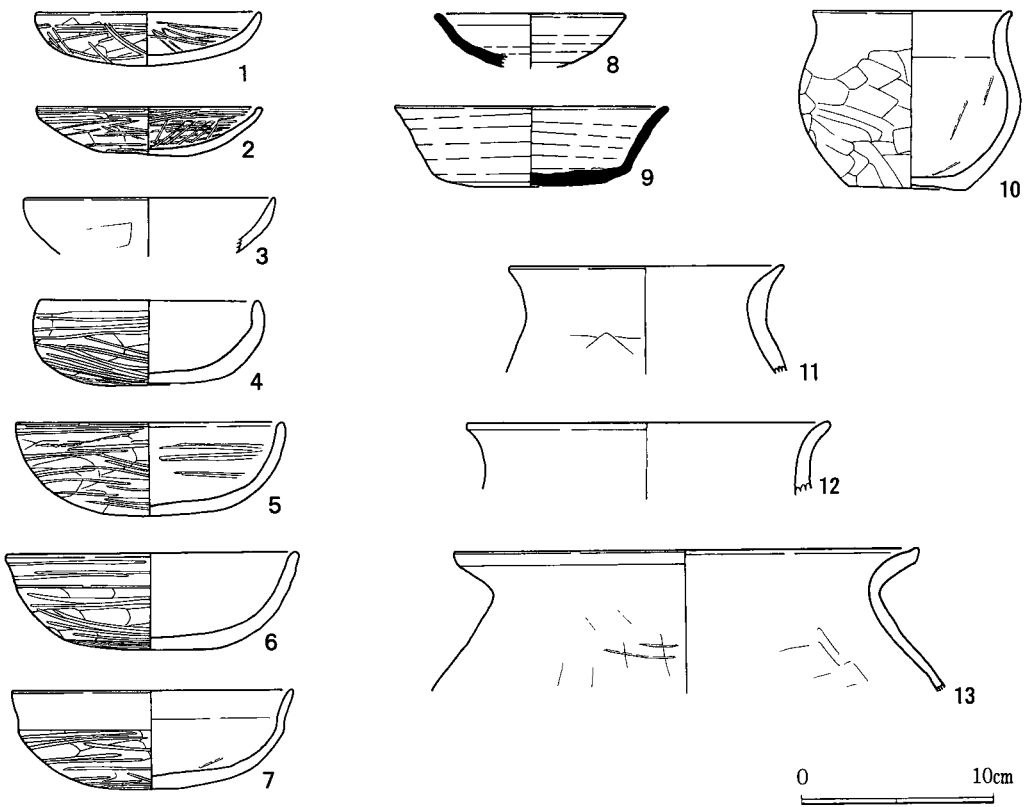
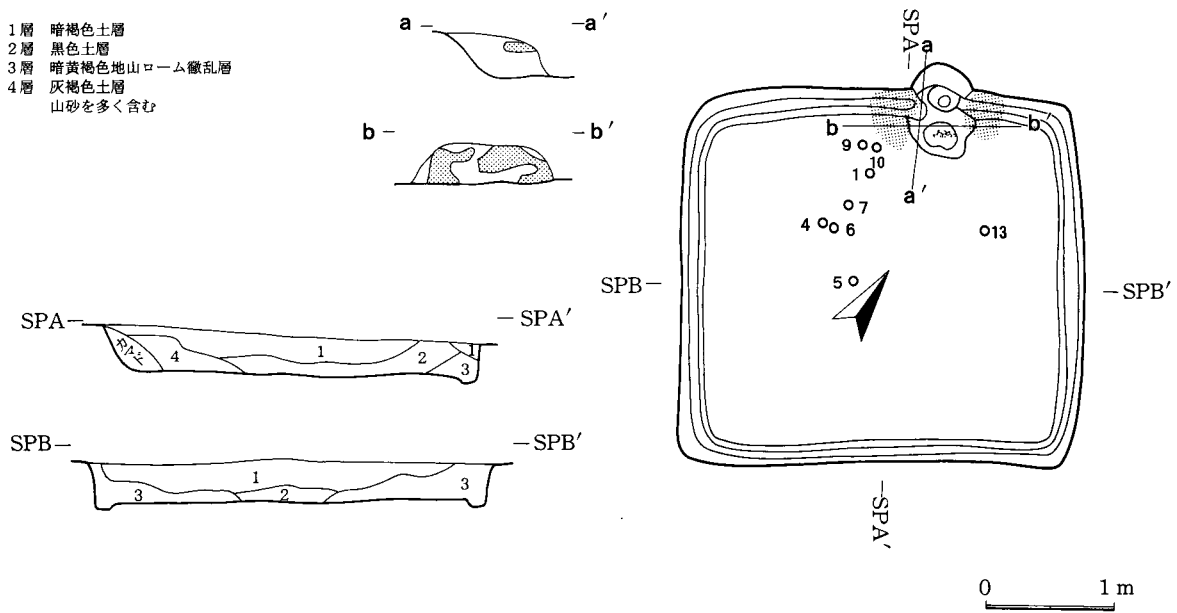


第27図 SI 13 遺構・遺物実測図

もとより、天井部も潰れた状態で残存していた。両袖部は極めて短い。燃烧部には円形のピットが壁面に接して掘られているが、使用頻度が少ないためか、坑底は余り焼けていない。燃烧部と煙道部の中間には小ピットが存在する。煙道部の掘り方は小さく、未発達である。

遺物 1～9は杯である。1は竈手前の床面直上から出土した。口径11.4cm、器高2.7cmで、赤褐色を呈する。外面はヘラケズリ後、粗いヘラミガキ、内面は粗いヘラミガキが施される。2は口径11.5cm、器高2.5cmで、赤褐色を呈する。底部は平底気味で、口縁は内面に軽い抉りが入っている。調整は1と等しいが、内面のミガキはより緻密になっている。3は口径12.9cm、現高2.9cmで、赤褐色を呈する。外面はヘラケズリの後、ナデられている。4は中央寄りの覆土中から出土した。口径11.2cm、器高4.4cmで、丸底の深い器形を呈する。口縁は内屈しており、体部外面の調整は1と等しい。5は中央付近の覆土中から出土した。口径13.8cm、器高4.9cmで、明褐色を呈する。椀形だが、口縁は直立する。調整は1と等しい。6は中央付近の覆土中から出土した。口径15.0cm、器高5.0cmで、赤褐色を呈する。椀形で、口縁は開いている。7は中央付近の覆土中から出土した。口径14.6cm、器高5.1cmで、赤褐色を呈する。体部上位に稜を持ち、口縁は外反する。体部外面の調整は1と等しい。8・9は須恵器である。8は口径9.7cm、現高2.8cmで、明灰色を呈する。丸底の器形で、口縁は外反する。底部外面は回転ヘラケズリが施される。9は竈脇の覆土中から出土した。口径14.2cm、器高4.2cmで、明灰色を呈する。広い底部から体部は外反して立ち上がる。体部内外面はロクロ目がよく残り、底部外面は回転ヘラ切り後、周辺を回転ヘラケズリされている。

- 1層 暗褐色土層
- 2層 黒色土層
- 3層 暗黄褐色地山ローム礫乱層
- 4層 灰褐色土層
山砂を多く含む



第28図 SI 14 遺構・遺物実測図

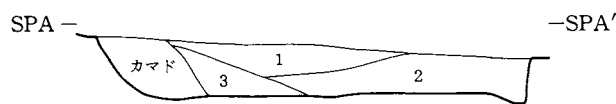
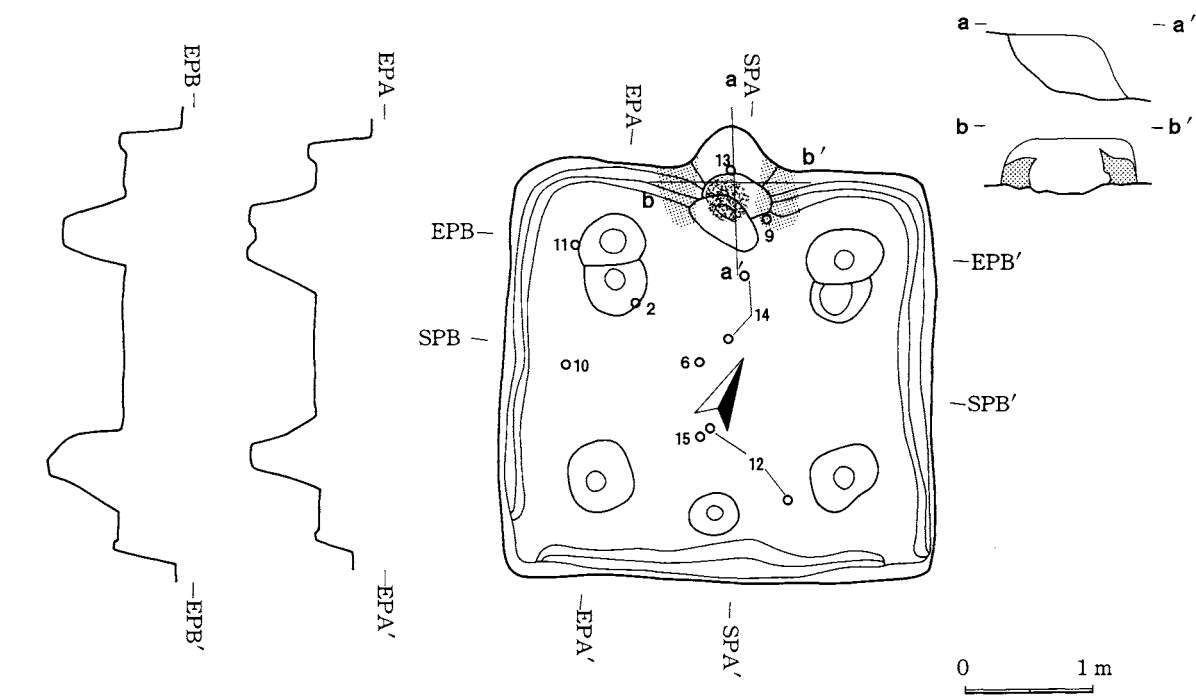
10～13は甕である。10は竈脇の覆土中から出土した。口径10.0cm、器高9.1cm、底径6.1cmで、暗褐色を呈する。口縁は僅かに外反し、胴の張る器形である。胴部外面は各方向にヘラケズリされている。11は口径14.4cm、現高5.5cmで、黄褐色を呈する。頸部は厚みがあり、胴の張らない器形になる。胴部はヘラケズリ後、ナデられている。12は口径19.0cm、現高3.8cmで、赤褐色を呈する。口縁の外反は弱く、端部は丸みを持つ。13は常総型の甕で、北寄りの覆土中から出土した。口径24.5cm、現高7.8cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。口縁頂を僅かにつまみ出して口唇部を成形している。胴部外面はナデ仕上げである。

SI 15 (第29図、第30図、図版7、図版8、図版32、図版33)

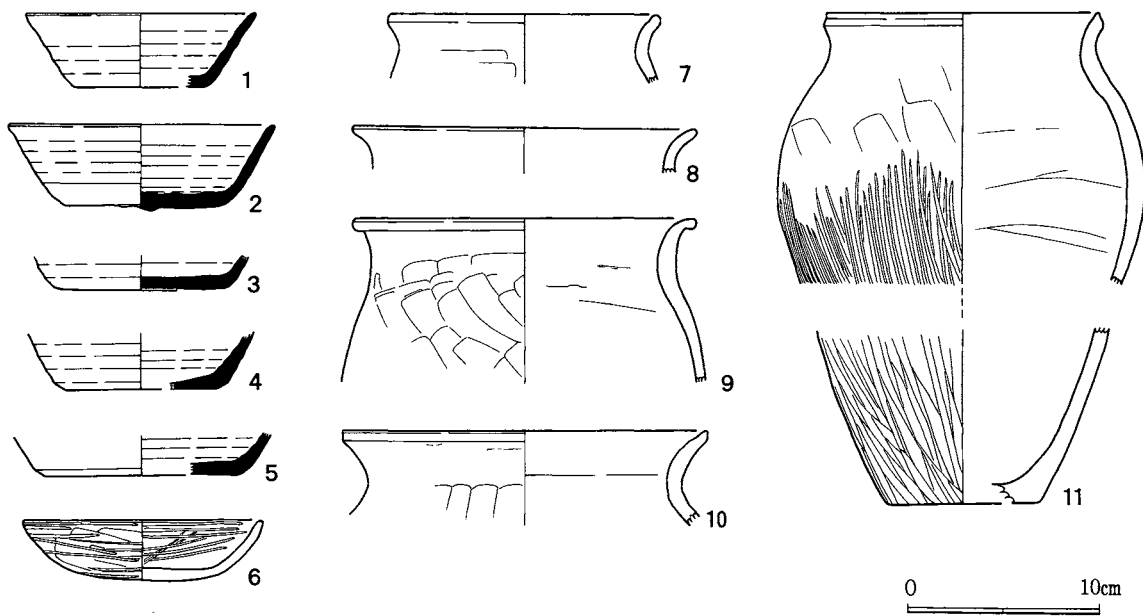
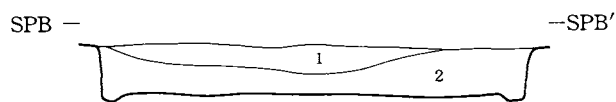
遺構 B13区の南西端寄りに所在し、SI 14の北に隣り合う。短辺3.2m、長辺3.3m、幅3.3mの横転台形プランを示す。北・東・南コーナーは角張るが、西コーナーは丸みを帯びている。竈は北西壁中央に位置する。北西壁は竈より南側では、西コーナー付近を中心にして、やや外側に張り出している。このために、本来ならば正方形に近い基本プランが、横転台形を呈するに至っている。柱穴は各コーナー寄りに4か所検出されたが、竈寄りの2か所は建て替えた痕跡がある。柱穴プランは不整形である。そのほか、竈対向壁際中央にはしご穴が存在する。周溝は幅にムラがあり、南・東両コーナーで途切れている。床面プランは周溝が途切れている南・東コーナーを含め、四隅が膨らんだ形状を呈し、北東壁及び南西壁の中央は内側にくぼんでいる。竈両側では内側にせり出してくる。床面中央部は硬化している。竈の遺存状態は普通で、両袖部は短い。燃烧部には円形のピットが壁面に接して掘られ、煙道部は比較的長い。

遺物 1～6は杯で、1～5は須恵器である。1は口径11.8cm、器高3.8cm、底径6.8cmで、明灰色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近で外反する。内外面はロクロ目が残っている。2は西柱穴脇の覆土中から出土した。口径13.6cm、器高4.4cm、底径8.0cmで、明灰色を呈し、胎土は雲母・長石を含む。広い底部から体部が直線的に立ち上がる。底部周縁の面取りは行き届いている。体部内外面にはロクロ目がよく残り、底部外面はヘラ切り後に、回転ヘラケズリされるが、切り離し痕が突出したままになっている。3は現高1.7cm、底径8.8cmで、黄灰色を呈する。底部周縁の面取りがなされ、体部にはロクロ目が残る。底部外面は回転ヘラケズリされている。4・5の調整法も3に準ずる。6は中央の覆土中から出土した。口径12.4cm、器高3.1cmで、赤褐色を呈する。いびつな作りで、外面はヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキされている。

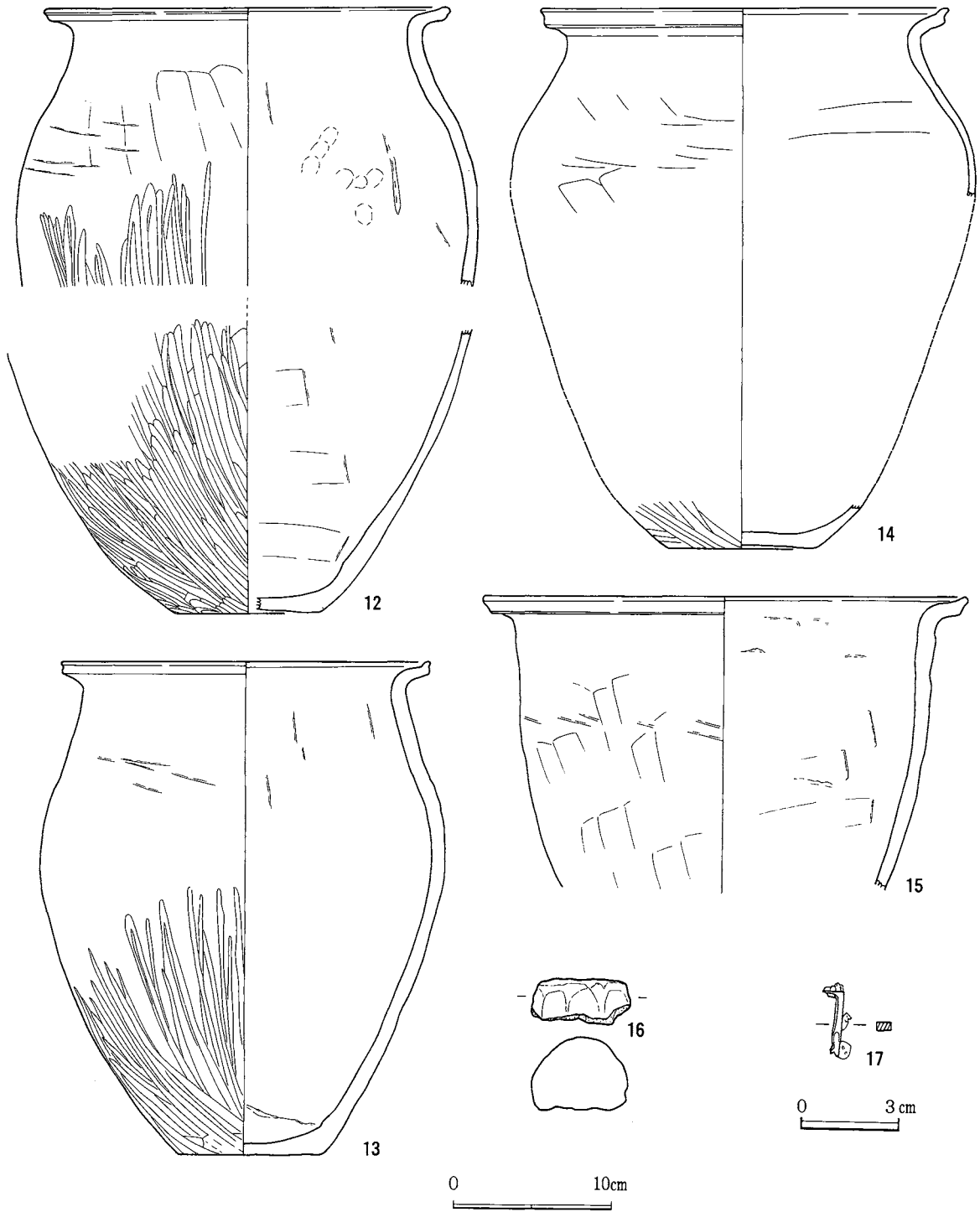
7～14は甕である。7は口径14.0cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。口縁端は丸く処理されている。8は口径17.6cm、現高2.3cmで、赤褐色を呈する。頸部が立ち、口縁端は丸く作られる。9は竈内から出土した。口径17.6cm、現高8.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は反り返って玉縁風になる。胴部は肩が張らない。外面は斜めのヘラケズリが入る。10は西寄りの覆土中から出土した。口径19.0cm、現高4.9cmで、赤褐色を呈する。口縁は側縁が直立して稜をなす。11～14は常総型の甕で、胎土には雲母・長石が含まれる。11は西柱穴脇の覆土中から出土した。口径14.0cm、底径8.0cmで、明褐色を呈する。口縁の外反は弱く、頂部に粘土紐を載せて口唇部を成形し、側縁に段を形成する。胴部最大径は上位にあり、腰高の器形となる。胴部外面はヘラケズリの後、中位以下がヘラミガキされる。12は中央及び東寄りの覆土中から出土した。口径25.0cm、底径8.8cmで、明褐色を呈する。口縁は外反し、頂部に口唇部を作る。胴部形態と調整法は11に準ずる。底部外面には木葉圧痕が見られる。13は竈内から出土した。口径22.8cm、器高



- 1層 茶褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 灰褐色土層
- 山砂を多く含む



第29図 SI 15 遺構・遺物実測図



第30図 SI 15 遺物実測図(2)

30.3cm、底径9.0cmで、明褐色を呈する。口縁成形は12に準じ、胴部最大径はやや下位にくるが、調整は11・12に準ずる。底部外面には木葉圧痕が見られる。14は竈手前の覆土中から出土した。口径12.7cm、底径9.2cmで、明褐色を呈する。口縁成形は12・13に準じ、胴部は肩が張るが、調整法は11～13と同じである。底部外面には木葉圧痕が見られる。

15は常総型の甑で、中央覆土中から出土した。口径30.0cm、現高18.0cmで、胎土には雲母・長石を含む。口縁成形は住居跡内の常総型甑と等しい。胴部外面はヘラナデされている。

16は土製支脚である。赤褐色を呈し、側縁には縦のヘラケズリ痕がある。

17は釘で、長さ3.0cm、0.9gを量る。頭部は直角に曲がり、扁平化している。断面は長方形になる。

SI 16 (第31図、図版8、図版33、図版37)

遺構 B13区の南西部に所在し、SI 15の北西に隣り合う。上辺4.1m、下辺4.3m、幅4.3mの逆台形プランを呈する。各コーナーは角張っている。床面プランは南東壁の東コーナー付近が外に張り出している。竈は北西壁中央に設置されている。周溝は全周している。床面が張り出した東コーナー付近では幅が狭くなっている。柱穴は各コーナー寄りに4か所検出され、西柱穴には立て替えの形跡がある。柱穴プランは北柱穴が不整形である。そのほか、竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。柱穴の内側の床面は硬くしまっている。この住居跡は火災を受けており、壁際の床面上には焼土や炭化材が散乱していた。竈の遺存状態は良好で、両袖部が床面上45cmまで残存していた。両袖部はほかの住居跡に比べれば長い方である。燃焼部には壁面に接して船型ピットが掘られている。煙道部は比較的長い。

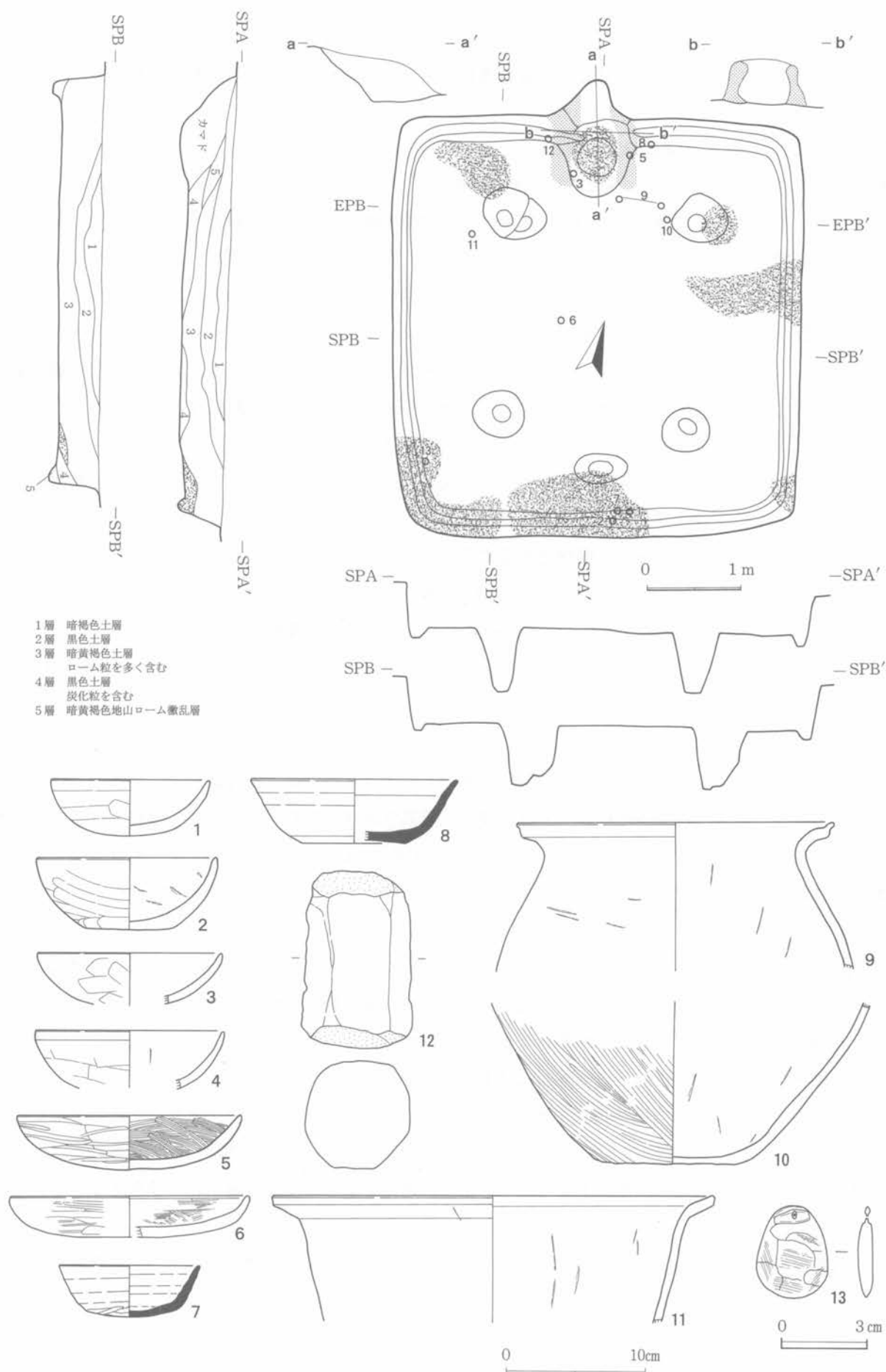
遺物 1～8は杯である。1は南東壁際の焼土中から出土した。口径11.2cm、器高4.0cmで、明褐色を呈する。丸底で、単純な口縁である。外面はヘラケズリされる。2は1とともに焼土中から出土した。口径12.8cm、器高5.1cm、底径6.3cmで、明褐色を呈する。平底で、面取りはされていない。外面はヘラケズリされる。3は竈内から出土した。口径13.0cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。外面は粗くヘラケズリされる。4は口径13.4cm、現高4.1cmで、暗褐色を呈する。口縁は強く横ナデされ、外面はヘラケズリされる。5は竈内から出土した。口径15.8cm、器高3.8cmで、赤褐色を呈する。皿形で、外面はヘラケズリ後、粗いヘラミガキ、内面は緻密にヘラミガキされる。6は中央覆土中から出土した。口径16.8cm、器高2.9cmで、明褐色を呈する。皿形で、調整は5と等しい。7・8は須恵器である。7は1・2とともに南東壁際焼土中から出土した。口径9.9cm、器高3.6cmで、青灰色を呈する。底部は僅かに丸底で、体部は直線的に立ち上がる。体部は内外面にロクロ目が残り、底部外面は手持ちヘラケズリで調整される。8は竈東脇の覆土中から出土した。口径14.7cm、器高4.5cm、底径7.4cmで、明褐色を呈する生焼け製品である。底部は上げ底で、体部は緩いS字状に大きく開く。体部にはロクロ目が残り、底部外面はヘラケズリされている。

9・10は常総型の甕で、胎土には雲母・長石を含む。9は竈手前の覆土中から出土した。口径22.1cm、現高10.4cmで、明褐色を呈する。口縁は外反した頂部に口唇部が載せられる。外面はヘラナデされる。10は北柱穴脇の覆土中から出土した。おそらく9と同一個体である。現高11.4cm、底径10.8cmで、明褐色を呈する。胴部はヘラミガキされ、底部外面には木葉圧痕が見られる。

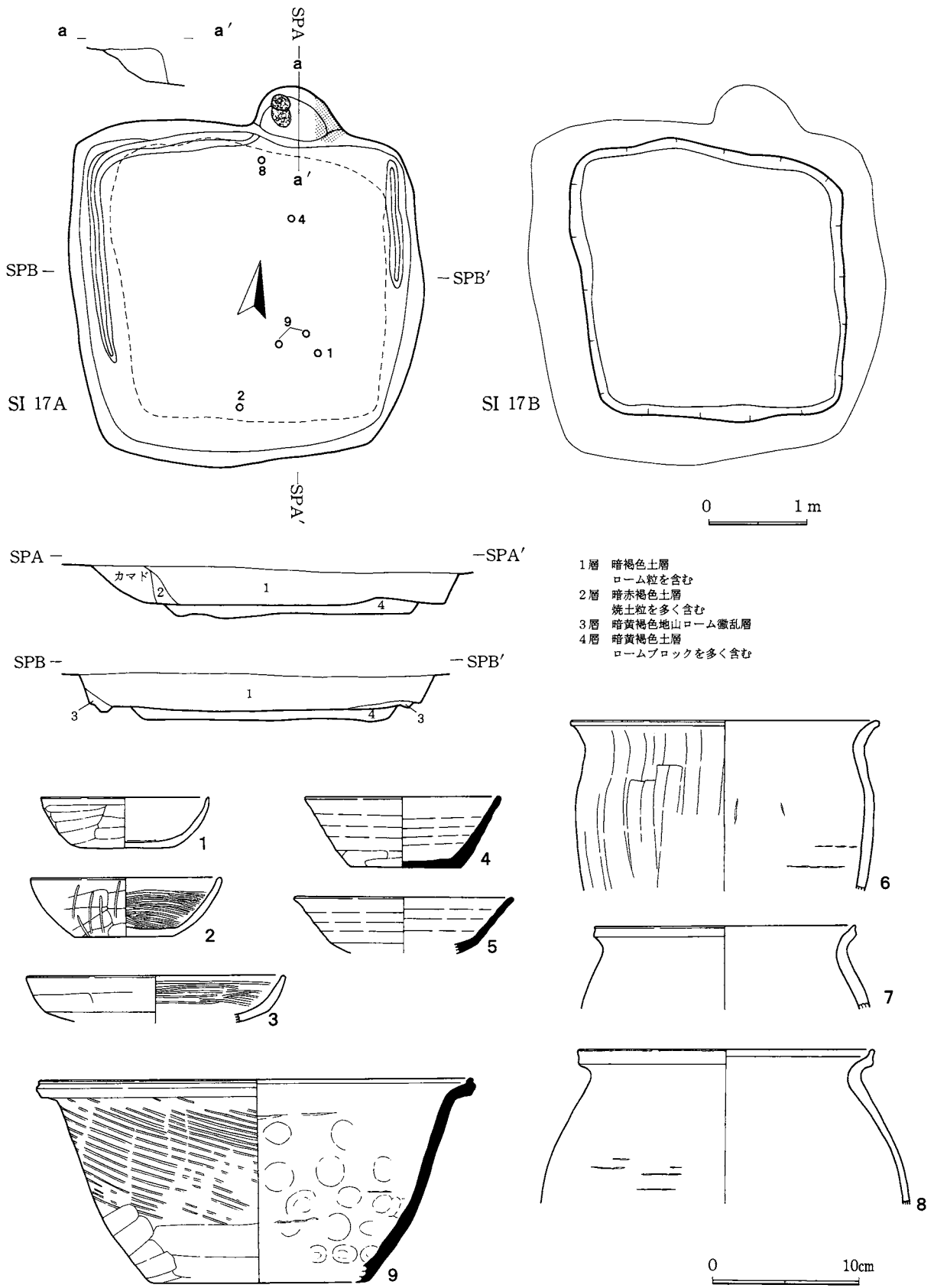
11は常総型の甑で、西柱穴脇の覆土中層から出土した。口径31.4cm、現高9.0cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。口縁頂に粘土紐を廻して口縁を盛り上げている。胴部はヘラナデされる。

12は土製支脚で、竈西脇の床面直上から出土した。赤褐色を呈し、側面は幅広いヘラケズリで7角柱になっている。

13は石製装飾品で、南コーナー付近の床面付近から出土した。素材は粘板岩で、6.9gを量る。ナスビ形の一端に小孔を穿っている。母岩を剥離して大まかに扁平にした後、表面を擦滑している。



第31図 SI 16 遺物実測図



第32図 SI 17A・SI 17B 遺構・遺物実測図

SI 17A・17B (第32図、図版9、図版33)

遺構 B13区の南西部に所在し、SI 16の東に隣り合う。SI 17Aは上辺3.4m、下辺2.8m、幅3.5mの逆台形プランを呈する。各壁は外側に張り出しているが、四隅は比較的角張っている。壁線の出入りが多く、掘り方が雑である。北壁東寄りに竈が設定されている。周溝は東・西壁の北側に偏り、南側からは確認されなかった。柱穴は存在しない。床面中央は硬くしまっている。竈の遺存状態は不良で、左袖基部が痕跡程度に残存していた。住居跡内に燃焼部は存在せず、船型または円形のピットも検出されなかった。煙道部は比較的大きく張り出し、その中に小ピットが掘られ、小ピットの中には焼土・木炭粒が充満していた。

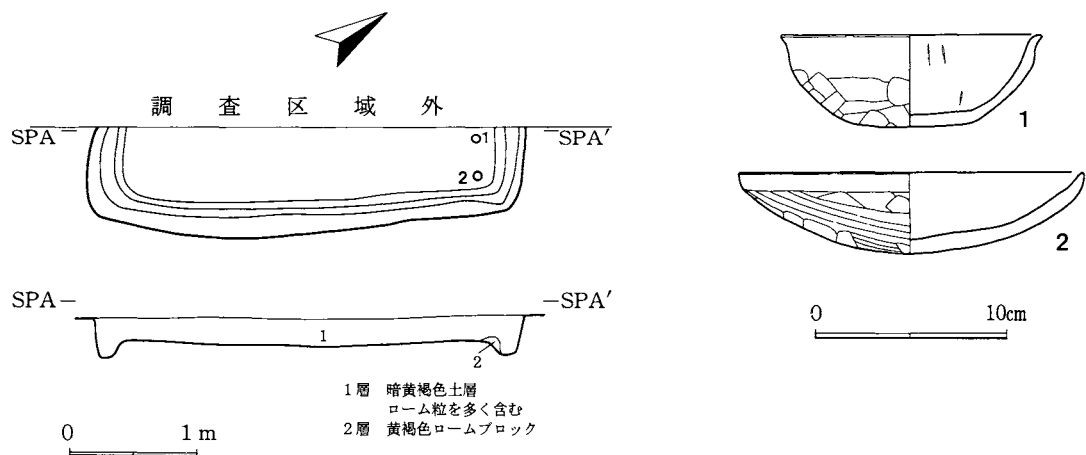
精査終了後に床面構成土を排除したところ、SI 17Bが検出された。SI 17BはSI 17Aの床面下10cmの深さに床面があり、SI 17Aよりも一回り小さいので、SI 17Aの建て替え前の床面であると理解される。上辺2.3m、下辺2.7m、幅2.6mの逆台形プランを呈する。SI 17A同様に壁線の出入りが激しく、雑な掘り方がされているが、各壁の張り出しは顕著でない。ただし、北壁やや西寄りに一か所小さな張り出しが認められるが、あるいはここが竈設置予定か所であったかもしれない。竈の痕跡、周溝、柱穴等はまったく検出されなかった。遺物も出土していない。

遺物 すべてSI 17Aに属する。

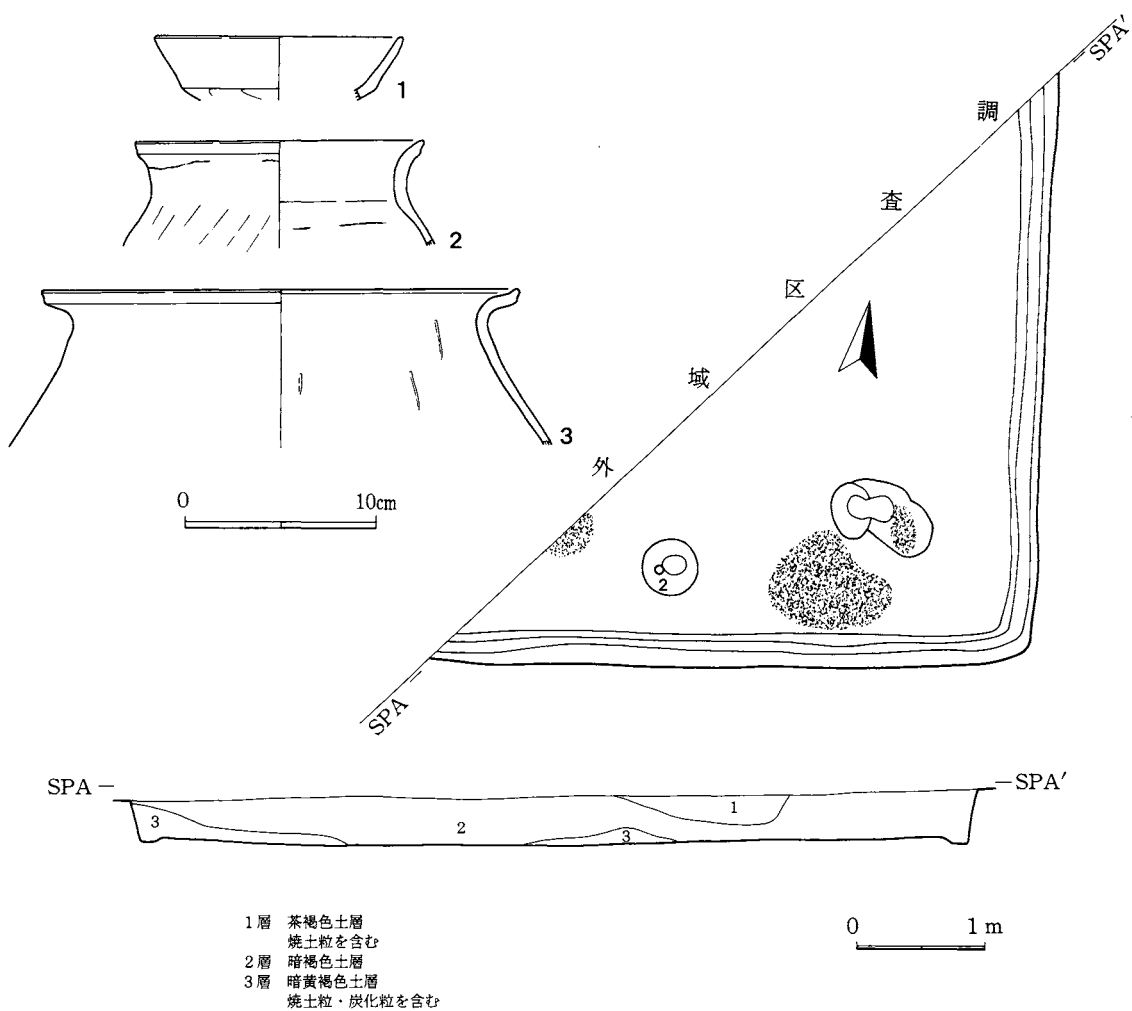
1～5は杯類である。1は南東寄りの覆土中から出土した。口径11.3cm、器高3.4cm、底径6.4cmで、明褐色を呈する。体部は内湾しながら立ち上がる。体部外面はヘラケズリ、底部外面は手持ちヘラケズリされる。2は南壁際の覆土中から出土した。口径12.8cm、器高4.0cm、底径6.6cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾しながら大きく開く。外面はヘラケズリ後、粗いヘラミガキ、内面は緻密にヘラミガキされる。底部は周縁が面取りされず、外面は手持ちヘラケズリされている。3は盤状杯で、口径17.5cm、現高3.1cmで、暗褐色を呈する。体部下位で屈折し稜を作っている。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされる。4・5は須恵器である。4は竈手前の覆土中から出土した。口径13.2cm、器高4.9cm、底径7.5cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母・長石を含む。体部は直線的に立ち上がり、内外面にロクロ目が残る。底部外面は手持ちヘラケズリされている。5は口径14.7cm、現高3.8cmで、明灰色を呈する。面取りされた底部から体部が直線的に大きく開き、口縁で外反する。体部内外面にはロクロ目が残り、下端はヘラケズリされている。

6～8は甕である。6は口径20.1cm、現高11.5cmで、赤褐色を呈する。口縁は短く、胴部の肩が張らない。外面は土器を倒立して、底部から口縁に向けてヘラケズリしている。7・8は常総型の甕で胎土に雲母・長石を含む。7は口径17.5cm、現高5.6cmで、明褐色を呈する。口縁は外反が弱く、頂部に口唇を形成する。外面はヘラナデされる。8は竈手前の覆土中から出土した。口径20.0cm、現高10.4cmで、明褐色を呈する。口縁は頂部に粘土紐を添付して盛り上げている。胴部はやや肩の張る器形になる。外面はヘラナデされる。

9は須恵器鉢で、南東寄りの覆土中から出土した。口径29.7cm、器高13.6cm、底径14.9cmで、明灰色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。口縁成形は下側に粘土紐を添付して二重口縁を成形し、さらに、口縁頂にも細い粘土紐で口唇部を作り出すという装飾的な手法を用いている。外面は平行タタキ目が施され、下半部はヘラケズリされる。



第33図 SI 18 遺構・遺物実測図



第34図 SI 19 遺構・遺物実測図

SI 18 (第33図、図版9、図版33)

遺構 B13区の西部に位置し、SI 16の北西に位置し、SI 19と接している。遺構の大半は調査区外に出ている。1辺3.3mの規模を有する。東コーナーは角張っているが、南コーナーはやや丸みを帯びている。南西壁は南東壁に対して鋭角的に取り付いており、台形プランの可能性を思わせる。また、北東壁は弧状に張り出す気配を示している。確認された範囲では周溝が巡っている。南東壁の周溝幅は他壁の周溝に比べて狭くなっている。柱穴をはじめピットは検出されていない。

遺物 1・2は杯である。1は北東コーナーの床面付近から出土した。口径13.4cm、器高4.9cmで、明褐色を呈し、胎土に長石・石英を含む。体部は緩く内湾しながら大きく開き、口縁で外反する。外面は中位以下がヘラケズリされる。2は北東コーナーの床面直上から出土した。口径17.8cm、器高4.1cmで、明褐色を呈する。体部外面はヘラケズリされる。

SI 19 (第34図、図版9、図版33)

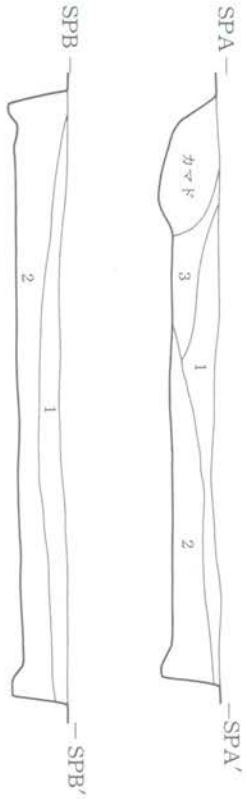
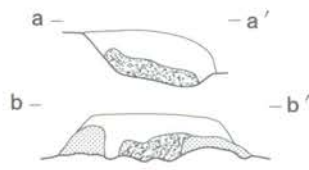
遺構 B13区の北西部に所在し、SI 18と接している。北西側が調査区外に出ている。南東コーナーを中心に調査され、規模は不明であるが、1辺4.5m以上はある。検出された南東コーナーは端正な稜をなしている。両壁の張り出しは見られず、直線的である。確認範囲では周溝は全周している。東壁の周溝に比べて西壁の周溝は幅が狭い。不整形プランの柱穴がコーナー付近で1か所検出された。また、南壁際にははしご穴がある。火災を受けた住居跡で、床面には所々焼土が散布している。

遺物 1は杯である。口径12.8cm、現高3.3cmで、雲母・長石を含み、明褐色を呈する。体部は直線的に開き、内外面がロクロ調整される。下端はヘラケズリされている。2・3は常総型の甕で雲母・長石を含む。2ははしご穴直上から検出された。頸部が立って、口縁は余り外反しない。口縁頂に口唇が成形される。胴部外面はヘラナデされる。3は口径24.5cm、現高8.1cmで、明褐色を呈する。外反した口縁頂に粘土紐を載せ、盛り上げている。胴部外面はヘラナデされる。

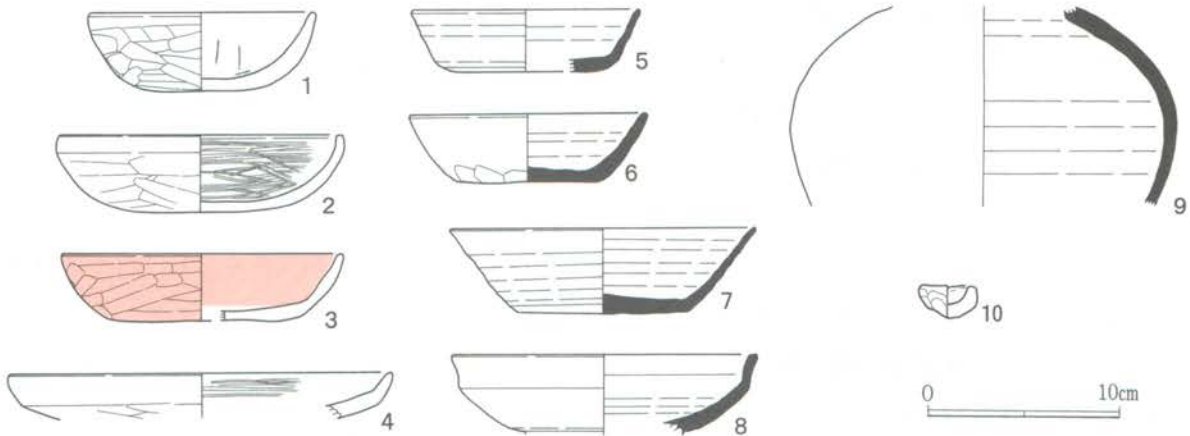
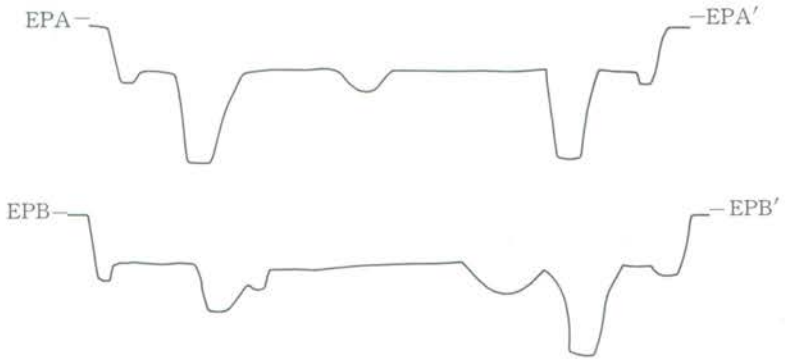
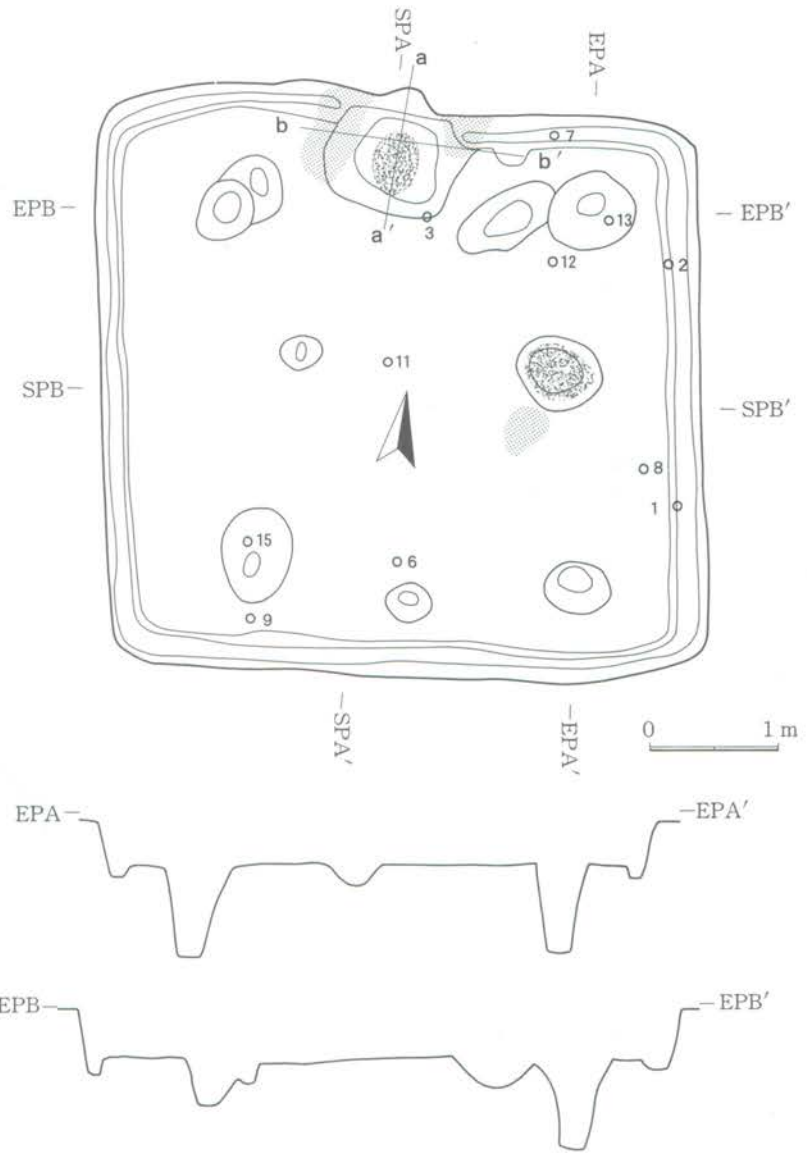
SI 20 (第35図、第36図、図版10、図版33、図版37)

遺構 B13区の中央付近に所在し、SI 19の東に位置する。短辺4.0m、長辺4.3m、幅4.7mの横長横転台形プランである。各コーナーは僅かに丸みを帯びている。北壁中央に竈が設置されている。北壁の竈・北西コーナー間は外側へ張り出しており、床面プランもこれと一致している。周溝は全周している。周溝幅はムラがあるが、特に北西コーナー付近及び南壁の南東コーナー付近では狭くなっている。柱穴は不整形プランで、各コーナー寄りに4か所検出されたが、北側の2か所は建て替えた痕跡がある。また、竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。このほかに、中央やや西寄りに小ピットがある。さらに、東側柱穴間には船型ピットに焼土が充満しており、その南脇に山砂の堆積が見られた。これは竈と思われるが、住居の内側に寄り過ぎており、煙道部の施設については不明な点がある。柱穴内側の床面は硬化していた。竈の遺存状態は不良で、左袖部(煙道部からみて)が大きく破壊されていた。燃焼部のピットは不整形で大きい。煙道部は小さく、未発達である。

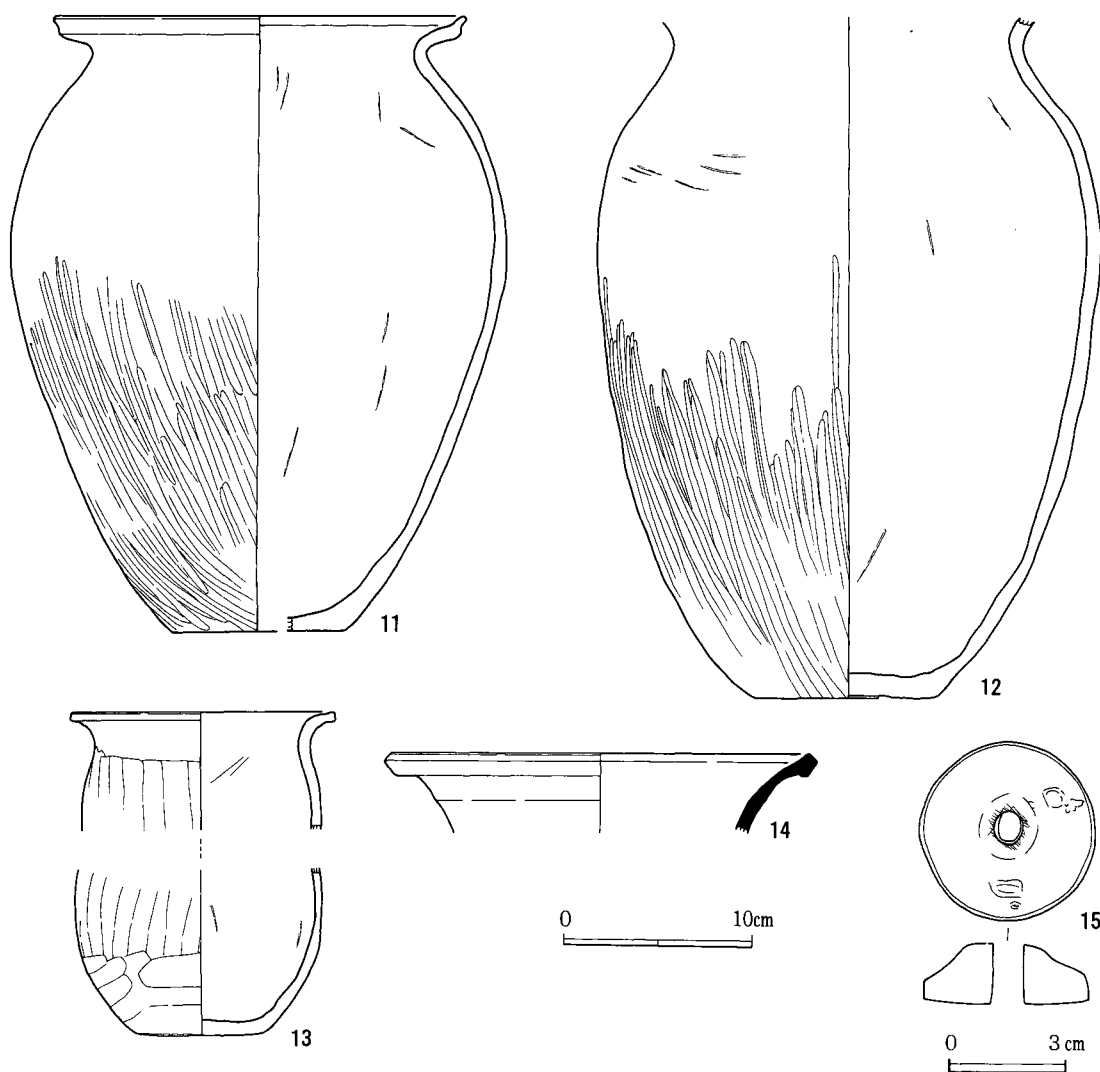
遺物 1～8は杯類である。1は東壁際の覆土下層から出土した。1は口径11.5cm、器高4.0cmで、赤褐色を呈する。平底から丸みを帯びて体部に移行する。体部から底部にかけて、外面はヘラケズリされている。2は南壁際の床面付近から出土した。体部は浅く、口縁は強く横ナデされる。外面はヘラケズリ、内



- 1層 黒色土層
- 2層 暗黄褐色土層
ローム粒を多く含む
- 3層 灰褐色土層
山砂を多く含む



第35図 SI 20 遺構・遺物実測図



第36図 SI 20 遺物実測図(2)

面はヘラミガキされる。3は竈内から出土した。口径14.5cm、器高3.5cm、底径10.0cmで、内外面とも赤色塗彩される。2よりも明確な平底で、外面はヘラケズリされる。4は盤で、口径19.8cm、現高2.4cmで、明褐色を呈する。口縁は横ナデ、底部はヘラケズリされ、内面は粗くヘラミガキされる。5～8は須恵器である。5は口径11.8cm、器高3.2cm、底径7.2cmで、青灰色を呈する。体部は直線的に立ち上がり、内外面に強いロクロ目を残す。底部外面は回転ヘラケズリされている。6ははしご穴脇の覆土中から出土した。口径12.3cm、器高3.5cm、底径7.0cmで、青灰色を呈する。体部は僅かに内湾しながら開く。内面は弱いロクロ目が残っている。外面下端部はヘラケズリされる。底部外面は手持ちヘラケズリである。7は北壁際の覆土下層から出土した。口径15.8cm、器高4.6cm、底径9.0cmの大型杯で、明灰色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。体部は直線的に開き、内外面にロクロ目が残る。底部外面は回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリされている。8は東壁際の覆土中から出土した。口径15.8cm、現高4.1cmの大型杯で、青灰色を呈する。長石を含む。体部は上位で屈折して、口縁はやや外反する。外面はナデが行き届き、内面には弱いロクロ目を残す。

9は長頸壺で、南壁際の覆土中から出土した。現高10.2cmで、明灰色を呈する。外面はロクロ調整され

ているが、内面はロクロ目が残っている。上半には自然釉がかかっている。

10は手捏ね土器で、器高1.7cmを計り、明褐色を呈する。外面には指頭圧痕が残る。

11～14は甕である。11・12は常総型の甕で、雲母・長石を含む。11は中央床面付近から出土した。口径21.2cm、器高32.0cm、底径9.0cmで、明褐色を呈する。口縁に口唇部を載せて、胴部は張りがある。外面はヘラナデされ、中位以下はヘラミガキされる。底部外面は木葉圧痕が残る。12は北東柱穴脇の覆土下層から出土した。現高35.2cm、底径9.5cmで、明褐色を呈する。胴下部が比較的太い器形で、外面はヘラナデされた後、下部がヘラミガキされる。底部外面には木葉圧痕が見られる。13は北東柱穴の覆土下層から出土した。口径13.4cm、底径6.6cmで、明褐色を呈する。口縁は外反して水平になり、胴部最大径は下位にある。外面は縦ヘラケズリで、下位は横方向になる。14は須恵器で、口径21.9cm、現高4.12cmで、明灰色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。ラップ状に開口口縁で、端部は二重口縁を成形している。

15は石製紡錘車で、南西柱穴内から出土した。直径4.6cm、45.1gを量る。断面は山形で、全面に磨きがかけられる。表面には細い擦痕が同心円状に付いている。原石自体に傷がある。

SI 21 (第37図、図版10、図版11、図版33、図版37)

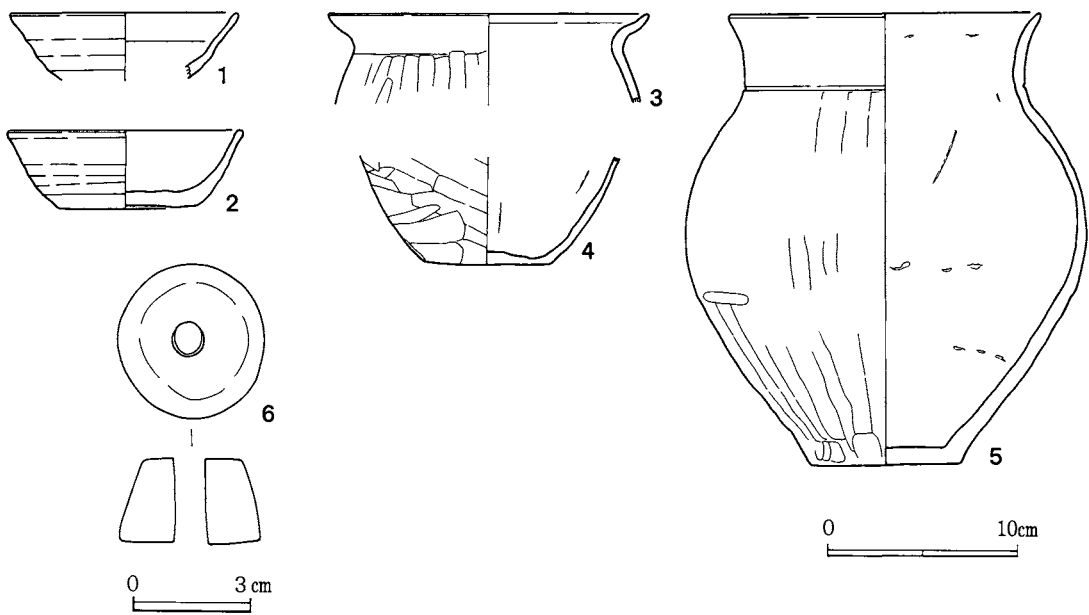
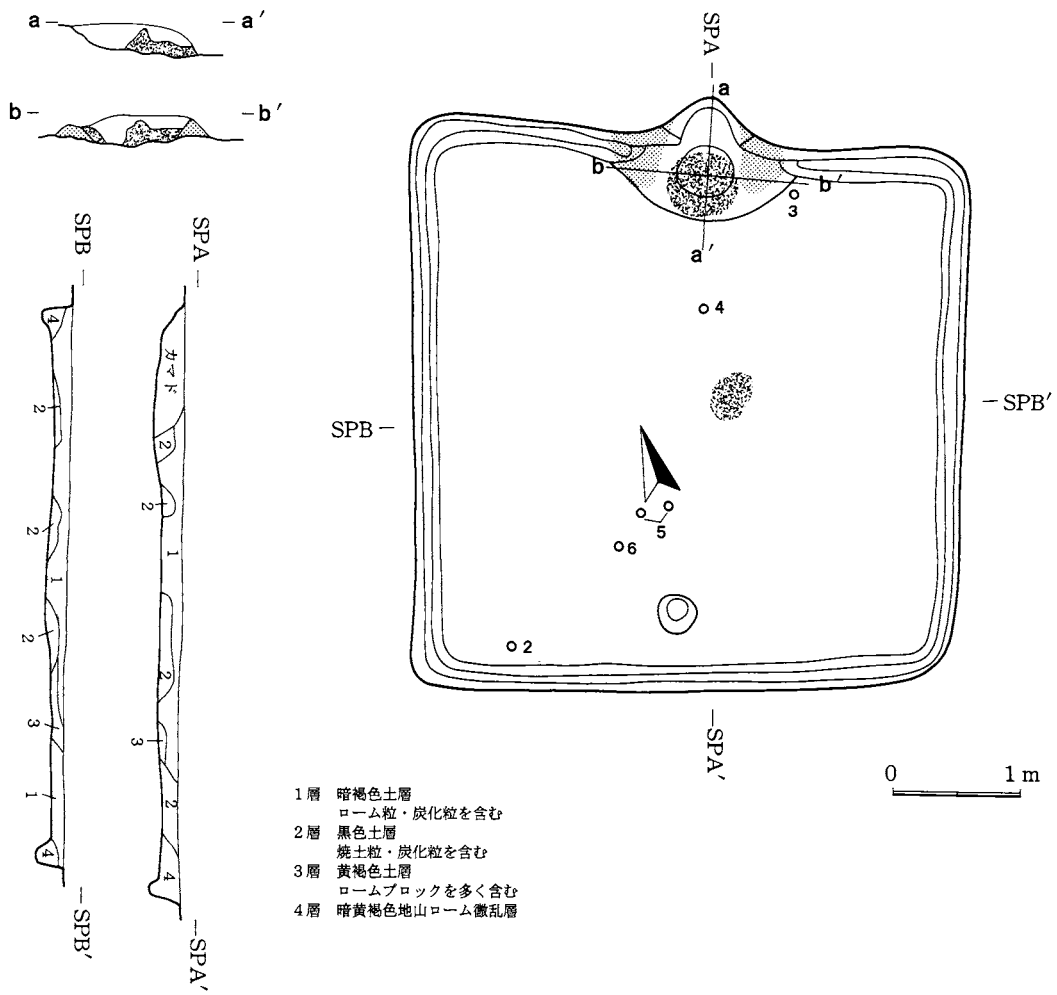
遺構 B13区の北部に所在し、SI 20の北に位置する。短辺4.0m、長辺4.5m、幅4.5mの横転台形プランを呈する。竈はほかの住居跡とは異なり、北東壁中央に設置されている。北東壁は竈右袖側の壁が内側へせり出しており、また、北西壁が他壁よりも長いために、竈から北コーナーまでは壁線が斜行して、台形プランの由縁をなしている。周溝は全周する。周溝によって規制される床面プランは、竈・北コーナー間が外に張り出している。柱穴は検出されなかったが、竈対向壁際中央にはしご穴が確認された。床面は中央からはしご穴にかけて硬くしまっていた。また、中央付近に、床面が焼けて赤変している箇所があった。竈の遺存状態は不良で、両袖の基部付近が残存していた。両袖部は短く、燃焼部には壁面に接して浅い播り鉢状のピットが掘られている。煙道部の張り出し方は普通である。

遺物 1・2は杯である。1は口径11.8cm、現高3.4cmで、明褐色を呈する。薄い土器で、体部にはロクロ目が残される。下端はヘラケズリされている。2は西コーナー付近の床面付近から出土した。口径12.2cm、器高4.0cm、底径7.2cmで、赤褐色を呈する。厚みのある広い底部から、浅い体部が緩いS字状に立ち上がる。体部は外面はロクロ目を残し、下端は回転ヘラケズリされている。内面は調整されて平滑になっている。底部外面は回転糸切り後、周囲を回転ヘラケズリしている。3～5は甕である。3は竈東脇の床面直上から出土した。口径16.8cm、現高4.7cmで、明褐色を呈する。口縁は大きく開いて内湾する。胴部は縦のヘラケズリが施される。4は竈手前の床面付近から出土した。現高5.6cm、底径6.6cmで、赤褐色を呈し、長石を含む。胴部外面はヘラケズリされている。5は南西寄りの床面直上から出土した。口径16.2cm、器高23.2cm、底径7.8cmで明褐色を呈する。頸部が立ち、胴部最大径は中位にある。頸部下端には沈線が巡る。胴部外面はヘラナデされている。底部外面は木葉圧痕が観察される。

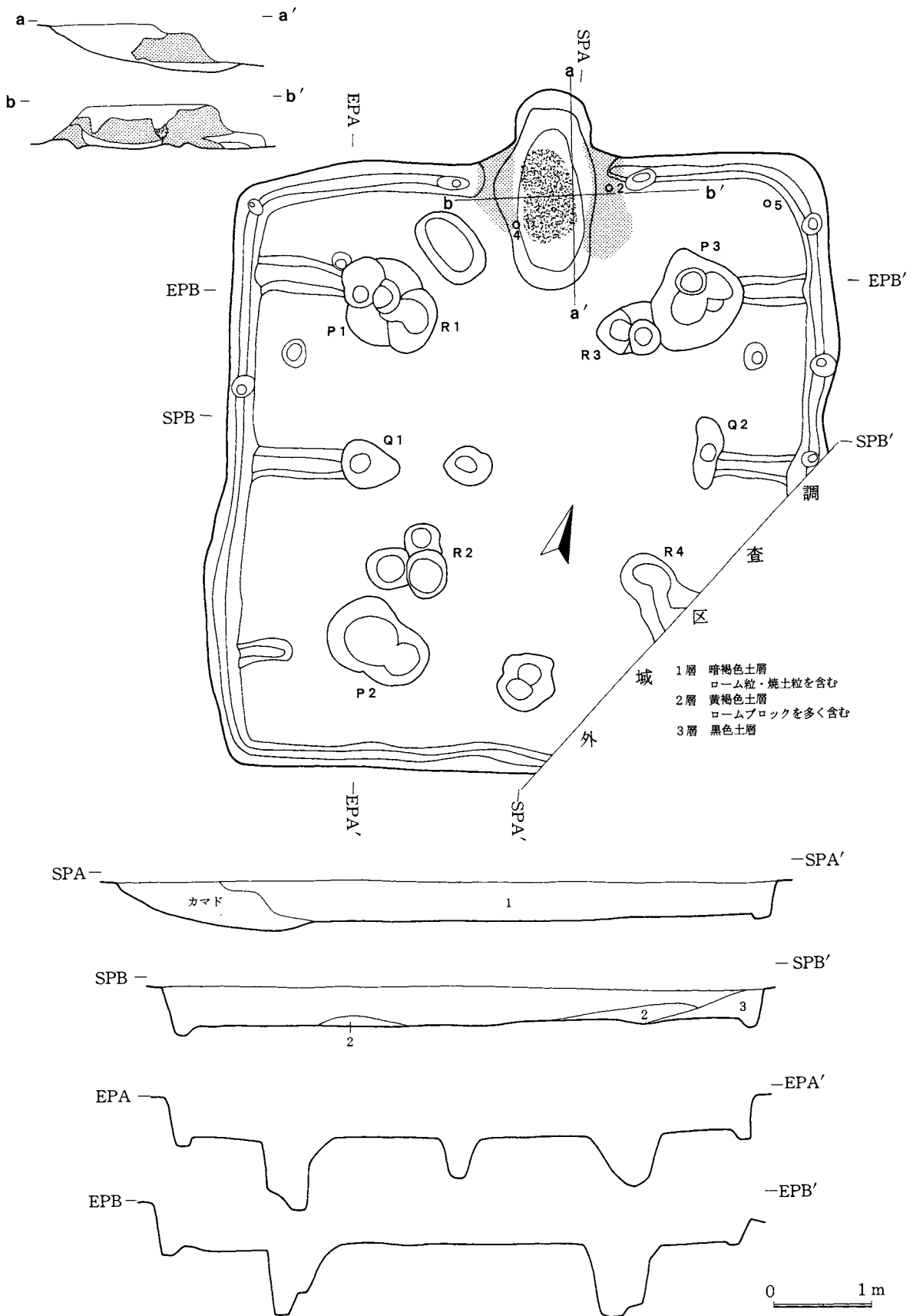
6は土製紡錘車で、西寄りの覆土下層から出土した。直径3.8cm、高さ2.2cmで、37.8gを量る。各面は平滑にナデられている。

SI 22 (第38図、第39図、図版11、図版34)

遺構 B13区の北東部に位置し、SI 20の東方にあり、東コーナーは調査区外に出ている。南西壁は5.9m



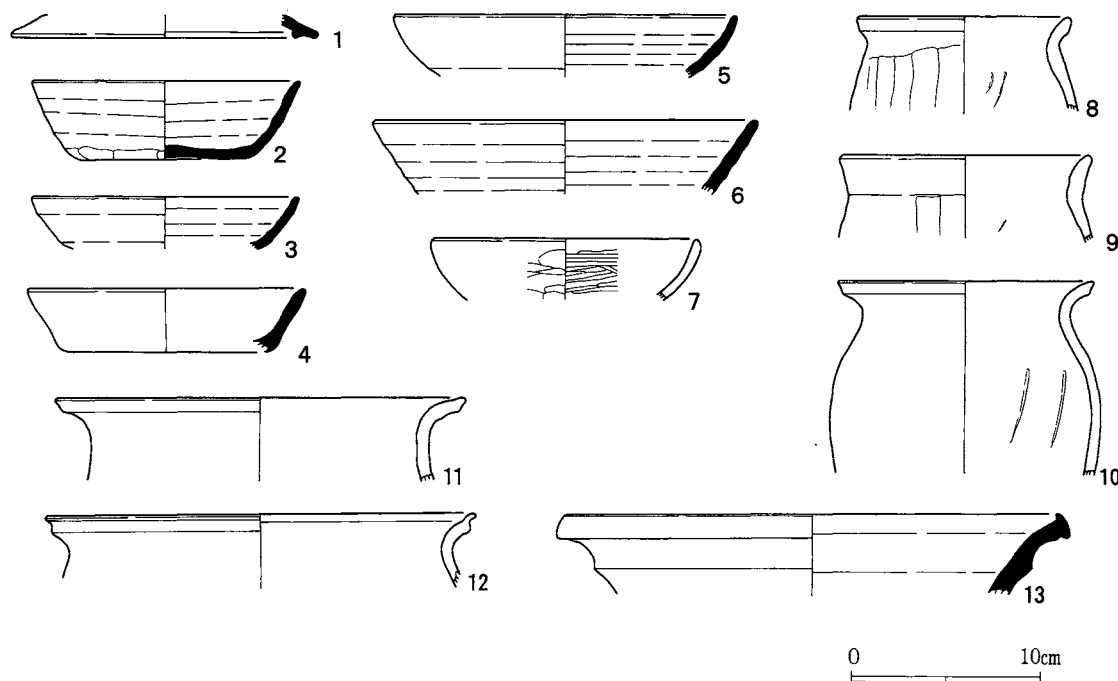
第37図 SI 21 遺構・遺物実測図



第38図 SI 22 遺構実測図

を計る。南西壁を短辺とする横転台形プランを呈すると思われる。壁線に出入りが多く、掘削時に雑な掘り方がなされている。そのために、平面形が意図的な設計観によるものか、偶然の所産であるのか判然としない部分もある。西・南コーナーは明確に稜をなすが、北コーナーは丸みを帯びている。南西壁は南半部が外に張り出している。また、北東壁は調査区限界直前で若干くびれている。竈は北西壁中央やや東寄りに設置されている。北西壁の竈・北コーナー間は外に張り出している。支柱穴はP1・P2・P3の3か所で、それぞれ立て替えの形跡がある。副柱穴はQ1・Q2の2か所である。R1～R4については、R2が貼り床下から検出されたので、拡張前の支柱穴と思われる。各主・副柱穴には壁から間仕切り溝が延びている。竈南脇には浅い楕円形ピットがあり、中には焼土や山砂が充満していた。竈対向壁際中央にはしご穴がある。また、周溝内には土止め板支持杭の差込痕がある。床面中央は硬くしまっている。竈の遺存状態はやや良好であるが、右袖の外側が削平されている。燃烧部には長大な船型ピットが掘られている。このピットは壁面を大きく突き抜け、坑底レベルを上げながら煙道部と化している。両袖下には心棒ピットが検出された。

遺物 1～7は杯類で、1～6は須恵器である。1は杯蓋で、現高1.2cm、明灰色を呈する。2は竈内から出土した。口径13.8cm、器高4.1cm、底径8.5cmで、明灰色を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、内外面にロクロ目を残す。外面下端はヘラケズリされている。底部外面は手持ちヘラケズリされている。3は口径13.8cm、現高2.7cmで、明灰色を呈する。体部は弱いロクロ目が残る。4は竈内から出土した。口径14.3cm、現高3.2cmで、胎土に雲母・長石を含み、赤褐色を呈する生焼け製品である。体部はナゲ調整がなされ、底部接合部は面取りされている。5は北コーナーの床面直上から出土した。推定口径17.7cm、現高3.2cmで、青灰色を呈する。体部は内湾し、内面にはロクロ目を残す。6は現高3.9cmで、明褐色を呈する生焼け製品である。体部にはロクロ目が残る。7は口径13.8cm、現高3.2cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾し、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキである。8～13は甕である。8は口径10.8cm、現高4.3cm



第39図 SI 22 遺物実測図

で、明褐色を呈する。口縁は短く、胴張りの小さい器形である。胴部外面はヘラケズリされる。9は口径12.8cm、現高4.3cmで、明褐色を呈する。口縁の外反は弱く、胴張りは小さい。胴部外面はヘラケズリされる。10～12は常総型の甕で、雲母・長石を含む。10は口径13.1cm、現高10.0cmで、明褐色を呈する。外反した口縁頂に粘土紐を積み上げて、口縁を盛り上げている。やや胴張りする器形である。胴部外面はヘラナデされる。11は口径21.2cm、現高4.3cmで、明褐色を呈する。口縁は二重口縁で、胴部は緩やかに膨らむ。12は口径22.5cm、現高3.7cmで、明褐色を呈する。口縁頂上に口唇部を成形している。13は須恵器で、推定口径25.8cm、現高4.1cmで、明灰色を呈する。口縁は二重口縁で、直下に突線を巡らせる。

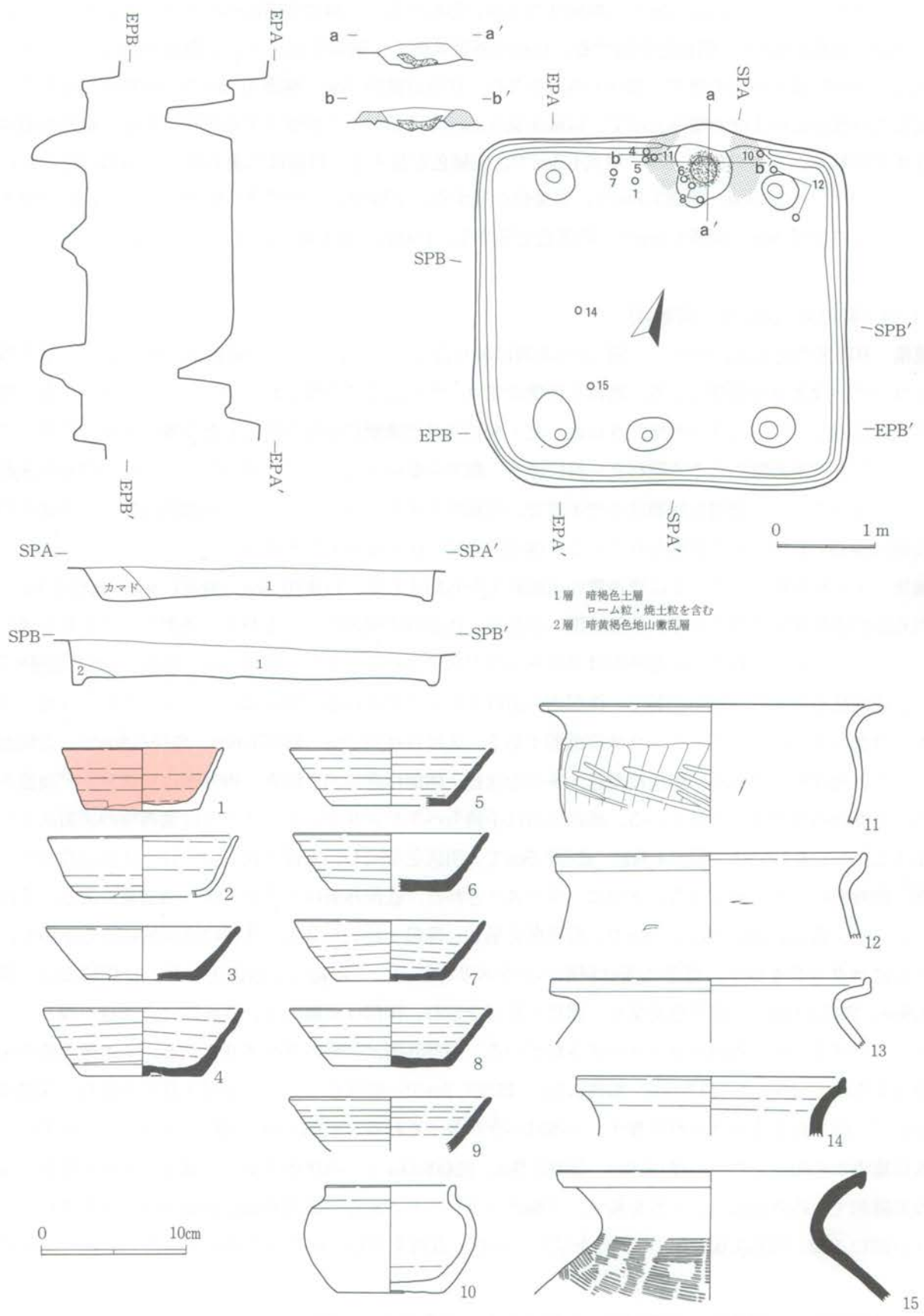
SI 23 (第40図、図版11、図版34)

遺構 B13区の北東部に所在し、SI 22の北西に隣り合う。3.4m×3.8mの横長長方形プランを呈する。各コーナーは丸みを帯びている。竈は北西壁の北コーナー近くに設置されている。周溝は全周する。柱穴は壁に接近した位置に4か所検出された。北・東柱穴が北東壁にかなり接近した位置にあるのに対して、西・南柱穴は南西壁からやや離れた位置にある。竈対向壁中央にはしご穴が存在する。柱穴内側の床面は硬くしまっていた。竈遺存状態はやや不良で、両袖の下半部が残存していた。両袖部は短く、焼成部には壁面に接して船型ピットが掘られている。煙道部の張り出しは極めて小さい。

遺物 1～9は杯である。1は竈西脇の床面直上から出土した。口径10.8cm、器高7.8cm、底径4.3cmで、内外面が赤色塗彩されている。体部の深い器形で、体部は直線的に立ち上がり、外面にロクロ目を残し、下端はヘラケズリされる。底部外面は手持ちヘラケズリされる。2は口径12.8cm、器高4.1cm、底径8.7cmで、赤褐色を呈する。薄い土器で、体部内外面はロクロナデされる。底部周縁は面取りされ、外面は手持ちヘラケズリされている。3～9は須恵器である。3は口径13.1cm、器高3.6cm、底径7.8cmで、黄褐色を呈する生焼け製品である。胎土に雲母・長石を含む。体部は直線的に開き、内外面はロクロナデ調整される。下端はヘラケズリされている。底部外面は手持ちヘラケズリされる。4・5は竈西脇の床面直上から出土した。口径13.5cm、器高4.6cm、底径7.9cmで、明灰色を呈し、雲母・長石を含む。体部は直線的に開き、内外面にロクロ目が残る。下端はヘラケズリされる。底部外面はヘラ切り後、無調整である。5は口径13.8cm、器高4.0cm、底径8.0cmで、明灰色を呈し、雲母・長石を含む。体部は直線的に立ち上がり、内外面にロクロ目を残す。底部外面は回転ヘラケズリされる。6は竈内から出土した。口径13.2cm、器高3.9cm、底径8.0cmで、明灰色を呈し、雲母・長石を含む。体部は直線的で、外面はロクロ目が残り、下端はヘラケズリされ、内面はロクロナデされている。底部外面は回転ヘラケズリされる。7は竈西脇の床面直上から出土した。口径13.0cm、器高4.1cm、底径7.2cmで、暗灰色を呈し、雲母・長石を含む。体部は直線的で、内外面ともロクロ目を残す。下端はヘラケズリされる。底部外面は回転ヘラケズリされている。8は竈内から出土した。口径13.8cm、器高3.9cm、底径8.0cmで、明灰色を呈し、雲母・石英を含む。体部は直線的で、内外面にロクロ目を残す。下端はヘラケズリされる。底部外面は回転ヘラケズリされる。9は口径13.6cm、現高3.6cmで、暗灰色を呈し、長石・石英を含む。体部は直線的で、内外面にロクロ目を残す。

10は短頸壺で、竈東脇の床面付近から出土した。葉壺形で、口径8.7cm、器高7.3cm、底径7.3cmで、赤褐色を呈する。口縁は直立し、胴部の肩に稜を持つ。器面は荒れている。

11～15は甕である。11は竈西脇の床面直上から出土した。口径23.2cm、現高8.0cmで、赤褐色を呈する。



第40図 SI 23 遺構・遺物実測図

口縁は外反して水平になる。胴部は胴の張らない長胴形である。外面はヘラケズリ後、粗くヘラミガキされる。12は北柱穴脇の床面直上から出土した。12・13は常総型の甕で、胎土に雲母・長石を含む。12は口径21.0cm、現高5.7cmで、明褐色を呈する。口縁の外反は弱く、胴はなで肩になる。胴部外面はヘラナデされる。13は口径21.5cm、現高4.4cmで、明褐色を呈する。口縁は外反して直立する。14・15は須恵器である。14は西寄りの床面付近から出土した。口径18.2cm、現高4.0cmで、暗灰色を呈する。口縁の外反は弱く、屈折して直立する。15は南西寄りの床面直上から出土した。口径20.9cm、現高8.7cmで、明灰色を呈する。細頸甕で、二重口縁を持ち、頸部以下に平行タタキ目が施される。

SI 24 (第41図、図版12)

遺構 B13区の北東部に所在し、SI 22の北西に隣り合い、南東側の大部分が調査区外に出ている。プランや規模は不明である。検出された西コーナーはやや丸みを帯びている。竈は北西壁に設置され、確認範囲では周溝は全周している。西側の柱穴の一部が検出された。竈は西半部が調査されたのみである。竈の西隣には、燃焼部ピットのような浅い落ち込みがあるが、坑底は焼けていない。竈の遺存状態はやや不良である。煙道部の張り出しは極めて小さい。遺物は検出されなかった。

SI 25 (第42図、図版12、図版34)

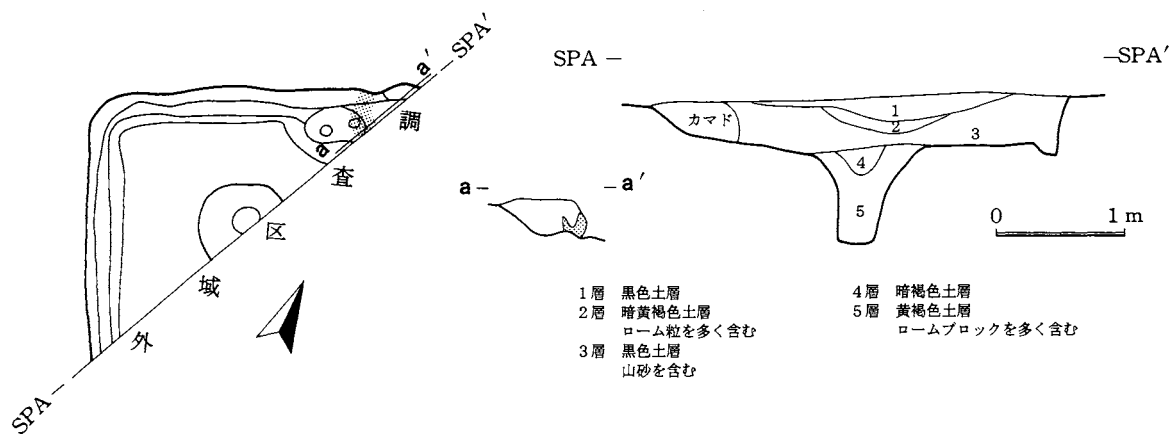
遺構 B13区の北東端に所在し、SI 24の北西に位置する。上辺4.5m、下辺4.3m、幅4.6mの逆台形プランを呈する。各コーナーは角張っている。周溝は全周しているが、柱穴は検出されなかった。竈対向壁際中央には、はしご穴が存在する。床面はほとんど全面が硬化していた。竈遺存状態はやや不良で、両袖下半部が残存していた。燃焼部には船型ピットが壁面を突き抜けて、煙道部床と接続している。

遺物 1は杯で、竈手前の床面直上から出土した。口径12.4cm、器高4.5cmで、口縁は体部との境に稜を作って、外反気味に内傾する。体部外面はヘラケズリ、内面は粗いヘラミガキが施される。2・3は甕である。2は竈手前の床面直上から出土した。口径14.0cm、現高7.9cmで、明褐色を呈する。頸部の立ち上がる短い口縁の土器で、胴張りは小さい。胴部外面は縦方向にヘラケズリされる。3は北東寄りの床面直上から出土した。口径14.0cm、器高13.1cm、底径5.8cmで、明褐色を呈する。器形は2と類似し、底部は上げ底となる。胴部外面はヘラミガキ、内面もヘラミガキされている。

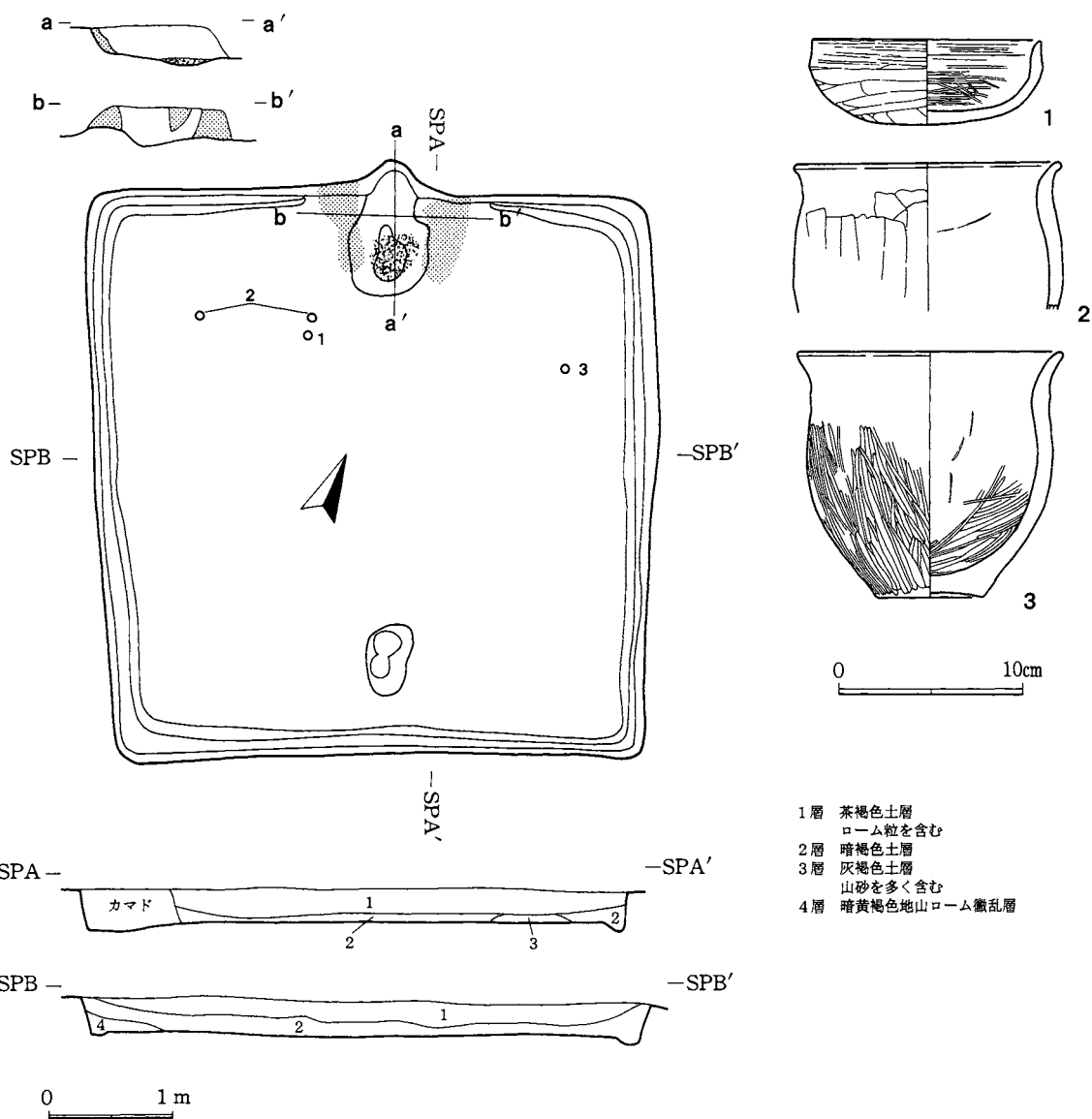
SI 26 (第43図、図版13)

遺構 C13区の北西端に所在し、SI 25の東に位置し、南東側は調査区外に出ている。1辺3m前後の小規模な住居跡である。検出された西壁、及び調査区境界にかかる北・南壁は丸みを帯びている。南西壁は内側にせり出している。竈は北西壁に設置されている。周溝は確認範囲では全周している。周溝によって規制される床面プランは、出入りが多く曲線的で、南西辺は南西壁同様内側にせり出している。柱穴は検出されなかった。中央部の床面は硬化している。竈の遺存状態は不良で、短い両袖部の基部が残存していた。燃焼部には不整形プランのピットが掘られている。煙道部の張り出し方は普通である。

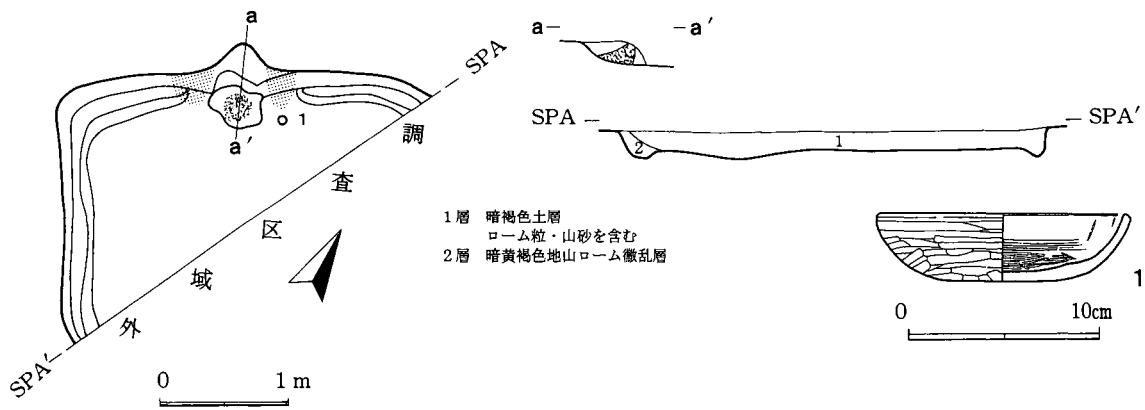
遺物 1は杯で、竈手前の床面直上から出土した。口径12.7cm、器高3.5cmで、赤褐色を呈する。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされる。



第41図 SI 24 遺構実測図



第42図 SI 25 遺構・遺物実測図



第43図 SI 26 遺構・遺物実測図

SI 27 (第44図、図版13)

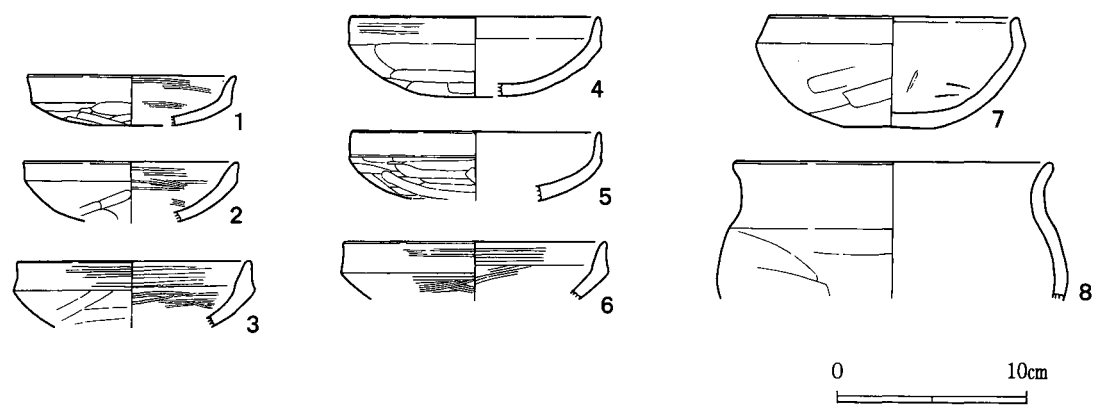
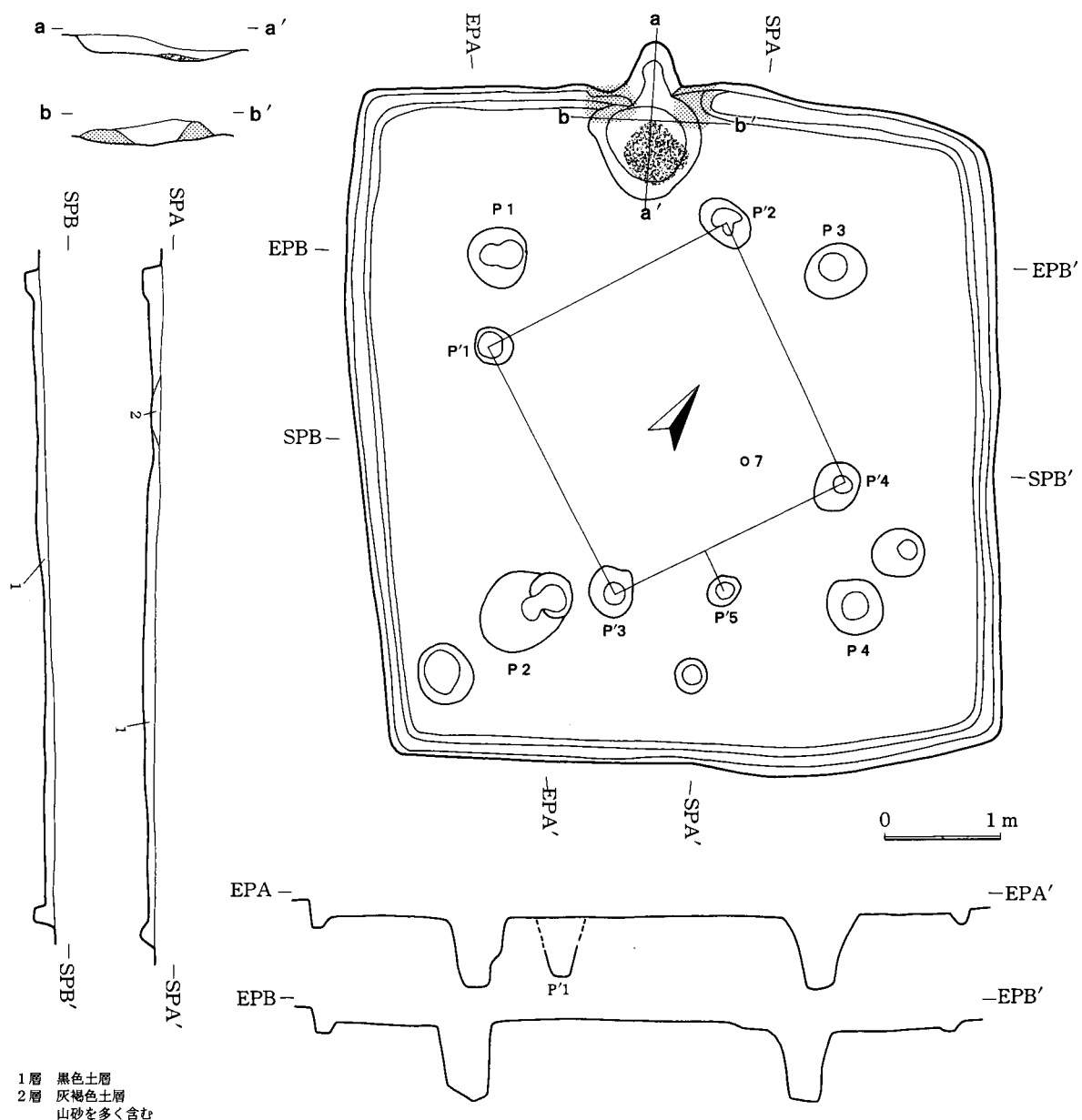
遺構 B12区の南東端付近に所在し、SI 26の北西に位置する。短辺5.2m、長辺5.7m、幅5.5mの横転台形プランを呈する。各コーナーは角張っており、壁線も比較的直線的である。ただし、北西壁の竈東脇が外側に若干膨らんでおり、それに対応するように、南東壁の対向部位がやはり僅かに膨らんでいる。北西壁中央に竈が設置されている。周溝は全周している。主柱穴はP 1～P 4の4か所である。P 2とP 4の傍らには、主柱穴より若干浅い柱穴状ピットが付随している。また、竈対向壁際中央には、はしご穴が存在する。主柱穴内側の床面は硬くしまっていた。なお、床面構成土除去後に、P' 1～P' 4の旧柱穴、及びP' 5の旧はしご穴が検出された。竈の遺存状態は不良で、両袖の付け根部分しか残存していない。燃焼部には不定形なピットが壁面に接して掘られ、ピットに連続して比較的長い煙道部が延びている。

遺物 1～7は杯である。1は口径10.8cm、現高2.6cmで、明褐色を呈する。扁平な底体部から口縁がやや外反して立ち上がる。底体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされる。2は口径10.9cm、現高3.1cmで、明褐色を呈する。短い口縁が外反気味に立ち上がる。底体部外面はヘラナデ、内面は粗いヘラミガキである。3は口径12.0cm、現高3.4cmで、明褐色を呈する。口縁は厚みがあり、ほぼ直立する。口縁内外面はヘラミガキ、底体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。4は口径13.0cm、現高4.1cmで、明褐色を呈する。口縁は直立する。底体部外面はヘラケズリされる。5は口径13.0cm、現高3.5cmで、暗褐色を呈する。底体部端は突出し、口縁は直立する。底体部外面はヘラケズリされる。6は口径13.6cm、現高3.0cmで、明褐色を呈する。口縁は内傾し、端部は僅かに外反する。内外面ともヘラミガキされている。7は中央やや東寄りの床面付近から出土した。口径12.8cm、器高5.7cmで、明褐色を呈する。深い碗形で、口縁は外反気味に内傾する。体部外面は粗くヘラケズリされ、底部外面には木葉圧痕が残っている。

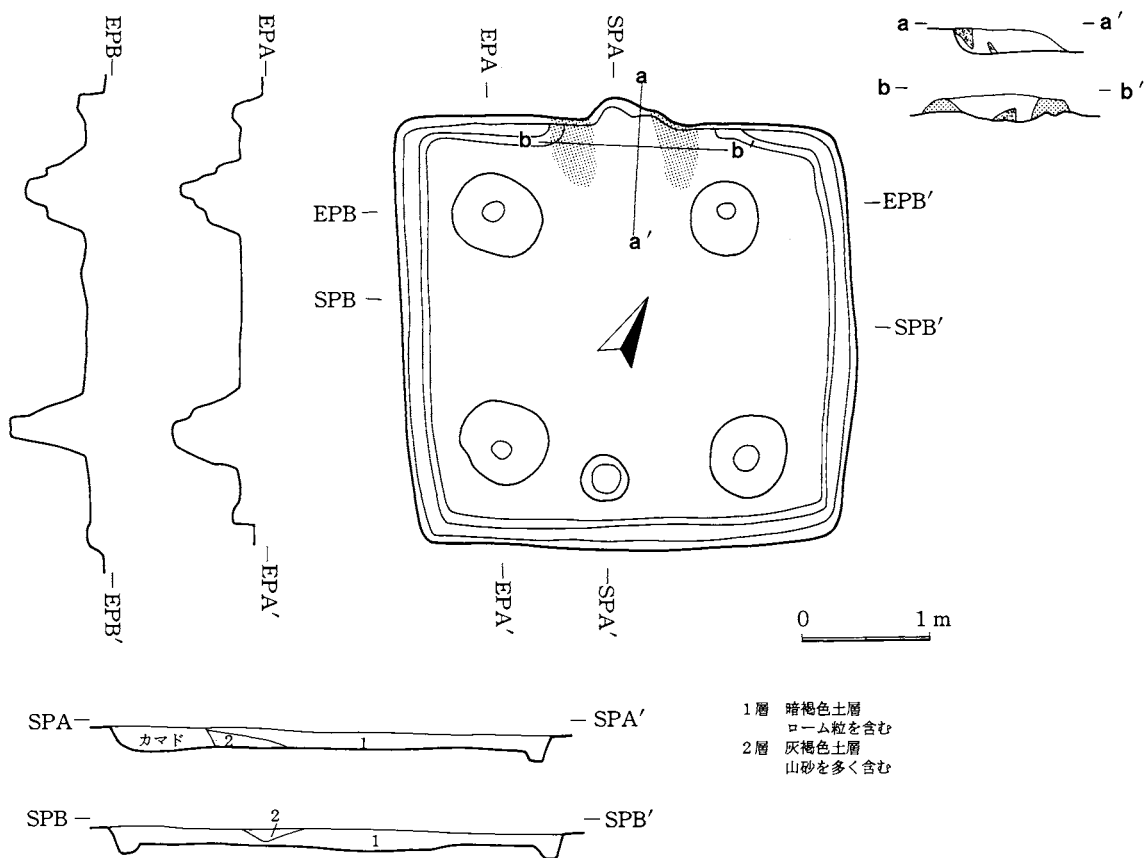
8は甕で、口径16.4cm、現高7.1cmで、赤褐色を呈する。頸部は直立し、口縁は短い。胴部は丸みを帯びる。胴部外面は横方向にヘラケズリされる。

SI 28 (第45図、図版13)

遺構 B12区の南東部に所在し、SI 27の西に隣り合う。上辺3.5m、下辺3.3m、幅3.3mの逆台形プランを呈する。各コーナーは角張っている。北東壁は外側へ張り出し気味である。北西壁中央に竈を備え、周溝は全周している。周溝に規制される床面プランは、南西部では外側に張り出し、北西部では逆に内側へ



第44図 SI 27遺構・遺物実測図



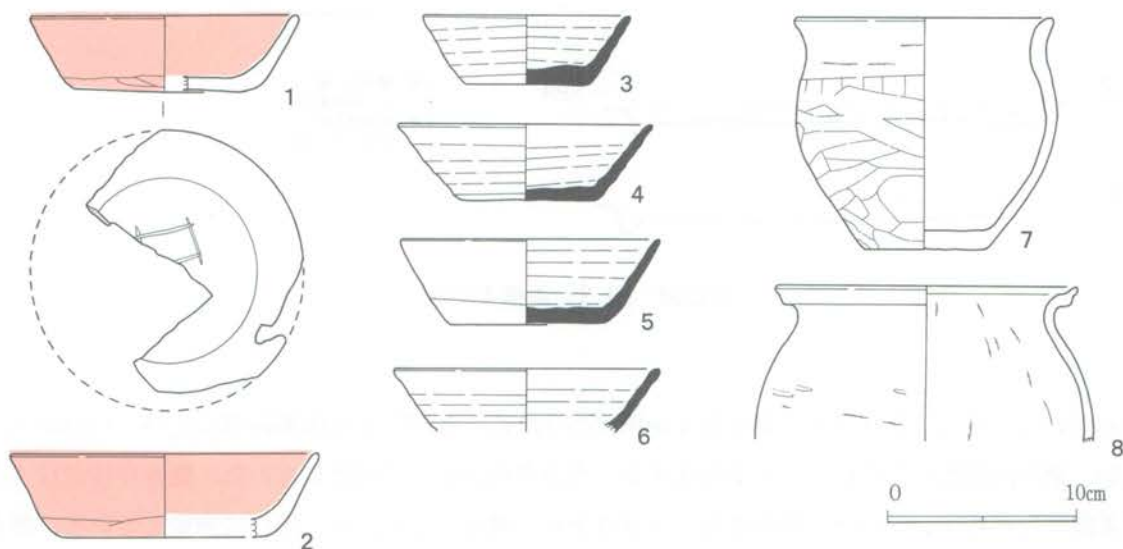
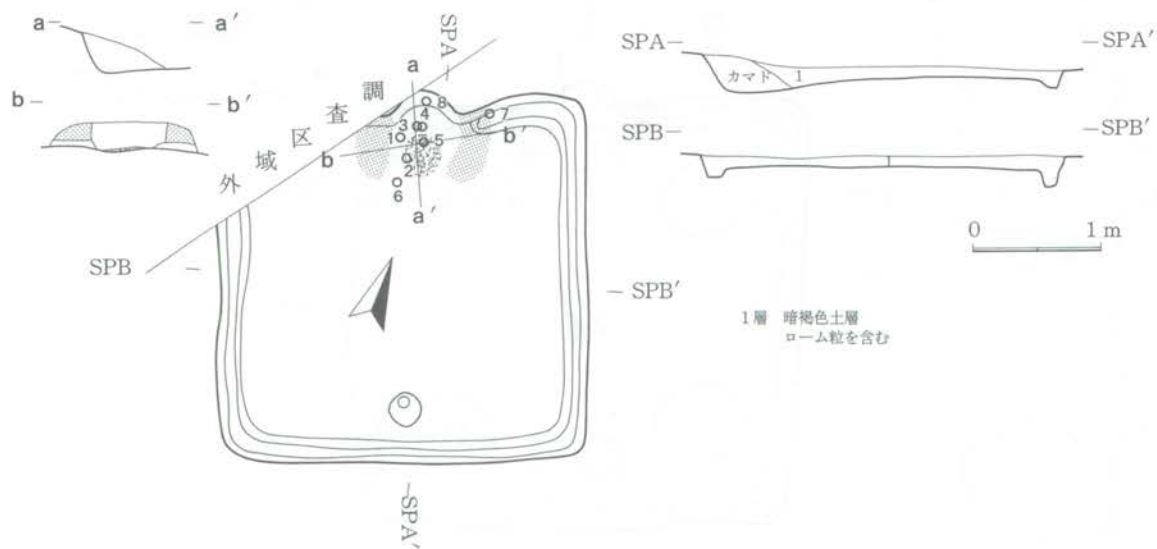
第45図 SI 28 遺構実測図

食い込んでいる。柱穴は各コーナー寄りに4か所検出された。各柱穴とも床面面積に比べ、口径が大きい。そのほか、竈対向壁際中央にはしご穴が存在する。床面中央は僅かに硬化していた。竈遺存状態は不良で、両袖の基部付近が残存していた。燃烧部ピットはほとんど確認できないが、僅かに赤変している。煙道部は小さい。遺物は検出されなかった。

SI 29 (第46図、図版14、図版34)

遺構 B12区の東部に所在し、SI 28の北西に位置し、西側コーナーが調査区外に出ている。1辺2.9mの方形プランである。各コーナーは丸みを帯びている。竈は北西壁のやや東寄りに設置されている。北西壁の状況は、竈東脇が内側にせり出し、そこから北コーナーまでが逆に外側に張り出している。この事例では北西壁の竈東側のみ確認できたが、西側も常に対称的な形状を呈するとは限らない。周溝は確認範囲では全周している。柱穴は検出されなかった。竈対向壁際中央にはしご穴が存在する。床面中央部は硬くしまっている。竈遺存状態はやや不良で、両袖の基部付近が残存していた。燃烧部ピットは存在しないが、相当部分が焼けていた。煙道部は小型である。

遺物 1～6は杯である。1～5は竈内から出土した。1は口径13.8cm、器高4.0cm、底径7.4cmで、内外面ともに赤色塗彩されている。広い底部から浅い体部が直線的に開き、底部周縁は面取りされている。体部内外面は横ナデ調整で、下端はヘラケズリされる。底部外面は手持ちヘラケズリ後、線刻を施している。



第46図 SI 29 遺構・遺物実測図

2も1と同様な土器で、口径15.8cm、現高4.3cm、底径10.9cmで、内外面が赤色塗彩されている。3～6は須恵器である。3・4は倒置された入れ子状態で出土した。3は口径10.8cm、器高3.6cm、底径6.5cmで、明灰色を呈し、雲母・長石が含まれる。分厚い底部から体部が直線的に立ち上がる。内外面ともロクロ目が残り、下端がヘラケズリされる。底部外面は手持ちヘラケズリで調整される。4は口径13.3cm、器高4.0cm、底径7.0cmで、青灰色を呈し、胎土には雲母・長石が含まれる。体部は直線的に立ち上がり、内外面ともロクロ目を残す。底部外面は回転ヘラ切り後、ヘラナデされている。5は口径13.4cm、器高4.4cm、底径8.1cmで、明灰色を呈し、長石・石英が含まれる。体部は直線的で、外面はロクロナデされ、下端はヘラケズリされる。内面はロクロ目が残っている。底部外面は回転ヘラケズリで調整される。6は竈手前の床面付近から出土した。口径13.8cm、現高3.3cmで、明灰色を呈し、胎土に長石・石英が含まれる。体部は直線的で、内外面にロクロ目が残る。

7・8は甕である。7は竈東脇の床面付近から出土した。口径13.1cm、器高12.0cm、底径6.3cmで、赤

褐色を呈する。口縁の外反は弱く、胴部最大径は中位にある。胴部外面は上位に縦のヘラケズリを施した後、横方向にヘラケズリされる。底部外面には木葉圧痕が残る。8は竈上から出土した。口径15.6cm、現高8.0cmで、明褐色を呈する。常総型の甕で、胎土には雲母・長石を含む。外反する口縁上に口唇部を成形する。胴部は肩の張るタイプに属する。外面はヘラナデされている。

SI 30 (第47図、図版14、図版34)

遺構 B12区からC12区にかけて所在し、SI 29の東に隣り合う。短辺5.0m、長辺5.3m、幅5.2mの横転台形プランを呈する。各コーナーは角張っているが、壁線は出入りが多く、非直線的である。北東壁は外側へ張り出している。竈は北西壁中央に設置されている。周溝は全周している。周溝によって規制される床面プランは、北東壁北部と南西壁南部が外側に張り出し、北東壁南部と南西壁北部が内側にせり出している。柱穴は4か所確認され、そのうち、東柱穴に立て替えの痕跡が見られた。このほか、竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。北東の壁際には焼土塊が2か所検出された。炭化材の出土は少なかつたものの、覆土下層には焼土粒を多く含んでいるので、火災を受けた住居跡であると考えたい。床面の状態はトレンチャーによる攪乱が著しいため、不明であった。竈の遺存状態はやや不良で、左袖が大きく破壊されていた。燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られ、小さい煙道部が突出している。

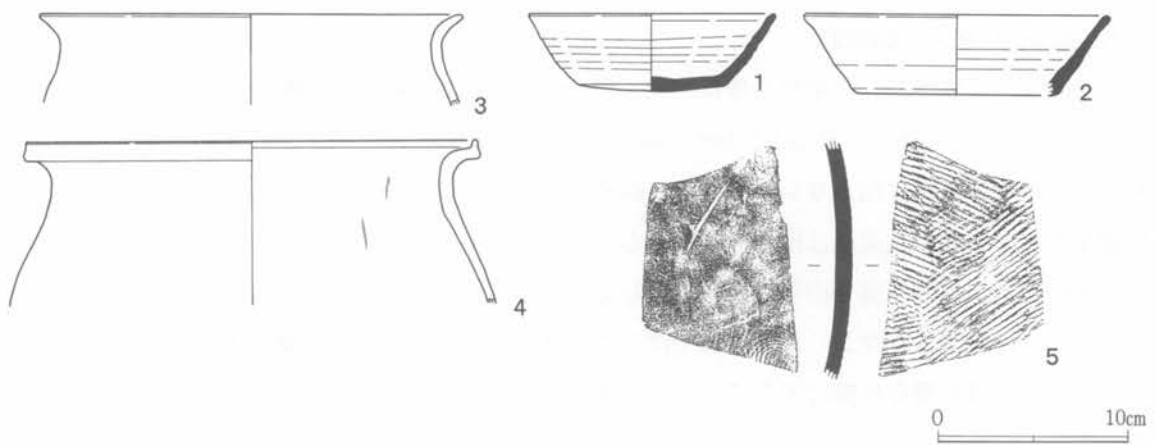
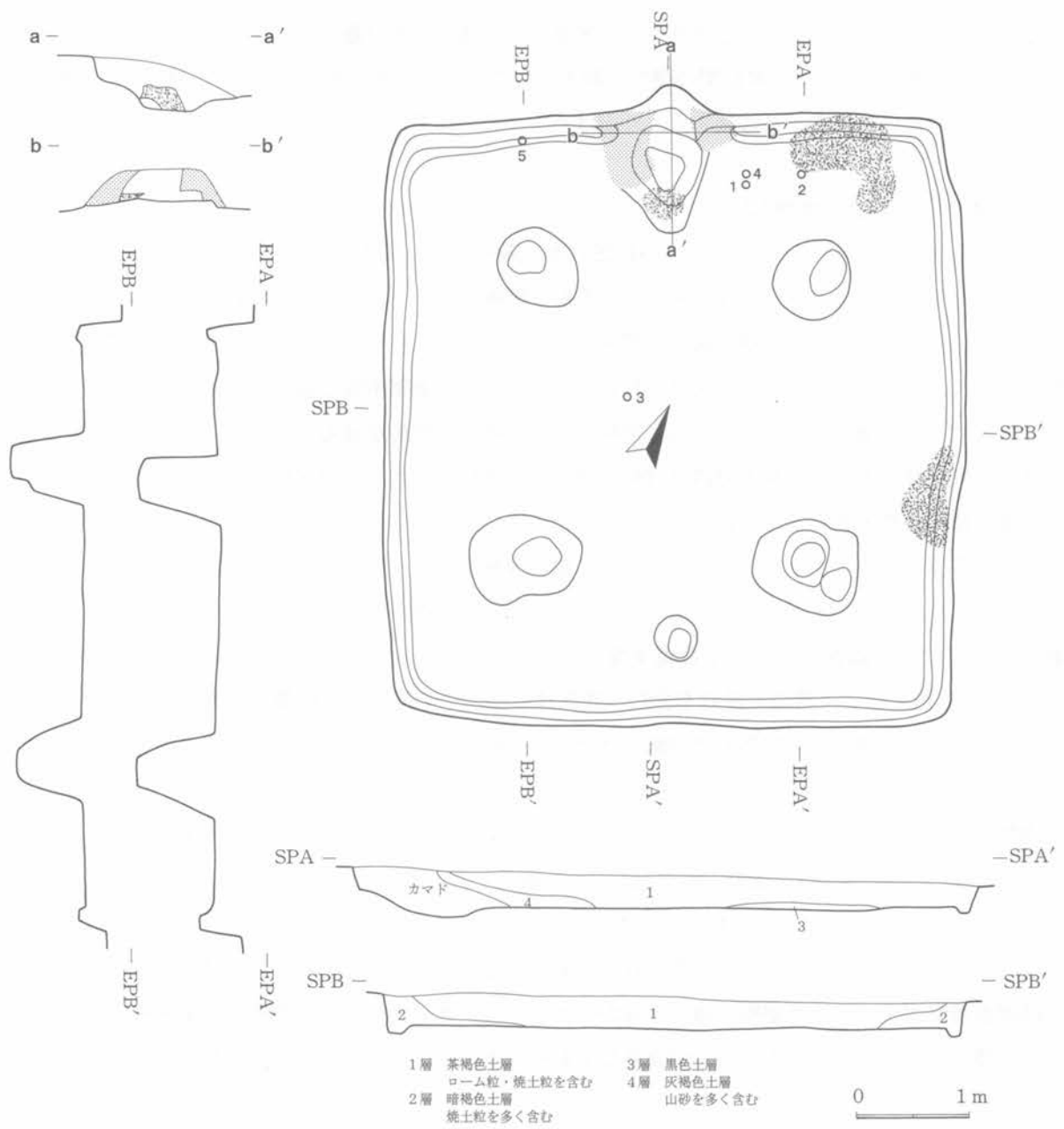
遺物 1・2は須恵器杯である。1は竈東脇の床面直上から出土した。口径12.8cm、器高4.1cm、底径7.6cmで、明灰色を呈し、雲母・長石を含む。底部は中央がやや突出し、体部は内湾気味である。体部内外面にはロクロ目が残り、底部外面は回転ヘラケズリされている。2は北側焼土塊脇の床面直上から出土した。口径15.6cm、現高4.2cmで、明褐色を呈し、雲母・長石を含む。体部は直線的で、口縁端が肥厚する。内外面はロクロナデ調整されている。3・4は常総型の甕である。3は住居跡中央の床面直上から出土した。口径21.9cm、現高4.7cmで、明褐色を呈し、雲母・長石を含む。口縁は短く、端部は単純である。外面はヘラナデされている。4は1とともに、床面直上から出土した。口径23.2cm、現高8.4cmで、明褐色を呈し、雲母・長石を含む。外反する口縁上に直立する口唇部を成形する。外面はヘラナデ調整される。

5は須恵器転用硯で、北西壁際の覆土下層から出土した。青灰色を呈する甕胴部の湾曲部破片を転用している。甕の外面は平行タタキ目が一部交差しており、内面には同心円文状の当て具痕が見られる。内面は磨滅して平滑になっている。

SI 31 (第48図、図版34、図版37)

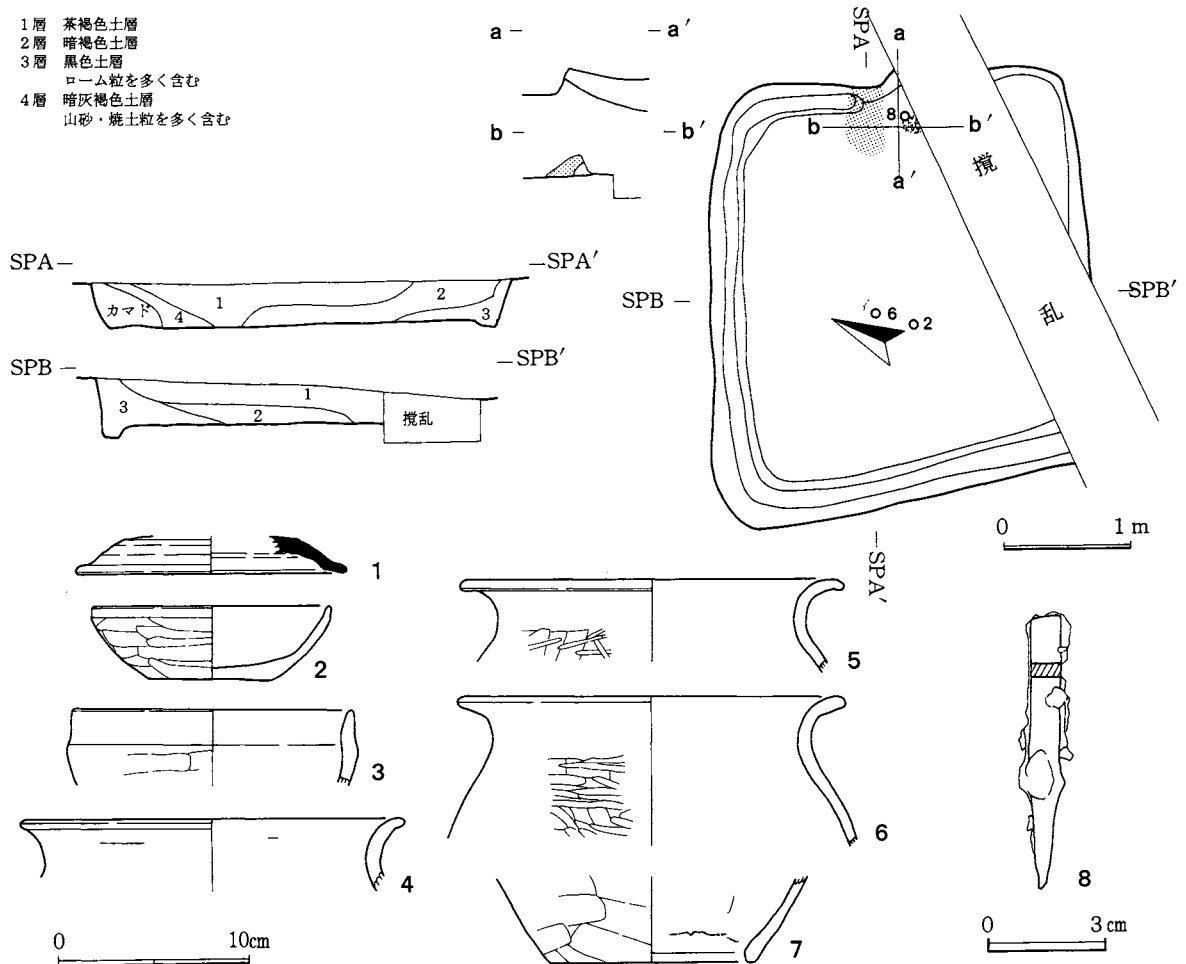
遺構 C12区の西部に所在し、南群のほぼ中央、SI 30の北東に位置する。竈から南コーナーにかけて攪乱を受けている。短辺2.6m、長辺約3.0m、幅3.4mの極端な横転台形プランを呈する。各コーナーは丸みを帯び、北西壁の壁線は出入りが多く、非直線的である。竈はほかの住居跡とは異なり、北東壁の中央付近に設置されている。北東壁は攪乱されているが、おそらく、竈左脇が住居跡内側へせり出し、そこから東コーナーまでが外側へ張り出して波状を呈していると思われる。周溝は北西側から検出されたが、東コーナー周辺では確認されなかった。柱穴やはしご穴は存在しない。床面は攪乱溝あたりから中央にかけて硬化していた。竈の遺存状態は不良で、左袖は攪乱によって破壊されていた。燃焼部には明確なピットは存在していないと思われる。煙道部は小規模であったろう。

遺物 1～3は杯類である。1は須恵器杯蓋で、推定口径13.8cm、現高2.0cmで、明灰色を呈し、胎土に

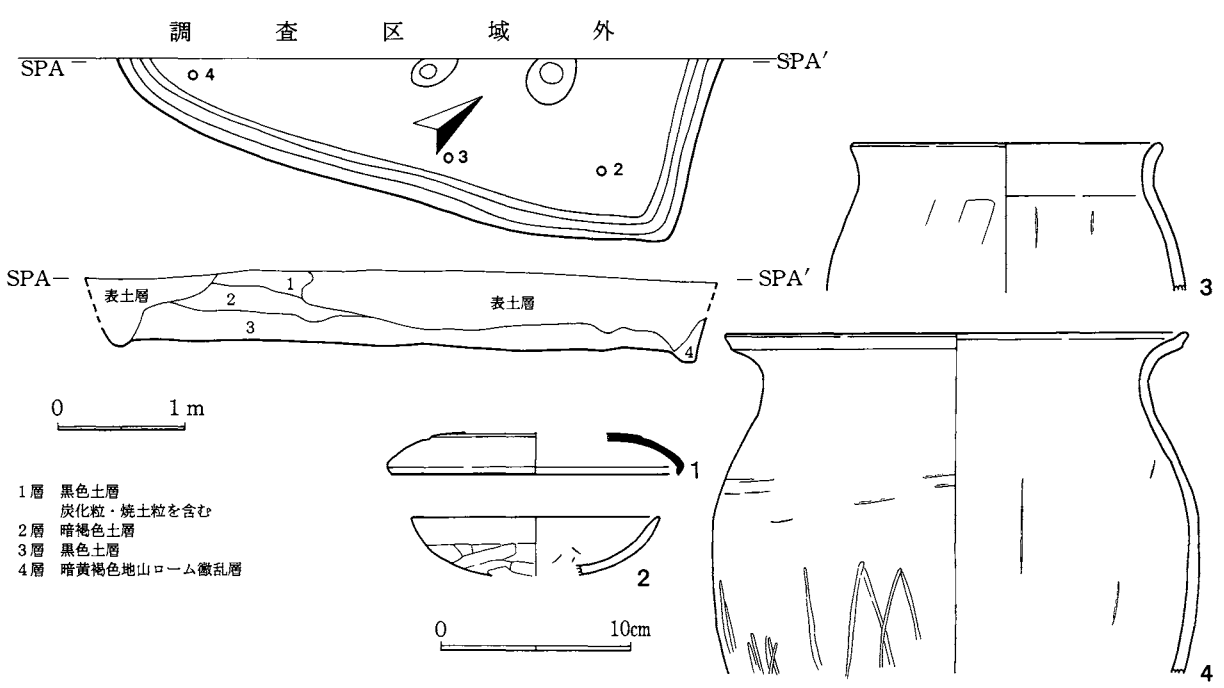


第47図 SI 30 遺構・遺物実測図

- 1層 茶褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 黒色土層
- 4層 暗灰褐色土層
ローム粒を多く含む
山砂・焼土粒を多く含む



第48図 SI 31 遺構・遺物実測図



- 1層 黒色土層
炭化粒・焼土粒を含む
- 2層 暗褐色土層
- 3層 黒色土層
- 4層 暗黄褐色地山ローム微乱層

第49図 SI 32 遺構・遺物実測図

長石・石英を含む。口縁部は屈曲し、内湾気味に横に広がっている。天井部の回転ヘラケズリは、底体部の3分の2に及んでいる。内側のカエリは断面三角形の小突起に退化している。2は住居跡中央の床面直上から出土した。口径12.2cm、器高3.9cm、底径6.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は強い横ナデが入り、体部及び底部外面はヘラケズリされている。3は大杯または鉢で、口径14.2cm、現高3.9cmで、口縁は外反気味に直立する。体部外面はヘラケズリされている。

4～6は常総型の甕である。4は推定口径19.3cm、現高3.7cmで、明褐色を呈し、胎土に長石・石英を含む。口縁は単純に丸みを持つ。5は口径19.0cm、現高4.2cmで、明褐色を呈し、胎土に長石・石英を含む。口縁は外反度が強く、内面がめくり返っている。胴部外面はヘラケズリの上から粗いヘラミガキが加えられる。6は住居跡中央の床面付近から出土した。口径19.5cm、現高7.6cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。口縁端は単純な丸みを帯び、胴部外面はヘラナデ後、ヘラミガキが加わる。

7は常総型の甗で、現高4.4cm、底径10.7cmで、明褐色を呈し、胎土に長石・石英を含む。底部は内面が削がれ、接地面が調整され、外面は横方向にヘラケズリされている。

8は鉄鏃で、竈内から出土した。筥から茎にかけての破片である。長さ7.1cm、6.1gを量る。

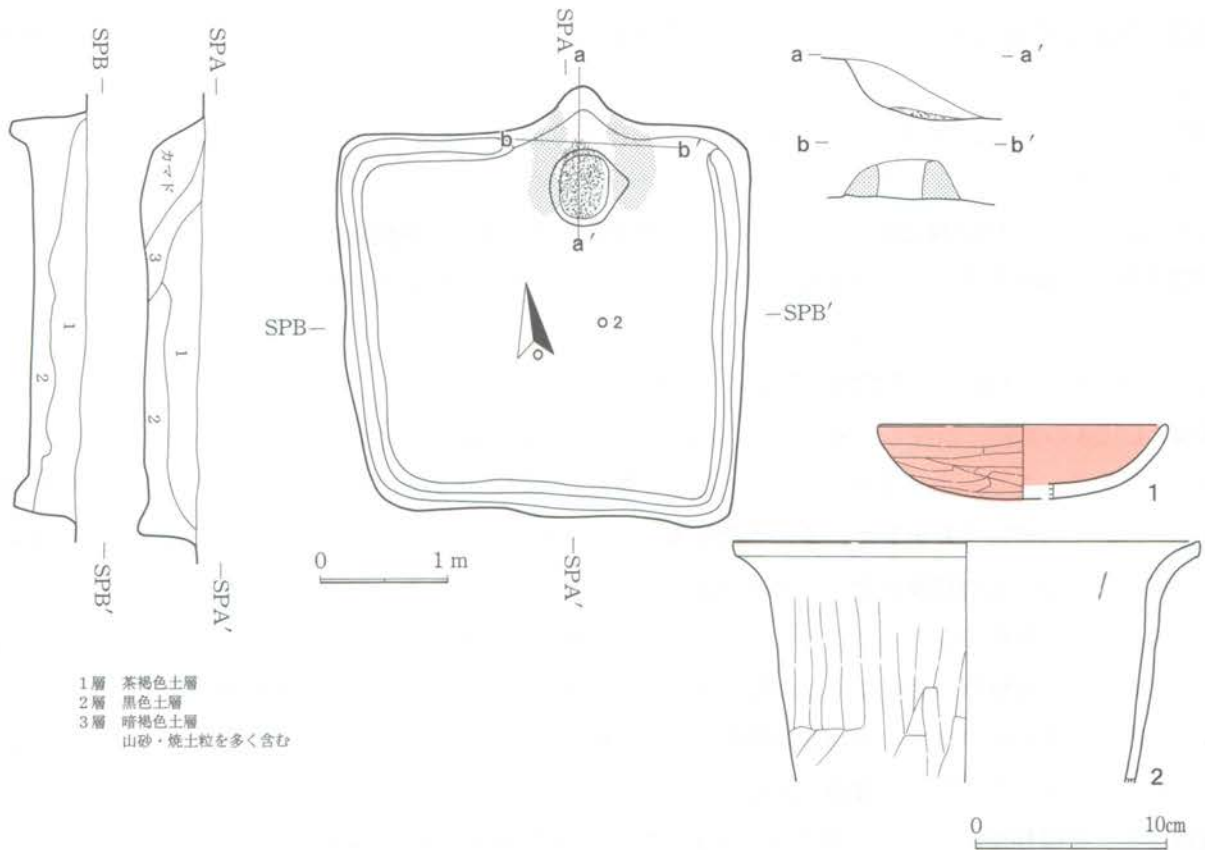
SI 32 (第49図、図版15)

遺構 B12区からC12区にかけて所在し、南群のほぼ中央、SI 29の北に位置する。調査できたのは東コーナー周辺のみで、大部分は調査区外に出ている。1辺約4.6m程の規模であろう。東コーナーは角張っているが、南コーナーは丸みを帯びている。南東壁は外に張り出し気味である。周溝は確認された範囲では全周している。ピットは2基検出されている。東コーナー寄りのピットは床面下78cm、もう1基は同じく17cmで、前者は柱穴、後者ははしご穴に相当する可能性が高い。とすれば、この住居跡の竈は北西壁中央に設置されている可能性も高くなる。また、床面は南東壁際は平坦だが、中央に向かって緩く傾斜している。

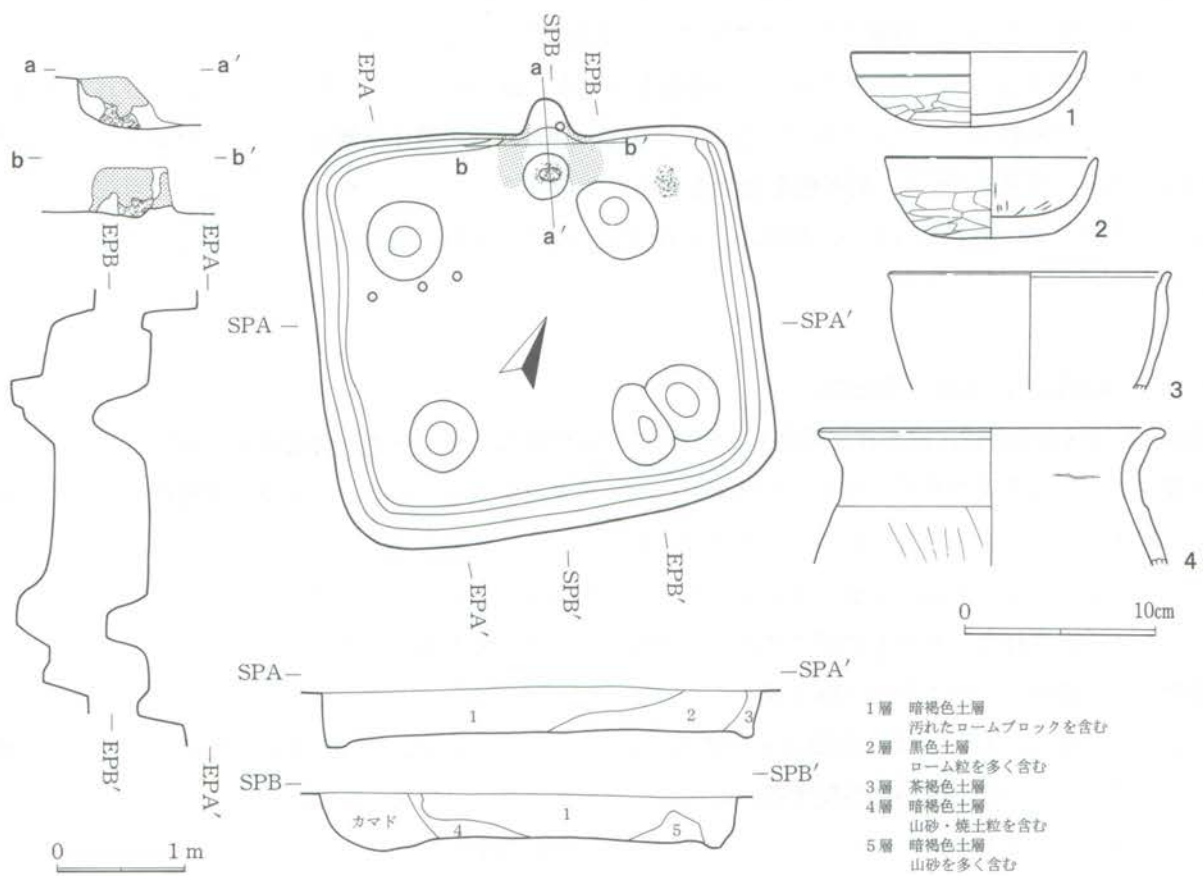
遺物 1・2は杯類である。1は須恵器杯蓋で、口径15.0cm、現高2.1cmで、暗青灰色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。薄手の土器で、口縁が内傾している。天井部から底体部の3分の2程が回転ヘラケズリされている。2は東コーナー付近の覆土中から出土した。丸底で、口縁は大きく開く。口縁は横ナデされ、底体部はヘラケズリされている。3・4は甕である。3は南東壁際の覆土中から出土した。口径15.8cm、現高7.7cmで、明褐色を呈する。口縁の外反は弱く、端部は単純に丸くなる。肩の張りは弱い。胴部外面はナデに近いヘラケズリが施される。4は常総型の甕で、南コーナー付近から出土した。口径23.7cm、現高17.5cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石・石英を含む。口縁は直下に稜を作って外反する。胴部の肩は余り張らない。胴部外面はヘラナデ後に、粗くヘラミガキされる。

SI 33 (第50図、図版15、図版34)

遺構 C12区の北西部に所在し、南群のほぼ中央、SI 31の北に隣り合う。上辺3.2m、下辺2.9m、幅3.1mの逆台形プランを呈する。各コーナーは丸みを帯びている。西壁と南壁は出入りが多く、非直線的である。竈はほかの住居跡とは異なり、北壁のやや東に偏して設置されている。周溝は竈と北東コーナー間で確認されなかった。周溝によって規制される床面プランは西辺・南辺が内側にせり出し、東辺は外に張り出している。柱穴・はしご穴は存在しない。床面は中央付近が硬化していた。竈の遺存状態は普通で、両



第50図 SI 33 遺構・遺物実測図



第51図 SI 34 遺構・遺物実測図

袖部は床面上55cmの高さまで残存していた。燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られていた。煙道部の張り出し方は普通である。

遺物 1は杯で、住居跡中央付近の床面直上から出土した。口径14.7cm、現高3.8cmで、内外面ともに赤色塗彩されている。丸底の皿形で、底体部外面はヘラケズリされている。2は甑で、住居跡中央の床面直上から出土した。口径24.2cm、現高12.4cmで、明褐色を呈する。口縁側縁は直立して、直下に稜を作る。胴部外面は土器を倒置して、底部から口縁の方向にヘラケズリを施している。

SI 34 (第51図、図版15、図版16、図版34、図版35)

遺構 C12区の北部に所在し、SI 33の北に位置する。短辺2.6m、長辺3.1m、幅3.5mの横長横転台形プランを呈する。各コーナーは丸みを帯びている。竈は北西壁のやや北に偏して設置されている。北西壁の竈東脇は若干内側にせり出している。周溝は竈と北コーナー間では検出されなかった。南西壁・南東壁側では幅が広いが、北西壁及び北コーナー付近では幅が狭くなっている。柱穴は各コーナー寄りに比較的大きな口径で4か所存在し、このうち、東柱穴には立て替えの痕跡が見られる。北コーナー付近に焼土が堆積しており、南東壁際の柱穴間には山砂が堆積していた。床面は竈と柱穴の周囲以外は硬くしまっている。竈の遺存状態はやや不良で、両袖部の外側が破壊されていた。燃焼部のピットは円形で、壁面からは離れている。煙道部の張り出しは普通である。

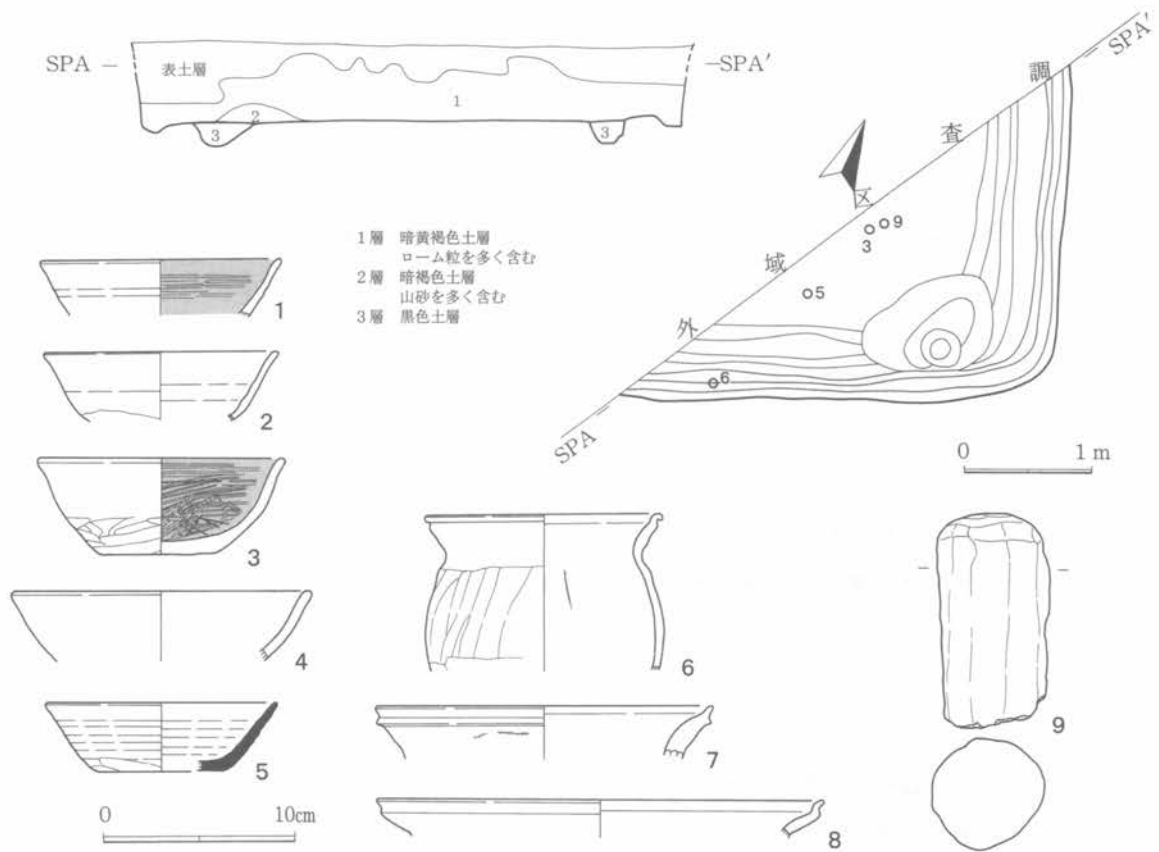
遺物 1・2は杯である。1は竈内から出土した。口径12.0cm、器高3.9cmで、赤褐色を呈する。椀形の器形で、口縁下に細沈線が巡っている。底体部外面はヘラケズリされている。2は西柱穴脇の床面付近から出土した。口径11.0cm、器高4.1cmで、赤褐色を呈する。底部の分厚い土器で、平底化した底部から体部が椀形に立ち上がり、口縁で僅かに外反する。外面は体部中位から底部にかけてヘラケズリされている。3は鉢で、口径14.4cm、現高6.1cmで、暗褐色を呈する。最大径を口縁に持つ。口縁はくびれた後に、外反する。胴部外面はヘラナデされている。4は甕で、西柱穴脇の覆土下層から散乱した状態で出土した。口径17.5cm、現高6.9cmで、明褐色を呈する。頸部から口縁にかけて緩やかに外反し、口唇部で水平に延びる。胴部の肩は余り張らない。頸部から口縁は強く横ナデされ、胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。

SI 35 (第52図、図版16、図版35)

遺構 C11区からC12区にかけて所在し、SI 34の西に位置し、東コーナー付近以外は調査区外に出ている。規模やプランは不明である。検出された東コーナーは丸みを帯びている。北東壁・南東壁ともにやや張り出し気味である。確認された範囲では周溝は全周している。壁線・周溝ともに比較的出入りが目立つ。床面は住居跡中央寄りが硬くしまっていた。なお、床面構成土を排除したところ、拡張以前の周溝の一部とピットが検出された。ピットの深さは新床面下67cmである。覆土は人為的な埋土である。

遺物 出土遺物はすべて新住居跡に属する。

1～5は杯である。1は口径12.3cm、現高3.0cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部は内湾気味で、口縁で僅かに外反する。ロクロナデ調整の後に、内面が粗くヘラミガキされている。2は口径11.8cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。器形や調整法は1と類似し、底部から口縁にかけて緩いS字状を呈する。体部はロクロナデ調整され、外面下端部はヘラケズリされている。3は調査区限界付近の



第52図 SI 35 遺構・遺物実測図

覆土中から出土した。口径12.5cm、器高5.0cm、底径6.1cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。底部周縁は面取りされず、体部から口縁に緩いS字状を呈する器形である。体部はロクロナデ調整の上から外面は下位にヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。底部外面は手持ちヘラケズリされている。4は口径15.1cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾気味で、口縁は僅かに外反している。器面が荒れているため、調整法は不明である。5は須恵器で、覆土中から出土した。口径11.8cm、器高3.6cm、底径6.4cmで、明褐色を呈する生焼け製品である。胎土に長石・石英を含む。体部は直線的に開き、内外面にロクロ目を残す。外面下端はヘラケズリされている。底部外面は回転糸切り後、周縁部が手持ちヘラケズリされている。

6～8は甕である。6は南東壁際の覆土中から出土した。口径12.2cm、現高8.0cmで、赤褐色を呈する。口縁は直線的に開き、口縁頂に口唇部を成形するが、外反度が強く、内面がめくれ返っている。おそらく、下側に紐をあてがって成形したのであろう。胴部は肩の張らない器形になる。外面は上位が縦方向の、下位が横方向のヘラケズリである。7は口径17.5cm、現高2.8cmで、赤褐色を呈する。分厚い口縁が外反し、側縁に断面三角形のタガ状突帯を巡らせて、頂部には細い粘土紐で口唇部を成形している。8は推定口径23.5cm、現高1.9cmで、暗褐色を呈する。外反する口縁頂に口唇部を成形する。

9は土製支脚で、調査区限界付近の覆土下層から出土した。現高11.0cm、直径5.8cmで、赤褐色を呈する。一端は原状を残している。断面観察から5～6本の粘土紐を接合して、所定の太さを実現しているこ

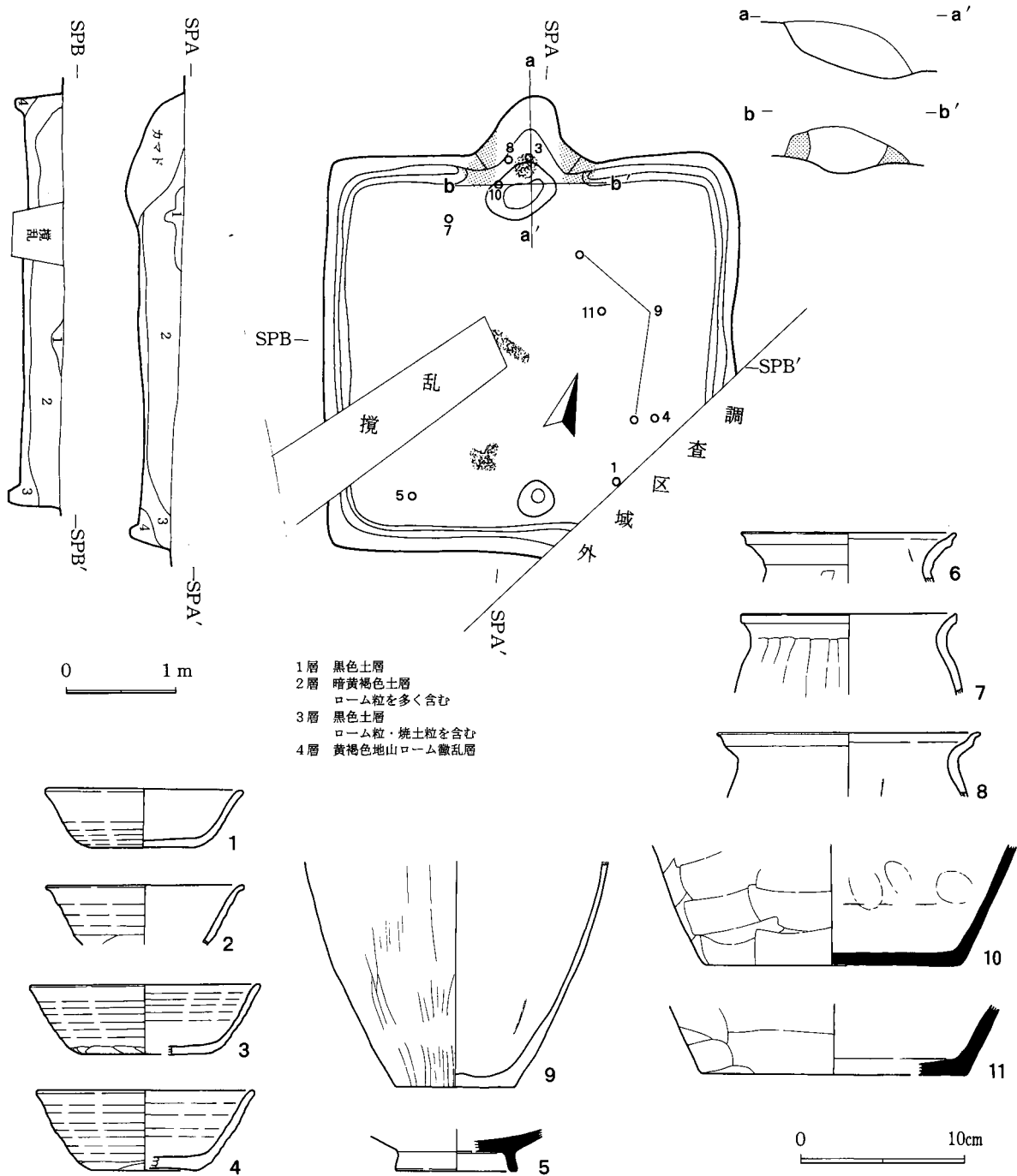
とが判明する。表面にはその際の接合痕が残っている。接合された粘土塊は、硬い平坦面上で転がされて円柱形が成形されたものと思われる。木口面の成形は填圧によったものであろう。

SI 36 (第53図、図版16、図版35)

遺構 C12区の北部に所在し、SI 34の南東に位置する。東コーナー付近が調査区外に出ている。1辺3.5mの正方形に近いプランを示すが、北東コーナーが張り出しているので、横転台形の可能性もある。西・南コーナーは角張っているが、北東コーナーは丸みを帯びている。壁線は概ね直線的だが、北東壁中央付近では若干くびれている。また、南東壁は調査区境界直前で外側に広がる傾向を示しているので、調査区外に潜在する南東コーナーは、北東コーナー同様張り出し気味になる可能性が高い。竈は北西壁中央に設置されている。北西壁の竈東脇はやや内側にせり出している。周溝は確認された範囲では全周している。南東壁側の調査区境界直前では、急に幅が広がっている。柱穴は存在しない。竈対向壁際中央にはしご穴が検出された。床面上には焼けて赤変した痕跡が2か所確認された。覆土下層は焼土粒を多く含むので、火災を受けた住居跡と思われる。この2か所を含めて、中央付近の床面は硬くしまっている。竈の遺存状態は不良で、両袖は付け根部分しか残っていない。横長扁円形の燃烧部ピットが壁面に接して掘られている。煙道部の張り出しは大きい。覆土は人為的な埋土である。

遺物 1～5は杯類である。1は調査区限界際の床面付近から出土した。口径11.6cm、器高3.6cm、底径6.2cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石・石英を含む。広い底部から浅い体部が緩いS字状に開く。体部上半と内面はロクロナデ調整されているが、体部外面にはロクロ目が残っている。底部外面は手持ちヘラケズリで切り離し痕を消している。2は口径10.8cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。口縁は直線的に開き、口唇部で強く外反する。外面はロクロ目がよく残るが、内面はロクロナデで消されている。3は竈内から出土した。口径13.8cm、器高4.2cm、底径8.0cmで、赤褐色を呈する。底部は大きく、体部は僅かに内湾して、口縁では外反する。体部外面はロクロ目がよく残るが、内面ではロクロナデで消されている。外面下端部にヘラケズリが施される。底部外面は回転ヘラケズリされている。4は調査区限界付近の床面付近から出土した。口径13.2cm、器高4.7cm、底径6.2cmで、明褐色を呈する。厚みのある底部は上げ底になり、周縁がヘラケズリで面取りされている。深い体部は直線的に開き、口縁で僅かに外反するが、厚みにムラがある。体部調整は外面はロクロ目が残され、内面はロクロナデによって消されている。底部外面は回転糸切り後、周囲を手持ちヘラケズリしている。5は高台付きの須恵器杯で、南コーナー付近の覆土下層から出土した。現高2.5cm、台径7.4cmで、暗灰色を呈し、内面は黒色処理されている。高台の開きは小さく、厚みは一定している。接地面は丸みがある。

6～11は甕である。6は口径12.9cm、現高3.1cmで、赤褐色を呈する。口縁を外反させ、その頂部にさらに外反する口唇部を取り付けている。頸部には細突線が巡るが、意図的なものかは不明である。7は竈西脇の覆土下層から出土した。口径12.9cm、現高4.8cmで、赤褐色を呈する。口縁の外反は弱く、側縁を直立させ、下端に稜を作っている。胴部はやや肩が張り、縦方向のヘラケズリが施される。8・9は常総型の甕で、胎土に雲母・長石を含む。8は竈内から出土した。口径15.7cm、現高3.9cmで、明褐色を呈する。口縁は一旦外反してから立ち上げて段を作り、さらに、その頂部に水平に延びる口唇部を成形している。胴部はなで肩状になり、外面はヘラナデされている。9はかなり離れた地点の床面付近から出土した破片が接合した資料である。現高13.6cm、底径7.2cmで、明褐色を呈する。腰高の器形で、胴部はヘラナ



第53図 SI 36 遺構・遺物実測図

デ後、細い工具によって、縦方向にミガキに近いヘラナデが行われる。底部外面には木葉圧痕が残っている。10・11は須恵器である。10は竈内から出土した。現高7.2cm、底径15.3cmで、青灰色を呈する。胎土に雲母・長石を含む。胴部は直線的に開き、外面には横方向のヘラケズリが加えられる。底部は僅かに上げ底になり、網代状圧痕をヘラナデで消しかけている。11はやや北寄りの覆土下層から出土した。現高4.3cm、底径16.0cmで、明灰色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。器形・調整ともに10と等しく、底部外

面にも網代圧痕が残っている。

SI 37 (第54図、図版17、図版35)

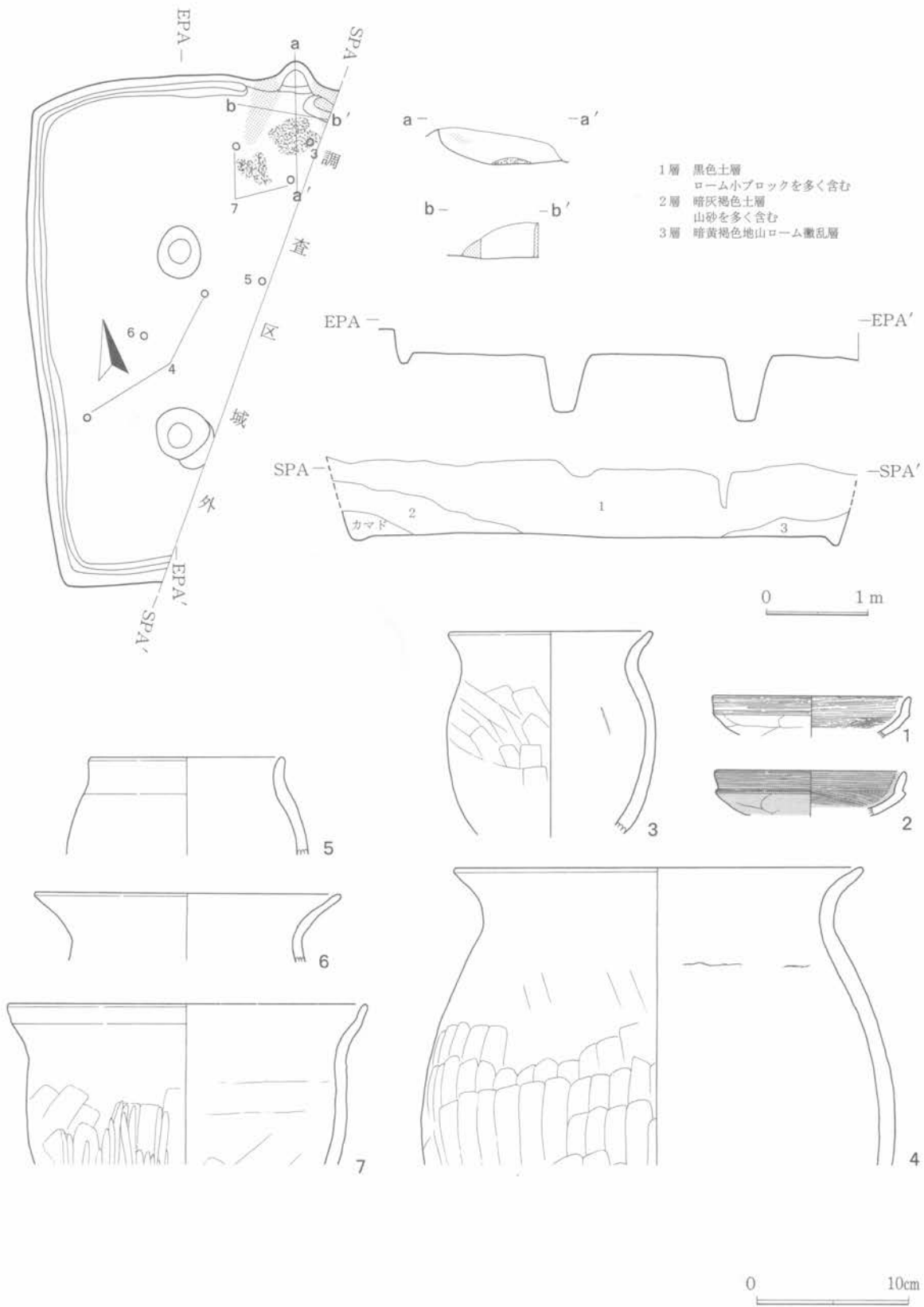
遺構 C12区の北端に所在し、SI 36の北東に隣り合う。東部の半分が調査区外に出ている。1辺4.5m前後の規模になる。北壁・西壁は角張っている。北東壁の確認範囲ではかなり外側に張り出している。また、南西壁は北西壁に対して鋭角的に取り付いているので、北東壁の形状をも考え合わせると、この住居跡は横転台形プランを呈する可能性が高い。竈はほかの住居跡とは異なり、北東壁に設置されている。北東壁の竈東脇は内側へせり出しているので、竈から東側では波状壁になる可能性がある。周溝は幅が狭く、確認された範囲では全周している。柱穴は2か所検出されたが、調査区外にもう2か所潜在していると思われる。床面は柱穴の内側で硬化している。竈の遺存状態は不良で、右袖は基部付近しか残存していない。明確な燃焼部ピットは存在しない。煙道部は未発達である。覆土の状況は人為的な埋土を示している。

遺物 1・2は杯である。1は口径12.8cm、現高2.7cmで、暗褐色を呈する。体部上端に稜があり、口縁は僅かに外反する。口縁外面は細い工具でヘラミガキされ、底体部はヘラケズリされている。内面は口縁から底部に至るまでヘラミガキされている。2は口径12.2cm、現高2.9cmで、内外面ともに黒色処理されている。体部上端のやや下に口縁部を接合して、体部上端を突出している。口縁は直線的に開く。各部調整は1と等しい。3～7は甕である。3は竈内から出土した。口径13.2cm、現高13.1cmで、赤褐色を呈する。口縁端は単純に丸みを帯び、胴部は肩が張らずに底部に至る。胴部外面はヘラケズリされる。4は離れた地点の覆土中から出土した接合資料である。口径26.6cm、現高25.3cmで、赤褐色を呈する。口縁端は単純に丸みを帯び、胴部は中位に最大径を持つ。胴部中位を中心にヘラケズリされている。5は調査区限界際の覆土下層から出土した。口径12.4cm、現高6.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は外反気味に直立し、胴部はなで肩になる。蓋を想定した器形であろうか。胴部外面はヘラナデされている。器面は荒れている。6は柱穴間の覆土下層から出土した。口径19.8cm、現高4.3cmで、暗褐色を呈する。口縁は直線的に開き、端部は単純に丸みを帯びる。7は竈周辺の覆土中から出土した。口径23.4cm、現高15.8cmで、赤褐色を呈する。口縁は穏やかに開き、僅かに内屈する。端部は単純に丸みを帯びる。胴部最大径は最上位にくる長胴型である。胴部外面は縦方向にヘラケズリされた後、同方向にヘラミガキされる。

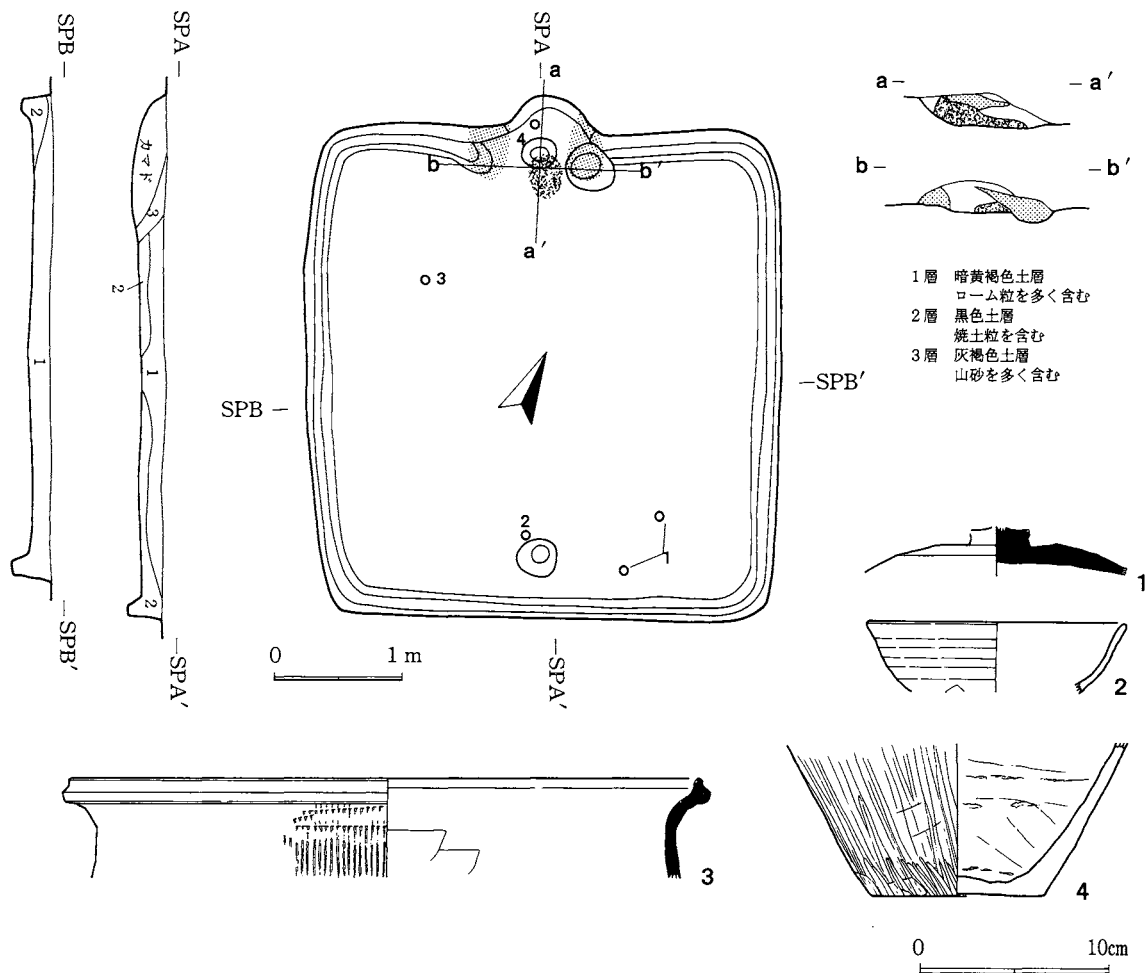
SI 38 (第55図、図版17)

遺構 C11区の南端に所在し、SI 35の北東に隣り合う。3.5m×3.8mの長方形プランを呈する。南コーナー以外はやや丸みを持っている。南西壁は外側へ張り出している。竈は北西壁中央に設置されている。北西壁の西コーナーから竈までは外側に張り出し、竈東脇は内側にせり出している。周溝は全周している。柱穴は検出されなかった。竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。竈・はしご穴間の床面中央部は硬くしまっている。竈遺存状態はやや不良で、両袖の基部付近が残存していた。燃焼部には小規模なピットが床面外に掘られ、煙道部の張り出しは小さい。左袖下には心棒ピットが検出された。

遺物 1・2は杯類である。1は須恵器杯蓋で、東コーナー付近の床面付近から出土した。現高2.5cmで、青灰色を呈する。天井部のツマミ周囲がめり込んでおり、回転ヘラケズリの範囲は狭い。2ははしご穴に接した床面直上から出土した。口径13.4cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。体部から口縁へ緩いS字状を呈する器形で、外面はロクロ目が残るが、内面はロクロナデで消されている。下端部はヘラケズリされ



第54図 SI 37 遺構・遺物実測図

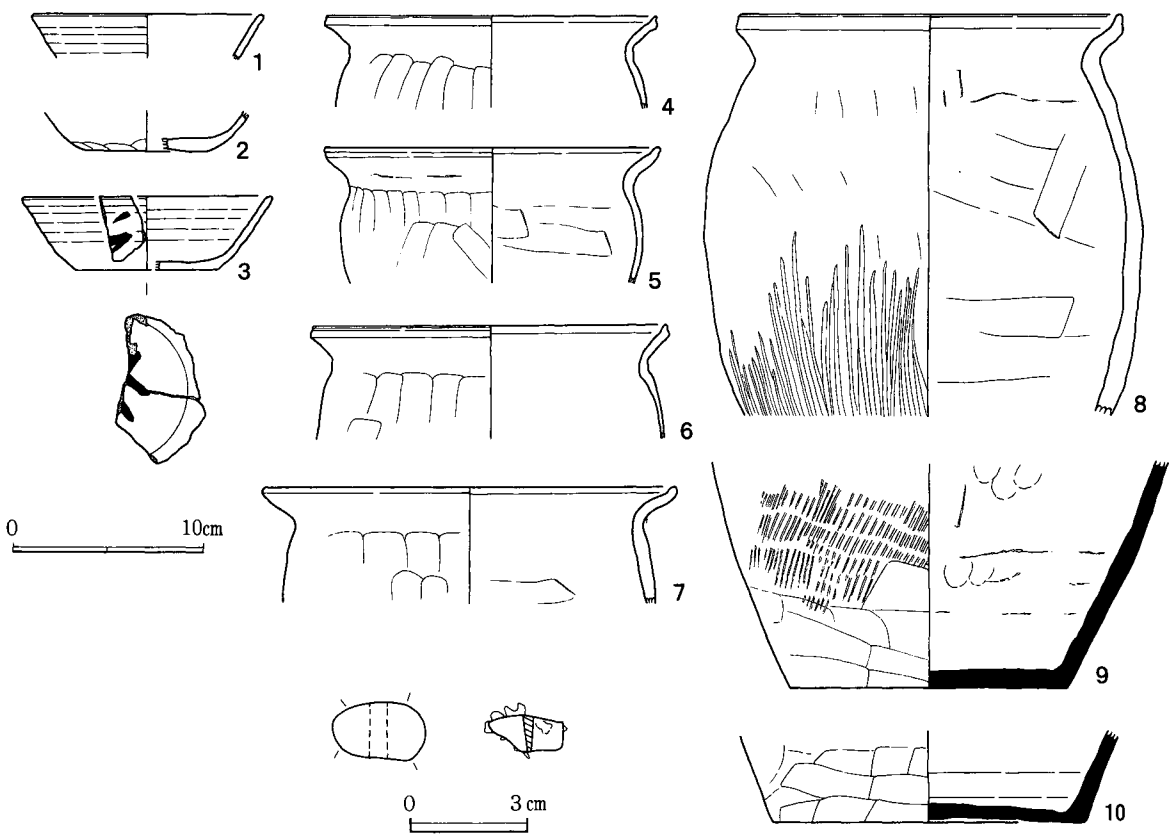
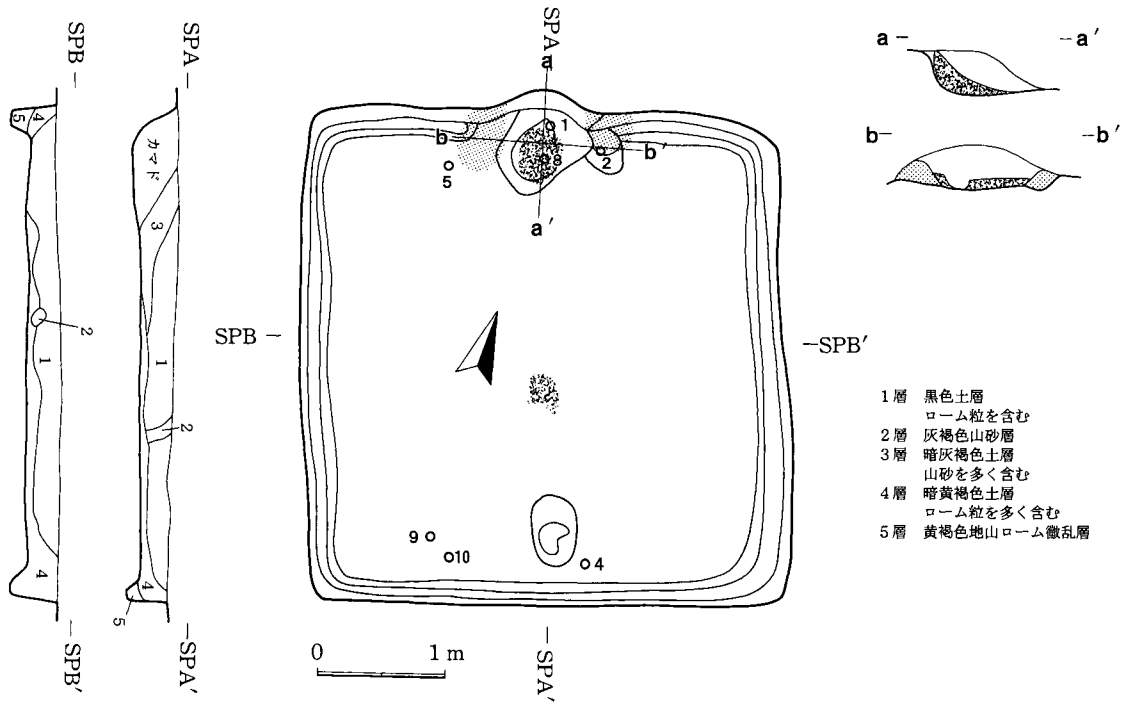


第55図 SI 38 遺構・遺物実測図

ている。3・4は甕である。3は須恵器で、住居跡西寄りの覆土下層から出土した。口径33.0cm、現高5.2cmで、青灰色を呈し、胎土に長石を含む。口縁側縁にタガ状の突帯を巡らせ、口縁頂には外反する口唇部を成形している。外面には突帯直下から平行タタキ目文が施される。4は常総型の甕で、竈内から出土した。現高7.8cm、底径9.0cmで、暗褐色を呈し、胎土には雲母・長石・石英を含む。胴部外面は縦方向の細かいヘラミガキで、底部外面には木葉圧痕が残っている。

SI 39 (第56図、図版18、図版35、図版37)

遺構 C11区の南東部に所在し、SI 38の北東に位置する。短辺3.5m、長辺3.8m、幅3.7mの横転台形プランを呈する。各コーナーは角張っており、北東壁の南部は外へ張り出している。竈は北西壁中央に設置されている。北西壁の竈・北コーナー間は外へ張り出している。周溝は全周している。柱穴は存在しない。竈対向壁際中央にはしご穴が検出された。住居跡中央の床面には焼けて赤変した箇所があった。竈・はしご穴間の床面中央部は硬くしまっている。竈の遺存状態は不良で、覆土断面に観察されるように、竈材の山砂が床面中央付近にまで大きく流れ出していた。両袖は付け根付近の基部が残存していた。燃焼部には壁面まで船型ピットが掘り込まれ、煙道部は短い。



第56図 SI 39 遺構・遺物実測図

遺物 1～3は杯である。1は竈内から出土した。口径11.8cm、現高2.2cmで、赤褐色を呈する。体部は直線的で、外面はロクロ目を残すが、内面はロクロナデで消されている。2は竈内から出土した。現高2.1cm、底径6.2cmで、赤褐色を呈する。体部下端はヘラケズリされ、底部外面は回転糸切り後、手持ちヘラケズリされている。3は口径12.8cm、器高3.8cm、底径7.4cmで、赤褐色を呈する。底部周縁は手持ちヘラケズリで幅広く面取りされる。体部は直線的に開き、内外面ともロクロ目を残す。体部外面と底部外面には墨書銘が見られるが、破損部にかかり、釈読不能である。

4～10は甕である。4ははしご穴脇の覆土中から出土した。口径17.2cm、現高4.7cmで、赤褐色を呈する。頸部は僅かに立ち上がり、口縁端は肥厚して稜を作り、その頂部には口唇部が成形される。胴部外面は縦方向にヘラケズリされる。5は竈西脇の覆土下層から出土した。口径17.4cm、現高7.0cmで、赤褐色を呈する。口縁部頂には口唇部が成形される。胴部は丸みを帯び、外面は縦方向にヘラケズリされる。6は口径9.2cm、現高5.7cmで、暗褐色を呈する。4と器形・調整ともによく似た土器である。胴部は極めて薄くなっている。7は口径21.4cm、現高6.0cmで、赤褐色を呈する。外反した口縁頂に粘土紐を載せて口唇部を成形する。胴部は最大径が中位近くまで降りた俵形になり、外面はヘラケズリされている。8は常総型の甕で、竈内から出土した。口径19.6cm、現高20.7cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。口縁は屈折して直立する。胴部は最大径が上位にくる腰高の器形で、外面はヘラナデ後、ヘラミガキされる。9・10は須恵器である。9は南東壁際の覆土中から出土した。現高11.5cm、底径14.6cmで、胎土に雲母・長石を含む。黄褐色を呈する生焼け製品である。胴部外面は平行タタキ目が施され、下位にはヘラケズリが見られる。10は南東壁際の覆土中から出土した。現高4.7cm、底径16.2cmで、暗灰色を呈し、胎土に長石を含む。上げ底になり、胴部外面はヘラケズリされている。

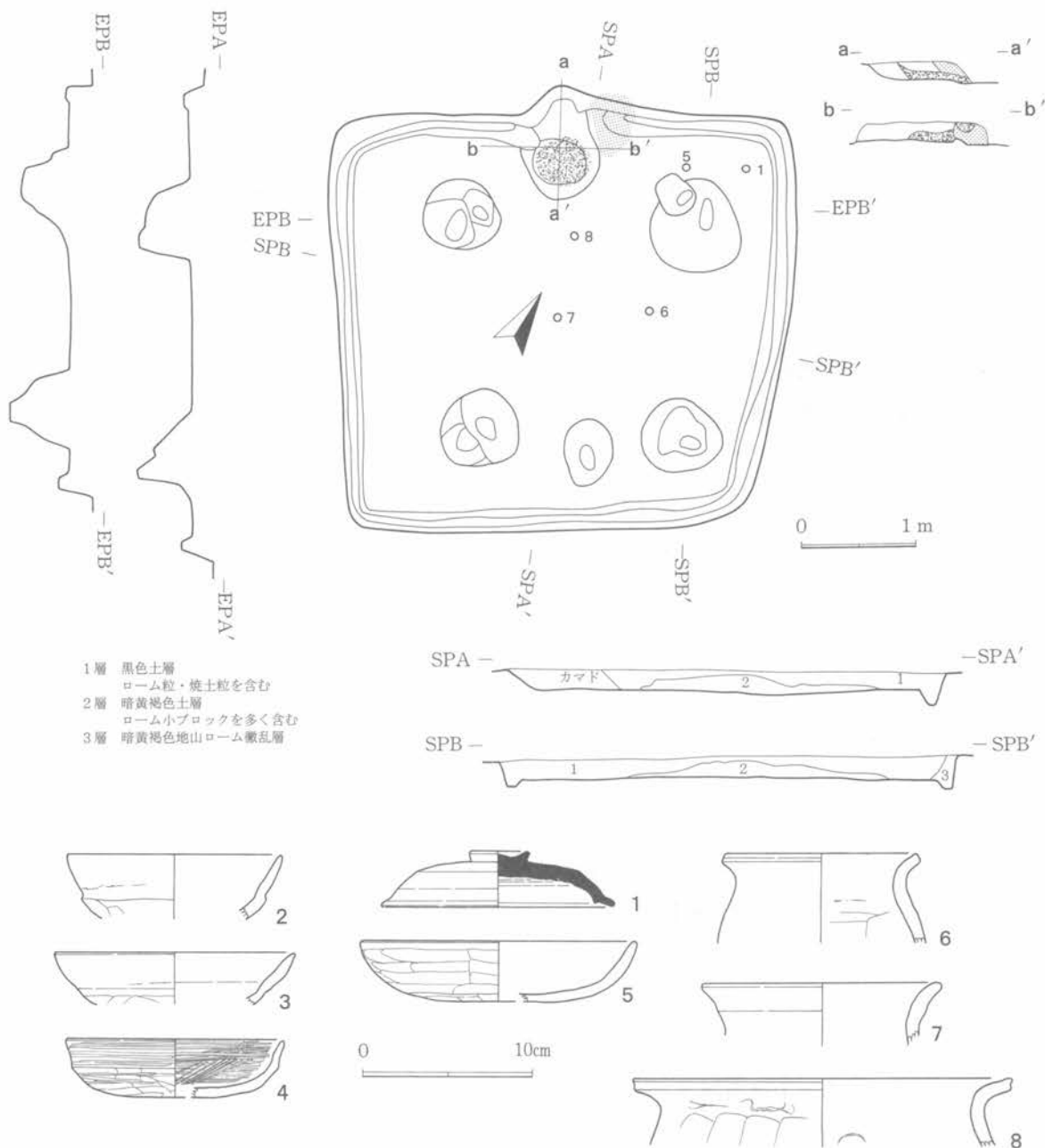
11は土玉で、赤褐色を呈し、7.8gを量る。不整な偏球形で、中央に1孔貫通している。孔の周囲は両面とも面取りされている。

12は鉄製品で、1.3gを量る。刀子もしくは片刃鉄鏃の破片で、1側は刃部になっている。

SI 40 (第57図、図版18、図版35)

遺構 C11区の中央付近に所在し、SI 39の北西に位置する。上辺4.1m、下辺3.5m、幅3.6mの極端な逆台形プランを呈する。南北両コーナーは角張っているが、東西両コーナーは丸みを持っている。また、北東壁は外側に張り出しているが、南西壁は内側へせり出し気味である。竈は北西壁中央に設置されている。北西壁の竈西脇は内側にせり出し、そこから西コーナーまでは外側へ張り出している波状壁の形状を呈する。周溝は全周している。柱穴は4か所検出された。口径は比較的大きく、各柱穴は建て替えの痕跡がある。竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。柱穴の内側の床面は硬くしまっている。竈の遺存状態は不良で、右袖は既に消失し、左袖も付け根付近が残存しているに過ぎない。燃焼部には船型ピットと煙道部が一体的に掘り込まれている。煙道部の張り出しは未発達である。

遺物 1～5は杯類である。1は須恵器杯蓋で、北コーナーの覆土中から出土した。口径12.5cm、器高3.3cmで、明灰色を呈する。天井部のツマミは扁平な王冠形で、体部端で口唇部がさらに外方へ延びている。内面には痕跡程度のカエリが付される。天井部は口径の3分の2程にわたる回転ヘラケズリされている。2は口径12.4cm、現高3.7cmで、赤褐色を呈する。体部端の内側から長い口縁が内湾気味に開いている。体部端の外側は、顕著な稜となって装飾的に残される。底体部外面はヘラケズリされている。3は口



第57図 SI 40 遺構・遺物実測図

径13.8cm、現高3.0cmで、赤褐色を呈する。厚みのある口縁は内湾気味に大きく開く。体部外面はヘラケズリされている。4は口径12.4cm、器高3.2cmで、明褐色を呈する。底体部と口縁の境は稜となって強調され、口縁は高く、外反は弱い。口縁外面は細い工具でヘラミガキされ、底体部外面はヘラケズリ後に、粗くヘラミガキされる。内面は全面的にヘラミガキされている。5は北柱穴脇の覆土中から出土した。口径15.8cm、器高3.5cmで、赤褐色を呈する。皿形の器形で、外面はヘラケズリされる。

6～8は甕である。6は北東部柱穴間の覆土下層から出土した。口径11.0cm、現高5.1cmで、赤褐色を呈する。外反する口縁の側縁に細沈線が巡っている。胴部外面はヘラナデされている。7は住居跡中央の覆土中から出土した。口径13.8cm、現高3.6cmで、赤褐色を呈する。口縁の外反は弱く、端部は単純に丸みを帯びる。口縁の下位が肥厚し、かすかな稜線を形成しているが、意図的なものかどうか分からない。

8は常総型の甕で、竈手前の床面直上から出土した。大きく外反する口縁頂に小さな口唇部を成形している。胴部外面はヘラナデされる。

SI 41 (第58図、図版19)

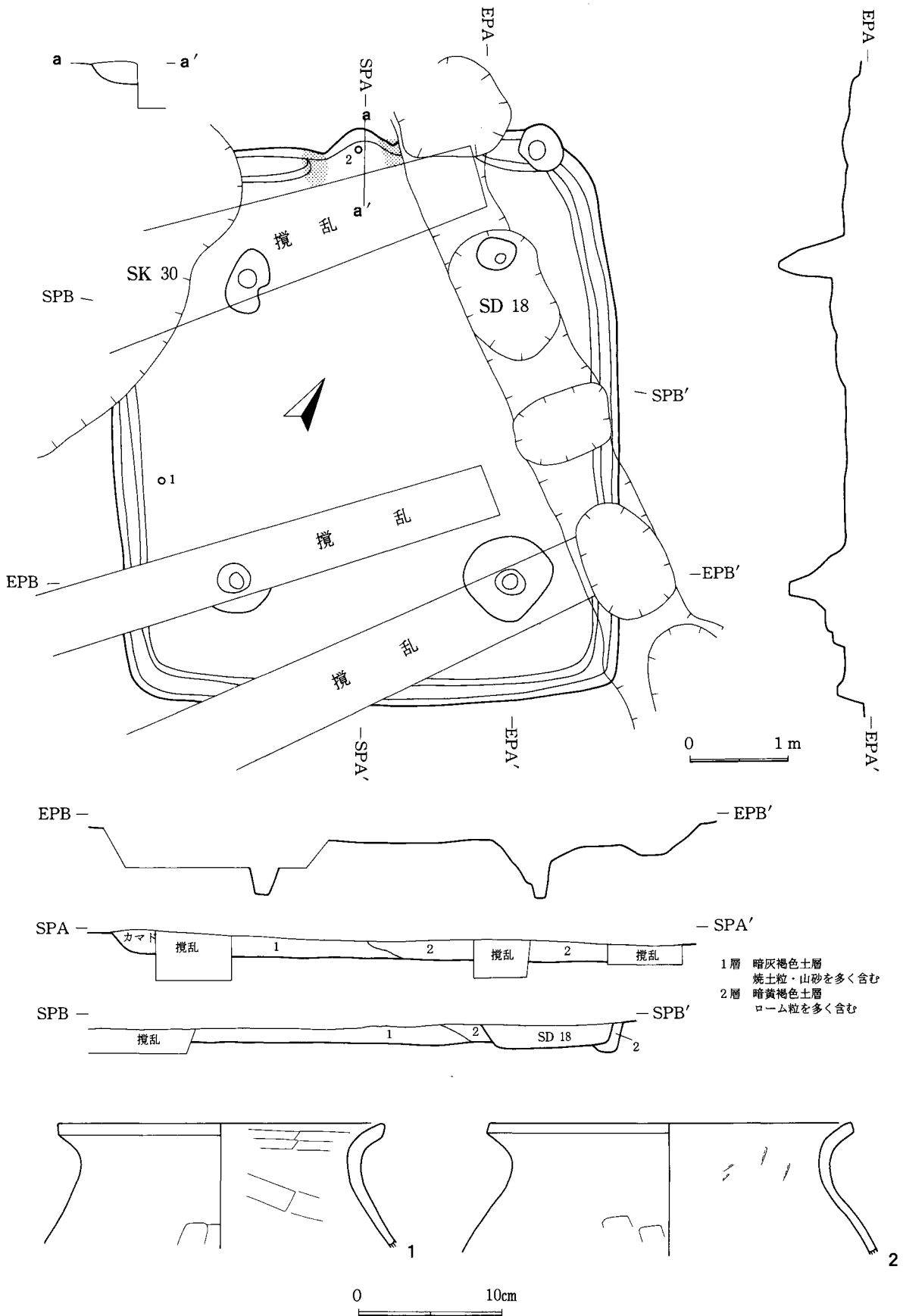
遺構 C11区の北東部に所在し、SI 40の北東に位置する。遺存状態が不良な住居跡である。西コーナーはSK 30に、竈から東コーナーにかけてはSD 18に、そのほか新しい芋穴によって、随所に攪乱を被っている。5.0m×5.5mの長方形に近いプランを示す住居跡である。東コーナーは角張っているが、南北両コーナーは丸みを帯びている。北東壁・南東壁は外側へ張り出し気味である。竈は北西壁中央に設置されている。周溝は確認された範囲では全周している。柱穴は各コーナー寄りに4か所検出された。中央付近の床面は硬くしまっている。竈は攪乱溝によって主要部が破壊されている。両袖は付け根付近のみ残存し、燃焼部はまったく破壊されている。煙道部は小規模である。

遺物 1・2はともに常総型の甕で、胎土に雲母・長石が含まれている。1は南西壁際の床面直上から出土した。口径24.8cm、現高8.5cmで、明褐色を呈する。口縁端は側縁を横ナデで調整され、稜を生じている。胴部外面はヘラナデされている。2は竈内から出土した。口径22.3cm、現高8.4cmで、赤褐色を呈する。1と器形・調整が類似している。胴部は1に比べてなで肩になる。

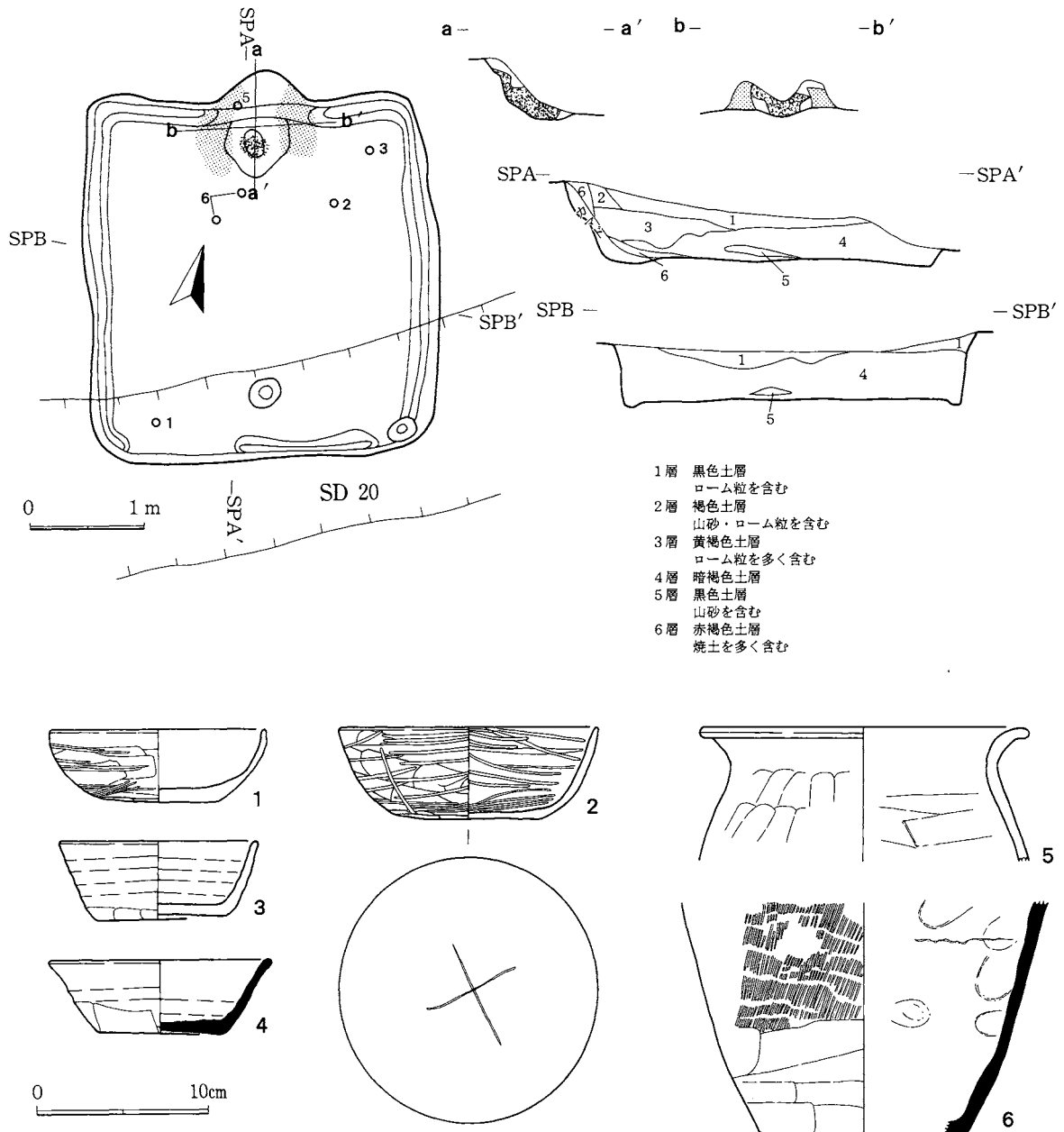
SI 42 (第59図、図版19、図版35)

遺構 A14区の北西部、調査区中の最南端に位置する住居跡である。南側はSD 20によって攪乱を受けている。2.9m×3.0mの歪んだ長方形プランを呈する。竈は北壁中央に位置する。東壁は外側へ張り出し、竈のある北壁は内側へせり出している。各壁線は出入りが多く、非直線的である。周溝はSD 20の下位にある南側ではっきりしない。柱穴は検出されなかったが、竈対向壁際中央にはしご穴が存在する。このほか、南東コーナーから小ピットが検出された。中央部付近の床面は硬くしまっていた。竈の遺存状態はやや不良で、両袖の基部付近が残存していた。燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られ、煙道部の張り出し方は普通である。

遺物 1～4は杯である。1は南西コーナー近くの覆土下層から出土した。口径12.4cm、器高4.1cm、底径7.1cmで、明褐色を呈する。厚みのある底部から、体部は内湾しながら立ち上がり、外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキされる。内面は横ナデされている。底部外面は多方向のヘラケズリで調整される。2は北東寄りの床面付近から出土した。口径14.8cm、器高5.2cm、底径8.5cmで、赤褐色を呈する。1と器形がよく似た土器だが、底部はかなり薄い。体部は内湾しながら立ち上がり、外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキされ、内面は同様のヘラミガキが施されている。底部外面は多方向のヘラケズリがなされ、中央に「×」の線刻が見られる。3は北東コーナーの床面直上から出土した。口径11.2cm、器高4.5cm、底径7.5cmで、暗褐色を呈する。上げ底の底部から、体部は余り開かず、内湾気味に立ち上がっている。体部は内外面ともロクロ目が残され、下端はヘラケズリされている。底部外面は回転糸切り後、周囲を手持ちヘラケズリで調整する。4は須恵器で、口径12.6cm、器高4.3cm、底径7.1cmで、青灰色を呈し、胎土には長石・石英が含まれる。底部は僅かに上げ底になる。体部は直線的に開き、口縁で外反する。体部調整は外面はロクロ目が残り、下端はヘラケズリされている。内面はロクロナデによってロクロ目が消されている。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリされている。



第58図 SI 41 遺構・遺物実測図

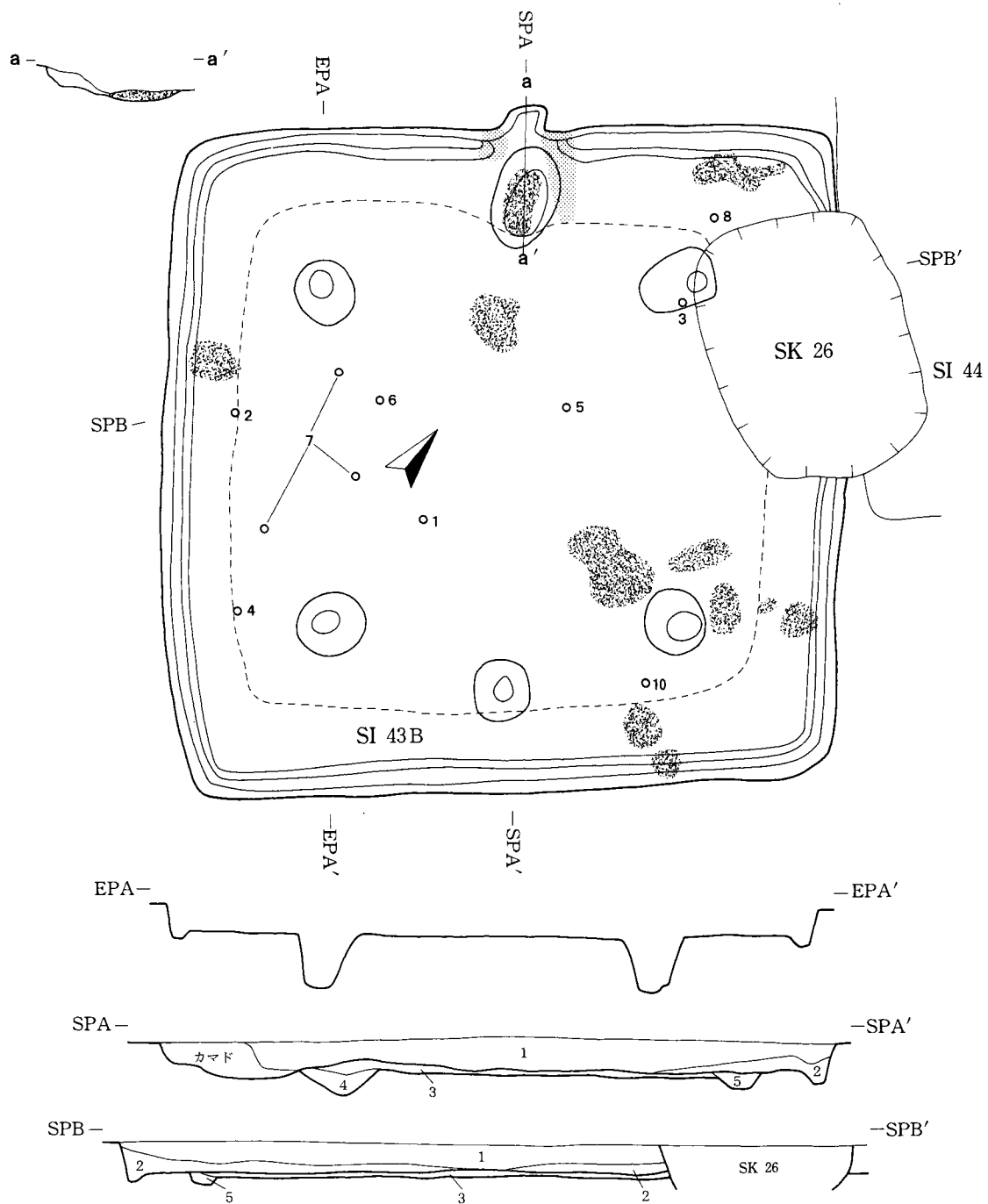


第59図 SI 42 遺構・遺物実測図

5・6は甕である。5は竈内から出土した。口径18.6cm、現高7.6cmで、赤褐色を呈する。口縁は外反して水平になり、端部は単純に丸みを帯びる。胴部は余り肩が張らない。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。6は須恵器で、竈手前の覆土中から出土した。現高13.1cm、底径12.0cmで、茶褐色を帯び、胎土に雲母が含まれる。胴部外面は平行タタキ目を施してから、下端が横方向にヘラケズリされている。

SI 43A (第60図、図版19、図版35、図版36)

遺構 D10区の南西端付近に所在し、南群の北端に近く、SI 44の南に接している。北東壁の一部がSK 26に攪乱されている。短辺5.5m、長辺5.9m、幅5.9mの横長横転台形または横長逆台形プランを有し、SI 44に次ぐ大型竪穴住居跡である。北東壁の一部がSK 26によって攪乱されている。各コーナーは比較



0 1 m

- 1層 茶褐色土層
焼土粒・ローム粒を含む
- 2層 暗褐色土層
焼土粒・炭化粒を多く含む
- 3層 暗黄褐色土層
ロームブロックを多く含む
- 4層 灰褐色土層
山砂・焼土粒を多く含む
- 5層 黒色土層
ローム粒を含む

第60図 SI 43A 遺構実測図

的角張っているが、東コーナーのみは幾分突出する形で丸みを持っている。南西壁は外側へ張り出している。竈は北西壁中央に設置されている。周溝は全周している。北西壁の北部では幅が広がっている。周溝に規制される床面プランは、南西壁付近で両側へ広がっている。柱穴は東西南北から4か所検出された。また、竈対向壁際中央にははしご穴が存在する。柱穴の内側の床面は硬くしまっている。住居跡の覆土下層は焼土・炭化粒を多く含み、床面には焼土塊が各所に散乱していた。竈の遺存状態は不良である。右袖は付け根付近しか残っていなかった。燃焼部には長大な船型ピットが壁面に接して掘られている。煙道部の張り出しは小さい。

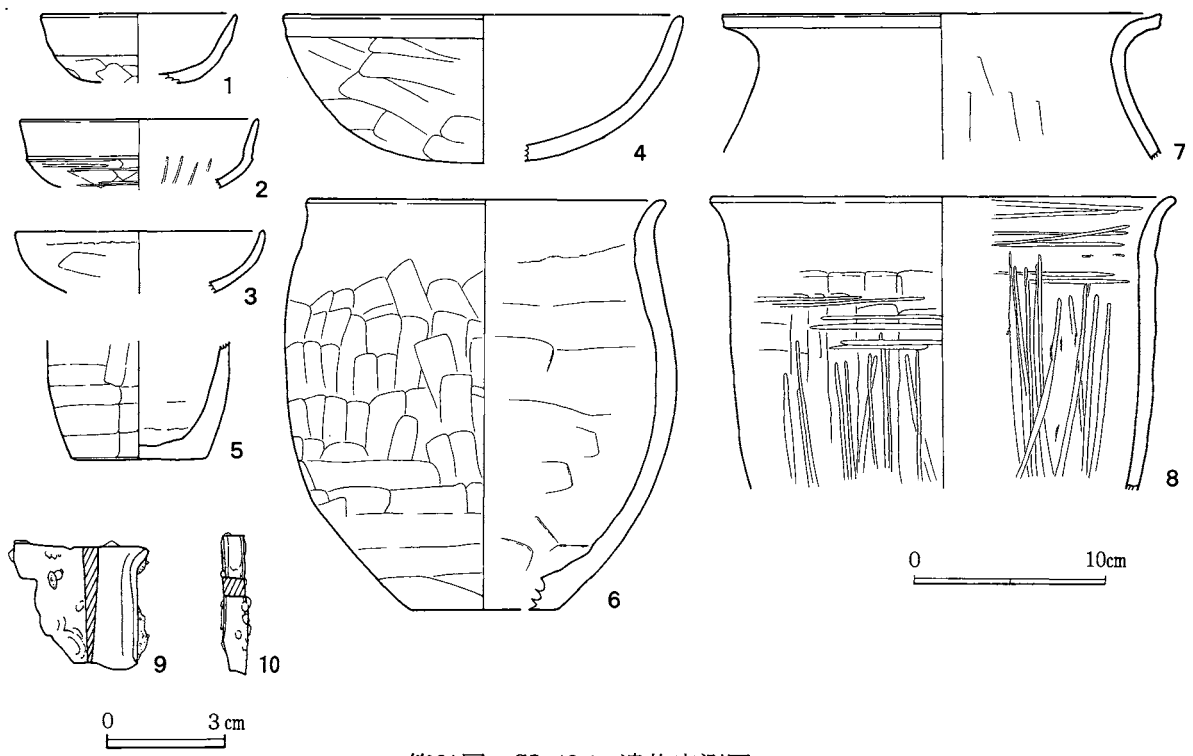
遺物 1～4は杯類である。1は住居跡中央の覆土中から出土した。口径10.2cm、現高3.5cmで、赤褐色を呈する。底体部と口縁の境が僅かにくびれ、口縁は直線的に開いている。底体部外面はヘラケズリされる。2は南西壁付近の覆土下層から出土した。口径12.2cm、現高3.7cmで、明褐色を呈する。底体部と口縁の境は稜線をなして、高い口縁は緩く外反して立ち上がる。底体部外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。3は北柱穴上の床面付近から出土した。口径12.8cm、現高3.1cmで、赤褐色を呈する。体部から口縁にかけて内湾している。外面はヘラケズリの後、ナデが加えられる。4は大型杯で、南西壁付近の床面付近から出土した。口径20.6cm、現高7.7cmで、赤褐色を呈する。底部から口縁にかけて単純に内湾している。口縁には強い横ナデが加えられ、端部は丸みを帯びる。底体部外面はヘラケズリされている。内外面ともに器面が荒れている。

5～7は甕である。5は住居跡中央の床面中央から出土した。現高6.1cm、底径7.0cmで、赤褐色を呈する。残存部分で胴部最大径に接近していると思われ、小型品となろう。胴部外面は横方向にヘラケズリされる。6は住居跡中央付近の覆土下層から出土した。口径18.6cm、器高21.2cm、底径7.6cmで、赤褐色を呈する。最大径は胴部中位にあり、なで肩で、短い口縁が外反している。胴部外面は上位から中位は縦方向に、下位は横方向にヘラケズリされる。7は常総型の甕で、南西柱穴間の覆土中から、散乱した状態で出土した。口径22.8cm、現高7.6cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。外反する口縁の下側に、断面三角形の粘土紐を補填して稜を形成し、口縁端を横ナデして口唇部を作り出している。胴部はなで肩になる。胴部外面はヘラナデされている。8は甕または甑で、北柱穴脇の覆土下層から出土した。口径24.0cm、現高15.0cmで、赤褐色を呈する。胴部最大径が頸部直下にくる長胴形で、胴部外面はヘラケズリ後、細い工具によるミガキに近いヘラナデが入る。内面は口縁が横方向、胴部が縦方向にヘラナデされている。

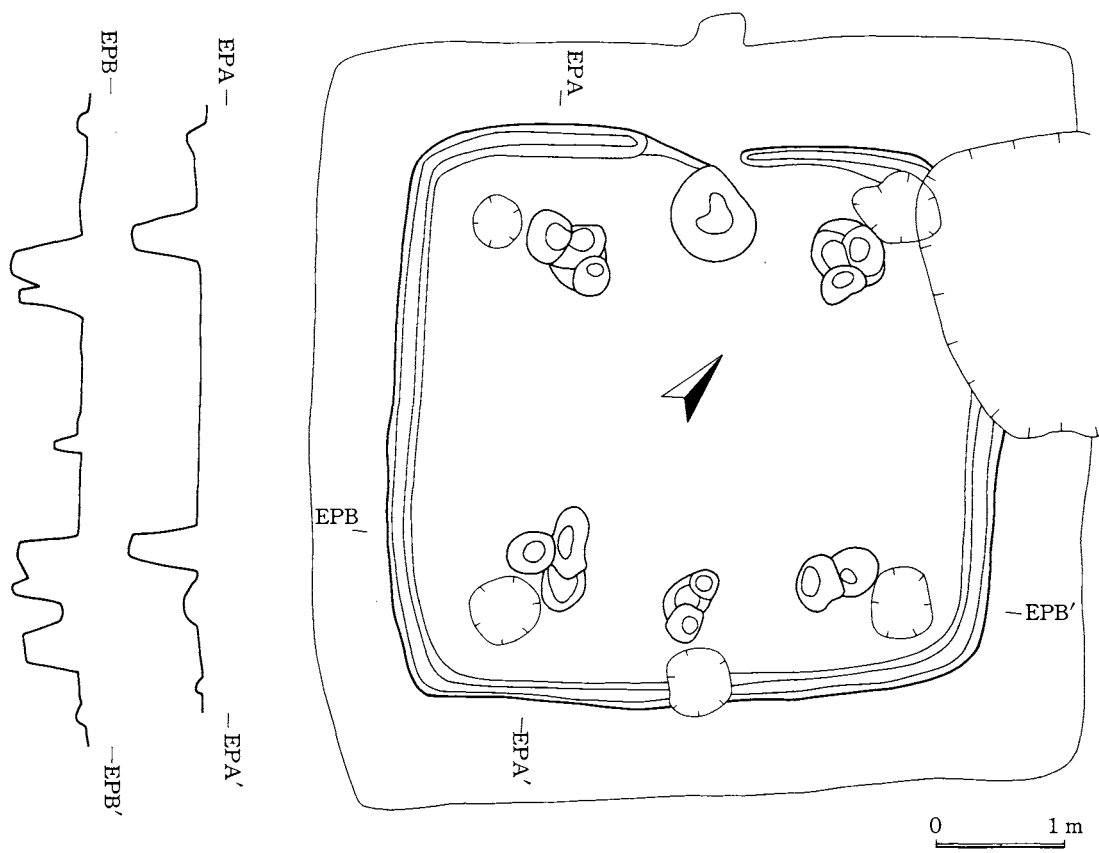
9・10は鉄製品である。9は鎌で、長さ3.7cm、幅3.2cmで、12.4gを量る。刃部の付け根から装着部にかけての破片である。10は鉄鏃もしくは釘で、東柱穴脇の床面付近から出土した。断面は正方形に近い。

SI 43B (第62図、図版19)

遺構 SI 43Aの調査終了後、床面構成土を排除したところ、拡張以前の住居跡が現れた。北東壁の北側はSK 26に攪乱されている。短辺3.9m、長辺4.3m、幅4.8mの横転台形プランを示す。南コーナーは角張っているが、東西両コーナーは丸みを帯びている。また、北東壁は内側へせり出し気味である。竈は北西壁中央に設置されていた。周溝は全周する。周溝によって規制される床面プランは、南西辺付近で両側に膨らんでいる。各コーナー付近には4か所の柱穴が確認され、竈対向壁際中央にははしご穴が検出された。柱穴とはしご穴には、いずれも建て替えの痕跡がある。床面は周溝手前に至るまで、広範囲に硬化し



第61図 SI 43A 遺物実測図



第62図 SI 43B 遺構実測図

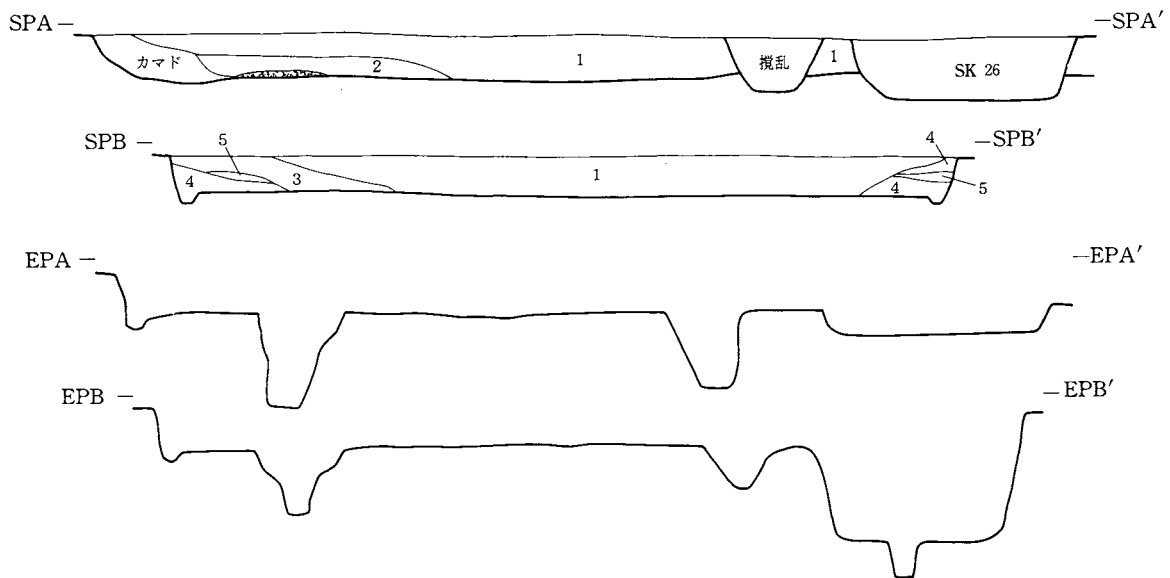
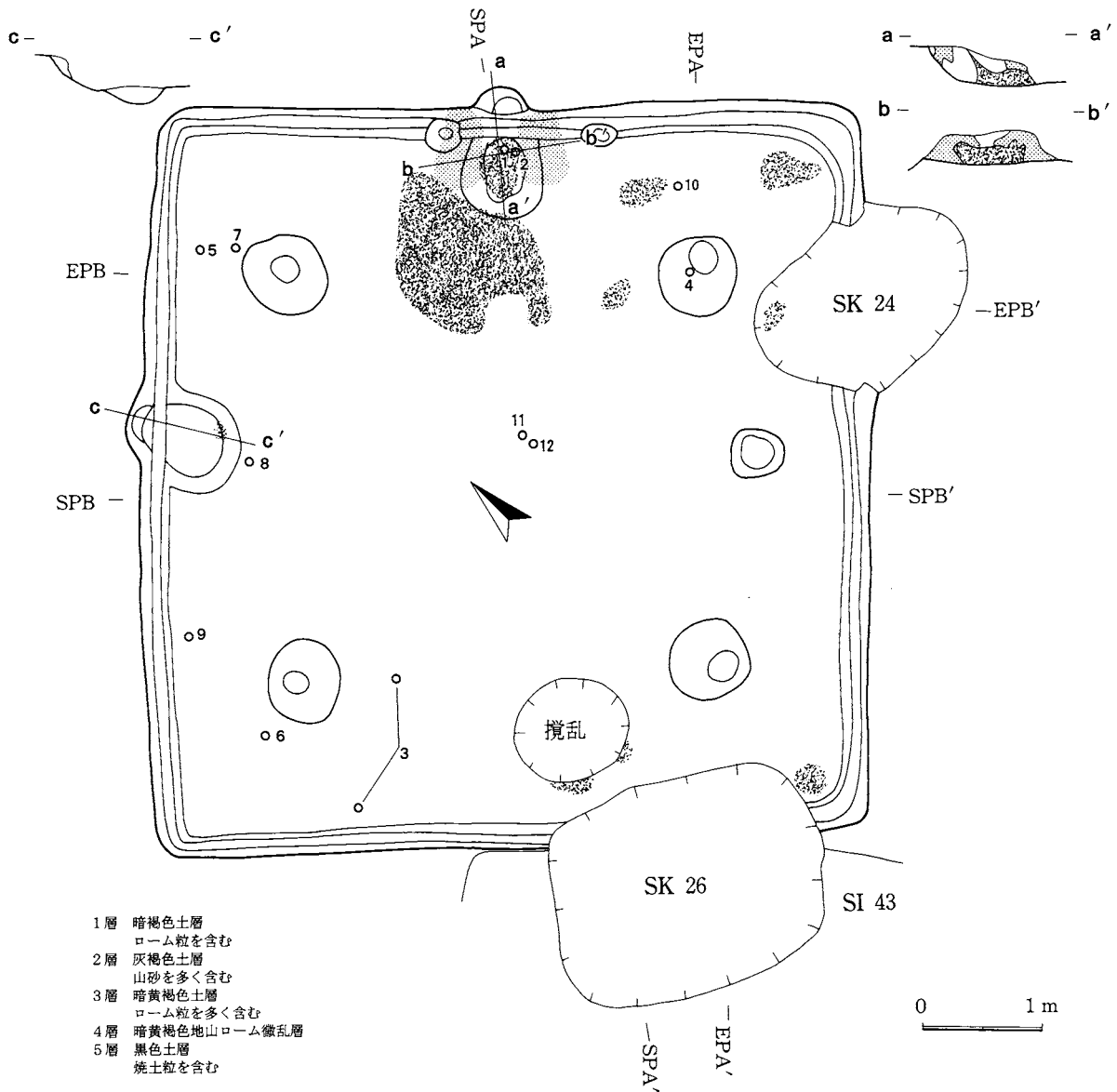
ていた。竈の上部構造は既に存在しない。燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られている。坑底には僅かに焼けて赤変した部分が残存している。煙道部は確認されなかった。遺物は検出されなかった。竈の状況と柱穴のあり方を考え合わせると、この住居跡は短期間の間に建て替えられ、さらにその後、SI 43 Aとして拡張されたことが窺える。

SI 44 (第63図、第64図、図版20、図版36、図版37)

遺構 D10区の南西部に所在し、南群中の最北端に位置する。1辺6.0mの正方形プランを有する調査区中最大規模の住居跡である。SK 24が南東壁を、SK 26が南西壁をそれぞれ攪乱している。各コーナーは比較的角張っている。竈はほかの住居跡とは異なり、北東壁中央に設置されている。北東壁は竈を中心に、内側へせり出し気味である。周溝は全周している。周溝によって規制される床面プランは、東コーナーで丸くなり、西コーナーでは逆に鋭角的に突出している。柱穴は各コーナー寄りに4か所検出された。はしご穴は存在しない。柱穴の内側では床面は硬くしまっている。竈の遺存状態はやや不良で、竈手前を中心に、床面上に山砂や焼土塊が散布していた。燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られていた。煙道部の張り出しは小さい。両袖下には心棒ピットが存在する。

なお、精査中に旧竈と旧はしご穴が発見されている。旧竈は北西壁中央に設置されていた。壁を中心に、煙道部と燃焼部ピットが一体的に作られている。ピット底には僅かに焼けて赤変した部分が残存していた。旧はしご穴は旧竈に対向する南東壁際中央から検出された。

遺物 出土土器はすべて杯である。1は竈内から出土した。口径13.8cm、現高3.4cmで、赤褐色を呈する。底体部と口縁の境は肥厚して顕著な稜線を形成する。口縁は外反して開いている。外面調整は口縁は細い工具でヘラミガキされ、底体部はヘラケズリ後に、粗くヘラミガキされている。内面は口縁から底部に至るまで、緻密にヘラミガキされている。2は竈内から出土した。口径13.2cm、現高3.0cmで、赤褐色を呈する。底体部上端の内側に口縁部を継ぎ足して器形を成形している。接続部分には段を生じている。口縁端は丸みを帯びる。外面調整は口縁部は細い工具によるヘラミガキ、底体部はヘラケズリで、内面は口縁から底部まで、緻密にヘラミガキされている。3は西コーナー付近の覆土下層から出土した。口径14.2cm、器高4.2cmで、明褐色を呈する厚みのある土器で、口縁は強い横ナデによって外反している。外面は細い工具によるヘラミガキ、底体部はヘラケズリ、内面は口縁から底部まで、緻密にヘラミガキされている。4は東柱穴内から出土した。口径11.8cm、器高3.7cmで、明褐色を呈する。底部に厚みを持つ土器で、底体部上端で屈折して、口縁として直立し、口縁端は外反している。外面は口縁は細い工具でヘラミガキされ、底体部はヘラケズリ後、粗くヘラミガキされている。内面は口縁から底部まで、緻密にヘラミガキされている。5は北柱穴脇の覆土中から出土した。口径12.0cm、現高2.9cmで、暗褐色を呈する。底体部の上端から口縁が直立している。口縁の付け根は僅かにへこんで、底体部上端が稜となって強調されている。外面調整は、口縁は細い工具でヘラミガキされ、底体部はヘラケズリ後、粗くヘラミガキされている。内面は口縁から残存部下端まで、緻密にヘラミガキされている。6は西柱穴脇の覆土中から出土した。口径12.8cm、現高3.3cmで、赤褐色を呈する。大きく開いた体部は、口縁で強く横ナデされ、厚みを減じている。器面が荒れているので、調整の細部は不明である。7は北柱穴脇の覆土中から出土した。口径13.0cm、器高4.3cmで、外面は赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。深めの底体部上端で屈折して、短い口縁は内傾する。外面調整は、口縁部は細い工具によるヘラミガキ、底体部はヘラケズリ後、粗くヘラミガ



第63図 SI 44 遺構実測図

キされる。内面は口縁から底部まで、緻密にヘラミガキされている。8は旧竈手前の覆土下層から出土した。口径11.8cm、器高3.6cmで、暗褐色を呈する。底体部上端の内側に短い口縁を継ぎ足している。口縁は内側では直立するが、外側では内傾している。外面調整は口縁は細い工具によるヘラミガキ、底体部は器面が荒れているので観察不能、内面は口縁から底部まで、緻密にヘラミガキされている。9は北西壁際の覆土中から出土した。口径12.2cm、現高3.3cmで、暗褐色を呈する。肥厚した底体部の上端に、口縁を継ぎ足している。接合部は稜をなし、口縁端は丸くなる。外面調整は、口縁部は細い工具によるヘラミガキ、底体部はヘラケズリ後、粗くヘラミガキされる。内面は口縁から残存部下端まで、緻密にヘラミガキされている。

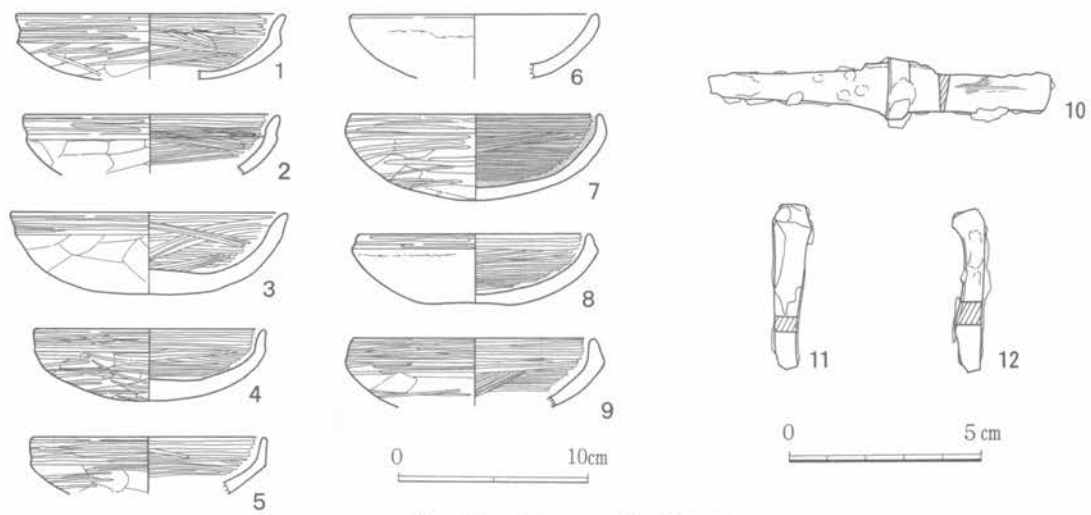
10～12は鉄製品である。10は刀子で、竈・東コーナー間の覆土下層から出土した。長さ9.1cmで、12.6gを量る。切っ先は欠失しているが、茎尻は残されている。関部には柄に伴う責め金具が付着している。茎は刃部側が薄くなっている。関幅に比べ、切っ先寄りの刃幅が小さくなっているのは、研磨を繰り返す、摩耗したためであろう。11・12は釘で、住居跡中央の床面直上から一緒に出土した。11は長さ4.2cmで、5.1gを量る。12は長さ4.6cmで、4.6gを量る。

SI 45 (第65図、図版20、図版36)

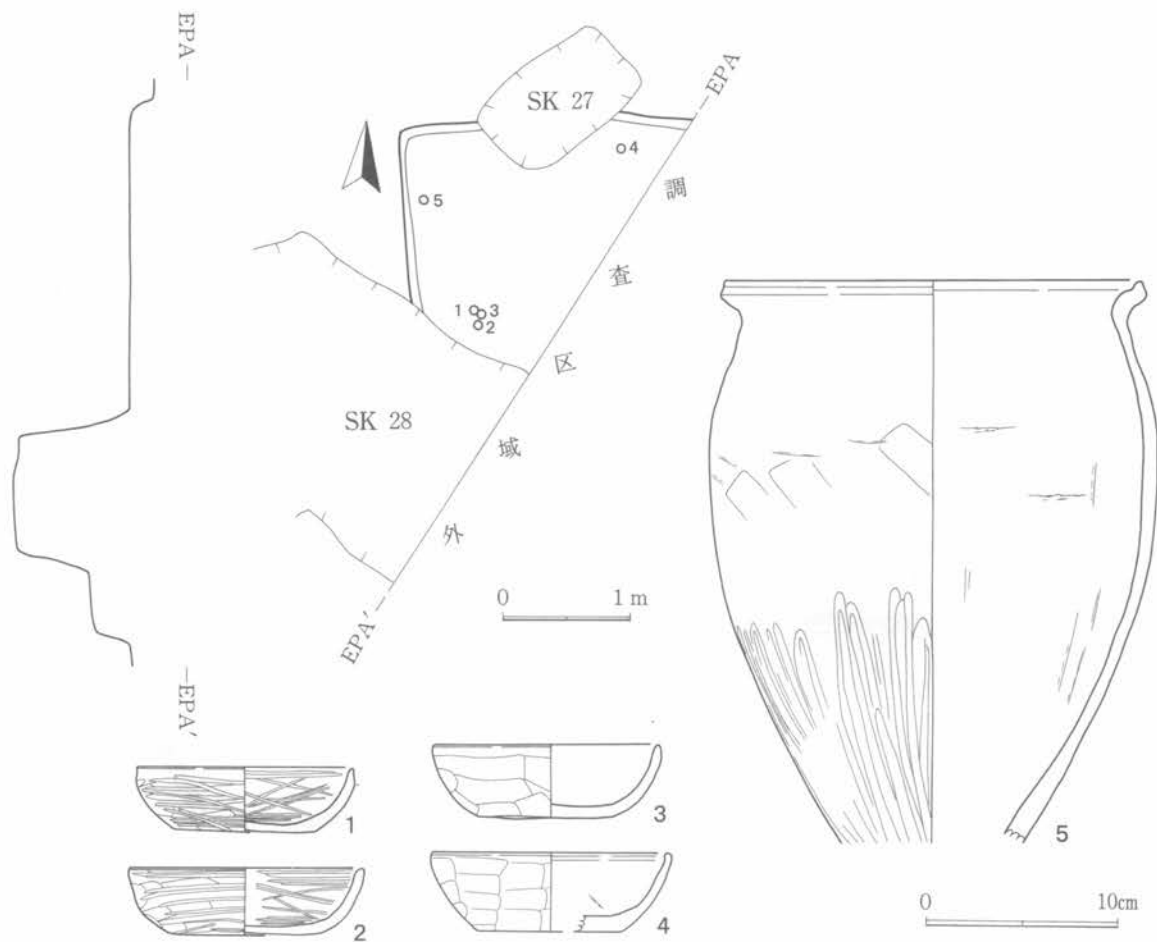
遺構 D10区の南西部に所在し、SI 43Aの東に隣接している。SK 27・SK 28に攪乱され、また、半ば以上が調査区外に出ている。調査ができたのは、北西コーナーの周辺に限られる。規模は不明だが、ほかの一般的な住居跡よりも主軸が北にぶれている。検出された北西コーナーは角張っている。北壁は外側へ張り出し気味である。周溝は確認されなかった。柱穴も発見されていない。北西柱穴が調査区外に潜在するとすれば、この住居跡の規模を相当大きく考えなければならないが、大型住居跡には周溝が伴わないことはまずないので、それはありそうもない。したがって、この住居跡には元々柱穴は掘られていなかったと考えられる。床面は中央に近い部分が硬くしまっていた。

遺物 1～4は杯である。1と2は南側から入れ子状態で、覆土下層から出土した。1は口径13.2cm、器高3.4cm、底径7.2cmで、明褐色を呈する。底部中央で僅かに上げ底になり、底部と体部の境には稜を残している。体部は内湾し、口縁は直立して端部で外反している。体部外面はヘラケズリの後、細い工具で粗くヘラミガキされ、内面は同じく粗くヘラミガキされている。底部外面は多方向にヘラケズリされている。2は1より一回り大きく、口径12.0cm、器高3.5cmで、明褐色を呈する。器形は1と同じであるが、底部と体部の境の稜は、面取りされて消されている。また、口縁端は外反せずに、単純に丸みを帯びる。内外面の調整法は1と同じである。3は1・2と接近した覆土中から出土した。口径11.2cm、器高3.8cmで、暗褐色を呈する。器形は2と同じだが、上げ底にはならない。外面は体部から底部までヘラケズリされている。4は北壁際の覆土下層から出土した。口径12.2cm、器高4.0cm、底径7.6cmで、赤褐色を呈する。底部は厚みがあり、底部と体部の境に明確な稜を残している。体部は少々内湾して開き、口縁端は内傾している。体部及び底部外面はヘラケズリされている。

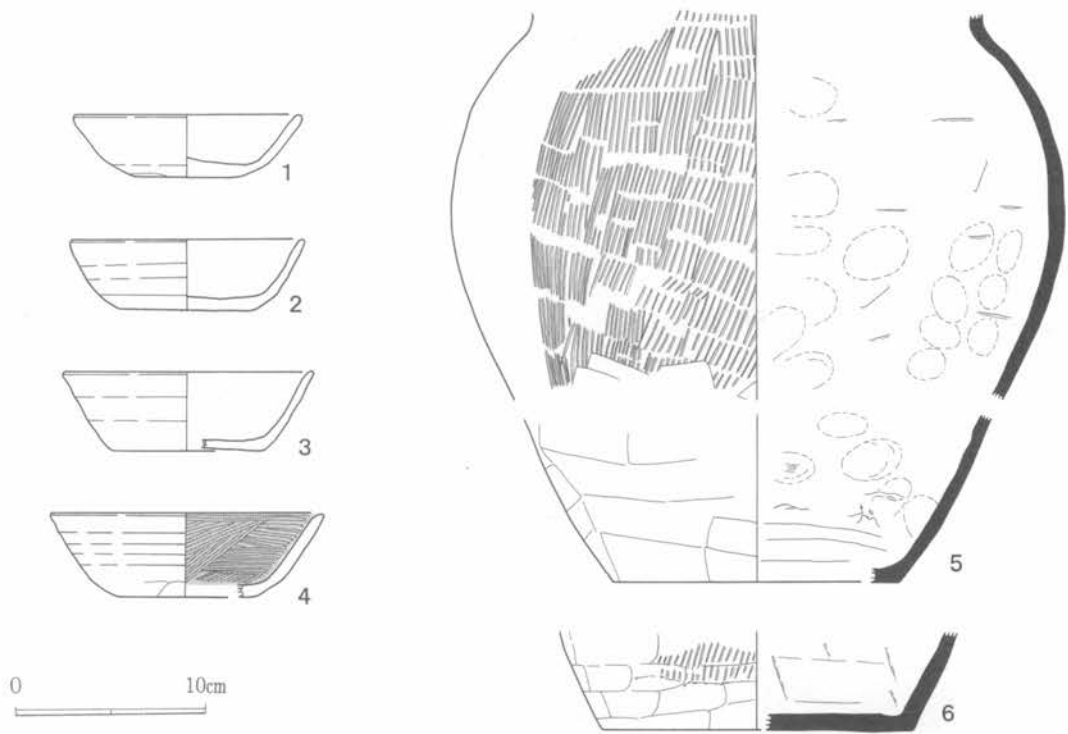
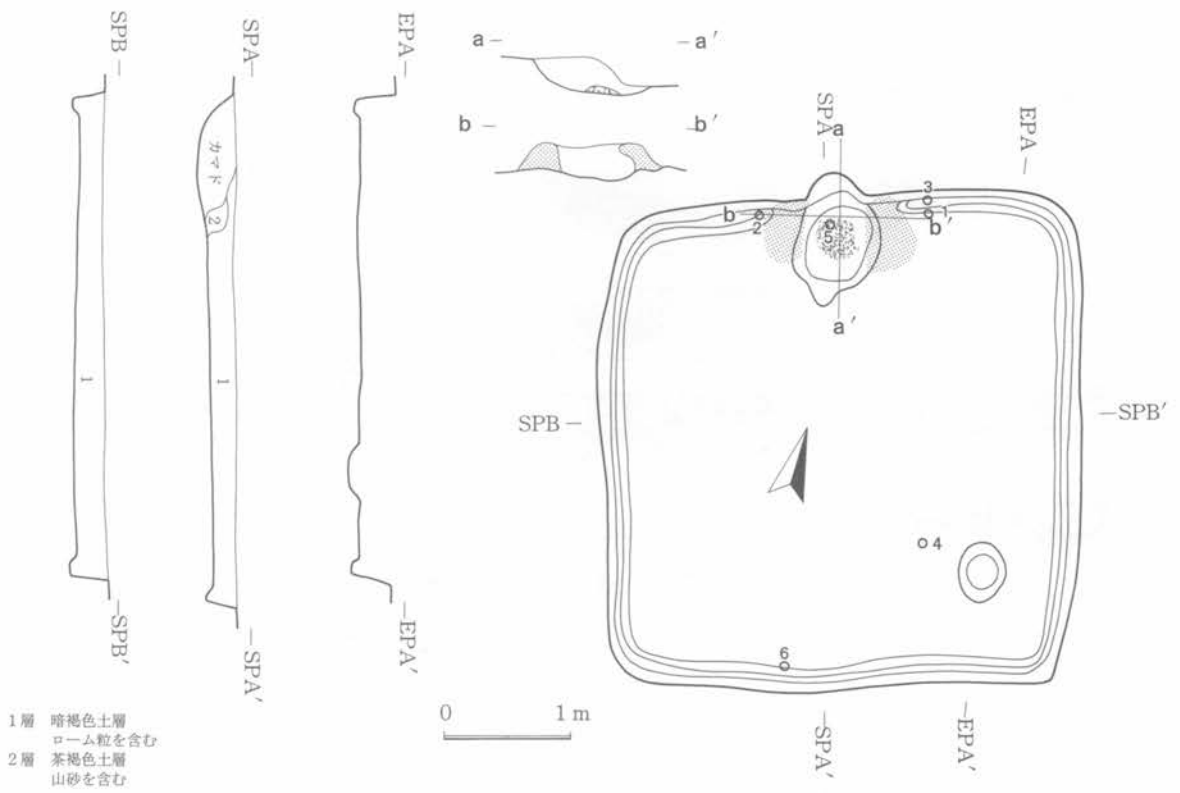
5は常総型の甕で、西壁際の覆土下層から出土した。口径21.6cm、現高30.0cmで、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石・石英を含む。短い口縁は外反して、頂部に直立する口唇部を載せている。このため、口縁外側は沈線が巡るような観を呈する。胴部は上位に最大径がくる腰高の器形になる。胴部は全体にヘラナデされた後、下位に縦方向のヘラミガキがかけられる。



第64図 SI 44 遺物実測図



第65図 SI 45 遺構・遺物実測図



第66図 SI 46 遺構・遺物実測図

SI 46 (第66図、図版21、図版36)

遺構 C11区の北東端に所在し、SI 41の北東に位置する。短辺3.5m、長辺3.8m、幅3.8mの横転台形プランを示す。南東壁は角張っているが、ほかの3コーナーは丸みを帯びている。西壁と南壁の壁線は出入りが多く、非直線的である。竈は北壁中央に設置されている。周溝は幅が狭く、全周している。柱穴・はしご穴は存在しない。南東コーナー付近に円形のピットが検出されたが、床面下10cm強で、柱穴にはならない。床面は竈手前から中央にかけて、硬くしまっていた。竈の遺存状態は普通で、両袖は下半部が残存していた。燃焼部には船型ピットが壁面に接して掘られ、煙道部の張り出しは小さい。

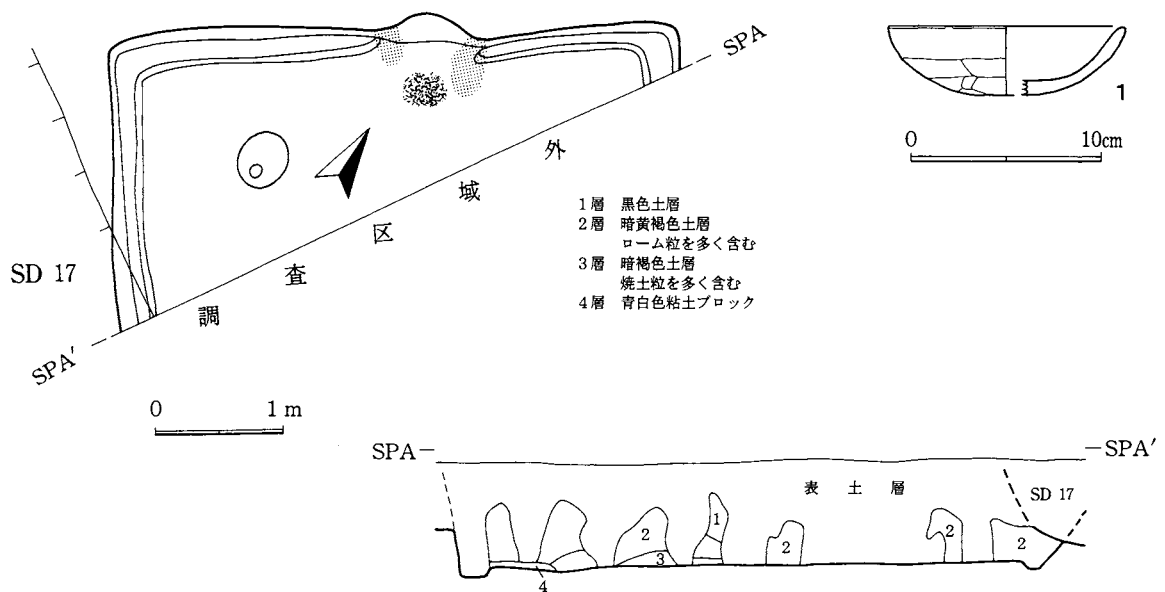
遺物 1～4は杯である。1は竈東脇の床面付近から出土した。口径11.6cm、器高3.2cm、底径5.6cmで、赤褐色を呈する。底部周縁は幅広く面取りされ、体部は直線的に大きく開いている。体部は内外面とも丁寧に横ナデされている。底部外面は手持ちヘラケズリされている。2は竈西脇の床面直上から出土した。口径12.0cm、器高3.6cm、底径6.9cmで、赤褐色を呈する。底部周縁は幅広く面取りされ、体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面はロクロ目が残るが、内面はナデ調整で消されている。底部外面は回転糸切り後、周囲を回転ヘラケズリしている。3は竈東脇の床面付近から出土した。口径12.8cm、器高4.1cm、底径7.8cmで、赤褐色を呈する。やや上げ底となり、底部と体部の境には明確に稜が残る。体部は直線的に立ち上がり、口縁で僅かに外反する。体部外面はロクロ目が残るが、内面はロクロナデで消されている。底部外面は手持ちヘラケズリがかかっている。4は東側ピット脇の床面付近から出土した。口径14.0cm、器高4.3cm、底径7.2cmで、明褐色を呈し、内面は黒色処理されている。底部周縁はヘラケズリで面取りされ、体部は直線的に開いている。体部外面はロクロ目が残るが、内面は緻密なヘラミガキによって調整されている。底部外面は手持ちヘラケズリがかかっている。

5・6は須恵器甕である。5は細頸甕で、竈内から出土した。現高28.2cm、底径15.0cmで、明灰色を呈し、胎土に雲母を含んでいる。胴部最大径は上位にあり、肩の張る器形である。外面は上位から中位に平行タタキ目が施され、下位は横方向にヘラケズリされている。内面には輪積痕と当て具痕が残されている。6は北東壁際の覆土中から出土した。現高5.1cm、底径16.2cmで、暗褐色を呈し、胎土には雲母・長石が含まれる。胴部外面は平行タタキ目の上から横方向にヘラケズリされる。内面はヘラナデ調整である。

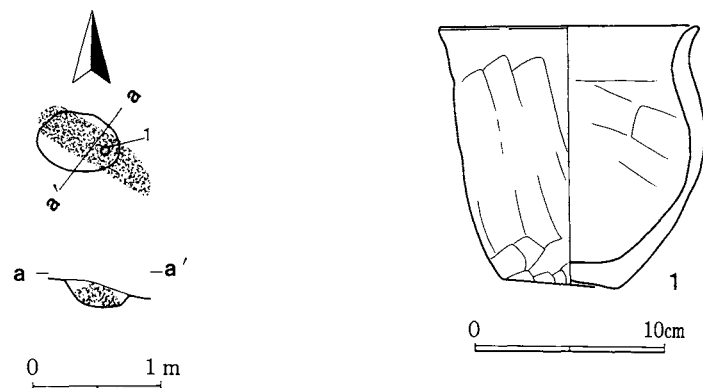
SI 47 (第67図、図版21)

遺構 D11区の北西端付近に所在し、SI 46の南東に位置する。東側の大半が調査区外に出ており、南端はSD 17で切られている。北西壁は4.5m程の規模を有する。竈は北西壁中央に設置されている。検出された北・西コーナーは角張っている。北西壁は竈北脇が内側へせり出して、そこから北コーナーまでは弱く外へ張り出しており、かすかに波状を呈している。また、竈から西コーナーまでは単純に外へ張り出している。周溝は確認された範囲では全周している。柱穴は西側から1か所検出された。床面の状態はトレンチャーによる攪乱が激しく、不明である。竈の遺存状態は不良で、右袖部は付け根付近しか残存していない。燃焼部にはピットは確認されなかったが、床面が焼けて赤変していた。煙道部の張り出しは未発達である。

遺物 1は杯で、口径12.2cm、器高3.6cmで、赤褐色を呈する。体部から口縁にかけて大きく開く器形で、底体部外面はヘラケズリされている。



第67図 SI 47 遺構・遺物実測図



第68図 SI 48 遺構・遺物実測図

SI 48 (第68図、図版36)

遺構 C11区の北東部に所在し、SI 41の北に位置する。竈内の船型ピットの遺構である。遺構確認面はソフトローム上層であったが、元々掘り方の浅い住居跡で、周辺はトレンチャーによる攪乱も激しいために、ほかの施設の情報はわからない。ピットは楕円形で、長径70cm、短径42cm、深さ15cmの規模である。ピット上は焼土・山砂混合土で覆われ、ピット内にも同層が充満していた。

遺物 1はピット内から出土した甕である。口径13.6cm、器高13.2cm、底径6.0cmで、赤褐色を呈する。口縁部の外反は穏やかで、端部は単純に丸くなる。胴部の器形は大きく歪んでいる。最大径の計測点が最上位と中位やや上部の2か所存在する。外面は縦方向のヘラケズリで調整され、下端は横方向になっている。底部は上げ底で、外面に木葉圧痕が観察される。

第4節 掘立柱建物跡と出土遺物

SB 1 (第70図、図版21)

掘立柱建物跡密集域の北端近くに位置し、SB 2と切り合っている。柱配置は2間×3間で、桁行5.1m、梁行3.4mの規模を有する。建物方位はN-57°-Eを示している。柱穴のP 1・P 2・P 3はSB 2と共用しているが、P 1・P 2には建て替えの痕跡が見られる。各柱穴は直径1m前後の略円形で、深さ60cm前後のものが主体を占める。その覆土は上層に焼土や炭化粒を多く包含しているため、火災を被ったことが知られる。SB 2との前後関係は明らかでない。遺物は出土していない。

SB 2 (第70図、図版21)

SB 1と一部の柱穴を共用する建物跡である。柱配置は2間×3間で、桁行4.8m、梁行3.7mの規模を有する。建物方位はN-33°-Eで、SB 1と直交する。各柱穴はプラン・規模においてSB 1と類似するが、深さは若干浅くなる。P 4の底面には柱根が残っていた。覆土上層にはSB 1と同様に、焼土・炭化粒が多く含まれている。遺物は出土していない。

SB 3 (第71図、図版36)

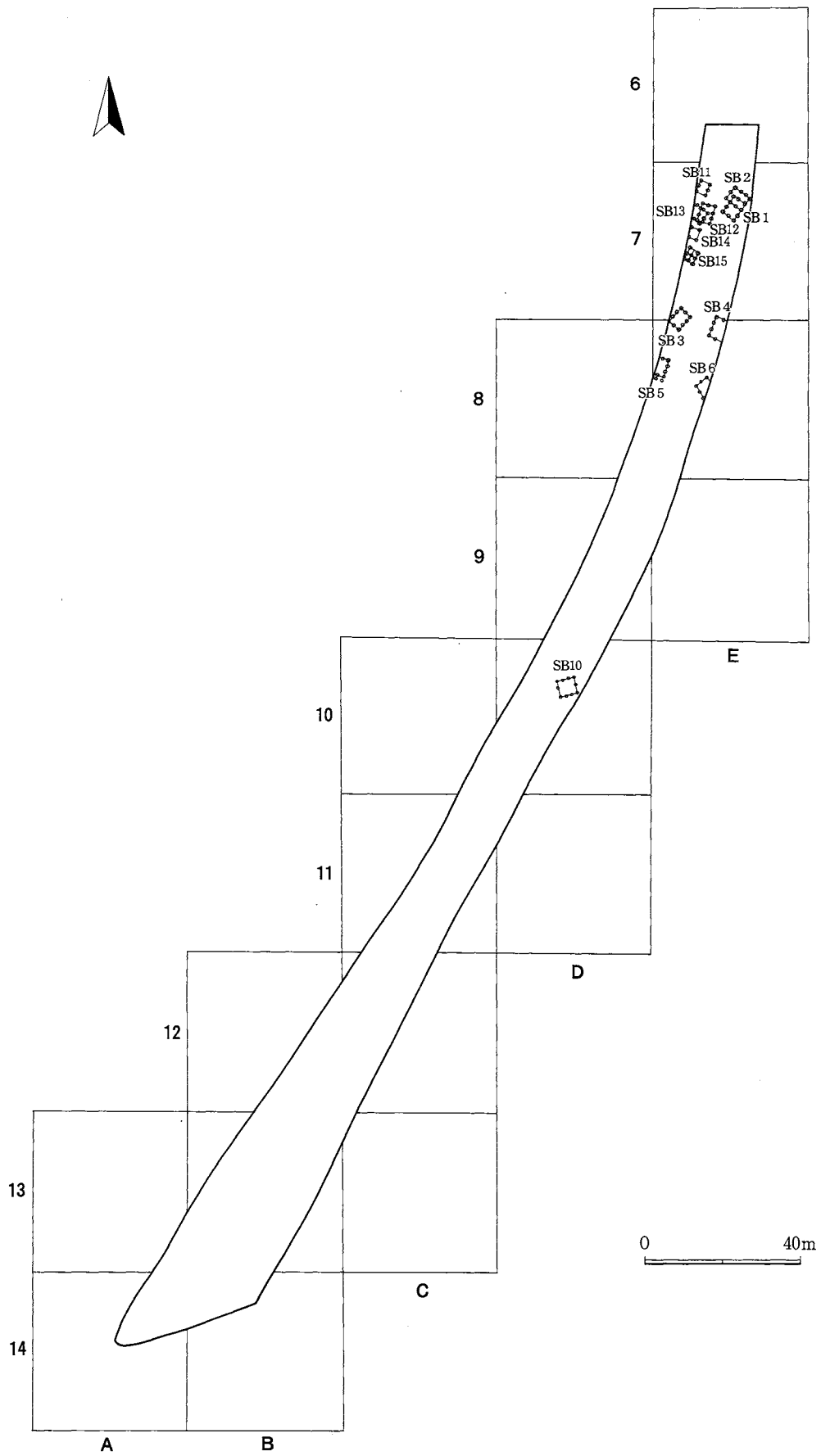
掘立柱建物密集域の南部に位置する。南西コーナーの一部が調査区外に出ている。柱配置は2間×3間で、桁行4.5m、梁行3.5mの規模を有する。建物方位はN-53°-Wを示している。各柱穴は直径1m前後の略円形プランで、深さ60cm前後のものが主体を占める。このうち、P 1・P 2には柱根跡が見られ、P 3には柱根跡もしくは建て替え痕が残っている。裏込めには暗褐色土とローム主体土が併用されている。

1は杯で、P 1の覆土中から分離して出土した。口径12.2cm、器高4.4cm、底径7.8cmで、赤褐色を呈する。均質な厚みの土器で、底部は広く、体部との境は十分面取りされている。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は僅かに外反する。体部内外面ともにナデ調整で、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。2は高台付きの須恵器杯で、P 3の覆土中から出土した。現高1.9cm、台径7.8cmで、明灰色を呈する。台部は外反しながら開き、接地面は丸くなっている。体部外面は回転ヘラ切り痕が残り、周囲をナデ調整している。また、同面にはヘラ描きで、「×」が陰刻されている。

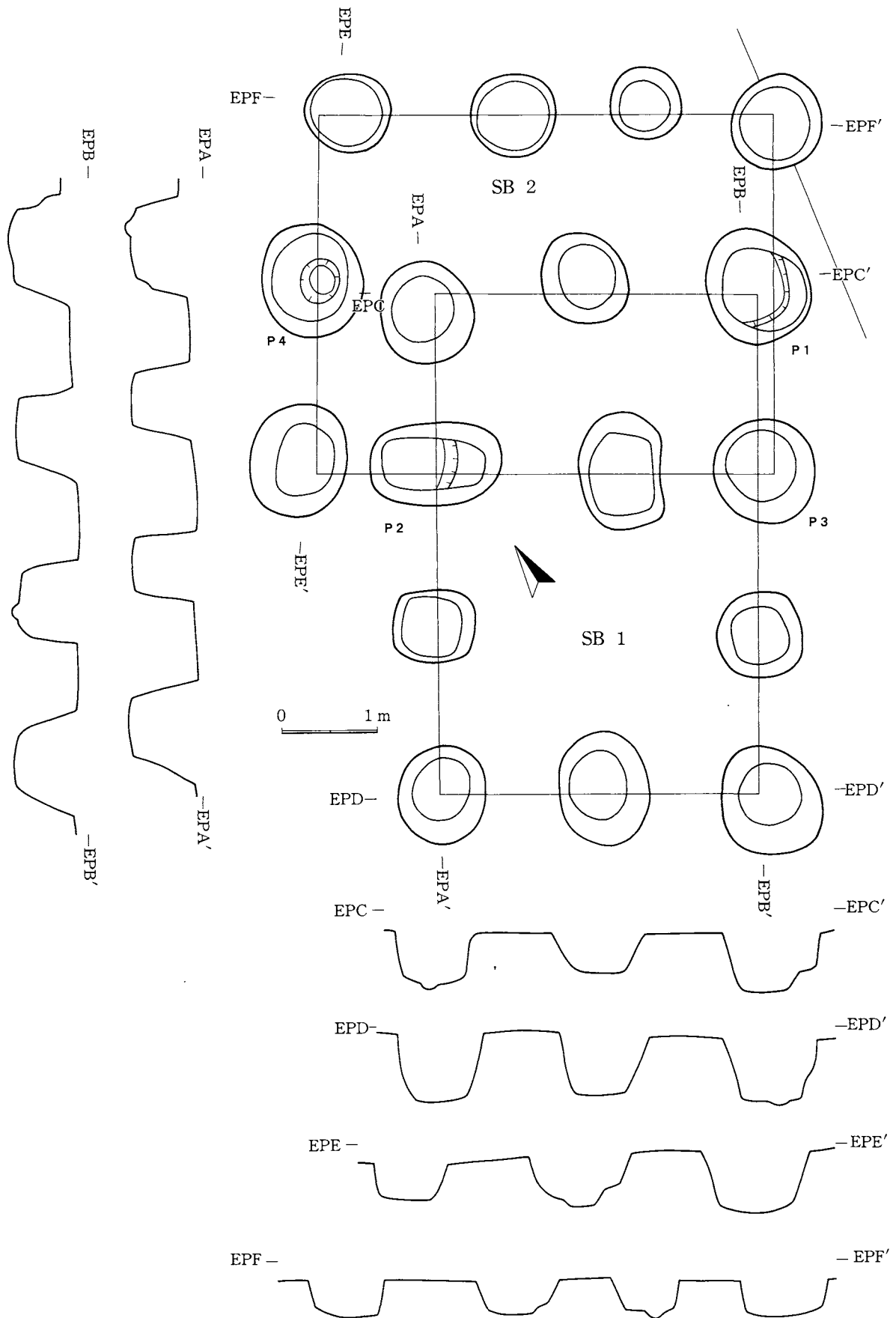
SB 4 (第72図、図版22)

SB 3の東方に位置する。SI 2・SI 3よりも新しく、東側が調査区外に出ている。柱配置及び規模は、1辺は3間の5.5mだが、他辺は不明である。建物方位はN-63°-Wを示している。各柱穴は北群と南群で様相が異なる。北群は大型で柱根がよく残り、P 2のように建て替え痕が見られるものもある。また、覆土に焼土・炭化粒を交えていることも共通する。一方、南群は直径60cm程の小規模な略円形に揃っている。深さは両者とも50cm前後が主体的である。裏込めにはローム主体土が用いられている。

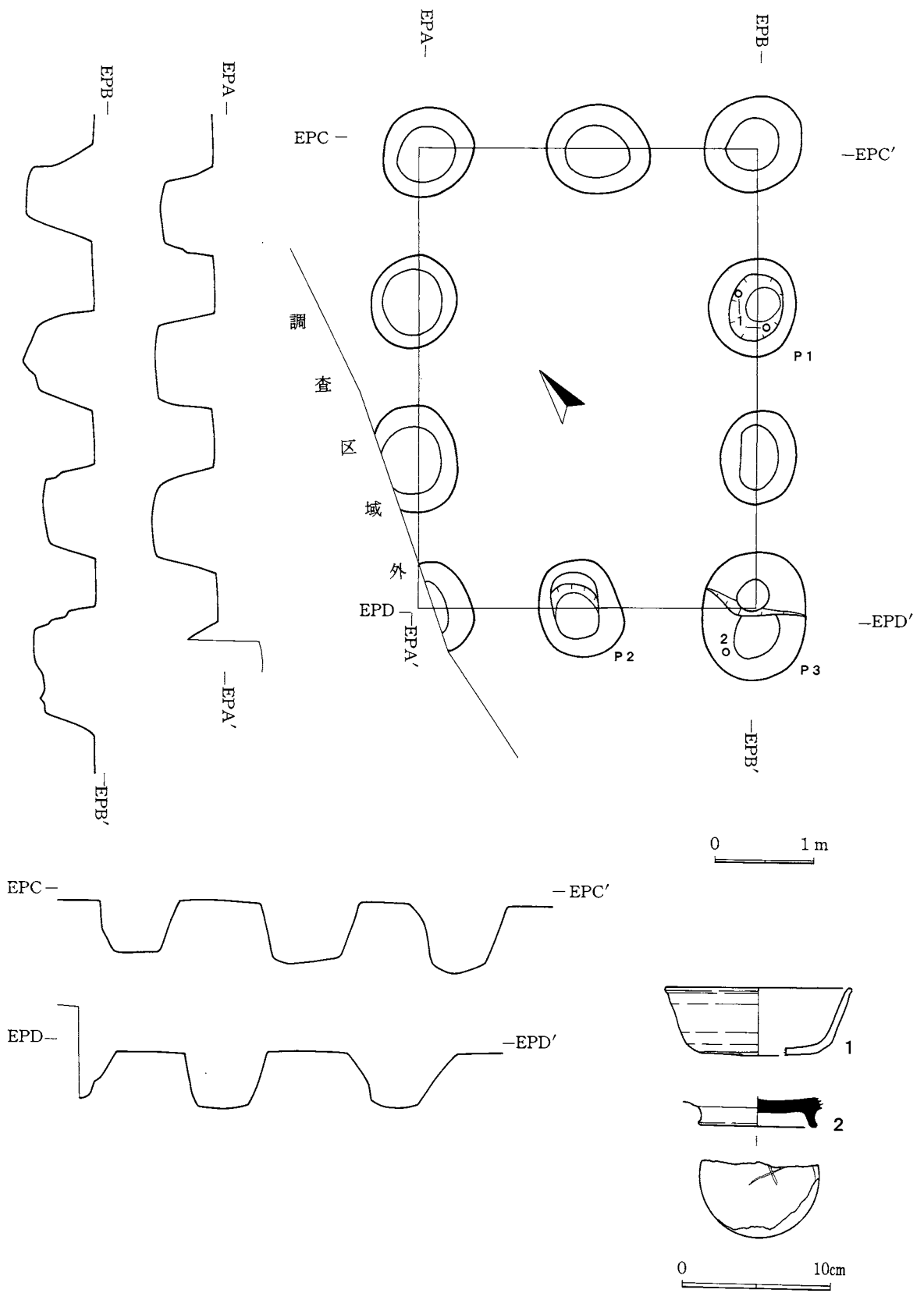
1は高台付きの須恵器杯で、P 3の覆土中から出土した。現高2.3cm、台径7.3cmで、灰褐色を呈する。底部に厚みがある土器で、台部は台裾が太く、接地面は傾斜している。底部外面はヘラケズリされている。



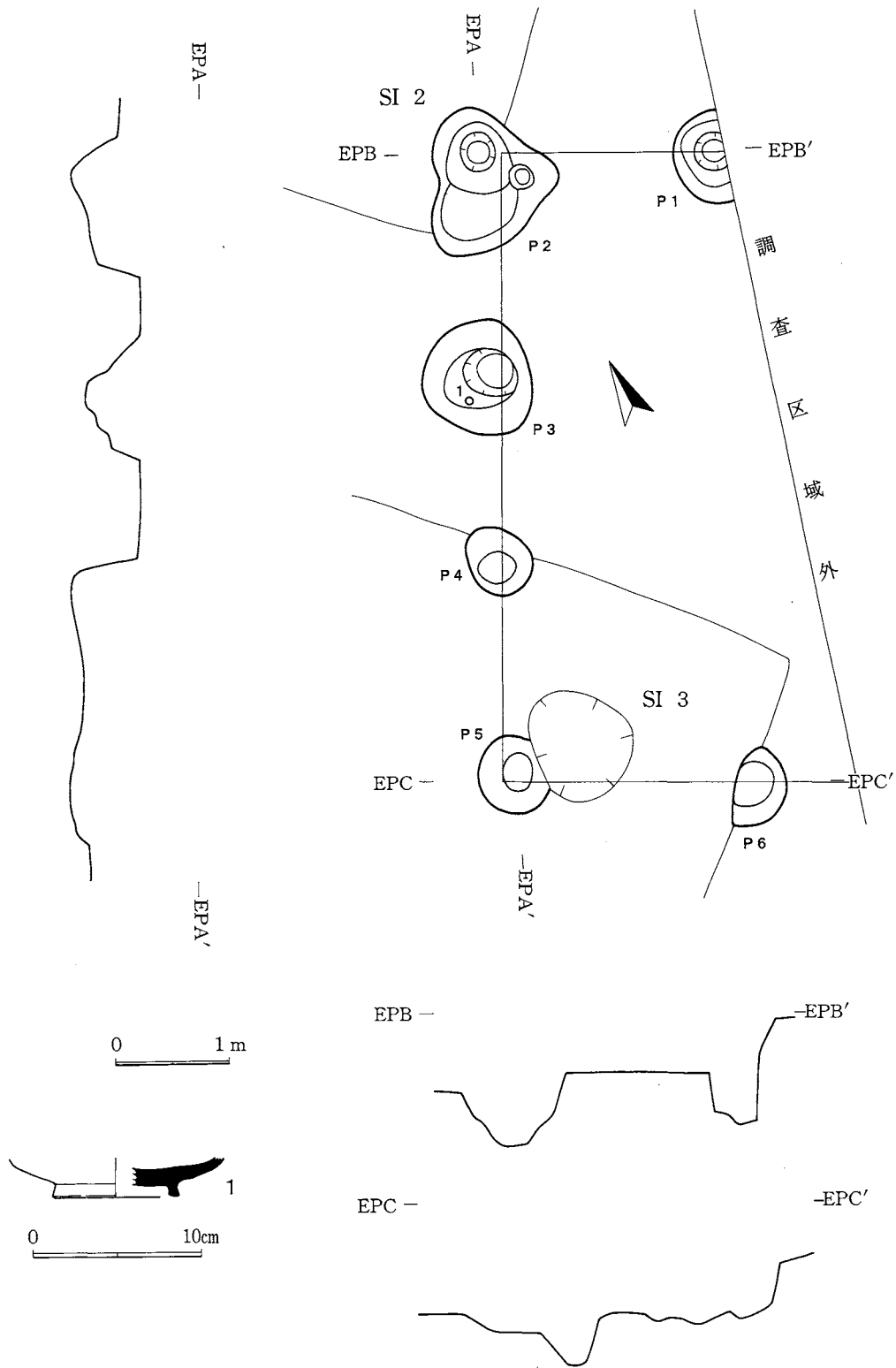
第69図 掘立柱建物跡配置図



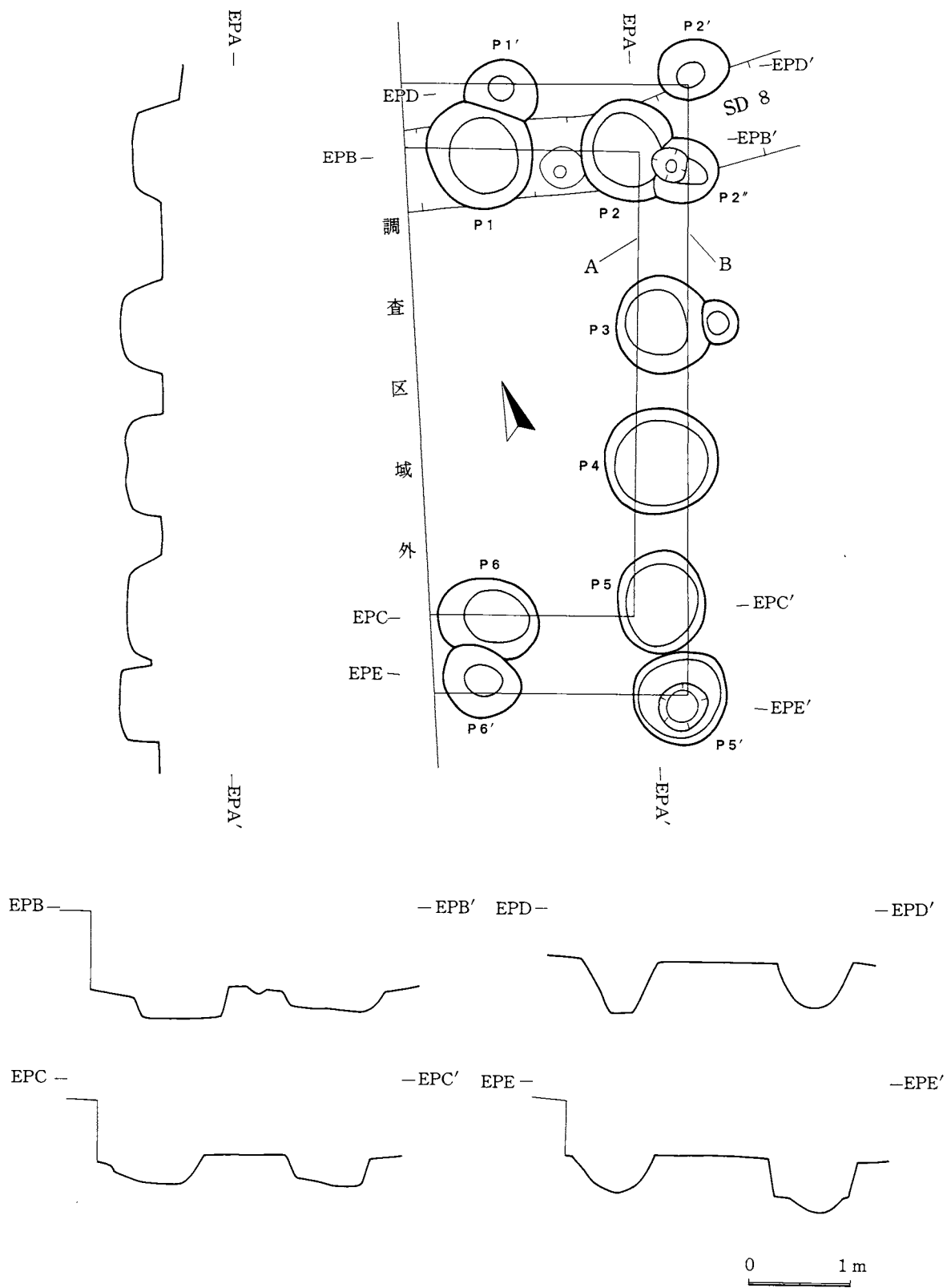
第70図 SB 1・SB 2 遺構実測図



第71図 SB 3 遺構・遺物実測図



第72図 SB 4 遺構・遺物実測図



第73図 SB 5 遺構実測図

SB 5 (第73図、図版22)

SB 3の南に位置する。北辺をSD 8に切られ、西辺は調査区外に出ている。本来の柱配置は実線Aで結ばれた柱穴群(P 1～P 6)で構成されており、その後南北方向に拡張され、実線Bで示される配置(P 1'・P 2'・P 2''・P 3・P 4・P 5'・P 6')に変更されたものと考えられる。したがって、この建物跡の東辺は当初P 2-P 5の3間で4.5m、拡張後はP 2'-P 5'の4間で4.9mということになる。建物方位はいずれもN-67°-Wである。各柱穴は当初のものは直径1m前後の略円形で、深さは40cm前後だが、拡張後は小規模なものが多くなる。P 2''・P 5'は柱根跡がよく残っている。柱の裏込めにはローム主体土が用いられている。遺物は出土しなかった。

SB 6 (第74図、図版22)

SB 5の東南に位置する。東側が調査区外に出ている。調査区内で検出された2辺とも完結しているかどうか不明なので、柱配置や規模は確認できない。建物方位はN-36°-Wを示す。各柱穴は直径40cm程の略円形で、深さ40cm前後である。遺物は出土しなかった。

SB 10 (第75図、図版23)

掘立柱建物跡密集域の80m南方に孤立して所在する。SK 15、SD 16、後世の芋穴等に攪乱されていた。西辺は上記攪乱を被っているが、柱配置は2間×3間で、桁行4.7m、梁行4.0mの規模を有する。建物方位はN-15°-Wを示している。各柱穴は直径30～50cmの略円形で、深さは40～50cmある。遺物は出土しなかった。

SB 11 (第76図、図版23)

掘立柱建物跡密集域の最北端に位置している。西辺の一部が調査区外に出ている。柱配置は1間×2間で、桁行・梁行とも2.9mの正方形プランを呈する。建物方位はN-21°-Eを示している。各柱穴は直径90cm前後の円形で、深さ50cm程のものが主体を占める。どの柱穴も柱根跡がよく残っている。柱の裏込めにはローム主体土が用いられている。遺物は出土しなかった。

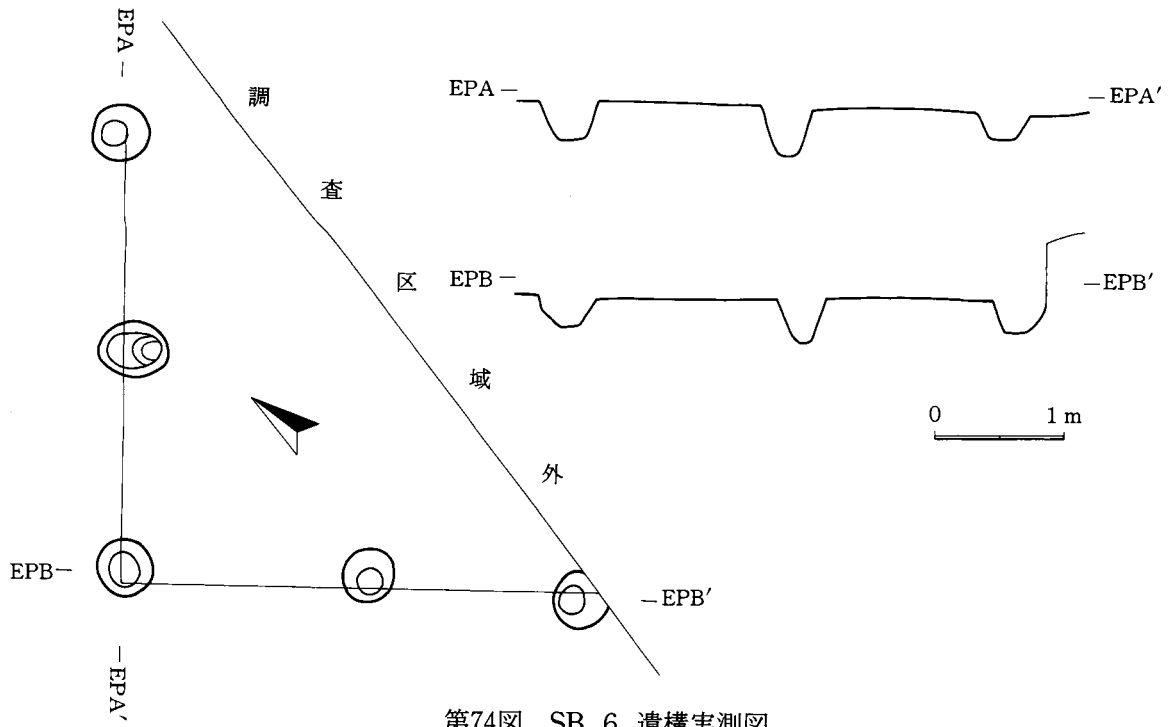
SB 12 (第77図、図版23、図版36)

SB 11の南に隣り合う。SB 13と南西部で交錯している。柱配置は2間×3間で、桁行4.5m、梁行3.3mの規模を有する。建物方位はN-78°-Wを示している。各柱穴は直径60～80cmの円形で、深さ20～50cm程あり、柱根跡が残っているものが多い。柱の裏込めにはローム主体土が用いられている。SB 13との新旧関係は不明である。

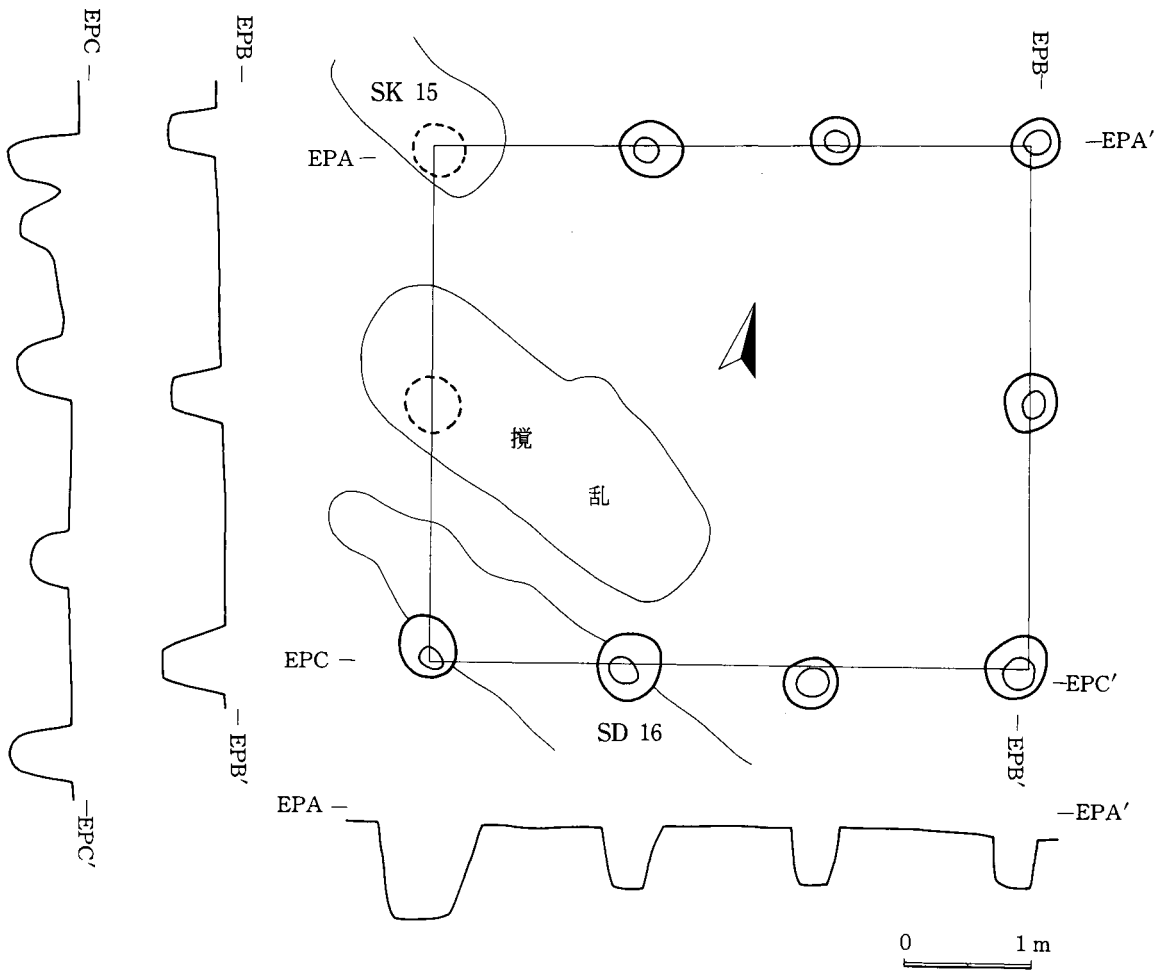
1は杯で、北東コーナーの覆土中から出土した。口径11.8cm、器高3.9cm、底径7.5cmで、赤褐色を呈する。底部はやや膨らみ、体部接合部での面取りは十分になされている。体部は直線的に開いている。体部内外面は横ナデで調整され、底部外面は手持ちヘラケズリがかけられている。

SB 13 (第77図、図版23)

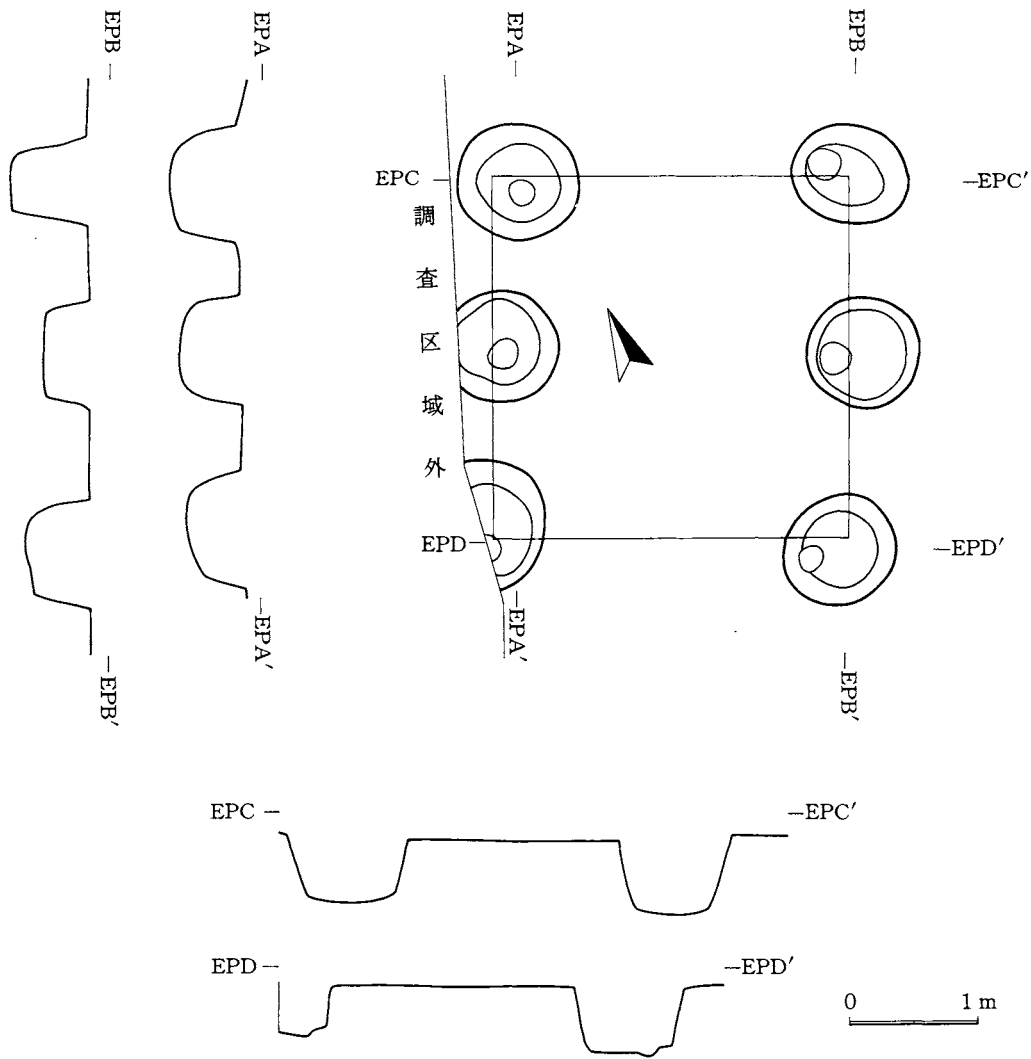
SB 12と東側で交錯し、西側は調査区外に出ているため、完全に検出されたのは西南辺のみであった。



第74図 SB 6 遺構実測図



第75図 SB 10 遺構実測図



第76図 SB 11 遺構実測図

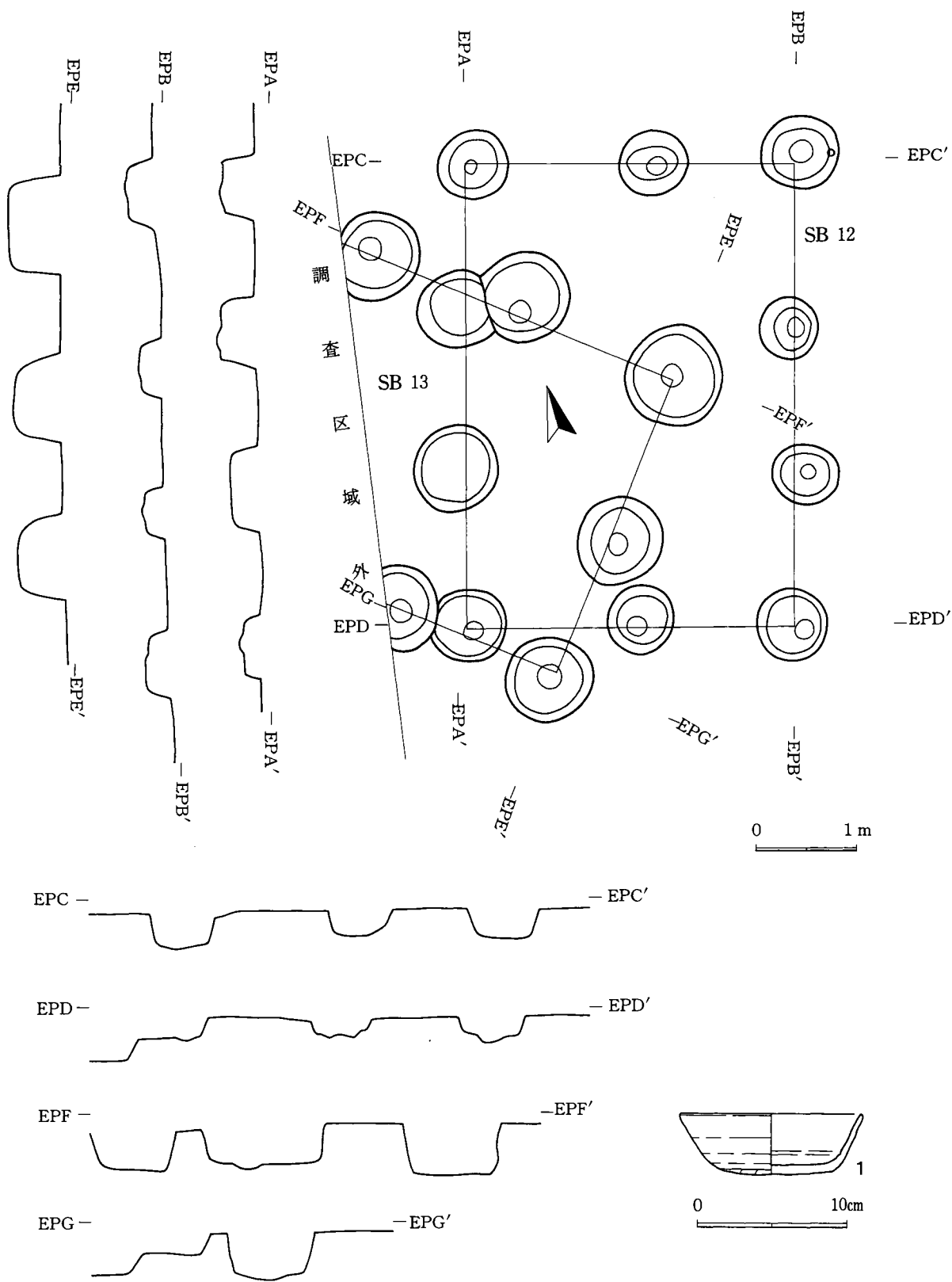
西南辺は2間で、3.1mを計る。本来は2間×(2間+ α)の建物である。建物方位はN-35°-Eを示している。各柱穴は直径90~100cmの円形で、深さは40~50cmあり、柱根跡がよく残っている。柱の裏込めにはローム主体土が用いられている。遺物は出土しなかった。

SB 14 (第78図、第24図)

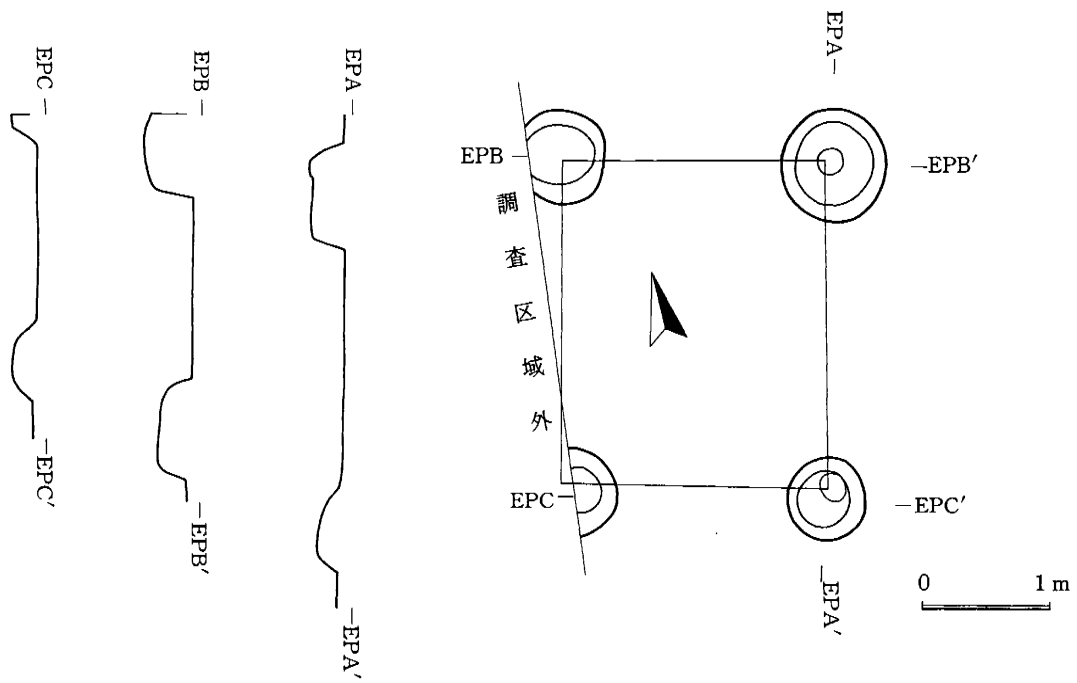
SB 12・SB 13の南に隣り合い、西側が調査区外に出ている。完全に検出されたのは東辺のみである。東辺は1間で、2.6mを計る。本来は1間×(1間+ α)の建物である。建物方位はN-12°-Eを示している。各柱穴は直径60~80cmの円形で、深さは20~40cmと浅い。東辺では柱根跡が残っている。柱の裏込めにはローム混入土が用いられている。遺物は出土しなかった。

SB 15 (第79図、図版24)

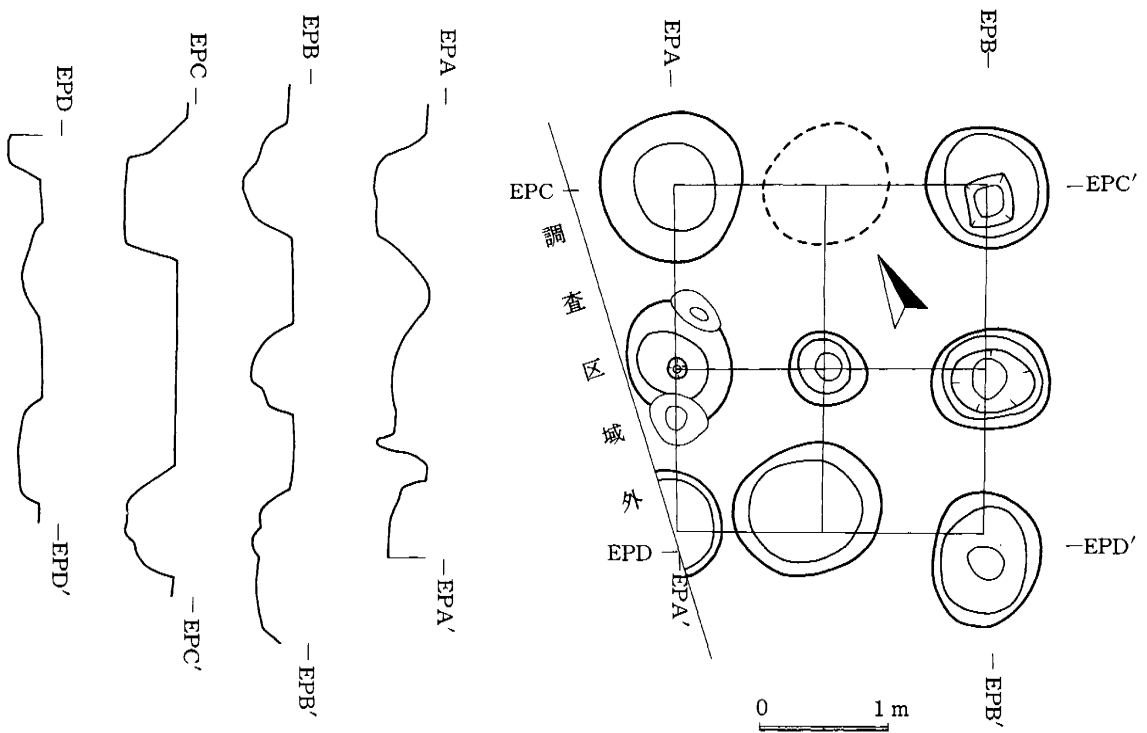
SB 14の南に隣り合い、西コーナーの一部が調査区外に出ている。柱配置は2間×2間の総柱造り2.7m×2.5mの規模を有する。建物方位はN-30°-Eを示している。北東辺の中央柱穴が確認されなかった



第77図 SB 12・SB 13 遺構・遺物実測図



第78図 SB 14 遺構実測図



第79図 SB 15 遺構実測図

が、建物全体が浅い掘り方なので、既に削平されているものと考えられる。各柱穴は直径1m前後の略円形を呈すが、中心柱のみが60cmと小さい。深さは20~40cmを計る。柱根跡がはっきり残るものが多い。柱の裏込めにはローム主体土が用いられている。遺物は出土しなかった。

第5節 土坑類と出土遺物

SK 1 (第81図、図版24)

調査区最北端、E4区に位置する遺構である。南側がSD 1に攪乱され、西側は調査区外に出ている。長径4.2mの不整形プランで、深さは1.3mを計る。覆土第2・3層が人為的な埋土である。遺物は出土していない。

SK 2 (第82図、図版24)

調査区北部のE7区に所在する。楕円形の土坑が2基重複している。長さ2m、深さ20cm(いずれも最大値)を計る。遺物は出土していない。

SK 3 (第82図、図版24)

SK 2のすぐ南に隣り合う。2基の楕円形土坑と2基の小ピットが重複している。長さ2m、深さ50cmを計る。遺物は出土していない。

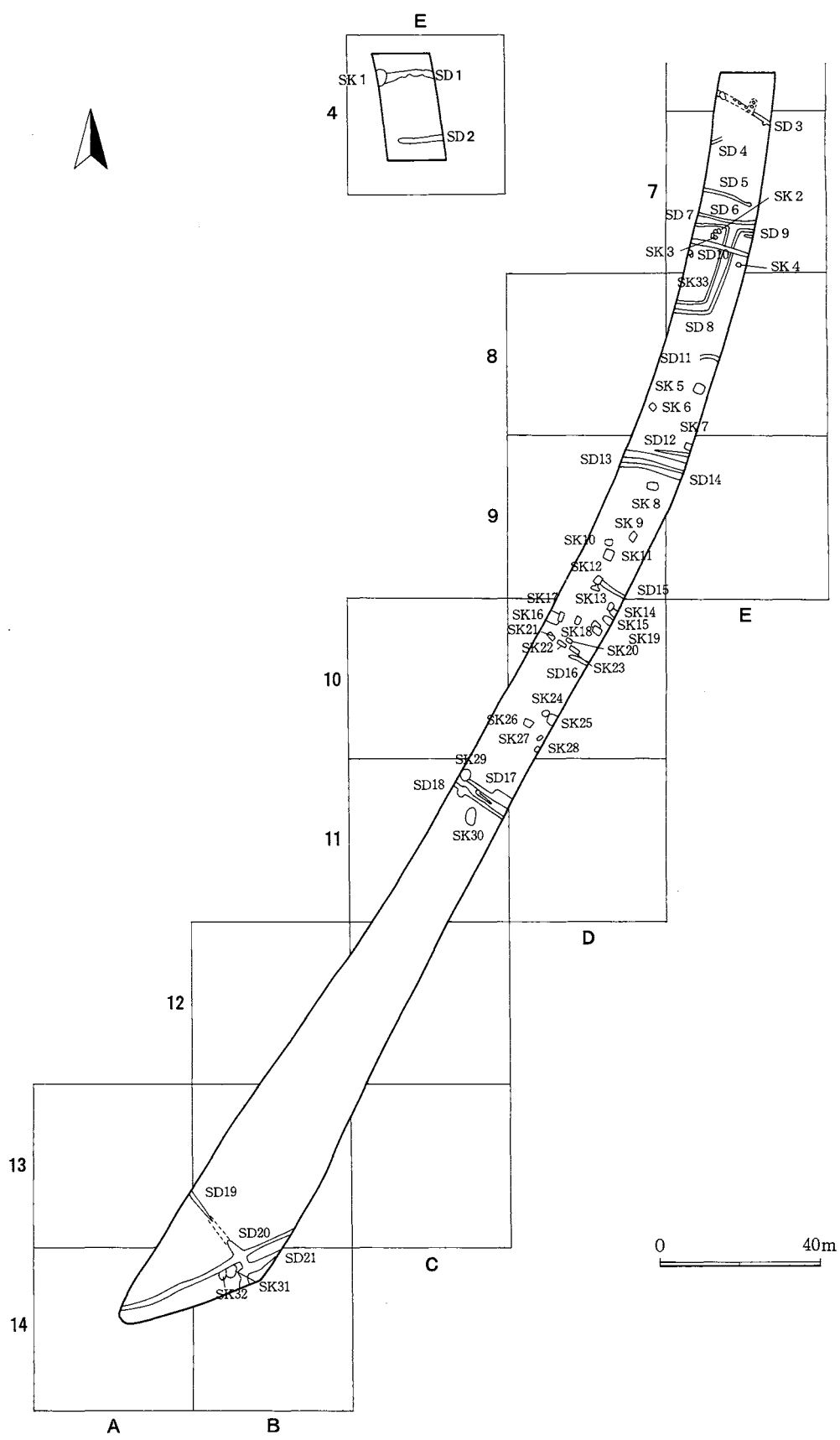
SK 4 (第83図、第84図、図版25、図版36、図版38)

SK 3の南西に位置する。不整卵形プランを呈し、長さ1.5m、深さ80cmを計る。坑底は狭くなり、3基の小ピットが集合した形状になる。

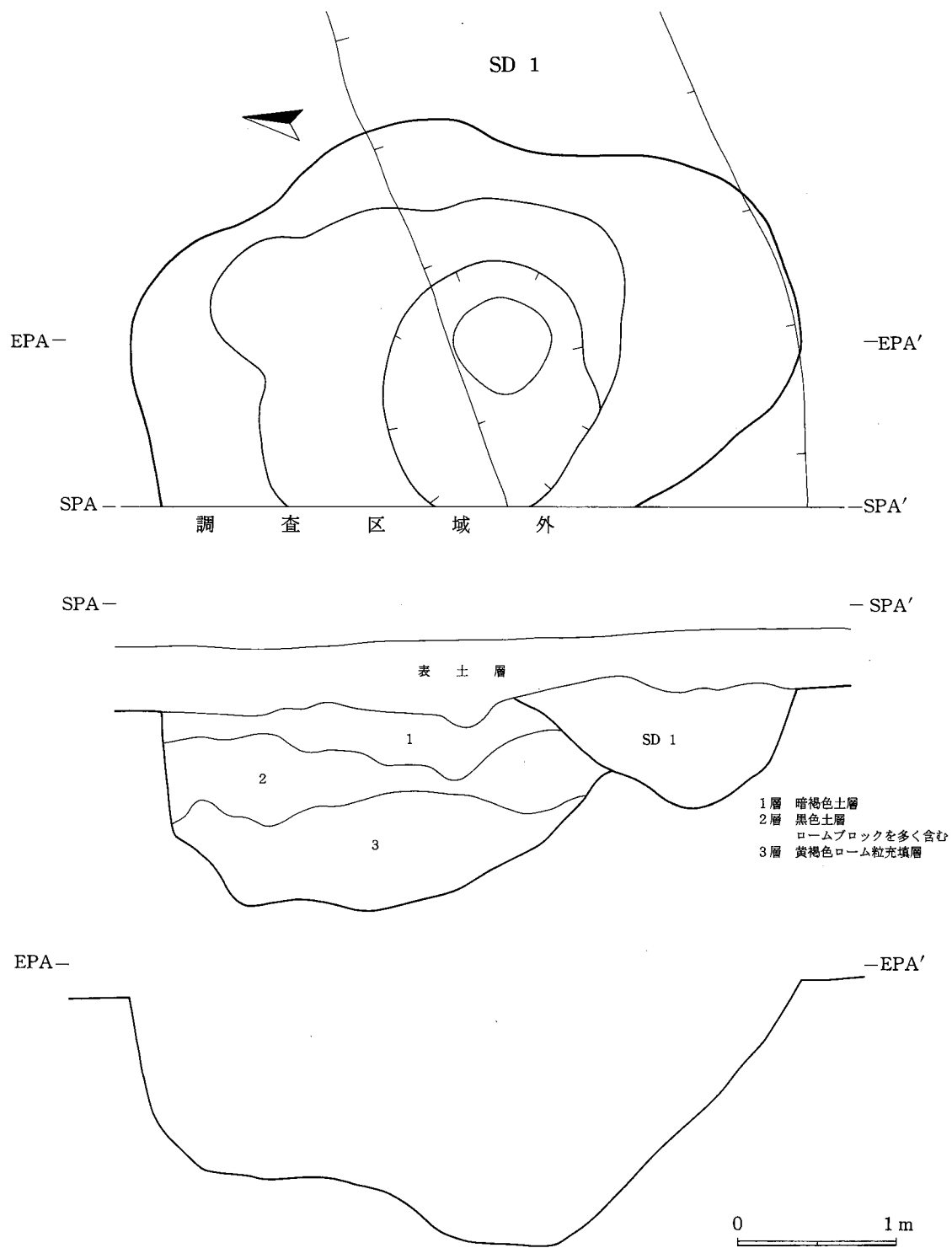
遺物はすべて覆土下層からまとめて出土した。

1・2は鞆(ふいご)の羽口である。1は現長7.0cm、推定外径7.8cmで、赤褐色を呈する。残存破片には通気孔の一部が遺存している。炉への差込口は一回り小さい段を形成し、ガラス質に変質している。また、それに直続する部分は、高熱を受けて器体から発泡した痕跡が観察される。2は現長9.5cm、外径7.3cm、内径2.5cmで、赤褐色を呈する。先端部を欠失しているが、1と同様な発泡痕が認められ、黒く変色している。

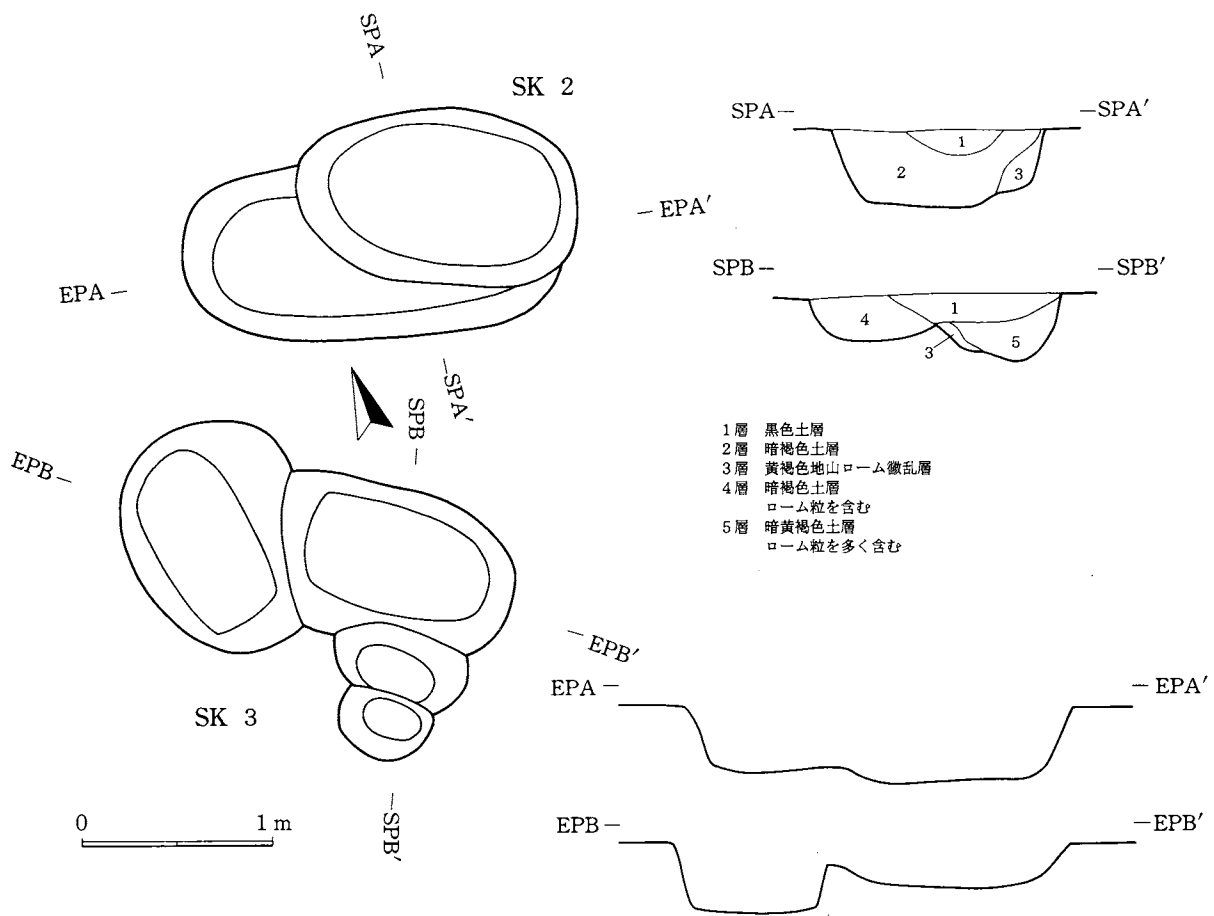
3~10は椀形鍛冶滓である。暗茶褐色のいわゆる鉄錆色を呈している。4以外は中央部表面は凹面を呈し、裏面に厚みがあって、鍛冶炉底に沈殿した形跡を留めている。また、側面から裏面にかけて、炉壁を構成していたスサの痕跡が認められる。凹面を呈する表面は比較的滑らかで、7・10は中央が青みを帯びて弱い光沢がある。裏面は間隙や発泡痕等による凹凸に富んでいる。各片の重量は次のとおりである。3=93.8g、4=50.9g、5=324.4g、6=218.3g、7=84.6g、8=163.0g、9=144.8g、10=105.0g。



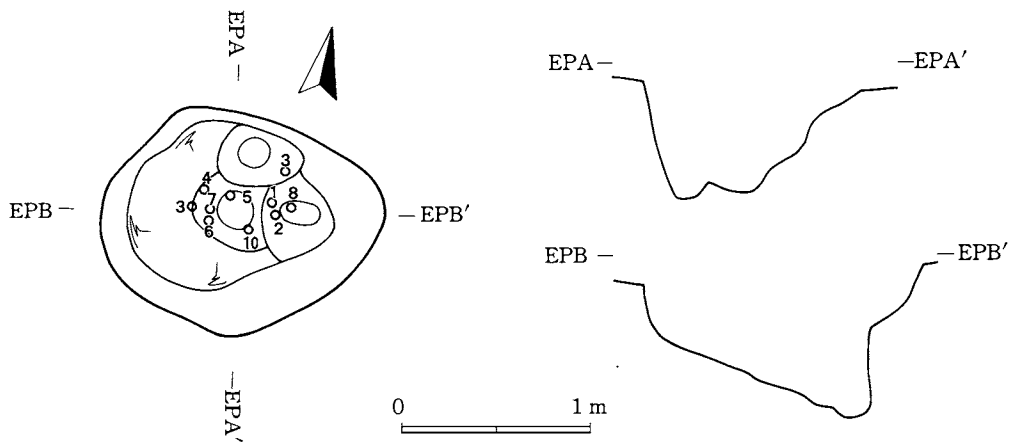
第80図 土坑類・溝等配置図



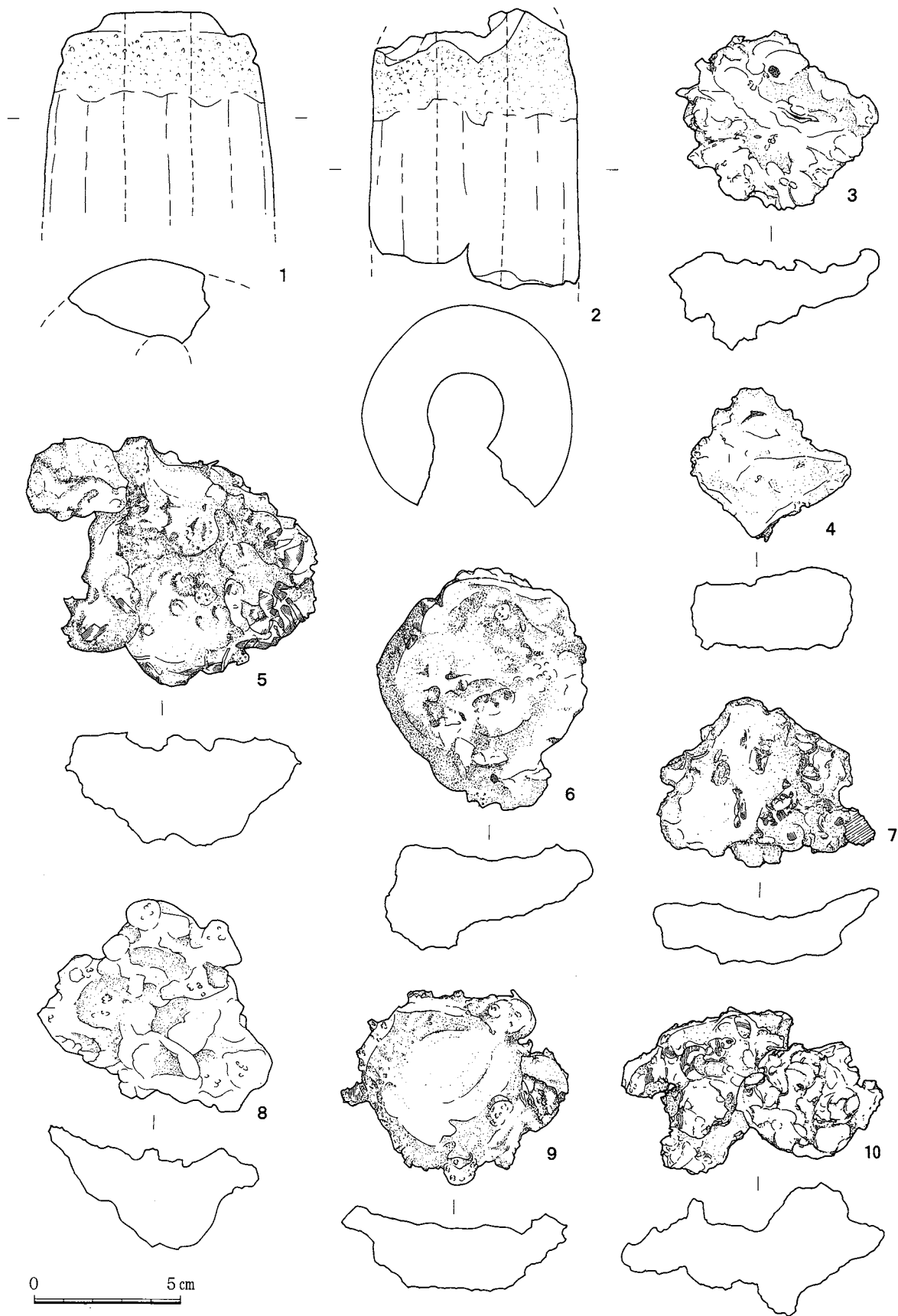
第81図 SK 1 遺構実測図



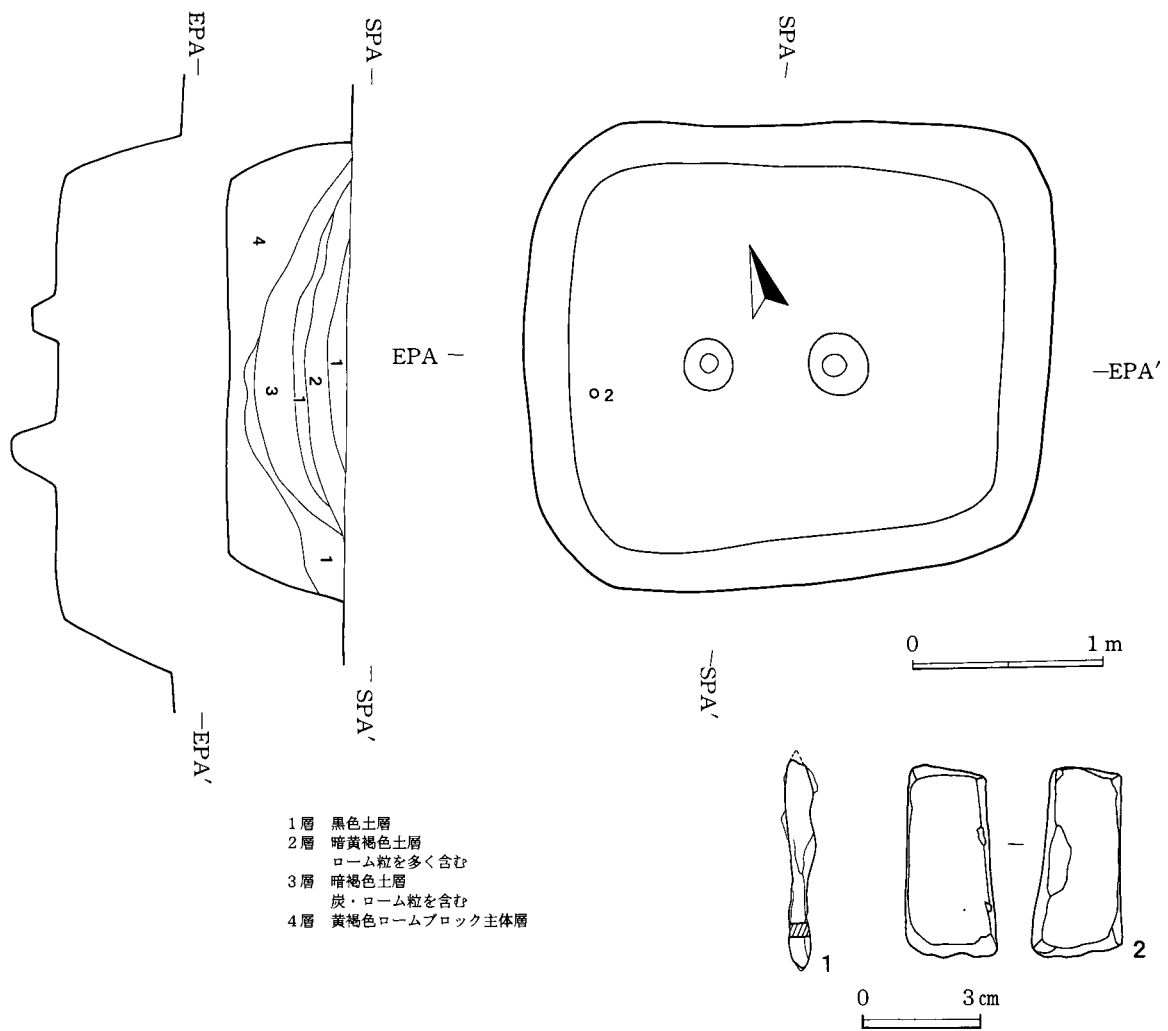
第82図 SK 2・SK 3 遺構実測図



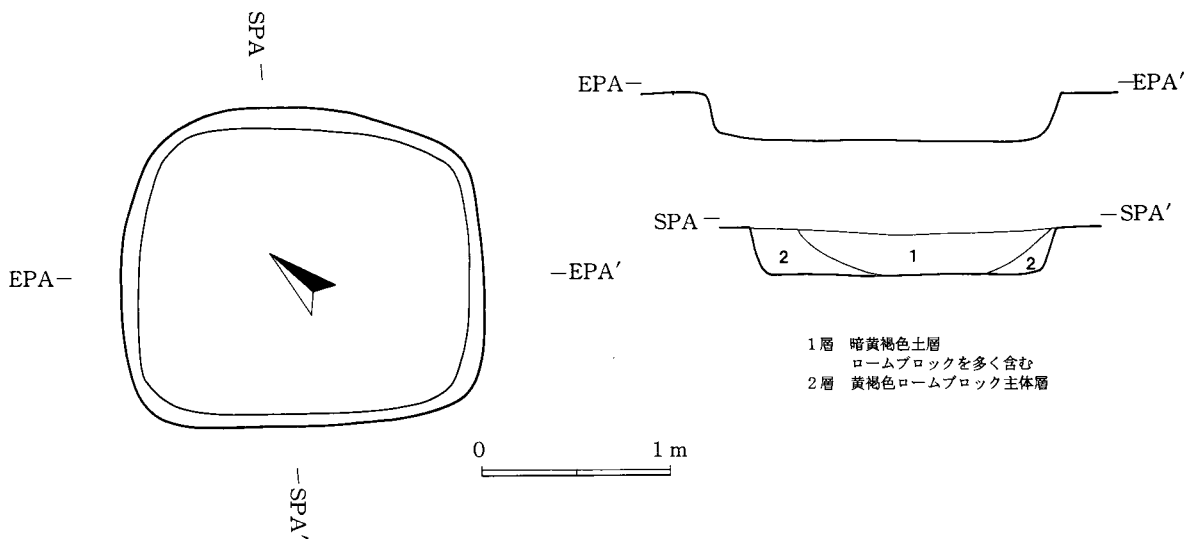
第83図 SK 4 遺構実測図



第84图 SK 4 遺物実測図



第85図 SK 5 遺構実測図



第86図 SK 6 遺構実測図

SK 5 (第85図、図版37)

E8区に所在する。2.2m×2.8mの隅丸長方形プランで、深さが60cmある。坑底は平坦で、中央に2連の小ピットが掘られている。猪穴(ししあな)と考えられる。覆土は人為的な埋土である。

1は鉄鏃で、現長5.3cm、4.4gを量る。片刃式の刃部とそれに続く筧の部分である。2は砥石で、西寄りの覆土中から出土した。現長5.0cmで、38.6gを量る。砂岩製である。

SK 6 (第86図、図版25)

D8区に所在する。1.3m×1.9mの略長方形を呈し、深さが20cmある。坑底は平坦である。覆土は人為的な埋土である。遺物は出土していない。

SK 7 (第87図、図版25)

E9区に所在する。東側は調査区外に出ている。短辺1.7mの隅丸長方形プランをとるものと思われる。深さは50cmで、坑底はやや凹凸がある。遺物は出土していない。

SK 8 (第88図、図版25)

D9区に所在する。1.7m×2.5mの略長方形プランで、深さが70cmある。坑底は平坦である。覆土は人為的な埋土である。遺物は出土していない。

SK 9 (第89図、図版25)

D9区に所在する。1.4m×2.3mの略長方形プランで、深さが30cmある。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 10 (第90図、図版25)

D9区に所在する。1.8m×2.3mの隅丸長方形プランで、深さが50cmある。坑底は平坦である。覆土は人為的な埋土である。遺物は出土していない。

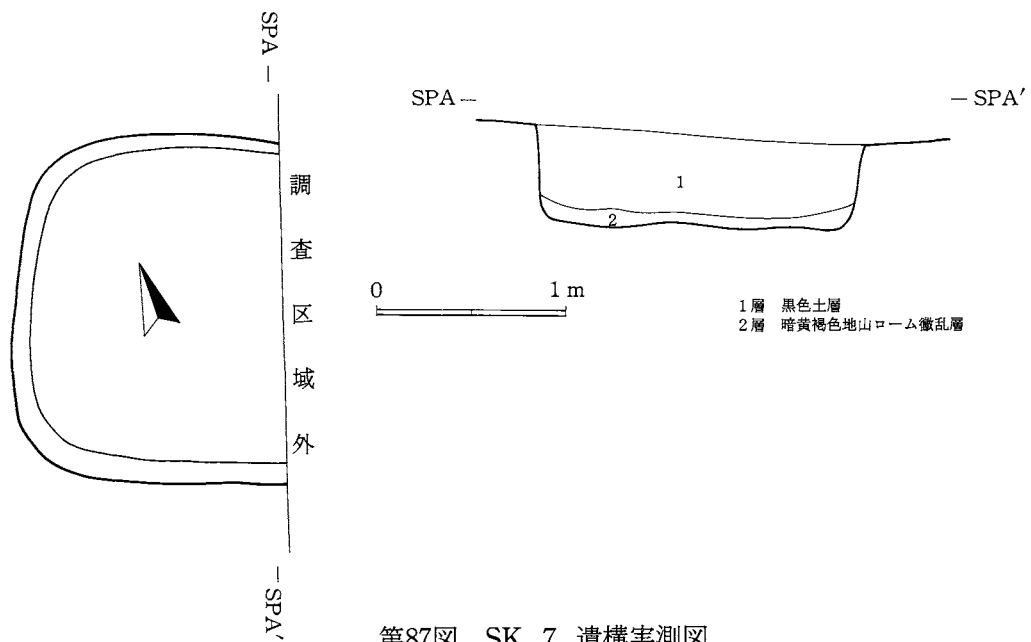
SK 11 (第91図、図版25)

SK 10の南隣に位置する。2.9m×3.1mの略長方形プランで、深さが20cmある。坑底は平坦である。

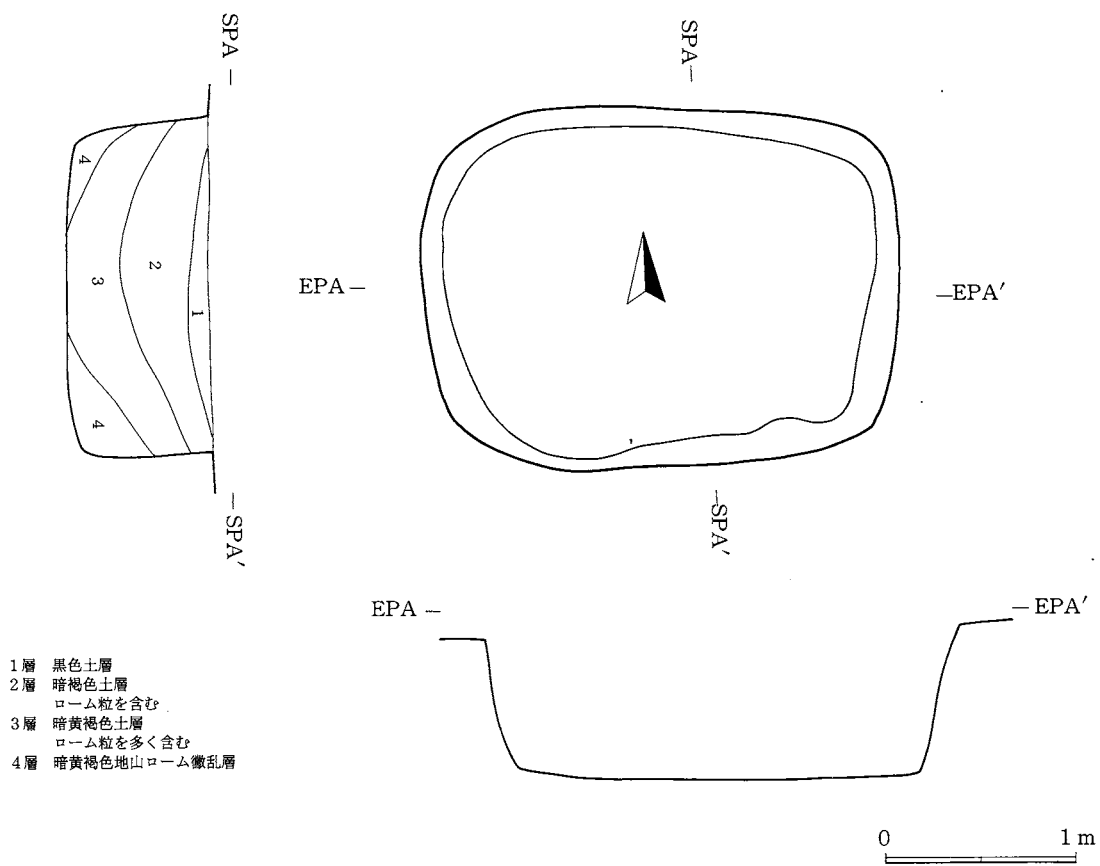
1は鉄製品で、板状を呈する断片である。5.4gを量る。

SK 12 (第92図)

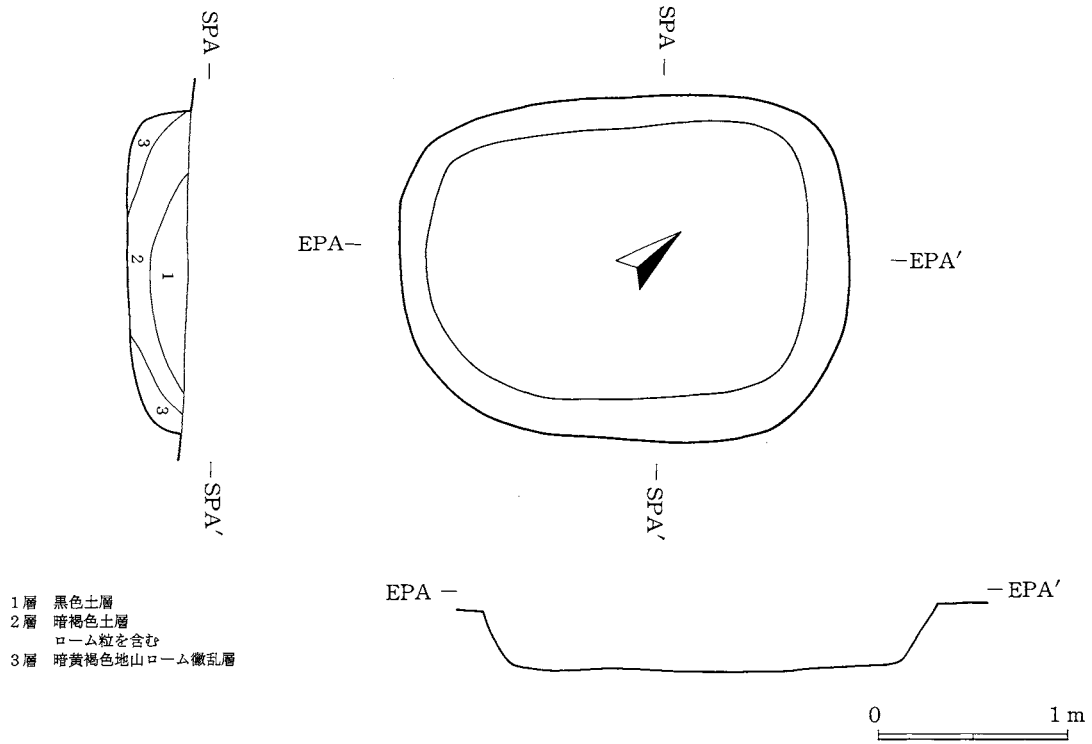
D9区に所在する。東側はSD 19の末端と切り合っている。遺構は略方形土坑と不整形土坑の複合である。方形部と不整形部の坑底はともに平坦である。また、方形部はその内部に、さらに深い長方形土坑とそれに取り付く不整形土坑を包含している。この長方形土坑は北側の長辺がオーバーハングしている。なお、方形部、不整形部ともに小ピットが1基掘られている。SK 12の基本構造を方形部とその内部の長方形土坑とみなせば、小規模な地下式墳の可能性はある。方形部は2.1m×2.3mで、長方形土坑までの深さは80cmある。遺物は出土していない。



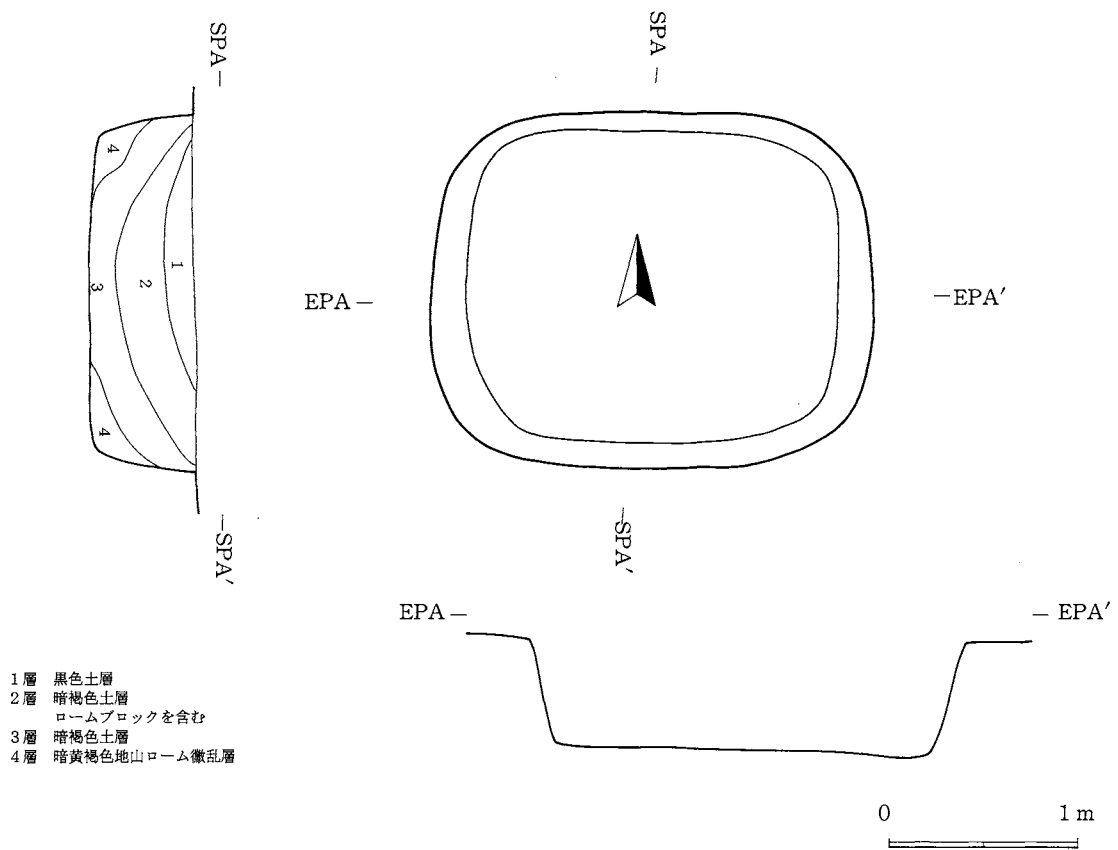
第87図 SK 7 遺構実測図



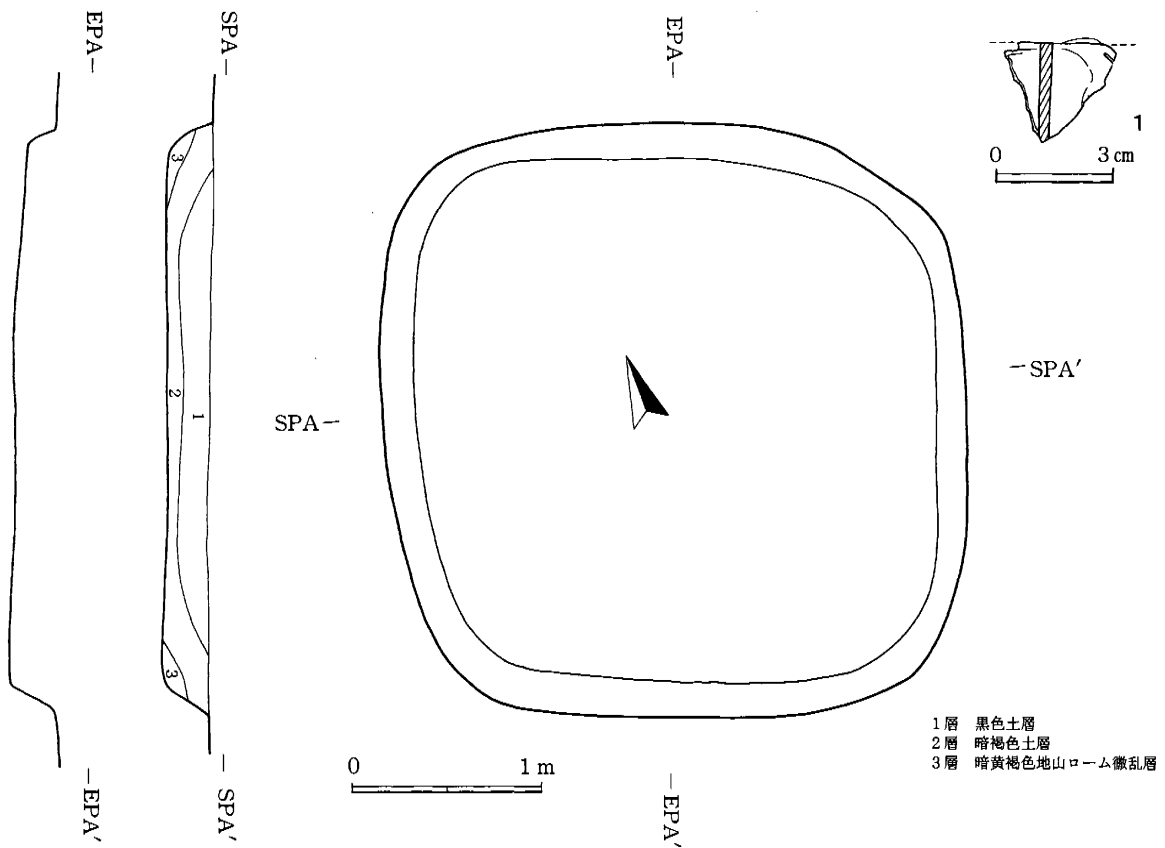
第88図 SK 8 遺構実測図



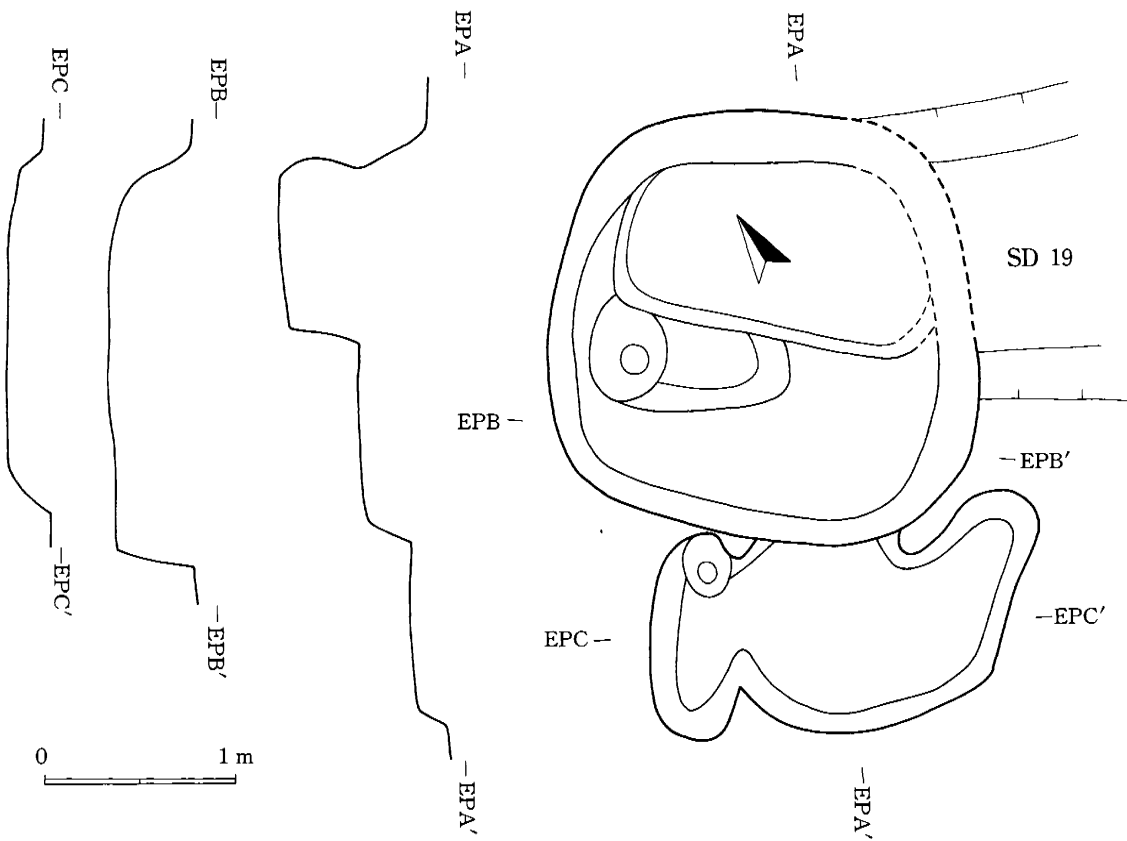
第89図 SK 9 遺構実測図



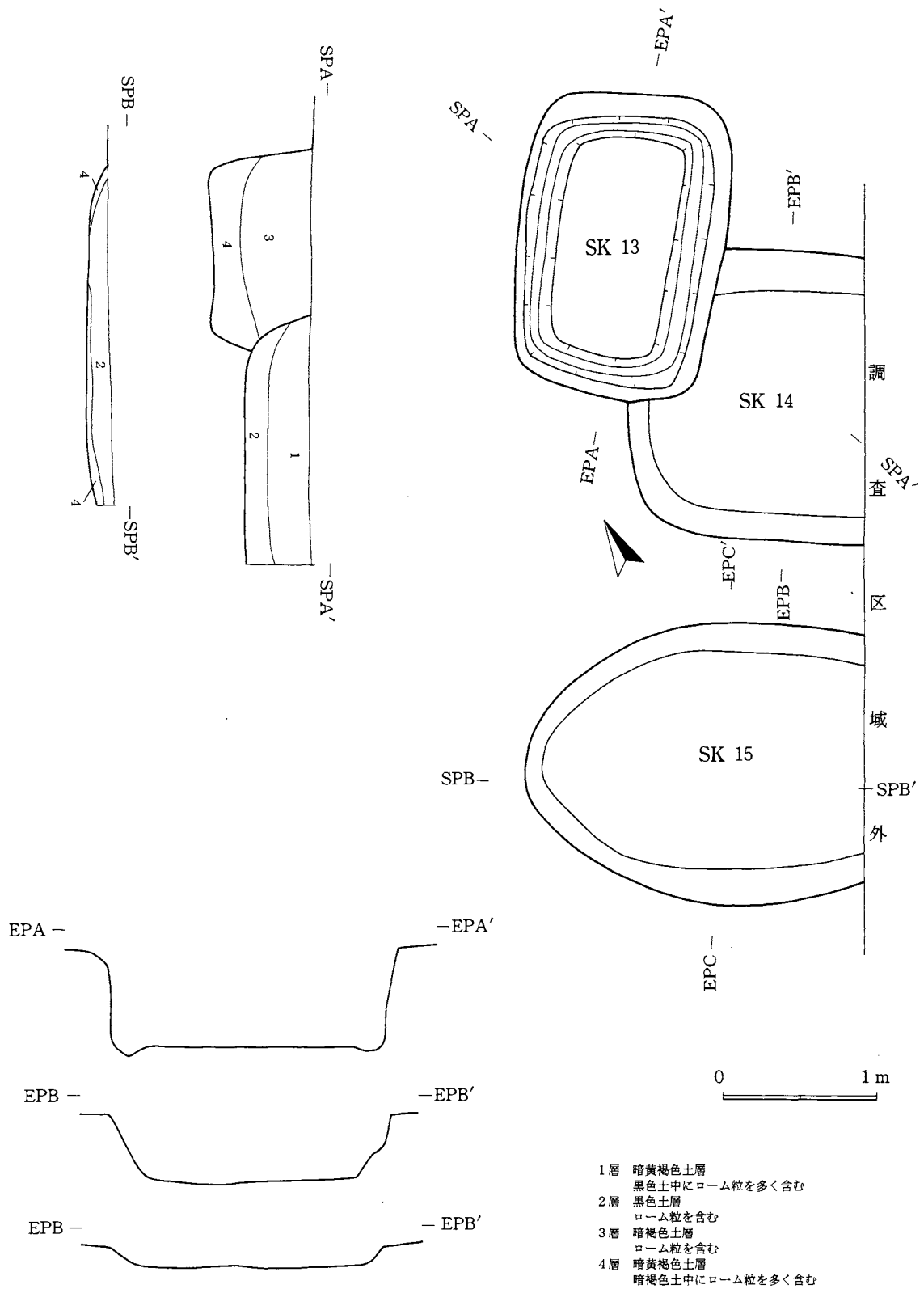
第90図 SK 10 遺構実測図



第91図 SK 11 遺構・遺物実測図



第92図 SK 12 遺構実測図



第93図 SK 13・SK 14・SK 15 遺構実測図

SK 13 (第93図、図版26)

D10区に所在する。南東部がSK 14に切られている。1.2m×2.0mの隅丸長方形プランを示し、深さは60cmある。坑底は平坦で、壁際には周溝が全周している。周溝内は0.8m×1.4mの規模になる。遺物は出土していない。

SK 14 (第93図、図版26)

北東部でSK 13を切り、南東部が調査区外に出ている。短辺が1.8mの隅丸長方形プランになると思われる。深さは40cmある。傾斜をつけて掘り込まれており、坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 15 (第93図、図版26)

SK 14のすぐ南西に隣り合う。南東部は調査区外に出ている。短径1.8m、長径2.2m以上の楕円形プランになると思われる。深さは18cmと浅い。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 16 (第94図、図版26)

D10区に所在する。東側でSK 17を切り、西側は調査区外に出ている。隅丸の方形または長方形プランになると思われる。確認された1辺は3.1mで、深さは50cmある。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 17 (第94図、図版26)

西側がSK 16に切られている。プランは不整形だが、隅丸長方形を2つずらし合わせたようにも見える。全長3.6m、深さ38cmを計る。坑底は平坦で、段差は存在しない。覆土の状態も単一遺構を示している。遺物は出土していない。

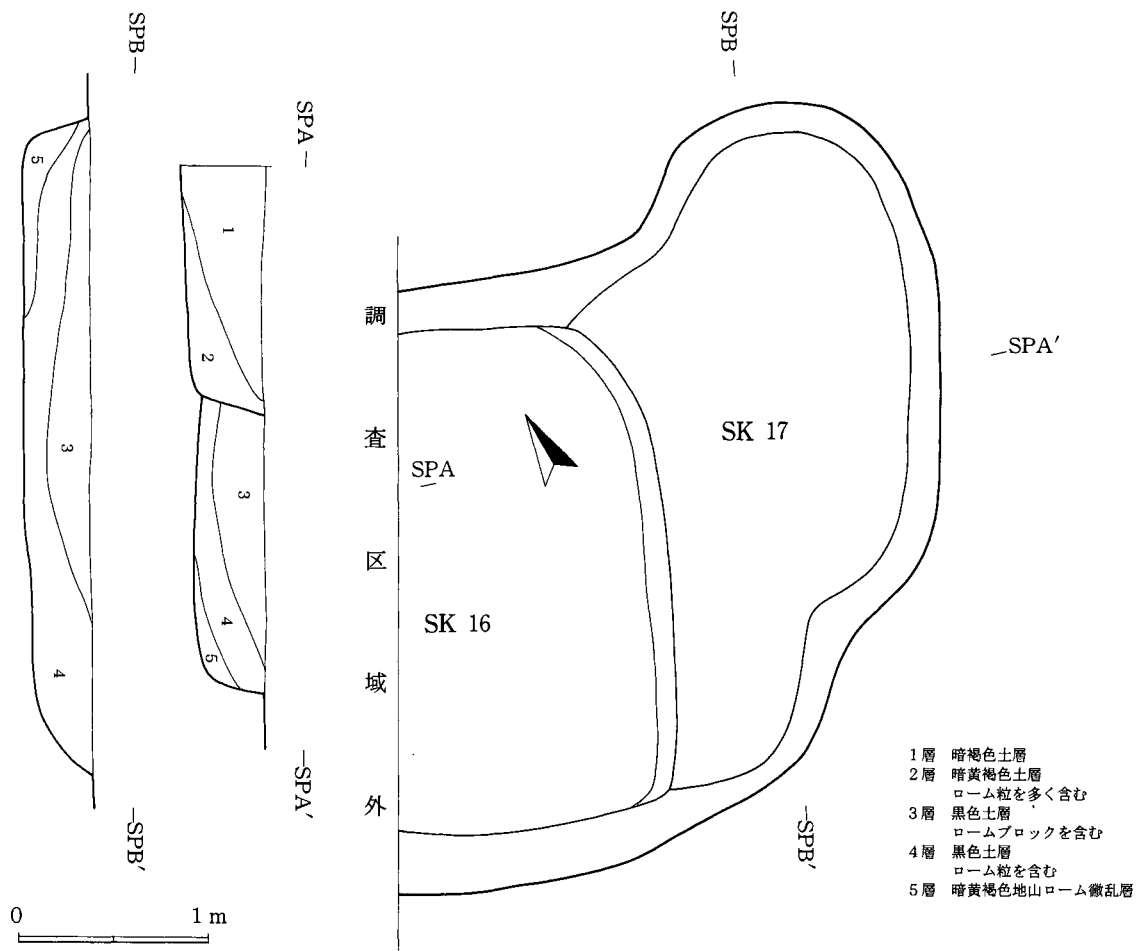
SK 18 (第95図)

SK 17の東方に位置する。1.4m×1.8mの隅丸長方形プランで、深さは20cmと浅い。坑底は平坦である。

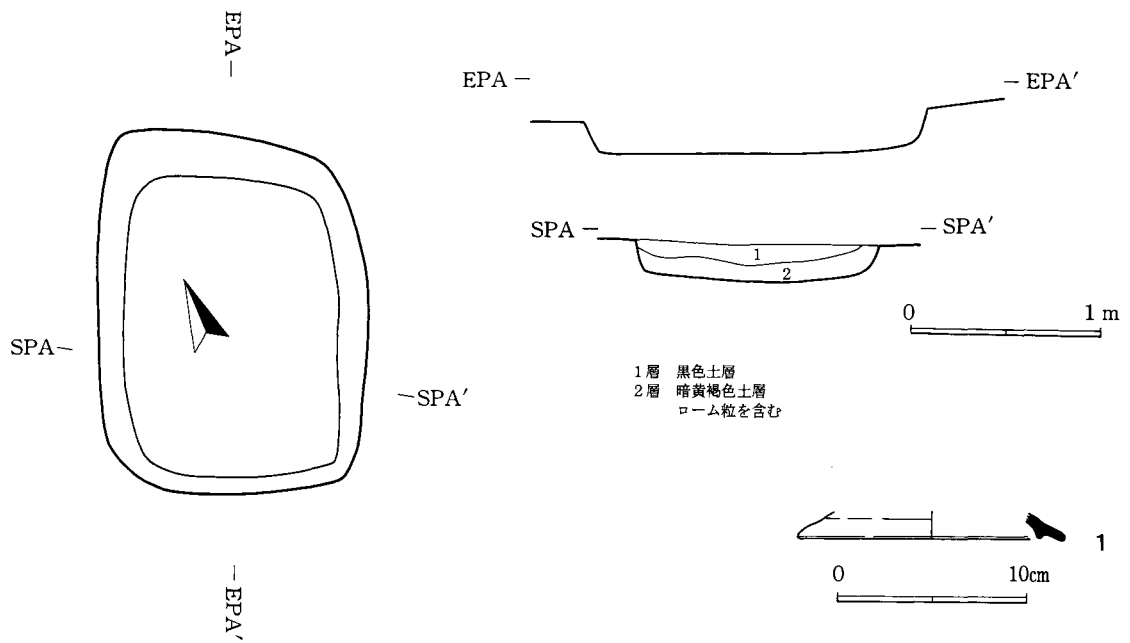
1は須恵器杯蓋で、口径7.1cm、現高1.3cmで、明灰色を呈し、胎土に長石を含む。内面には断面半円形のカエリが付されている。外面は天井部からの傾斜が、カエリのところで一旦緩くなって口縁に至る。残存破片は内外面ともロクロナデ調整されている。

SK 19 (第96図)

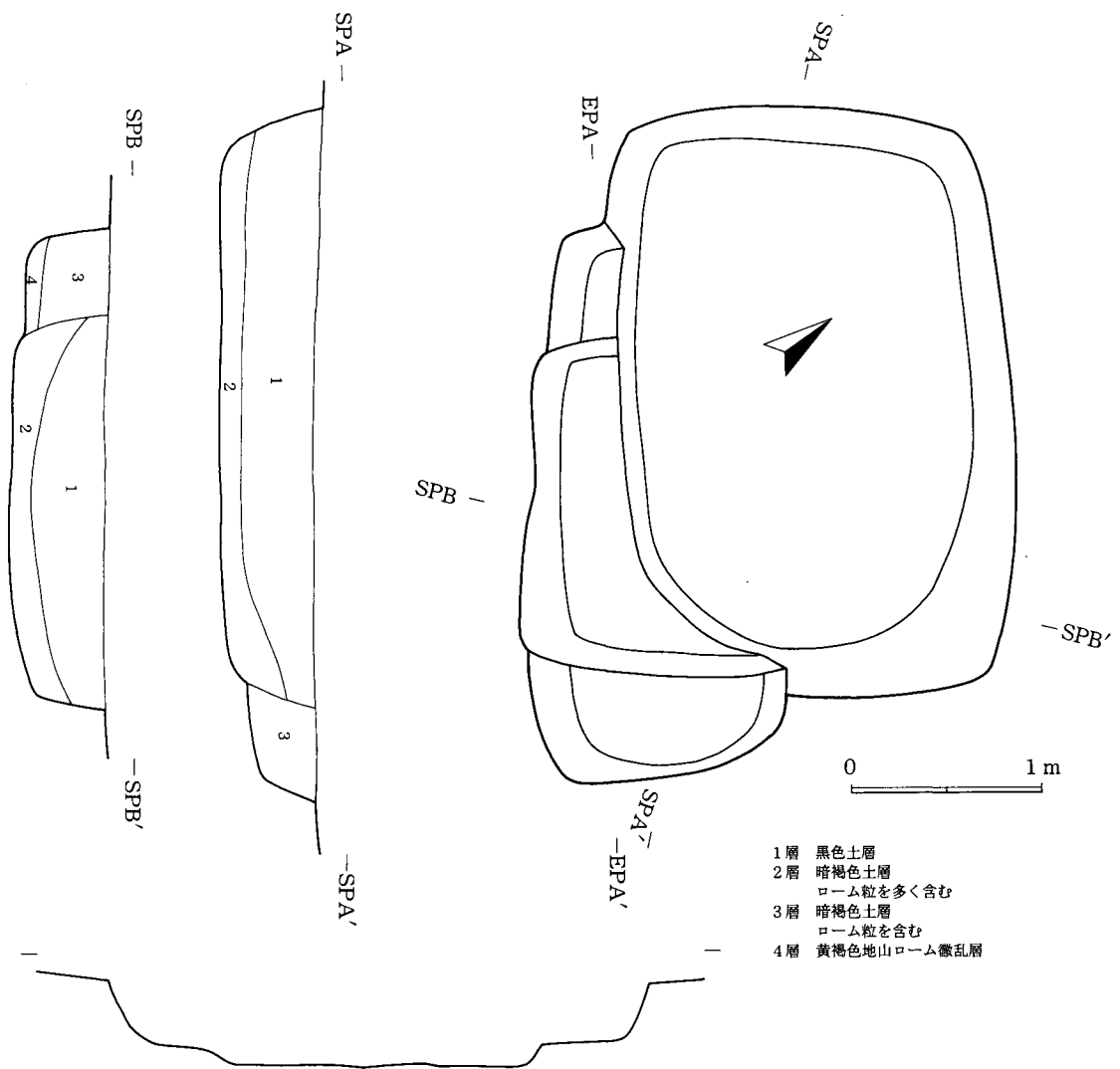
SK 18の東方に位置する。3基の長方形土坑の複合である。この中では最大のものが最も新しく、南側の2基を切っている。南側の2基は、長方形土坑の中央に第3の土坑が交錯しているが、その新旧関係は不明である。最大の土坑は1.9m×3.0mで、深さ50cm、南部の長方形土坑は1.3m×2.9mで、深さ37cm、第3の土坑は1辺1.6m、深さ40cmである。いずれの土坑も坑底は平坦で、遺物は出土していない。



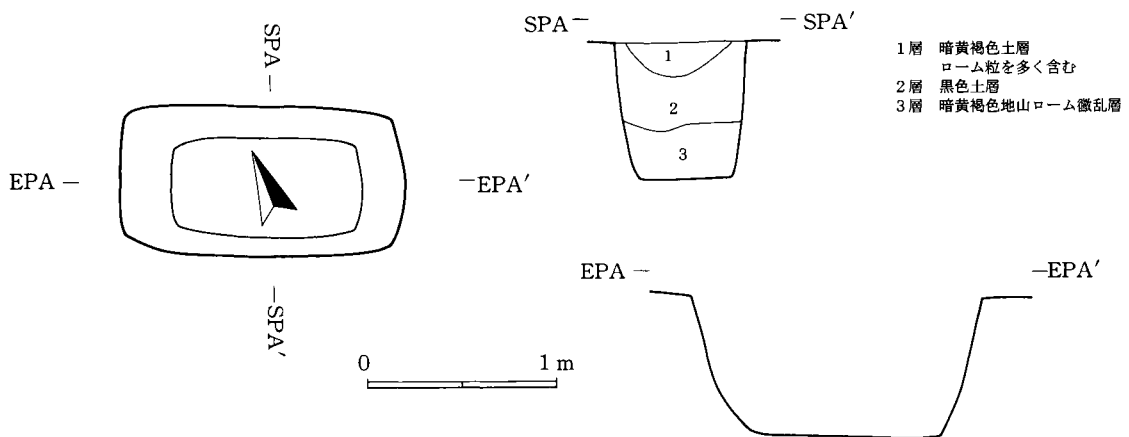
第94図 SK 16・SK 17 遺構実測図



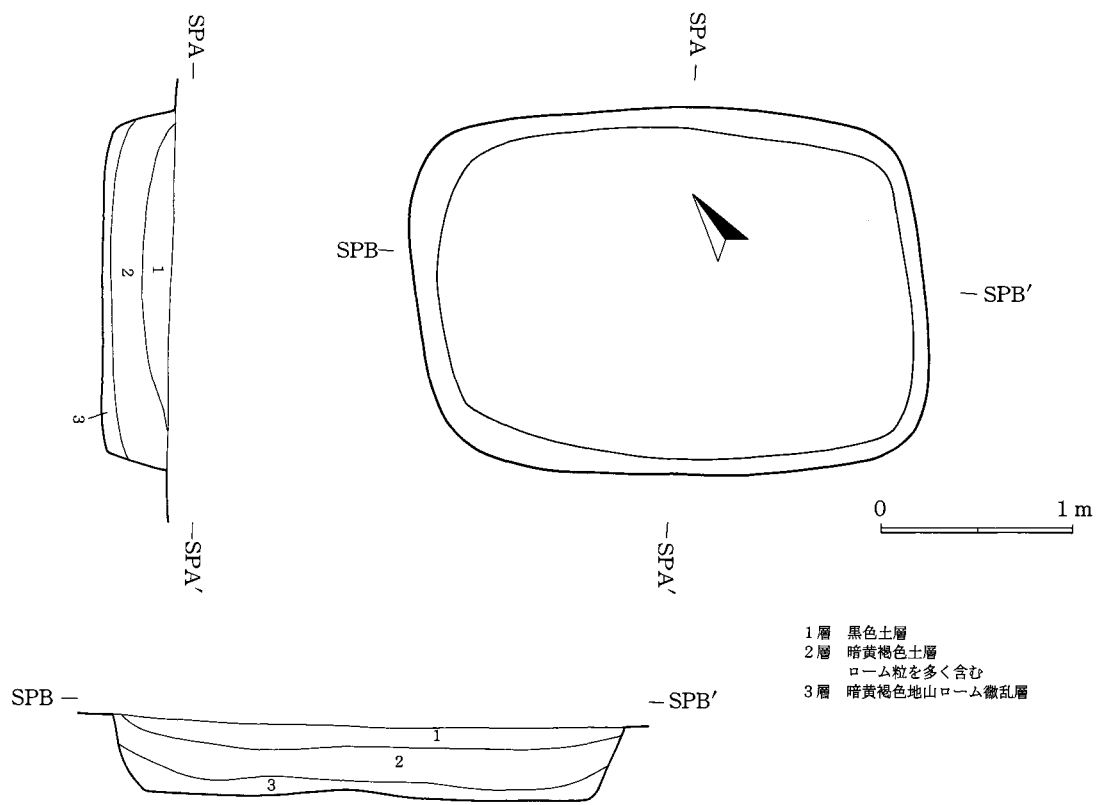
第95図 SK 18 遺構・遺物実測図



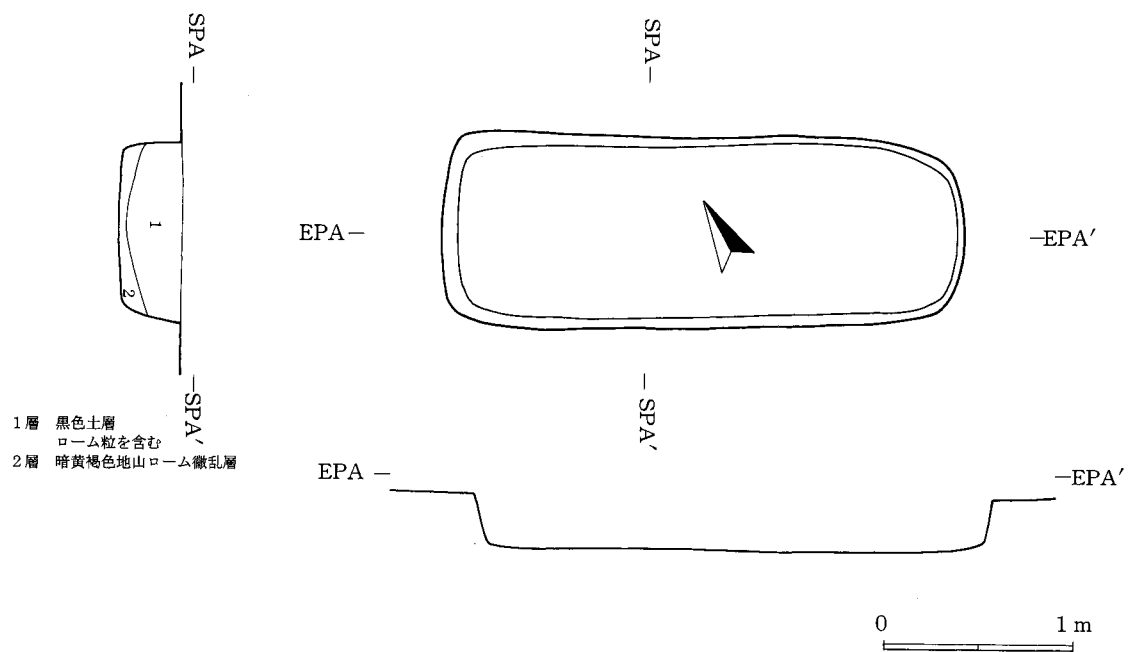
第96図 SK 19 遺構実測図



第97図 SK 20 遺構実測図



第98図 SK 21 遺構実測図



第99図 SK 22 遺構実測図

SK 20 (第97図)

SK 19の南西に位置する。0.7m×1.5mの長方形プランで、深さ70cmある。遺物は出土していない。

SK 21 (第98図、図版26)

SK 16・SK 17の南に位置する。南東のSK 22・SK 23とともに列を組んで並んでいるように見える。1.9m×2.6mの長方形プランで、深さ55cmある。坑底はやや凹凸が見られる。覆土中層は人為的埋土である。遺物は出土していない。

SK 22 (第99図)

SK 21の南東に位置する。1.0m×2.8mの長方形プランで、深さ30cmある。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 23 (第100図)

SK 22の南東に位置する。1.1m×3.2mの隅丸長方形プランで、深さ32cmある。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 24 (第101図、図版26)

D10区の南部に所在する。東側をSI 44に切られている。短径1.3m、長径1.9mの略楕円形プランで、深さ1.0mある。坑底は平坦で、小ピットが1基掘られている。遺物は出土していない。

SK 25 (第102図)

SK 24の南東に隣接し、東側は調査区外に出ている。長方形プランになると思われ、確認された1辺は2.3mである。深さは36cmある。覆土は人為的な埋土である。遺物は出土していない。

SK 26 (第103図、図版26)

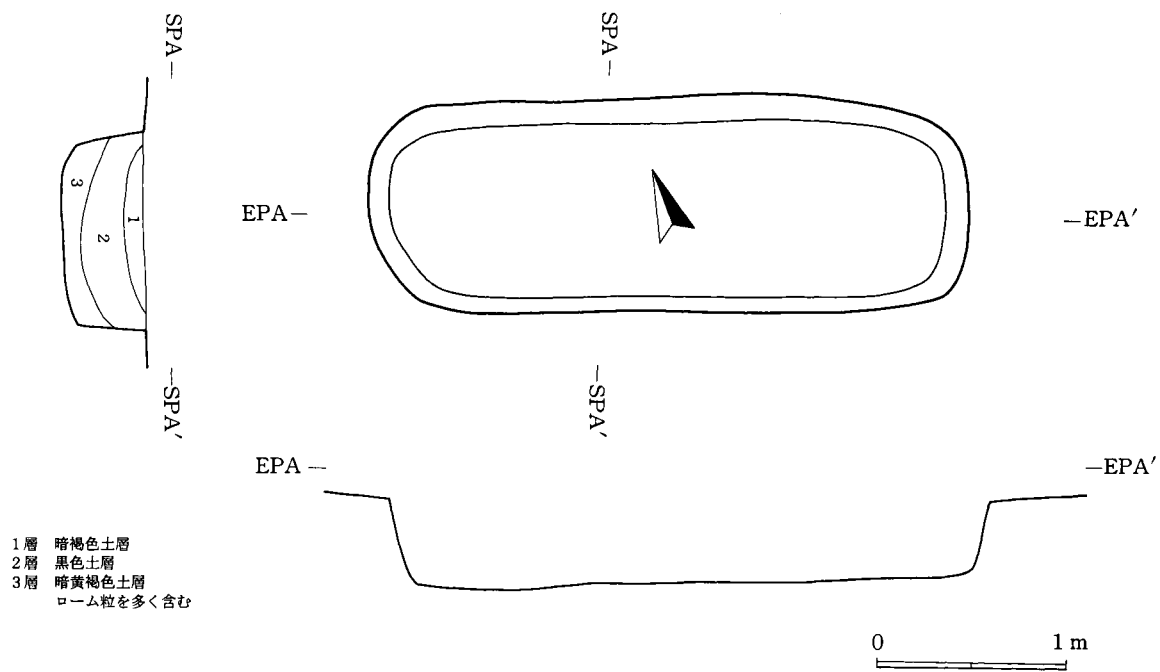
SK 25の西方に位置する。南側でSI 43を切っている。1.8m×2.4mの隅丸長方形プランで、深さは40cmある。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 27 (第104図)

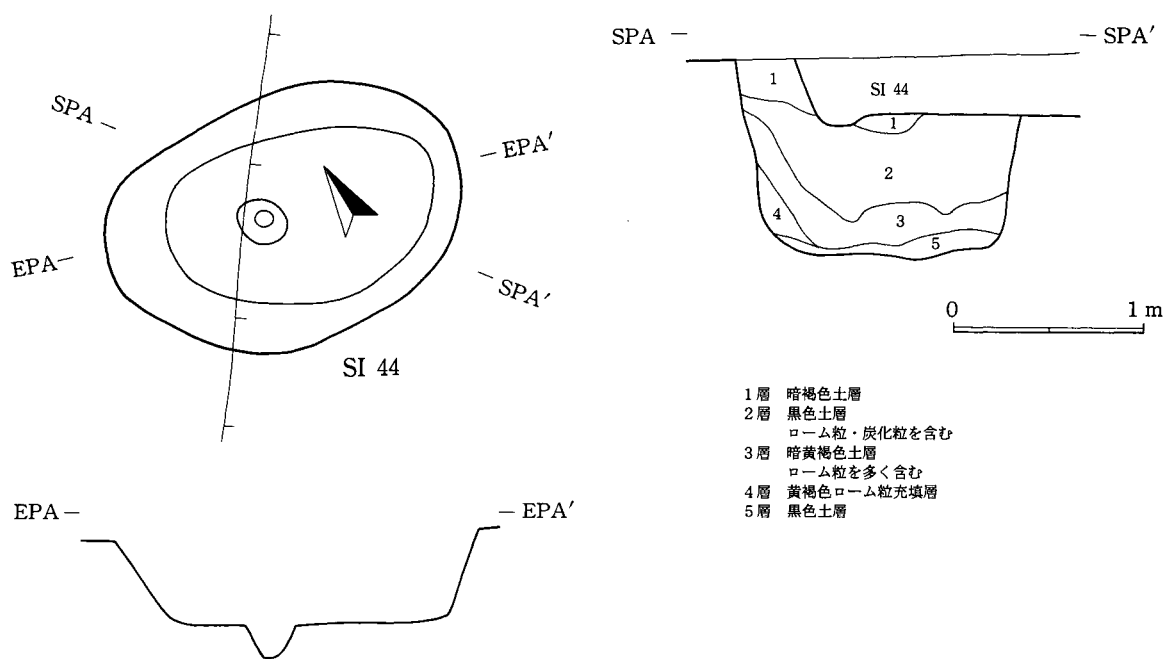
SK 26の南東に位置する。0.7m×1.2mの略長方形プランで、深さは20cmある。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

SK 28 (第104図)

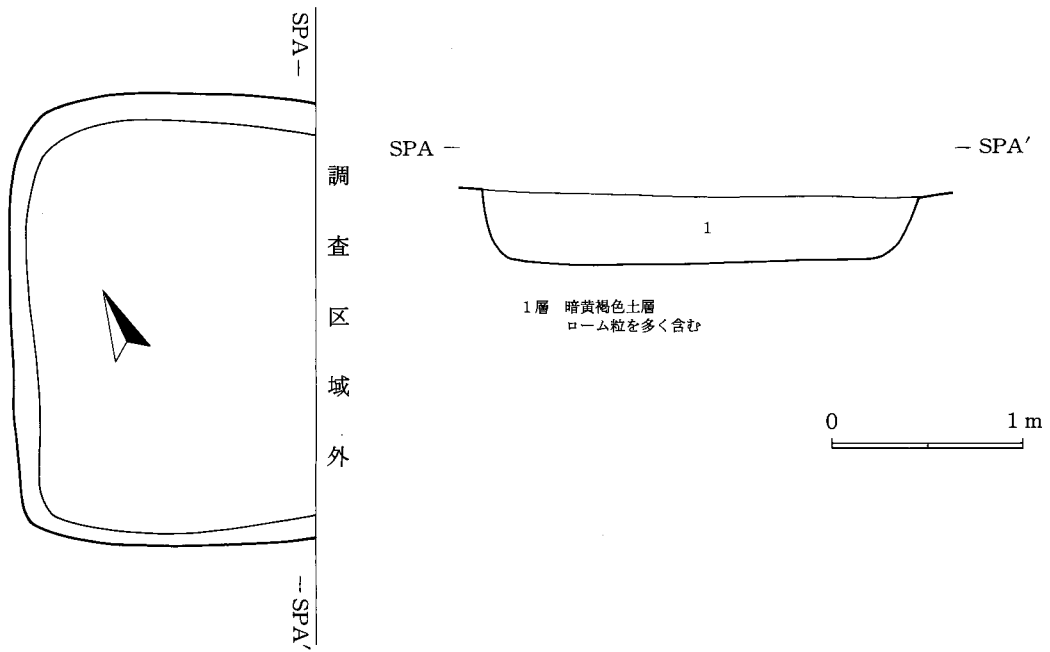
SK 27の南東に位置する。東側が調査区外に出ている。隅丸長方形プランをとると思われ、確認された1辺は1.2m、深さ90cmを計る。坑底は平坦である。覆土の状況は、北側から人為的に埋め戻した様子を示している。遺物は出土しなかった。



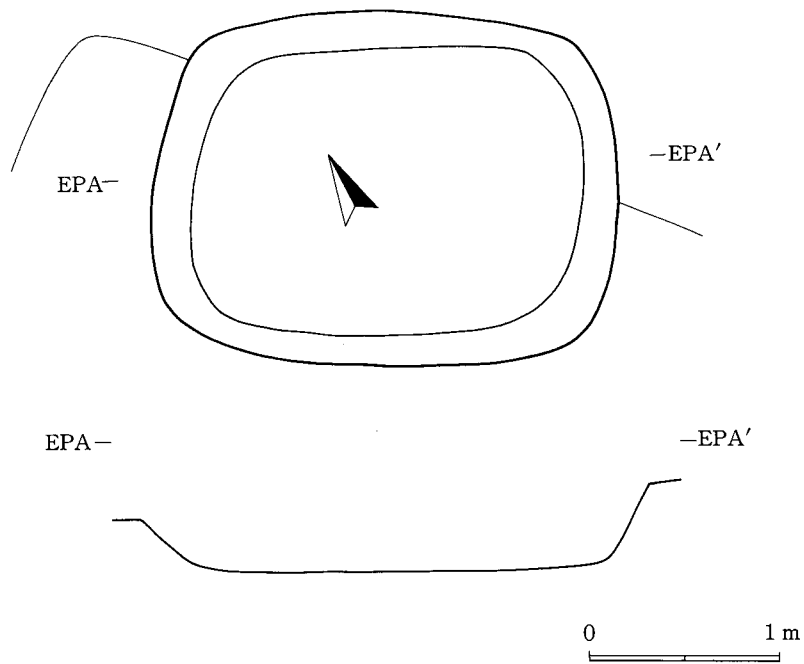
第100図 SK 23 遺構実測図



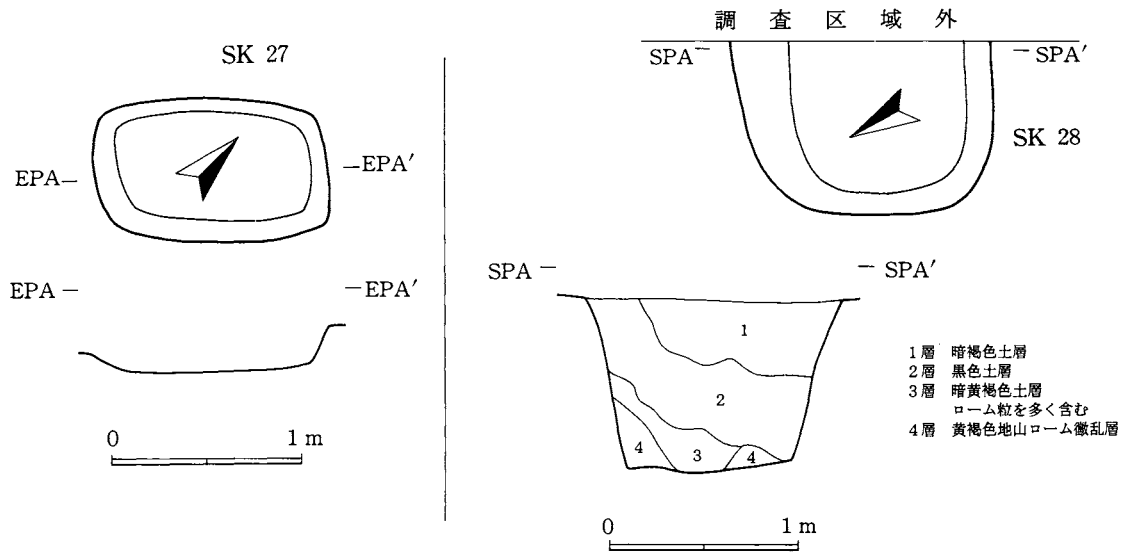
第101図 SK 24 遺構実測図



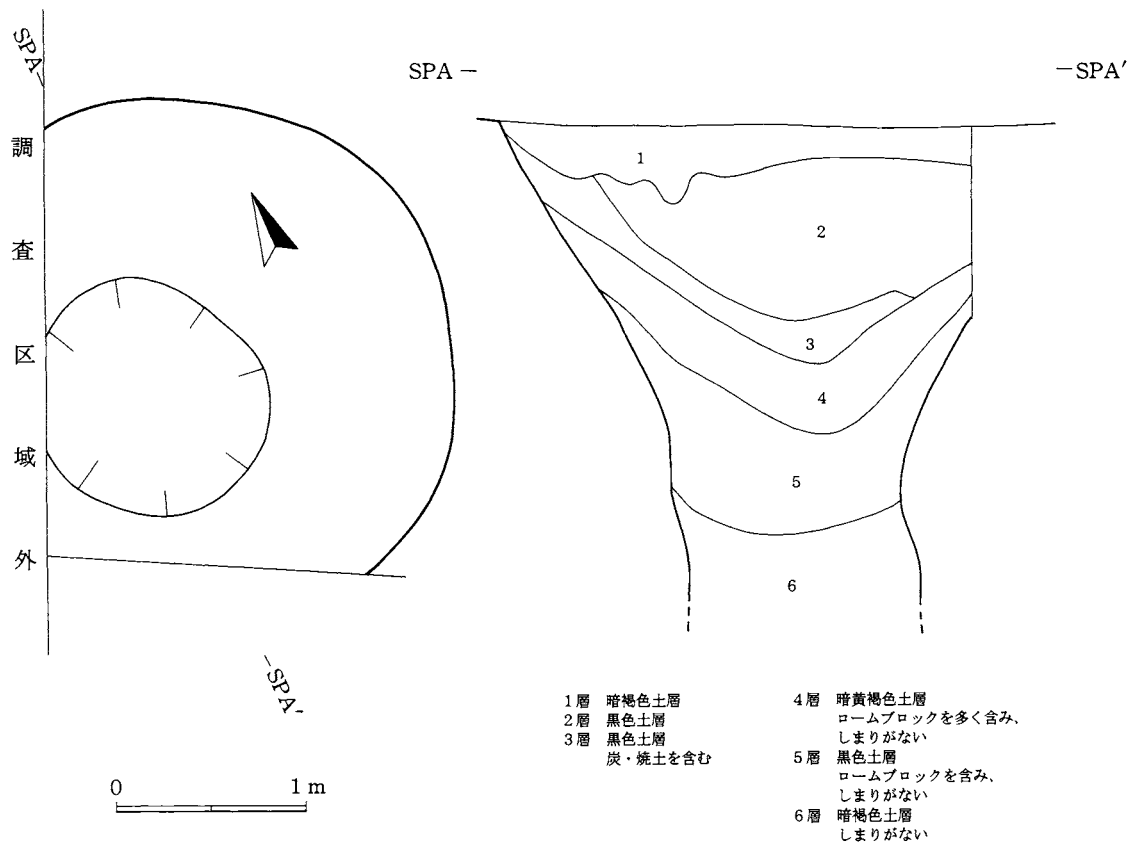
第102図 SK 25 遺構実測図



第103図 SK 26 遺構実測図



第104図 SK 27・SK28 遺構実測図



第105図 SK 29 遺構実測図

SK 29 (第105図)

C11区の北部に所在する井戸跡である。西側が調査区外に出ている。直径2.7m以上の略円形プランを呈すると思われる。深さは最深部まで確認できなかったが、遺構確認面下1.5mまでは挿り鉢状に次第に狭くなるが、それ以下は直径1.2mの一定の大きさを掘り下げられている。覆土は人為的な埋土である。遺物は出土していない。

SK 30 (第106図、図版26、図版36)

SK 29の南方に位置する陥し穴である。短径2.8m、長径4.1mの不整楕円形プランで、深さ2.1mを計る。遺構確認面下60cmまでは一様に斜めに掘り下げられるが、それ以下では4辺をはっきり区画しながら次第に幅を狭くしている。坑底は一段低くして、18cm×106cmの長方形に仕上げている。黒色土とローム包含土を交互に入れて埋め戻している。

1は染め付け茶碗で、覆土下層から出土した。口径8.5cm、器高4.7cm、台径3.3cmを計る。底部は厚く、体部は内湾しながら、余り開かず立ち上がる。台部は直立し、台裾が細くなっている。白地に藍色で文様が描かれ、内外面とも透明釉がかかっている。残存範囲で文様は2様あり、図示左手は何らかの花影、右手は五三の桐をあしらっている。

SK 31 (第107図、図版27)

調査区南端のB14区に所在する。西側の浅い土坑と東側の瓢形土坑との複合である。北側はSD 20と交錯している。東土坑は深さ10cm程である。西側土坑はその形に対応して、南が浅く、北が深くなっている。全長約3.9m、深さ70cmを計る。遺物は出土していない。

SK 32 (第108図)

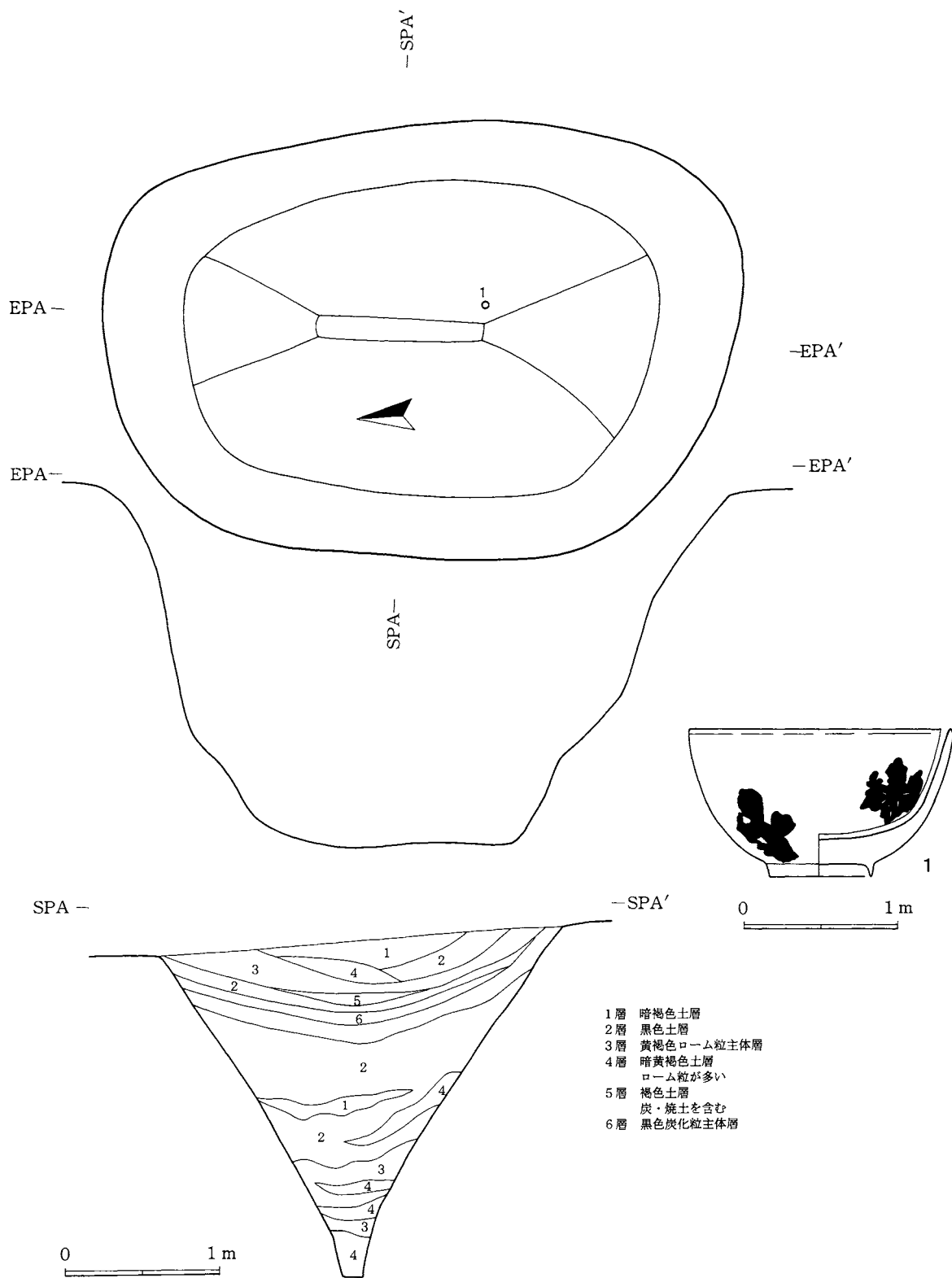
SK 31の西に隣接し、北側の一部がSD 20と交錯している。不整形なプランで、長さ2.6m、幅1.5m、深さ20cmを計る。坑底は凹凸があり、小ピットが点在している。遺物は出土しなかった。

SK 33 (第109図、図版27、図版36)

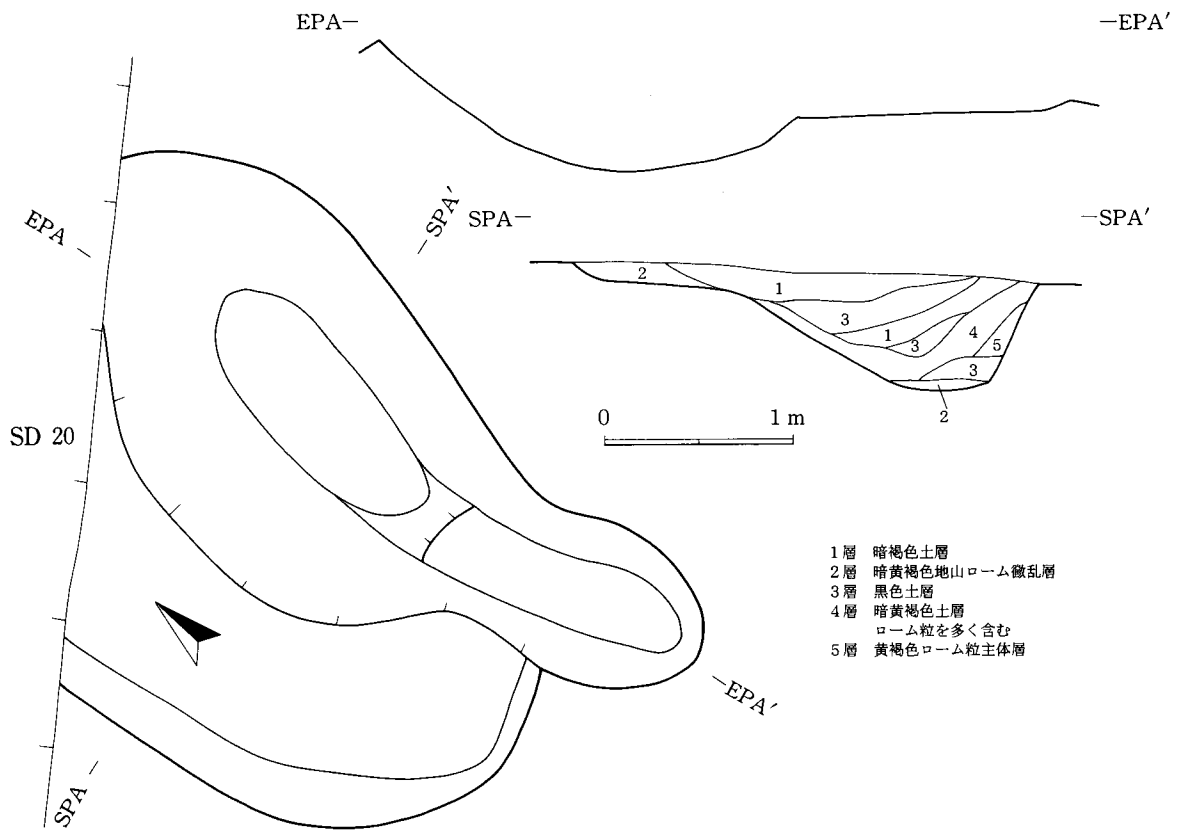
E7区の南部に所在する。短径0.9m、長径1.1mの楕円形プランで、深さ58cmを計る。覆土の状況は4層が遺物包含層で、その上を3層で埋められている。

遺物はすべて3層以下から出土した。

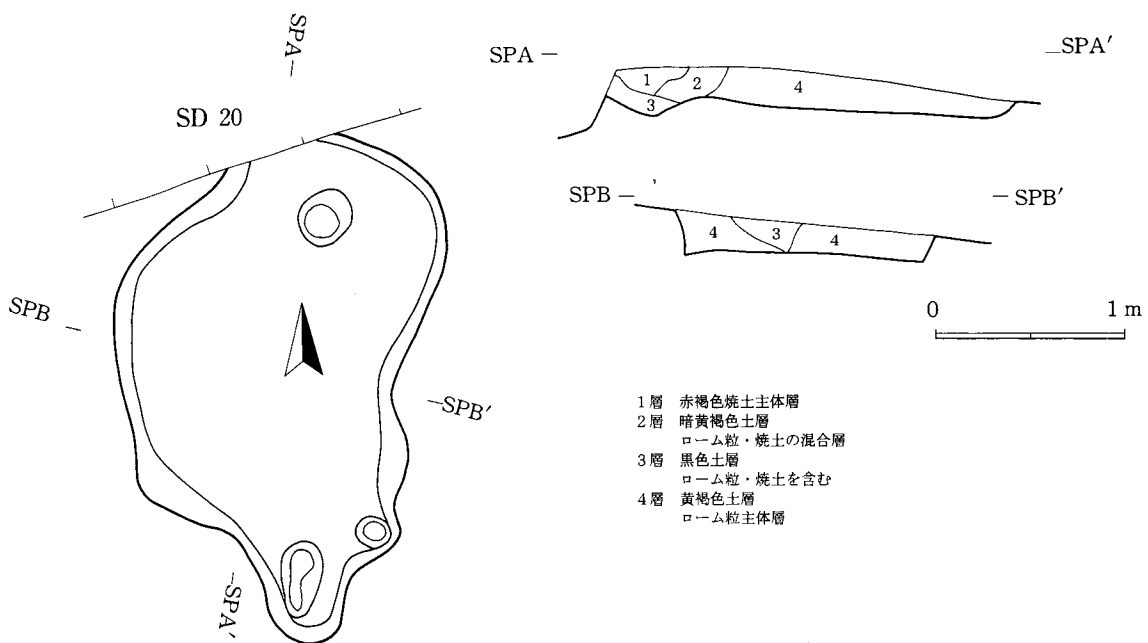
1～11は杯である。1は口径12.0cm、現高3.4cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部内側は横ナデで強く絞められる。体部外面はヘラケズリされている。2は口径12.3cm、現高2.3cmで、暗褐色を呈する。大きく開いた体部は、口縁で僅かに内屈する。体部外面はヘラケズリされ、口縁は内外面に強く横ナデされている。3は口径13.8cm、現高3.8cmで、暗褐色を呈する。体部は内湾気味に開き、口縁は単純に丸みを帯びる。体部外面はヘラケズリされている。4は口径10.8cm、器高3.3cm、底径6.0cmで、暗褐色を呈する。底部周縁は稜を残し、体部は内湾気味に大きく開く。口縁は肥厚して、単純に丸くなる。体部外面はヘラケズリされ、底部外面は手持ちヘラケズリされている。5は口径13.8cm、現高4.5cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部破片だが、底部との接合部がかなり厚みが



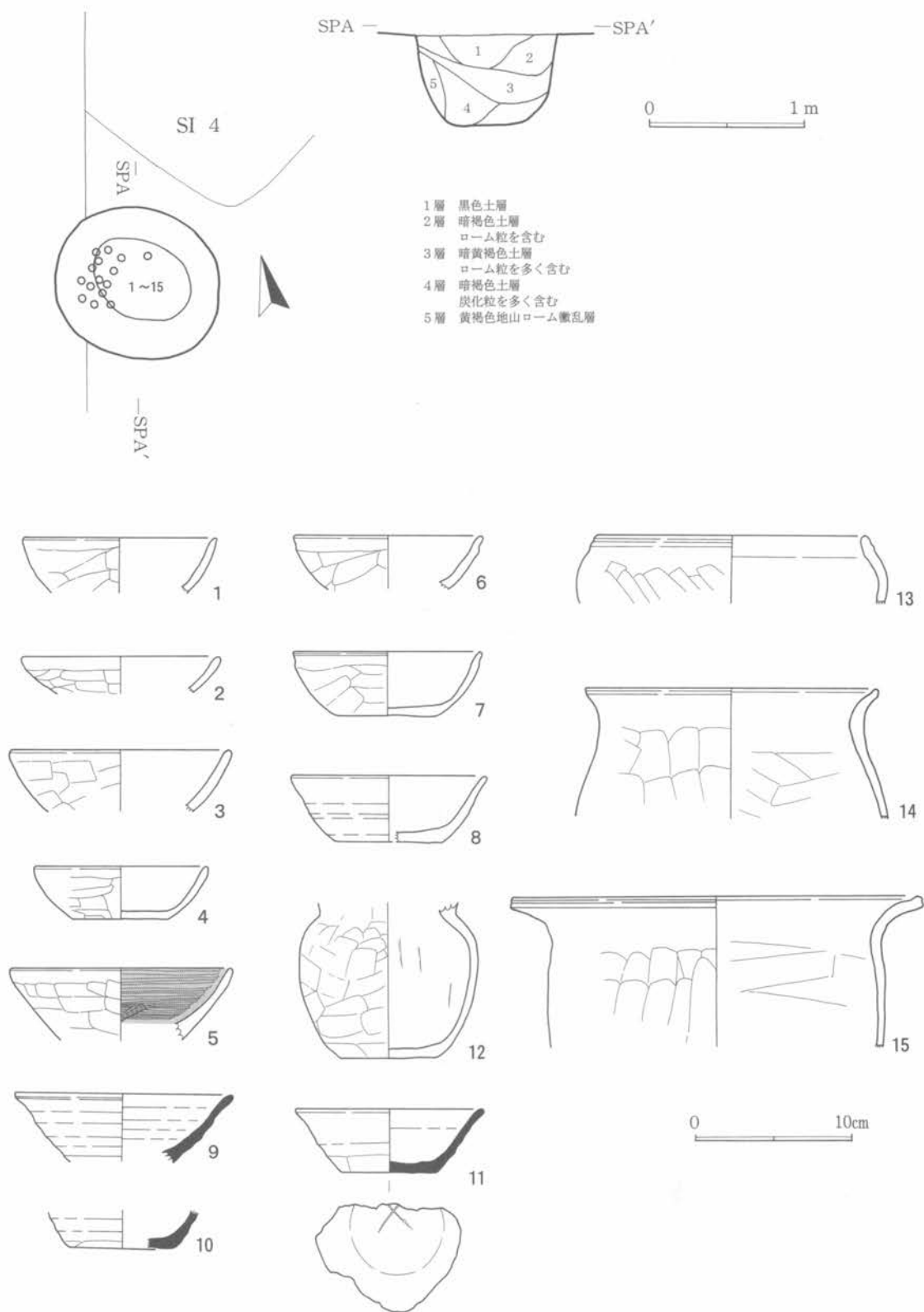
第106図 SK 30 遺構・遺物実測図



第107図 SK 31 遺構実測図



第108図 SK 32 遺構実測図



第109図 SK 33 遺構・遺物実測図

あるので、底部の厚みも想像できる。体部は直線的に開き、口縁は肥厚して、単純に丸くなる。体部外面はヘラケズリされ、内面は細い工具によって横方向にヘラミガキされている。6は口径11.8cm、現高3.3cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は横ナデで絞められて、外反している。外面はヘラケズリされている。7は口径11.8cm、器高4.0cm、底径6.4cmで、赤褐色を呈する。底部周縁はかすかに稜を残し、体部は内湾して立ち上がって、口縁は強く横ナデされて外反している。体部外面はヘラケズリ、底部外面は手持ちヘラケズリされている。9は口径12.3cm、器高4.1cm、底径6.8cmで、赤褐色を呈する。底部周縁は稜を残し、体部は緩いS字状に開いている。体部外面はロクロ目を残すが、内面はロクロナデによって消されている。底部外面は手持ちヘラケズリされている。9～11は須恵器である。9は口径13.8cm、現高4.4cmで、明灰色を呈し、胎土に雲母を含む。体部は直線的に大きく開き、口縁で肥厚する。体部外面にはロクロ目がよく残るが、内面はロクロナデによって緩く凹凸している。10は現高2.2cm、底径6.6cmで、明灰色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。底部周縁は面取りされて稜を残さず、体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面はロクロ目が強いが、内面はロクロナデで平滑になっている。底部外面は手持ちヘラケズリされている。11は口径11.7cm、器高4.0cm、底径6.0cmで、明灰色を呈し、胎土に雲母を含む。底部周縁は稜を残し、体部は下半は直線的に大きく開き、上半は外反する。体部外面はロクロ目を残し、下端はヘラケズリされる。内面はロクロナデによって平滑になっている。底部外面は回転ヘラ切り後無調整で、「×」のヘラ描きがある。

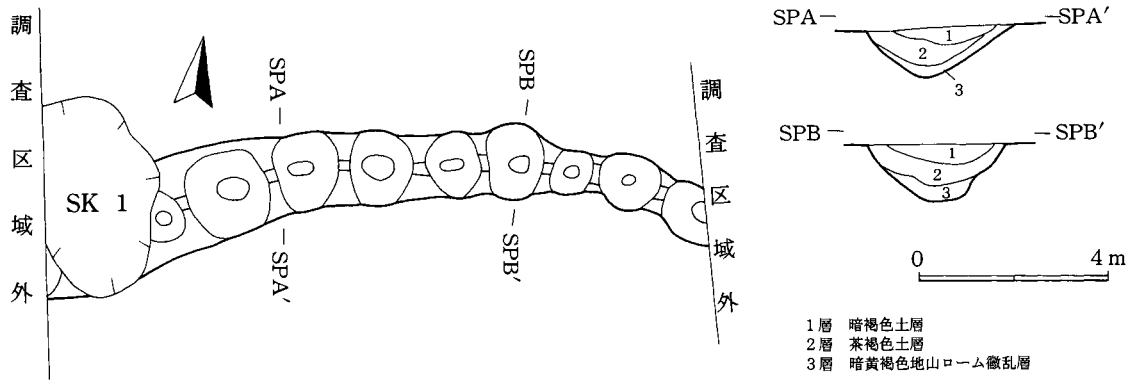
12・14・15は甕である。12は現高9.7cm、底径6.0cmで、暗褐色を呈する。胴部は肩が張って最大径となり、比較的大きい底部へ移行する。口縁は欠失しているが、頸部断面の厚さから判断して、強く外反する短い口縁になるものと思われる。胴部外面は上位が縦方向、中位以下が横方向にヘラケズリされている。14は口径18.4cm、現高8.0cmで、暗褐色を呈する。直立気味の頸部から外反する口縁頂に口唇部を成形している。胴部はなで肩で、最大径が中位近くにくる器形である。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。15は口径26.0cm、現高9.3cmで、赤褐色を呈する。口縁は強く外反し、口縁頂に口唇部を成形する。胴部は肩を形成せず、最大径が頸部直下にくる長胴形である。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。

13は鉢で、推定口径16.8cm、現高4.2cmで、赤褐色を呈する。口縁は内傾し、外面には沈線が2条巡っている。胴部は口縁直下に最大径を持つ、張りのある器形になる。胴部外面は斜めにヘラケズリされている。

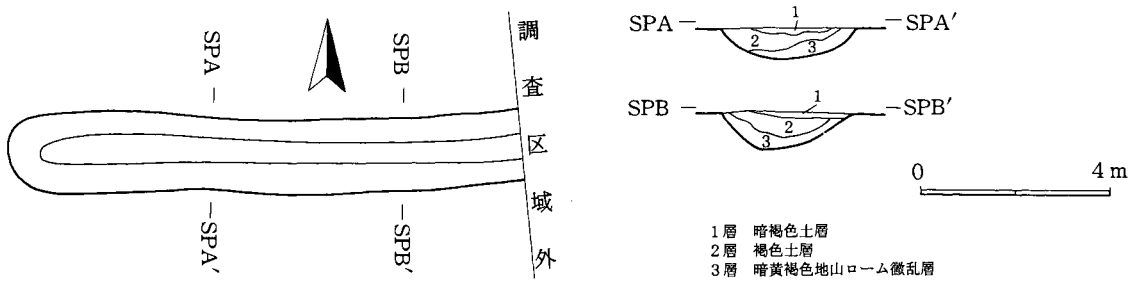
第6節 溝跡・柵跡と出土遺物

SD 1 (第110図、図版27)

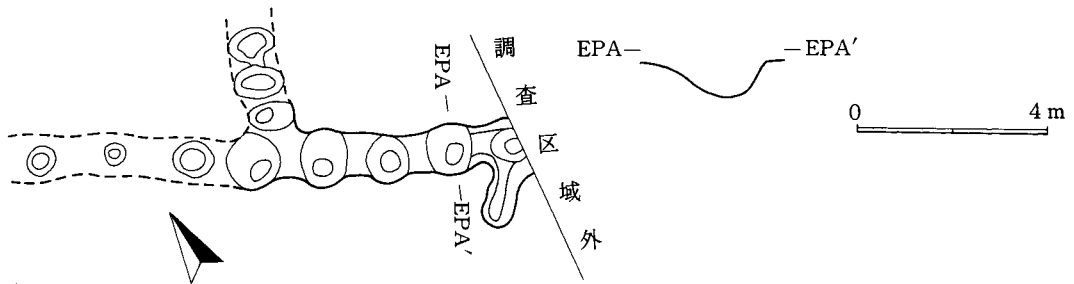
調査区最北端E4区北部に所在する。W-Eの軸線を持つ柵跡であるが、東部では南を指して若干曲がっている。西部ではSK 1を攪乱している。東西両端は調査区外に続いている。あらかじめ布掘りされた中に柱穴が掘られている。柵における布掘りの意味は根切りではなく、柵を敷設するコースの指定であろう。平均柱心間距離1.5m、確認長14.1m、深さ1.2mを計る。遺物は出土していない。



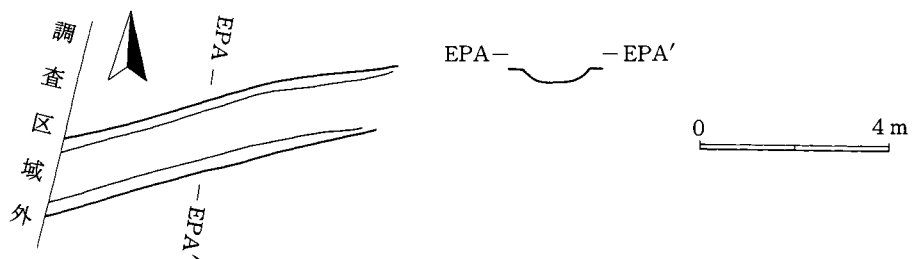
第110図 SD 1 遺構実測図



第111図 SD 2 遺構実測図



第112図 SD 3 遺構実測図



第113図 SD 4 遺構実測図

SD 2 (第111図、図版27)

E4区南部に所在する。W-Eの軸線を持つ溝跡である。ほぼ直進している。東端は調査区外に続いている。確認長11.0m、深さ70cmを計る。遺物は出土していない。

SD 3 (112図、図版27)

E6南部からE7区北部にかけて所在する。NW-SEの軸線の布掘りを伴う柵跡である。途中で北東方向へ同様な柵跡を分枝している。東西両端は調査区外に続いている。西側は確認深度が深かったため、布掘り部分が既に削平されていた。平均柱心間距離1.4m、確認長10.8m、深さ80cmを計る。遺物は出土していない。

SD 4 (第113図、図版27)

E7区北部に所在する。ENE-WSWの軸線を持つ溝跡である。東端は自然消滅し、西端は調査区外に続いている。確認長7.8m、深さ25cmを計る。遺物は出土していない。

SD 5 (第114図、図版28)

E7区中央に所在する。W-Eの軸線を持つ溝跡である。東端はL字状に屈折し、西端は調査区外に続いている。確認長13.2m、深さ40cmを計る。遺物は出土していない。

SD 6 (第114図、図版28)

E7区南部に所在する。W-Eの軸線の布掘りを伴う柵跡である。東部で北へやや曲がっている。南側ではSD 7・SD 8が併走している。東西両端は調査区外に続いている。平均柱心間距離1.3m、確認長13.5m、深さ50cmを計る。

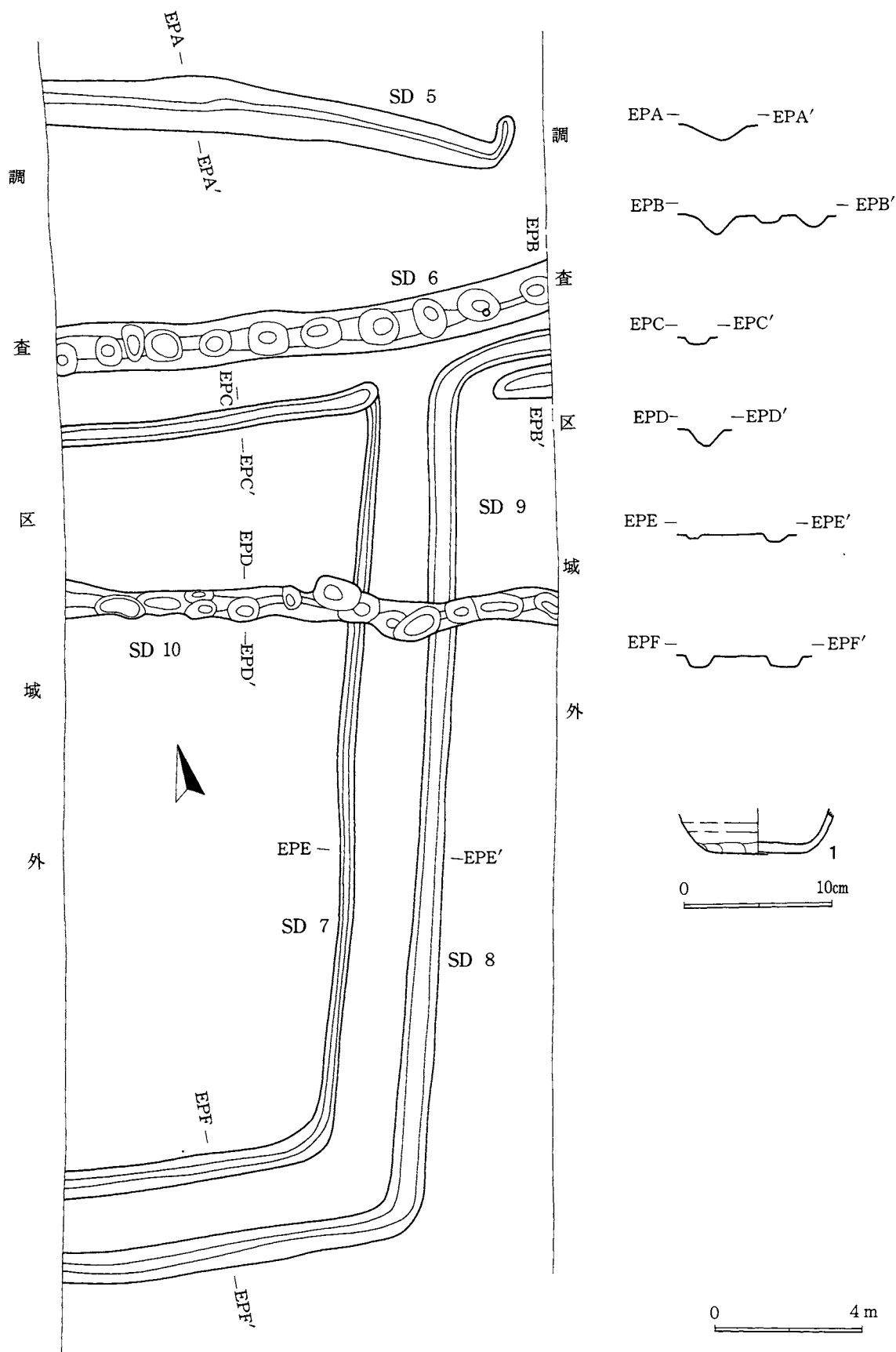
1は杯で、東部の柱穴内から出土した。現高2.9cm、底径6.6cmで、赤褐色を呈する。底部は僅かに上げ底になり、外縁の稜をかすかに残している。体部は内湾しながら穏やかに立ち上がる。体部外面はロクロ目を残し、下端はヘラケズリされている。内面はロクロナデで調整される。底部外面は回転糸切り後、周囲を手持ちヘラケズリしている。

SD 7 (第114図、図版28)

E7区南部からE8区北部にかけて所在する。方形区画溝跡の一部で、長辺に相当する部分はNNE-S SWの軸線を持つ。北側にはSD 6が併走し、東・南両側にはSD 8が併走している。西端は調査区外へ続いている。この溝によって区画された方形の1辺は19.0mである。溝自体の確認長は34.6m、深さは北部20cm、中央部10cm、南部30cmを計る。遺物は出土していない。

SD 8 (第114図、図版28)

E7区南部からE8区北部にかけて所在する。鍵の手状に屈折する溝跡で、東西両端は調査区外へ続いている。北側でSD 6が併走し、西側でSD 7が併走している。確認範囲における長辺は22.5mで、確認全長35.0m、深さは中央部で20cm、南部で30cmを計る。遺物は出土していない。



第114図 SD 5~SD 10 遺構・遺物実測図

SD 9 (第114図)

E7区に所在する。北側にSD 8が併走している。東端は調査区外へ続いている。確認長1.6m、深さ25cmを計る。遺物は出土していない。

SD 10 (第114図、図版29)

E7区に所在する。W-Eの軸線を持つ布掘りを伴う柵跡である。SD 7・SD 8と交錯している。柱穴間隔が不規則で、重複するものもあるので、建て替えを経ているであろう。両端は調査区外へ続いている。確認長13.3m、深さ40cmを計る。遺物は出土していない。

SD 11 (第115図)

E8区中央部に所在する。W-Eの軸線を持つ溝跡である。緩く湾曲しており、西端は自然消滅し、東端は調査区外へ続いている。溝内には小ピットが不規則に点在している。確認長10.6m、深さ40cmを計る。遺物は出土していない。

SD 12 (第116図、図版29)

D9区からE9区にかけて所在する。W-Eの軸線を持つ溝跡である。南側にSD 13・SD 14が併走している。東端は調査区外へ続いている。確認長7.8m、深さ20cmを計る。遺物は出土していない。

SD 13 (第116図、図版29)

D9区からE9区にかけて所在する。W-Eの軸線を持つ布掘りを伴う柵跡である。北側にSD 12、南側にSD 14が併走している。西側では柱穴列が消滅し、単なる溝になっている。両端は調査区外へ続いている。平均柱心間距離1.4m、確認長14.0m、深さ50cmを計る。遺物は出土していない。

SD 14 (第116図、図版29)

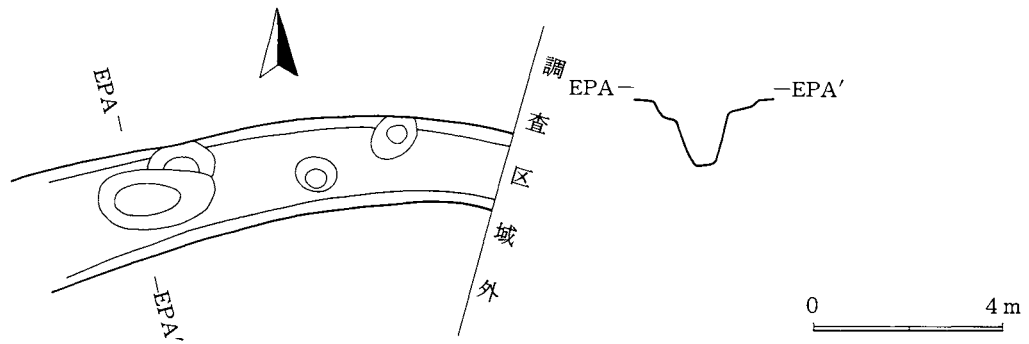
D9区からE9区にかけて所在する。W-Eの軸線を持つ溝跡である。北側にSD 12・SD 13が併走している。西側でやや湾曲し、細くなっている。両端は調査区外へ続いている。確認長14.2m、深さ40cmを計る。遺物は出土していない。

SD 15 (第117図)

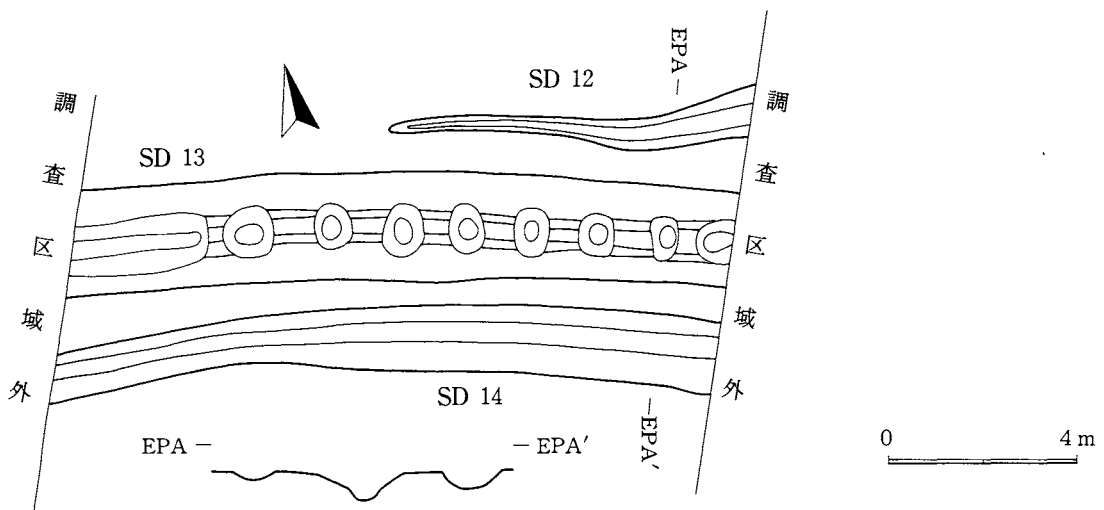
D9区南部に所在する。東端はSK 12と交錯し、西端は調査区外へ続いている。NW-SEの軸線を持つ溝跡で、やや湾曲している。2基の小ピットを包含している。確認長12.4m、深さ40cmを計る。遺物は出土していない。

SD 16 (第118図)

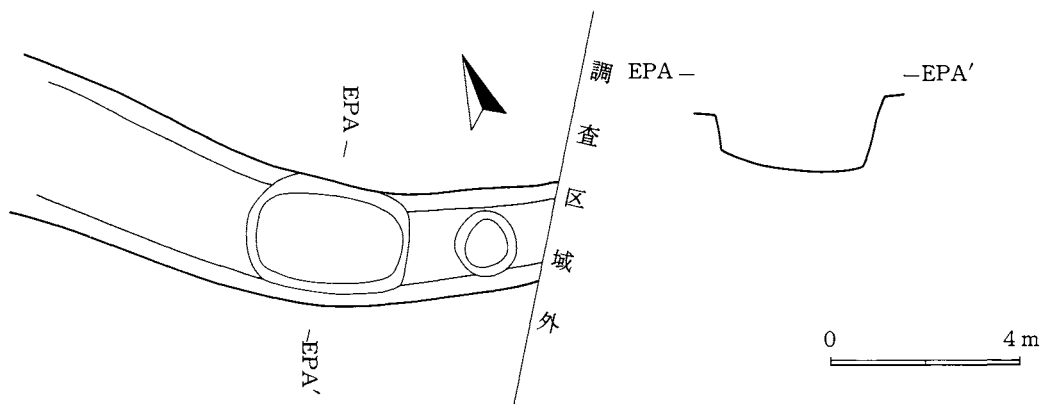
D10区北部に所在する。NW-SEの軸線を持つ布掘りを伴う柵跡である。建て替えを経たもので、柱穴は位置が不規則になっている。西端の延長にSK 21・SK 22が並んでいるが、本遺構との関係は不明である。東端は調査区外へ続いている。遺物は出土しなかった。



第115図 SD 11 遺構実測図



第116図 SD 12~SD 14 遺構実測図



第117図 SD 15 遺構実測図

SD 17 (第119図)

C11区からD11区にかけて所在する。NW-SEの軸線を持つ溝跡である。南側にSD 18が併走している。西端はSK 29と交錯し、東端は調査区外へ続いている。途中で北側の幅が広くなり、南側では併走する小溝を分枝している。確認長11.7m、深さ70cmを計る。

1は天目茶碗で、現高2.2cm、台径4.1cmを計る。胎土は白色で、微細な黒色粒子が混じる。底部は下ぶくれしているが、ヘラケズリで台部との接合部を調整している。体部外面はヘラケズリされている。台部はほぼ直立し、接地面は平坦に調整されている。体底部内面には茶がかかった黒色釉がかけられている。釉には微細な線状皸(ひだ)が放射状に現れ、その中心には淡緑色の油滴が認められる。

SD 18 (第119図)

C11区からD11区にかけて所在する。NW-SEの軸線を持つ布掘りを伴う柵跡である。北側にSD 17が併走している。両端は調査区外へ続いている。平均柱心間距離1.6m、確認長14.0m、深さ60cmを計る。遺物は出土していない。

SD 19 (第120図)

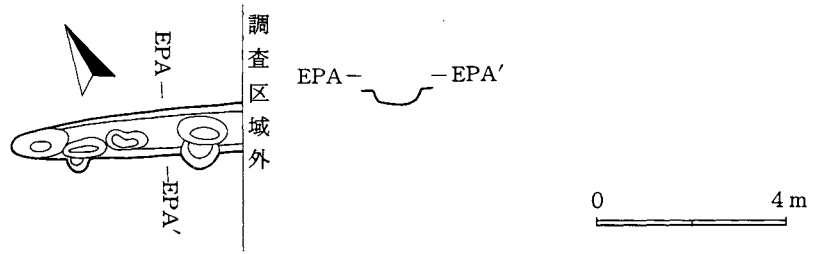
調査区の南部A13区からB13区にかけて所在する。SD 20から派生した溝跡で、NW-SEの軸線を持つ。東端は既に削平されているが、SD 20に接続し、西端は調査区外へ続いている。確認長8.9m、深さ25cmを計る。遺物は出土していない。

SD 20 (第121図、図版29)

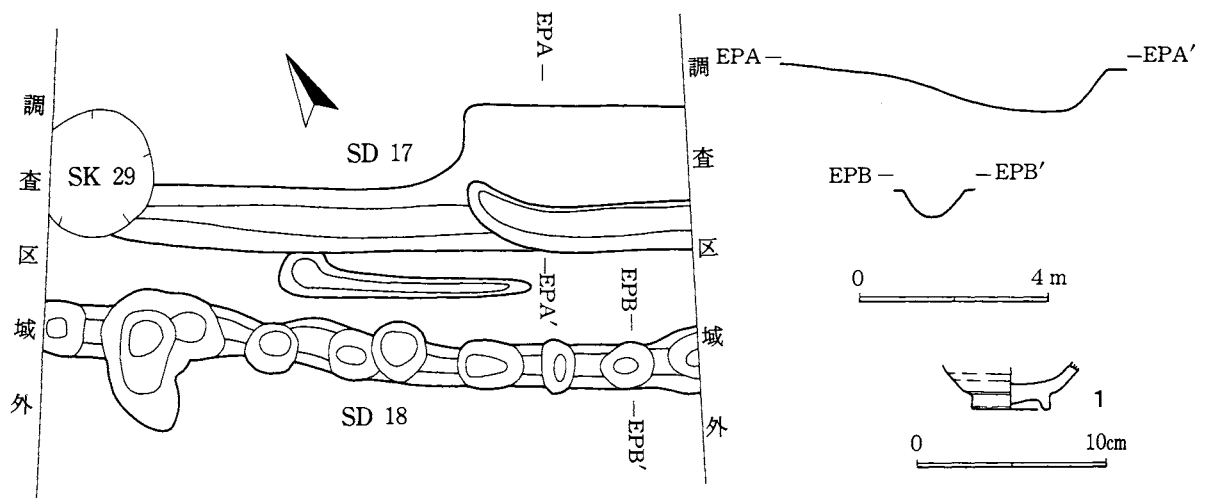
調査区最南端のA14区・B13区・B14区にまたがって所在する。ENE-WSWの軸線を持つ溝跡である。東西両端は調査区外へ続いている。台地縁辺に位置し、等高線に沿って、余り規格的ではなく、やや蛇行気味に掘られている。南側は急角度で落ち込むが、北側は広いノリ面が付けられている。東部にはピットが存在し、ここから北西へSD 19となる溝が派生し、また、南東へSD 21へ接続する溝が分枝している。確認長45.4m、深さ1.1mを計る。台地縁辺部に等高線に沿って掘られていることから、水田を保護する馬蹄形猪垣の一部であろう。遺物は出土していない。

SD 21 (第121図、図版29)

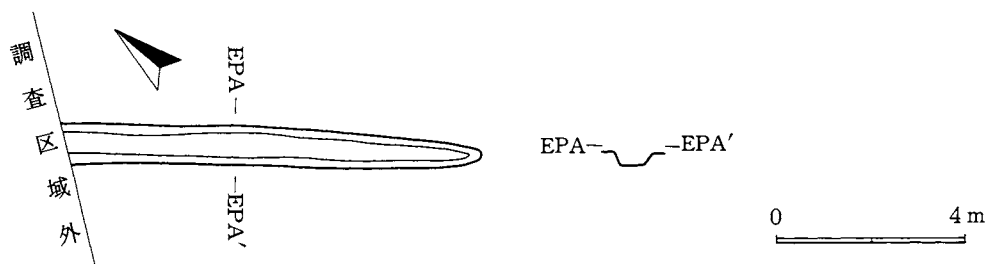
SD 20の南西に位置し、両端は調査区外へ続いている。西部ではSD 20と併走するが、接合部で南方へ屈折して、台地斜面を降りている。斜面部を掘削しているため、南側ではノリ面は見られず、断面が三角形を呈する。SD 20との接合部には、SD 20と対応するようにピットが掘られている。確認長12.8m、北側からの深さ60cmを計る。遺物は出土していない。



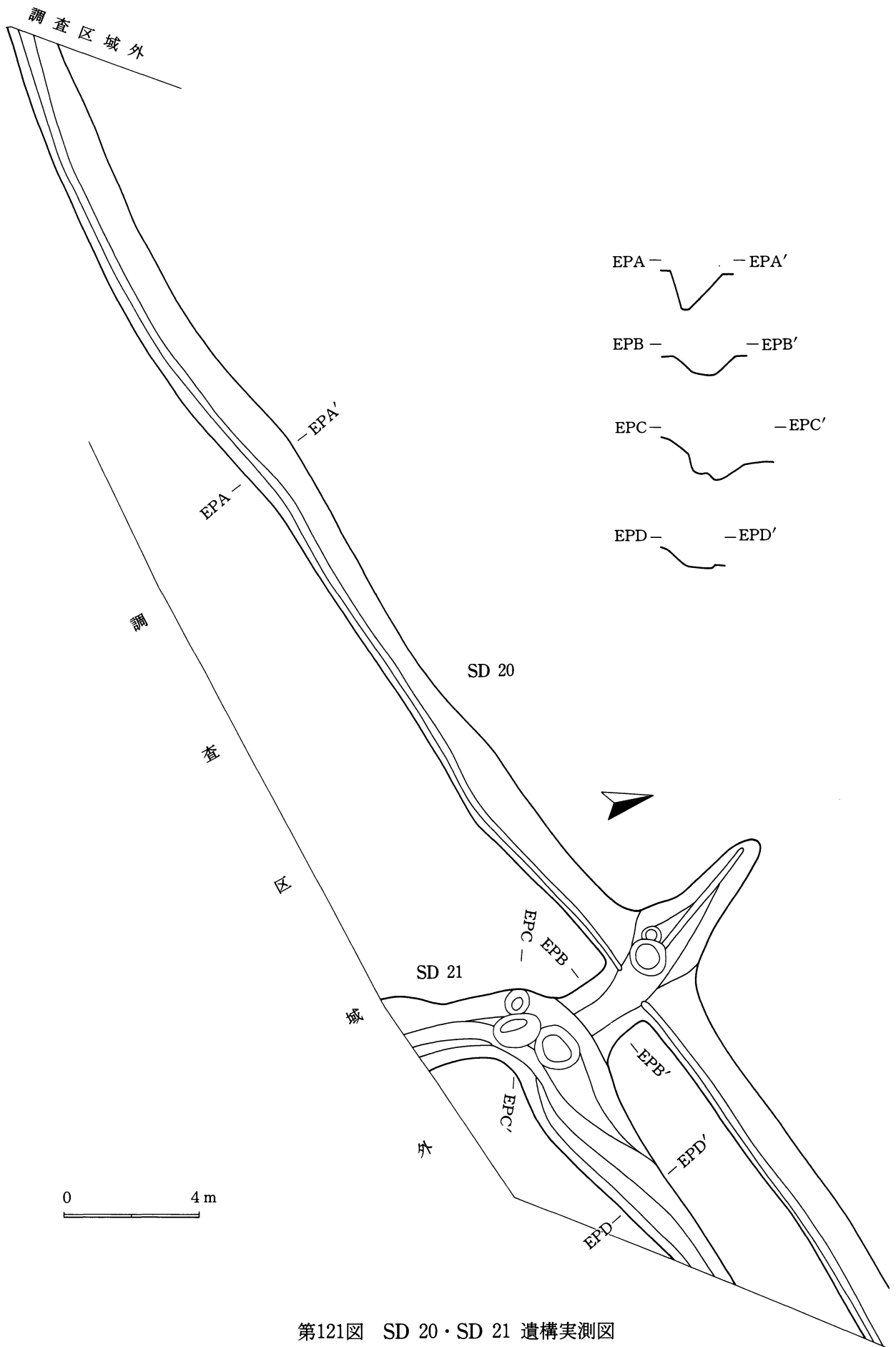
第118図 SD 16 遺構実測図



第119図 SD 17・SD 18 遺構・遺物実測図



第120図 SD 19 遺構実測図



第121図 SD 20・SD 21 遺構実測図

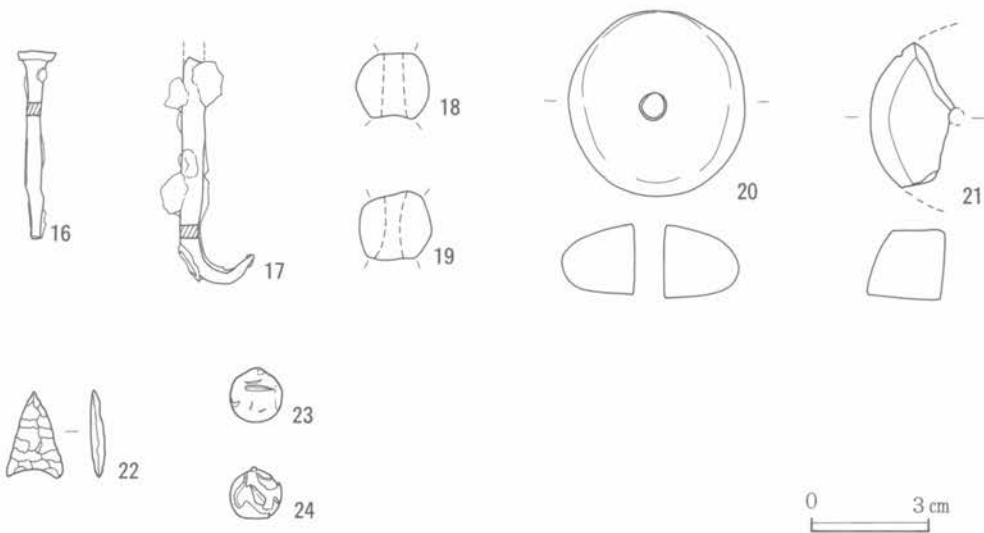
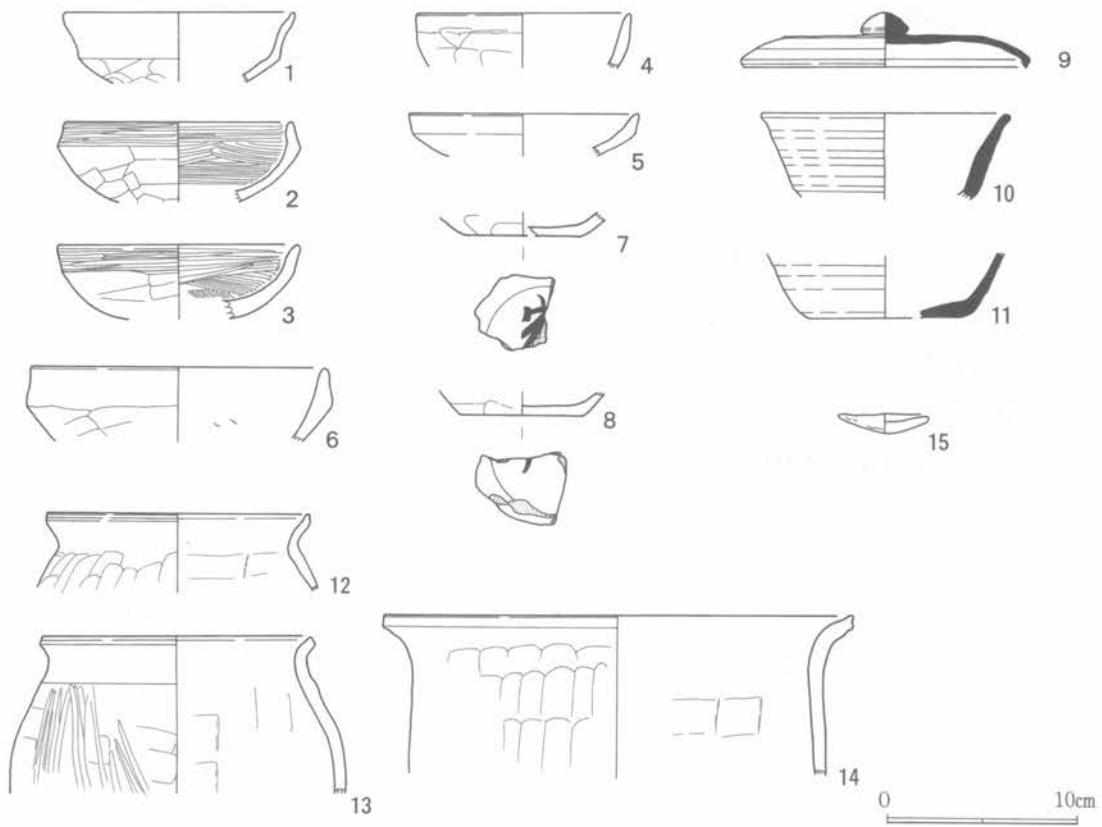
第7節 遺構外出土遺物 (第122図、図版36、図版37)

表土掘削中及び遺構面確認中に検出された、遺構に伴わない出土遺物である。

1～11は杯類である。1は口径11.8cm、現高3.7cmで、暗褐色を呈する。体底部の上端で稜をなして屈折し、深い口縁が外反しながら立ち上がり、口唇部で内傾している。器体の厚みは均質である。体底部外面はヘラケズリされている。C12区から出土した。2は口径11.6cm、現高4.2cmで、暗褐色を呈する。体底部の上端で稜をなして屈折し、口縁は内傾する。口縁部外面は細い工具によってヘラミガキされ、体底部外面はヘラケズリされている。内面は全体にヘラミガキされている。D10区から出土した。3は口径12.4cm、現高3.8cmで、明褐色を呈する。体底部の上端で稜をなして屈折し、口縁は短く外反する。調整法は内外面とも2に等しい。D10区から出土した。4は口径11.0cm、現高2.9cmで、赤褐色を呈する。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は横ナデによって僅かに外反している。体部外面はヘラケズリされている。A14区から出土した。5は口径11.8cm、現高2.3cmで、赤褐色を呈する。体底部の上端で肥厚して屈折し、口縁は外側は直立するが、内側は体部からそのまま立ち上がっている。内外面ともに横ナデ調整されている。B12区から出土した。6は口径15.2cm、現高3.8cmで、赤褐色を呈する。体底部上端で肥厚して屈折し、口縁は外側は内傾するが、内側は体部からそのまま立ち上がっている。体部外面はヘラケズリされている。C12区から出土した。7は現高1.2cm、底径6.3cmで、赤褐色を呈する。ロクロ成形土器で、体部外面下端はヘラケズリされている。底部外面は全面に手持ちヘラケズリされている。この面には墨書があつて、おそらく「家」と書かれたのであろう。D10区から出土した。8は現高1.3cm、底径6.4cmで、赤褐色を呈する。ロクロ成形土器で、体部外面下端はヘラケズリされている。底部外面は手持ちヘラケズリされている。この面には墨書の一部が認められる。C12区から出土した。9～11は須恵器である。9は杯蓋で、口径14.6cm、器高3.2cmで、暗灰色を呈する。ツマミは中央が著しく盛り上がる擬宝珠状を呈する。天井部の平坦面は広く、口縁は内屈している。天井部の平坦面はヘラケズリされ、他の部分はロクロナデ調整されている。B12区から出土した。10は口径12.8cm、現高4.5cmで、青灰色を呈する。深い体部が直線的に立ち上がり、口縁は肥厚して外反している。体部外面はロクロ目が残るが、内面はロクロナデで消されている。A14区から出土した。11は現高3.4cm、推定底径8.0cmで、明灰色を呈する。広い底部の周縁は面取りされ、体部は直線的に立ち上がる。体部外面はロクロ目を残すが、内面はロクロナデで消されている。B13区から出土した。

12～14は甕である。12は口径13.6cm、現高4.0cmで、赤褐色を呈する。口縁は直線的に開き、頂部に口唇部を成形する。胴部は大きく膨らむ器形をとる。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。B14区から出土した。13は口径13.8cm、現高8.0cmで、赤褐色を呈する。口縁は短く外反し、頂部に口唇部を成形する。胴部はなで肩で、上位やや下に最大径を持つ。胴部外面は粗いヘラケズリの後、縦方向に粗くヘラミガキされている。C11区から出土した。14は口径24.4cm、現高8.2cmで、赤褐色を呈する。口縁は短く外反し、外側は稜をなして直立し、頂部に粘土紐を継ぎ足して口唇部を成形している。胴部は頸部直下に最大径がくる長胴形である。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。C12区から出土した。

15は手捏ね土器である。口径4.8cm、器高1.0cmで、暗褐色を呈する。粘土円盤の中央を指頭でへこませて成形している。E7区から出土した。



第122図 グリッド出土遺物実測図

16・17は鉄製品である。16は釘である。現長4.9cm、3.3gを量る。頭部は扁平で、L字状に屈折している。断面は方形で、先端に行くほど細くなる。先端を欠失している。E7区から出土した。17は釣り針状製品である。現長5.9cm、6.4gを量る。断面は方形で、U字状の屈曲部分は次第に細くなり、先端は若干外反して尖っている。E7区から出土した。

18・19は土玉である。18は器高1.6cm、最大径1.9cmで、赤褐色を呈し、7.0gを量る。紐通し孔は一方から開けられ、両面が面取りされている。19は器高1.7cm、最大径1.9cmで、赤褐色を呈し、5.6gを量る。紐通し孔は両面から開けられ、両面とも面取りされている。C11区から出土した。

20・21は土製紡錘車である。20は直径4.6cm、高さ1.9cmで、赤褐色を呈し、胎土に長石を含む。47.6gを量る。側面は稜を持たず、丸く成形され、上面は中央が僅かに盛り上がり、下面は中央周辺のみが平坦になっている。B12区から出土した。21は4.5cm、高さ1.8cmで、赤褐色を呈し、14.7gを量る。各面とも丁寧仕上げられ、上下の稜線は鋭い。C12区から出土した。

22は石鏃である。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ3mmで、0.8gを量る。黒色のチャート製である。表裏両面とも同様な押圧剥離が施されている。E7区から出土した。

23・24は鉄砲玉である。23は直径1.3cm、重量13.2gで、白灰色を呈する。表面には発射時の擦痕が多数見られる。E8区から出土した。24は直径1.3cm、重量12.3gで、白灰色を呈する。表面は剥離が著しい。E7区から出土した。

第3章 まとめ

第1節 周辺地域の考古学的成果

名木天神台遺跡をはじめとする一連の調査成果によって、当地域における考古学的諸事実を解明することを通して、小支台ごとの歴史的な特徴も明らかになってきた。すなわち、名木支台では古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が卓越し、鎌部支台では1地点のみではあるが縄文時代遺跡が存在し、青山支台以南の内陸部に入ると、奈良・平安時代集落跡が増加する。さらに中世になると、北部の名木や青山には、掘立柱建物群が広範に展開し始める。この傾向が周辺諸地域といかなる関係にあるのか、次にその概況を紹介する（第1図）。

該当地域は、水脈によって4区域に小分割できる。小支谷が旧常陸川湿地帯に直流する北西部のA区、北東流する解析谷沿岸地区である北東部のB区、大須賀川上流支流群地域の南東部のC区、尾羽根川上流右岸に位置する南西部のD区である。この4区は、それぞれ現在の下総町、神崎町、大栄町、成田市におおむね重複している。

A区の遺跡 旧石器時代では青新岩作遺跡¹⁰から、立川ロームVII・VIII層の石器包含層が発見された。

縄文時代の遺跡は少数で、臼作山散布地¹¹では早・前・後期の土器片が確認されている。前原遺跡¹²は早期包蔵地である。また、中峰東・小峰遺跡¹³は早期から後期及び奈良平安時代の複合遺跡である。これらの遺跡は、いずれも大須賀川寄りに偏在している点に留意すべきである。

弥生時代では中里原の台遺跡¹⁴から、奈良平安時代集落に混じり、後期の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代に入ると、遺跡数が大幅に増加するが、それはこの地区には、多数の古墳が集中しているためである。神崎町に属する小松古墳¹⁵からは6個の石枕が出土したと伝えられている。同じく神崎町の向田古墳群¹⁶は前方後円墳を含む4基から構成される。高の宮作古墳群¹⁷中には前方後円墳と前方後方墳が含まれている。同じく高台古墳群¹⁸も前方後円墳を含む7基の古墳群である。さらに、大日山古墳¹⁹は木炭槨を伴う全長54mの前方後円墳で、小松古墳とともに古色を示している。名木地区では、名木不光寺遺跡内に未調査の前方後円墳が存在し、媛宮古墳群²⁰、前原古墳群²¹などの円墳群が所在する。このほか、青山新田には中原古墳群²²、成井地区には成井華塚古墳群²³が点在している。

一方、集落跡は古墳時代後期から始まる遺跡が圧倒的に多い。小野女台遺跡²⁴は後期から平安時代にわたっており、中里西口遺跡²⁵も後期から奈良時代にかけての集落跡である。

奈良時代になると、名木廃寺²⁷が建立され、集落跡としては中里原遺跡²⁶が成立する。

中世には名木地区に主要建造物が集中する観がある。名木砦跡²⁸は単郭式で、二段曲輪を備えている。現存する常福寺（真言宗）²⁹は、江戸時代に再興された寺だが、延応元年（1239）に僧湛導が開基したと伝えられる。

B区の遺跡 縄文時代では台阿らく遺跡³⁰から沈線文・条痕文系の早期土器が出土している。また、植房貝塚³¹は前期の標識遺跡として有名である。古原遺跡³²には中・後期の貝塚が存在する。

古墳では堀込1号墳³³や浅間古墳³⁴などの前方後円墳が知られている。

中世に入ると数多くの城館が築成され、B区を特徴づけている。植房地区には植房館跡³⁵と植房砦跡³⁶

が所在する。また、武田地区には武田砦跡³⁷⁾と千葉氏館跡³⁸⁾とされる遺構がある。武田砦跡は香取郡市文化財センターによって調査され、複郭式で腰曲輪が巡り、4棟の掘立柱建物跡が検出された。さらに、南方の古山地区には古原砦跡³⁹⁾が存在する。寺院では、応安4年(1371)銘の板碑が現存する植房の世尊寺⁴⁰⁾が知られている。当地域は、神崎津へ出る路と香取神宮へ至る路との分岐点に相当し、その重要性のゆえにこれらの軍事施設が集中している観がある。

C区の遺跡 旧石器時代では、久井崎Ⅱ遺跡⁴¹⁾でスクレイパーが出土している。この遺跡からはこのほかに、縄文時代早・中・後期、古墳～平安時代の遺物・遺構が検出されている。また、大久保遺跡⁴²⁾からは、縄文時代早・中期、奈良平安時代の土器に混じり、有舌尖頭器が採集されている。

当地区の特徴は縄文時代遺跡の多さにある。上記2遺跡のほかにも、長作遺跡⁴³⁾は早・前・中期の包蔵地である。さらに、三ツ塚遺跡⁴⁴⁾は前期の、浅間遺跡⁴⁵⁾、台遺跡⁴⁶⁾は中期のそれぞれ包蔵地である。

古墳では、6基の円墳からなる地蔵原古墳群⁴⁷⁾は、その一部が早稲田大学によって発掘され、1号墳の粘土郭が明らかにされている。同時期の集落跡としては、地蔵原鳳凰遺跡⁴⁸⁾が香取郡市文化財センターによって調査され、古墳時代後期1軒、平安時代9軒の竪穴住居跡群が検出されている。

中世では単郭式の中野砦跡⁴⁹⁾が知られている。

このほか当地区には、中近世の塚群が所在している。内野塚々群⁵⁰⁾は4基からなり、3号塚上には庚申碑が、4号塚上には二十三夜灯碑が建立されている。また、仙土台塚群⁵¹⁾は2基が現存している。

以上のA・B・C区の概況によって、各地区の特徴が一応把握できる。旧石器時代遺跡はまだ調査例が少なく、その偏在性を指摘するまでにいたらない。しかし、縄文時代遺跡では、内陸に位置するC区が卓越している。弥生時代は全体的に遺跡数が僅少である。古墳時代では、古墳数の圧倒的な多さから、A区が中心的存在となっている。この傾向は奈良・平安時代になっても、多数の集落跡や名木廃寺の存在からみて、依然持続していたであろう。やがて中世、それも南北朝以後は、B区に主要な軍事施設が集中的に築成されるようになる。A区からも、本事業関連調査で多数の中世後期掘立柱建物跡群が検出されたが、同様な密度の調査をB区で実施すれば、この時期のB区の優位性は、さらに不動のものとなるであろう。

こうした中心地域の変遷過程は、生産性と交通の視点から説明することができる。縄文時代の旧常陸川流域は、霞ヶ浦を含む長大な入り江を形成していた。A・B両区は、律令時代に「香取の海」と呼ばれたこの入り江の、沿岸台地に属している。台地下は遠浅の海岸か、汽水性の湿地帯であったはずである。狩猟・採集経済に依存する縄文時代の社会は、このような環境下では発展の余地がない。それに対して、内陸部のC区は、小支谷の水源となる湧泉地帯であり、小動物が豊富で、植生も沿岸台地とは相違を見せていたであろう。縄文時代社会の発展は、こうした環境下でこそ保証されたのである。

香取の海は、縄文時代前期を境に海退化がすすみ、それとともに水域は細くなり、淡水化が進行していく。一方、弥生時代以来の稲作農業は、その後全国的な普及を見せ、古墳時代には当地域においても、本格的な展開を開始する。この時期のA・B両区の汀線付近は、諸河川の堆積作用に伴い葦原が成長して、徐々に淡水化が進行していたはずである。初期の稲作は、こうした葦原を望む台地上の谷津を主要な母胎として定着していった。この時期にB区よりA区の方が優勢な理由は、A区の方が旧長沼と旧常陸川の合流点により接近していたためであろう。古墳時代における当地域に最寄りの政治的・文化的中心地は、印旛国造の所在地とも推定される龍角寺古墳群周辺である。そこから東総の中心地である香取神宮周辺へ至るには、水路をとった場合、旧長沼から旧常陸川に入るルートが考えられるが、その合流点は中継地とし

ての重要性を担っていたであろう。事実、下総町西大須賀・滑川は顕著な古墳群の集中地域である。

中世におけるB区の卓越性は、香取の海＝古霞ヶ浦の経済水域としての重要性の上昇と深く関連している。中世の古霞ヶ浦は漁業が盛んで、常陸側・下総側それぞれに基地となる湊として、多数の津が整備された。また、それらの津を結ぶ水運も発達して、津の後背地には大小さまざまな村々が形成された。かくして、古霞ヶ浦は、東関東における水上交通の一大中心地へと変貌するのである。数ある津の中でも、神崎津は下総側にあつて、ひときわ北に突きだした岬状の地形に恵まれて、ほかの津にまして有利な渡船場を兼ねていた。当地には小松社（現神崎神社）が鎮座し、神官の神崎氏が周辺社領を領有していた。その後背台地の一角に、B区の城館跡群は所在している。この地域一帯は、西からは大須賀氏が、東からは国分氏が進出しており、この地域に所在する軍事施設はいずれかの一族に帰属すると考えられる。

第2節 竪穴住居跡の土器編年（第123図、第124図）

名木天神台遺跡における今次調査で検出された48軒の竪穴住居跡を時期分類する前提として、竪穴住居跡から出土した土器の編年は欠かせない作業であることはいうまでもない。土器の器種は多岐にわたっているが、系統的にその変遷を跡づけることのできる器種は比較的限定されている。土師器杯・須恵器杯（身）・土師器甕（大・中小・常総型）等がその中心となっている。ここでは、まずそれらの編年観を組み立てたうえで、付随する他器種や他遺物の時期的な特徴を概観してみたい。

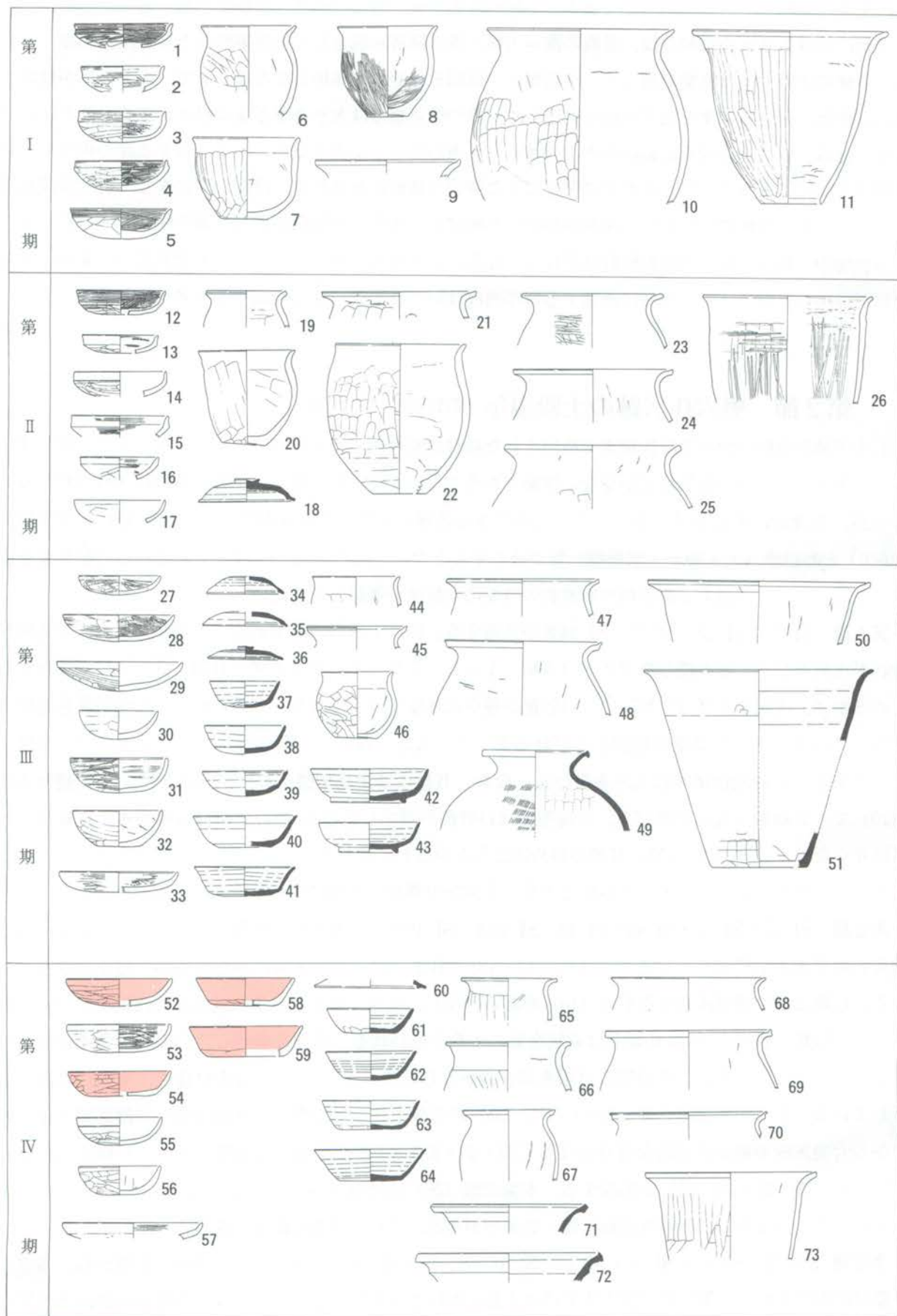
第Ⅰ期 SI 6・SI 25・SI 37・SI 44等が該当する。杯は土師器のみである。古墳時代特有の須恵器模倣杯が主流となり、蓋を模したタイプ（A類、1・2）と身を模したタイプ（B類、3・4）が共存する。このほかに、浅椀タイプ（C類）で、口唇部が僅かに外反するもの（5）が見られる。内面の黒色処理が盛行している。中・小型甕は頸部がくびれるタイプ（A類、19）と、頸部がくびれないタイプ（B類、7）がある。口縁端は単純に丸みを帯びる。なお、B類には常総型甕（8）が存在する。大型甕はA類（10）で、口縁端は丸みを帯びる。常総型甕は口唇部が直立している（9）。甑は口縁が水平に延び、端部は丸くなっているもの（11）、口縁が斜めに立ち上がるものがある。

本期にはこのほか、刀子・釘等が存在する。7世紀中葉から後葉にかかる時期に比定できる。

第Ⅱ期 SI 27・SI 31・SI 40・SI 41・SI 43A・SI 48等が該当する。杯類は前期に比べて少なくなる。相変わらず須恵器模倣杯が中心で、A類（12・13）・B類（14・15）ともにみられるが、矮小化が進んでいる。C類には口縁が直立するもの（16）がある。なお、次期に普及をみる単純口縁の浅椀タイプが存在するが（D類、17）、これはC類とは系統を異にすると思われる。前期に盛行した内面の黒色処理は本期では下火になる。また、この時期には須恵器杯蓋がみられる（18）。ツマミは大口径で、カエリははっきりしている。中・小型甕はA類（19）・B類（20）が共存する。大型甕ではB類（22）が確認できる。本期から大型常総型甕が普遍的な存在となる（23・24・25）。中・小型甕、大型甕ともに、口縁端が調整されたもの（19・21・24・25）が出現する。本期の甑（26）には粗いヘラミガキが施されている。

本期にはこのほか、土師器丸底鉢・鎌・鉄鏃等がある。7世紀後葉に比定できる。

第Ⅲ期 SI 2・SI 3・SI 4・SI 14・SI 16・SI 18・SI 19等が該当する。杯類は本期から、須恵器が豊富に出回り始め、第Ⅴ期に至るまでは出土量において土師器を圧倒する。土師器杯は前期の須恵器模倣杯は姿を消し、D類が主体となる。D類には浅く、皿に近いタイプ（DⅠ類、27・28・29）と、深く、



第123图 主要器種編年图 (1)

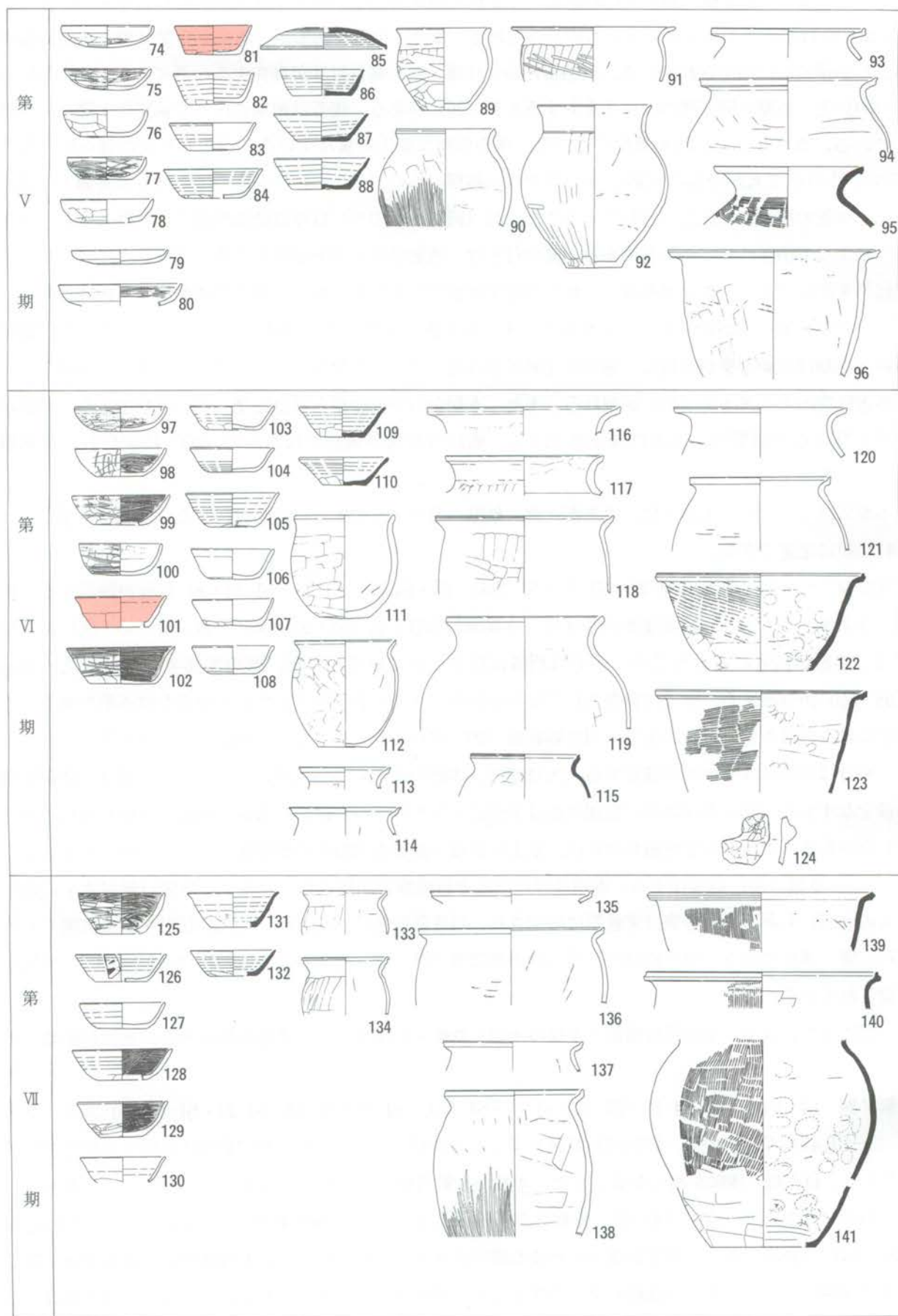
椀に近いタイプ（DⅡ類、30・31）がある。いずれも内外面に粗いヘラミガキがかけられるものが多い。DⅡ類中には32のように平底化したものもみられる。また、少数であるが、本期から第Ⅴ期まで土師器盤（33）が継続的に検出されている。須恵器杯類には蓋・身・高台付きが存在する。蓋にはツマミの無いもの（34）と、前期と同系統のツマミを有するもの（36）がある。後者は前期に比べて扁平化・矮小化が進んでいる。カエリはいずれも退化している。身の形態は変化に富んでいる。退化した受け部を伴うもの（39）、小口径で丸底のもの（38）、大口径で浅い体部のもの（40・41）等がある。これらに共通する点は、底部と体部の境が丸く仕上げられていること、41（回転ヘラ切り）以外は底部外面の切り離し痕がヘラケズリによって消されていることである。高台付きは、底部が高台接地面近くに達しているタイプ（42）と、底部が平坦なタイプ（43）がある。これらの胎土は黄灰色を呈しており、遠江湖西窯産の可能性が高いので、絶対年代観の手がかりとしてよかろう。中・小型甕はA類（45）・B類（44）が共存する。大型甕は本期と次期は常総型甕が卓越し、通常の土師器甕は極めて少なくなる。常総型甕の口唇部は、本期から斜め外方に突出するタイプ（48）が現れる。また、本期から少数ながら須恵器甕（49）が登場する。頸部が強くくびれる細頸型で、二重口縁を形成する。甑は口縁端が調整されたもの（50）に変化し、須恵器（51）も存在する。

本期にはこのほか、土師器鉢、須恵器大鉢、鉄鏃、刀子、石製模造品等が存在する。7世紀末葉から8世紀初頭に比定できる。

第Ⅳ期 SI 7・SI 8・SI 20・SI 22・SI 29の一部・SI 30・SI 33・SI 34・SI 47等が該当する。杯類は赤彩品が混じり、須恵器蓋が減少する。土師器杯はDⅠ類（52・53・54）とDⅡ類（55・56）が共存する。平底は両者にみられるが、赤彩は前者に限定されている。また、須恵器杯身を模倣した赤彩品（58・59）が存在する。胎土は精製されて厚みがある。ロクロが使用されているか否かは不明である。土師器にはこのほか盤（57）がある。須恵器杯蓋（60）は口径が大きくなり、痕跡程度のカエリを残している。杯身は本期にはすべて平底化する。大口径で、体部の浅いものが主流を占めている。底部と体部の境が稜をなすもの（64）が現れる。底部外面は全面にヘラケズリがかけられるが、回転ヘラ切りの痕跡を残すものがある。本期から須恵器杯身には、胎土に雲母・長石を含むものが混在してくる。中・小型甕はA類（67）・B類（65）が共存する。本期にはほとんど口縁端が調整されているが、単純口縁が水平に延びるもの（66）もある。大型甕は常総型に限定され、口唇部形態は単純（68）・直立（69）・斜めに開くもの（70）等、多彩である。須恵器甕は二重口縁の細頸型（71・72）である。甑（73）は前期同様、口縁端が調整されている。

本期にはこのほか、須恵器長頸瓶・手捏ね土器・鉄鏃・転用硯・石製紡錘車等がある。8世紀前葉に比定できる。

第Ⅴ期 SI 1の一部・SI 10・SI 12・SI 15・SI 17A・SI 21・SI 23・SI 29・SI 32・SI 36の一部・SI 42・SI 45等が該当する。住居跡数が最も多くなる時期である。土師器杯はD類において平底化の傾向が強まり、DⅡ類の体部が浅くなる。また、本期から第Ⅶ期に至るまで、体部下半が幅広くヘラケズリされる相模・上総系の土器（78）が、少数ながら混入してくる。本期の特徴はいわゆるロクロ土師器杯（81～84）の登場である。体部が深いいわゆる箱形のタイプ（81・82）と、大口径で、体部が大きく開くタイプ（84）がある。体部は直線的で、内外面ともロクロ目の凹凸がよく消されている。底部外面はヘラケズリがかけられるが、回転系切りの痕跡がみられる。土師器にはこのほか盤（79・80）がある。須恵器



第124図 主要器種編年図(2)

杯蓋は大口径で、カエリを失ったもの(85)である。杯身は体部が直線的で、余り開かないもの(86)と、大きく開くもの(87・88)がある。体部のロクロ目は比較的良好に消され、底部外面は回転ヘラケズリがかけられるが、回転ヘラ切り痕がみえるものもある。中・小型甕はA類・B類が混合したような、頸部は余りくびれず、比較的胴が張る器形(89)になる。常総型甕は、口縁が余り開かないもの(90)がある。大型甕は口縁が水平に延びる長胴型(91)と、口縁が余り開かず、壺型に近いもの(92)がある。常総型甕は前期同様、口唇部が直立するもの(93)や、斜めに開くもの(94)があるが、単純口縁は消滅している。須恵器甕(95)は前期同様、二重口縁の細頸甕である。甑(96)の口唇部は直立する。

本期にはこのほか、土師器葉壺・刀子・土製紡錘車等がある。8世紀中葉に比定できる。

第VI期 SI 1・SI 13・SI 17Aの一部・SI 26・SI 36・SI 42の一部等が該当する。前期以来、土師器杯は漸移的に増加し、須恵器杯は漸移的に減少して、本期に至り、その比率が逆転する。土師器杯D類は、DⅡ類が卓越する。この中には内面が黒色処理されたもの(99)が含まれている。相模・上総系の土器には、赤彩品(101)と、内面が黒色処理されたもの(102)とがある。ロクロ土師器杯は変化が多い。体部が浅く、大きく開くタイプ(103)、底部が小さく、強いロクロ目を残す、椀形に近いタイプ(105)、体部内外面に丁寧なロクロナデが施されるタイプ(106・107・108)等がある。これらはいずれも体部ラインが前期よりも曲線的となり、底部外面は手持ちヘラケズリされているが、中には回転糸切り痕を残しているものがある。須恵器杯は底部が小さく、体部が外反気味に大きく開く器形(109・110)が主体的となる。ロクロ目がよく残り、底部外面は手持ちヘラケズリされているが、回転ヘラ切り痕が残っている個体がある。中・小型甕の器形は前期同様であるが、依然として単純口縁(111)が残っている。常総型甕(114)・須恵器(115)も存在する。大型甕は長胴タイプ(116・118)と、胴張りタイプ(119)がある。常総型甕には口縁が通常で、なで肩のもの(120)と、口縁が短く、胴が張るもの(121)とがある。須恵器甕は本期から広口甕が登場する。鉢に近い短胴で、口唇部を口縁上に成形するタイプ(122)と、長胴で、口縁下に粘土紐を貼り付けて二重口縁を形成するタイプ(123)がある。後者の場合、口縁部破片では甕と甑の区別がつかない。甑は把手を付したもの(124)が存在する。

本期にはこのほか、土師器鉢・須恵器長頸瓶・手捏ね土器・鉄鏃・刀子等がある。8世紀後葉に比定できる。

第VII期 SI 9・SI 35・SI 38・SI 39・SI 46等が該当する。杯類は伝統的な土師器杯D類が姿を消す。ロクロ土師器杯は浅い体部が直線的に開くタイプ(126・127・128)と、椀形に近い深い体部が緩いS字状に立ち上がるタイプ(129・130)が共存する。前者は体部のロクロ目はよく残り、体部下端は深いヘラケズリによって、厚みを調整している。底部外面は周辺が手持ちヘラケズリされている。後者は体部に丁寧なロクロナデを行い、体部下端は幅広くヘラケズリされている。底部外面は全面的に手持ちヘラケズリが施される。また、前者は承和五年銘墨書土器を出土した、八千代市北海道遺跡のD048のロクロ土師器と並行していると思われるので、絶対年代観の手がかりとしてよからう。相模・上総系土器(125)は深い椀形を呈する。本期にはタイプの如何にかかわらず、内面の黒色処理化が普及する。須恵器杯は非常に少なくなる。土師器同様に、体部が深く、緩いS字状に立ち上がる椀形に近いタイプ(131)と、浅く、直線的に開くタイプ(132)が併存する。体部外面は回転糸切り後、手持ちヘラケズリされる。中・小型甕の器形は前期を踏襲している。口唇部処理では、紐を巻き込んで反転させる装飾的な技法が現れる(134)。大型甕は長胴型(136)である。常総型甕は短い口縁に限られ、器形は前期同様二種類ある。須

恵器甕は広口（139・140—甕の可能性もある）と細頸（141）の二種類ある。

本期にはこのほか、鎌・土玉等が存在する。9世紀前葉に比定できる。

第3節 竪穴住居跡の形態の変遷

前節で時期分類された竪穴住居跡を対象にして、ここでは竪穴住居跡の形態変遷の過程を跡づけてみたい。対象となる竪穴住居跡は第Ⅰ期4軒、第Ⅱ期5軒、第Ⅲ期7軒、第Ⅳ期7軒、第Ⅴ期10軒、第Ⅵ期4軒、第Ⅶ期5軒で、合計42軒に及ぶ（第125図）。これらの住居跡の平面プランに注目すると、第Ⅰ期では逆台形1軒、正方形1軒、台形1軒、不明1軒、第Ⅱ期では横転台形2軒、横長横転台形または横長逆台形1軒、逆台形1軒、長方形1軒、第Ⅲ期では逆台形2軒、正方形2軒、横長長方形1軒、不明2軒、第Ⅳ期では横転台形3軒、横長横転台形2軒、逆台形2軒、不明1軒、第Ⅴ期では横転台形3軒、逆台形2軒、正方形1軒、長方形1軒、横長長方形1軒、不明2軒、第Ⅵ期では横転台形1軒、正方形1軒、長方形1軒、不明1軒、第Ⅶ期では横転台形2軒、長方形1軒、隅丸長方形1軒、不明1軒となっている（第3表）。

竪穴住居跡の平面プランには様々な形態が存在するが、まず大きく正方形・長方形グループと台形グループに分けてみると、前者は全期を通して11軒、後者は同じく24軒となり、この期間中の平面プランの主流は台形系が占めていたことが理解される。実際、正方形・長方形グループでは、集中的に出現する時期が認められず、第Ⅳ期の正方形の2軒がそのピークに過ぎない。そこで、台形グループにさらなる分析を加えてみると、（正）台形・横長逆台形は、それぞれ第Ⅰ期に1例、第Ⅱ期に1例あるのみで、当面の考察対象からははずすことができる。結局、対象期間、すなわち7世紀中葉から9世紀前葉に主体的に存在していたのは、逆台形・横転台形・横長横転台形の3類型に絞られてくる。

これら3類型の推移状況を具体的に確認しておこう。逆台形は第Ⅰ期・第Ⅱ期が1軒ずつ、第Ⅲ期から第Ⅴ期までが2軒ずつで、以後は途絶えている。このことから、その最盛期が第Ⅲ期から第Ⅴ期にわたっていたと考えてよからう。また、その出現期については、第Ⅰ期以前に遡るかもしれず、これだけのデー

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴ期	第Ⅵ期	第Ⅶ期	合計
正方形	1	・	2	・	1	1	・	5
長方形	・	1	・	・	1	1	1	4
横長長方形	・	・	1	・	1	・	・	2
隅丸長方形	・	・	・	・	・	・	1	1
台形	1	・	・	・	・	・	・	1
逆台形	1	1	2	2	2	・	・	8
横長逆台形	・	1	・	・	・	・	・	1
横転台形	・	2	・	3	3	1	2	11
横長横転台形	・	1	・	2	・	・	・	3
不明	1	・	2	1	2	1	1	8

第3表 竪穴住居跡平面プランの時期別分布

タからは何ともいえない。横転台形は第Ⅱ期に初出し、第Ⅲ期を欠いて、第Ⅳ期・第Ⅴ期に3軒ずつ、第Ⅵ期・第Ⅶ期も継続的に存続している。この類型の最盛期は、第Ⅳ期・第Ⅴ期にあるとみてよかろう。出現期は、このデータの限りでは、第Ⅱ期にあるとみてよい。一方、終末期は第Ⅶ期よりも新しくなると思われる。なお、第Ⅲ期が欠落しているが、前後の時期にまとまって出現していることから、偶然の結果によるものと考えたい。横長横転台形については、最多出現期が第Ⅳ期にあり、横転台形の最盛期と重複していることから、横転台形の亜種と考えられる。ただし、〈横長〉に注目してほかの形態に目を移すと、横長長方形が第Ⅲ期・第Ⅴ期、横長逆台形が第Ⅱ期に存在し、横長横転台形の第Ⅱ期・第Ⅳ期を合わせると、横長タイプの竈穴住居跡は第Ⅱ期から第Ⅳ期という、比較的限られた期間内に存在していた特徴的な一群であることが理解できる。台形グループのすべてが出揃うのが第Ⅱ期であり、また、第Ⅵ期には横転台形以外は消滅してしまうので、台形グループ全体としての主たる出現期は、第Ⅱ期から第Ⅴ期までに限定してもよいのではないかと考える。そして、この期間中に横長タイプの竈穴住居跡が集中的に出現するのである。

次に、竈が付設された壁の変化について注意しておこう。前章でも指摘しておいたが、第Ⅴ期のSI 29に典型的にみられるように、竈脇の壁が内側へ食い込み、そこからコーナーまでが逆に外側へ張り出す特異な形態の壁が散見される。このような波状を呈する壁の対極には、コーナー―竈間の壁線が直線をなす壁が位置する。この2極を基準にして、第125図に掲載した各時期の竈穴住居跡をみていきたい。

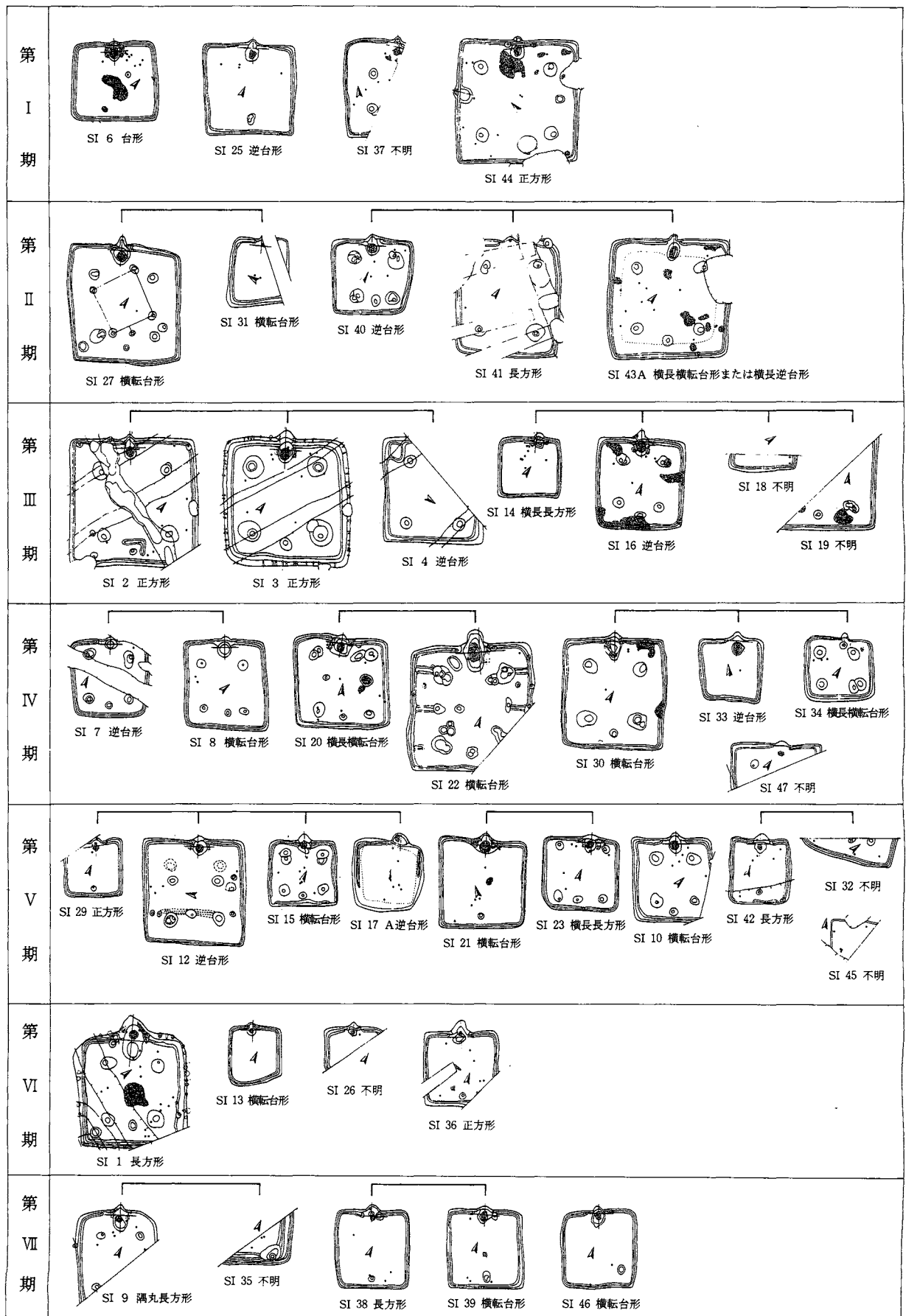
第Ⅰ期 SI 6は竈の両側壁が僅かに張り出している。SI 25は竈両側壁は直線的である。SI 37の竈右壁（煙道部からみて）はかなり張り出している。SI 44は竈右壁は直線的だが、左壁は若干張り出している。総じてこの時期には、竈付設壁の初期的な変化が既に始まっている。

第Ⅱ期 SI 27は竈両側壁が斜行して直線的である。SI 31の竈右壁は食い込みは穏やかであるものの、左壁は攪乱を受けているが、張り出しが大きい。SI 40は竈右壁の張り出しはあるが、竈脇の食い込みは僅かである。左壁は直線的である。SI 43Aは竈両側壁が直線的である。SI 27にみるように、この時期に壁の波状化現象が出現していることを確認しておく。

第Ⅲ期 SI 2は竈両側壁が直線的である。SI 3は竈右壁は張り出すが、左壁は直線的になる。SI 14・SI 16は竈両側壁が直線的である。この時期は竈付設壁の変化が少ない。

第Ⅳ期 SI 8の竈両側壁は直線的である。SI 20は竈右壁の張り出しは大きい、竈脇の食い込みはみられない。左壁は直線的である。SI 22は竈右壁は僅かに張り出すが、左壁は直線的である。SI 30の竈両側壁は直線的である。SI 33の竈右壁は直線的だが、左壁は僅かに張り出している。SI 34の竈右壁は直線的だが、左壁は僅かに張り出し、竈脇も僅かながら食い込んでいる。弱い波状を呈している。SI 47は竈右壁は僅かに張り出すが、左壁は直線的である。この時期に竈付設壁に何らかの変化を持つ竈穴住居跡が主流になる。

第Ⅴ期 SI 29の竈左壁は先述のように、典型的な波状壁である。SI 12は竈右壁は竈脇が僅かに食い込むが、斜行して張り出しは顕著でない。左壁は直線的である。SI 15は竈両側壁は直線的になるが、床面プランは竈左側で波状を呈する。SI 17Aの竈は偏在しているが、右壁は波状壁である。SI 21は竈右壁は僅かに張り出し、左壁も僅かに張り出すが、竈脇の食い込みはいずれも顕著でない。SI 23の竈は偏在しているが、両側壁は直線的である。SI 10は竈右壁は斜行して直線的だが、左壁は僅かに張り出して、竈脇も僅かに食い込んで、弱い波状を呈している。SI 42は竈右壁は斜行して直線的で、左壁は直線的であ



※竪穴住居跡のグルーピングは同一単位集団であることを示す

第125図 竪穴住居跡編年図

る。この時期にはほとんどの竈穴住居跡が竈付設壁に何らかの変化を持つに至る。その場合、竈を中心に非対称となる例が多い、否、むしろ一般的であることに注意したい。また、竈片側壁が斜行直線状を呈するのは、その多くが横転台形プランの住居跡である。なお、第Ⅲ期から第Ⅴ期にかけては、竈が一方に偏在する住居跡が散見される。

第Ⅵ期 SI 13は竈両側壁が直線的である。SI 26の竈両側壁は僅かに張り出している。SI 36は竈右壁は直線的だが、左壁は弱い波状を呈している。

第Ⅶ期 SI 9の竈両側壁は比較的直線的である。SI 38は竈右壁は直線的だが、床面プランは波状を呈している。左壁は直線的である。SI 39は竈右壁は直線的で、左壁は弱く張り出している。SI 46は竈両側壁は比較的直線的である。第Ⅵ期・第Ⅶ期は例数が少なく、不明点が多いが、第Ⅴ期に比べると、竈付設壁の変化は次第に目立たなくなってくるのではなかろうか。

最後に、竈穴住居跡の規模の問題にふれておこう。第125図には大型住居跡（SI 44、SI 27等）・中型住居跡（SI 6、SI 40、SI 38等）・小型住居跡（SI 31、SI 14等）の3類型が存在する。第Ⅰ期から第Ⅵ期までは大型住居跡が存在するが、例数不足のため、第Ⅶ期は中型住居跡に収束してしまう。また、小型住居跡は第Ⅱ期に登場し、第Ⅵ期まで存続している。これを要するに、第Ⅱ期から第Ⅵ期にかけては、3類型が並立して、住居跡間規模の多様化が顕著に展開していたのである。このことはいわゆる単位集団内部にも持ち込まれ、同一単位集団内部での規模の多様化は、一般的な現象としてとらえることができる。しかし、路線調査の限界はここまでで、さらに深い理解は台地上の全面調査に俟つほかはない。

以上、竈穴住居跡の形態変遷を追跡してきたが、第Ⅱ期から第Ⅴ期まで、すなわち、7世紀末から8世紀中葉までを一時代として括ることができるかと思う。竈穴住居跡にみられたこうした変化が、同時代の歴史とどのように関わっていたのか、あるいはいなかったのかを見極める作業は、これからの仕事となる。

参考文献

- 10) 原田享二 1996「青新岩作遺跡」『事業報告Ⅴ』(財)香取郡市文化財センター
- 14) 江尻和正ほか 1989『文化財調査報告Ⅶー中里原ノ台遺跡ー』下総町教育委員会
- 19) 市毛勲ほか 1970『大日山古墳』千葉県教育委員会
- 24) 石井明憲ほか 1990『小野女台遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 25) 鳴田浩司 1991『中里西口遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 26) 荒井世志紀 1995「中里原遺跡」『事業報告Ⅳ』(財)香取郡市文化財センター
- 27) 沼沢豊 1983『下総町名木廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会
- 28) 植竹好明 1990「名木城址」『下総町史 原始古代・中世編史料集』下総町史編纂委員会
- 30) 江尻和正 1993『台阿らく遺跡ー神崎町浄水場建設予定地の調査ー』(財)香取郡市文化財センター
- 31) 西村正衛 1957「千葉県香取郡植房貝塚出土土器」『早稲田大学教育学部学術研究』第6号
- 37) 江尻和正 1993「武田砦跡」『事業報告Ⅱ』(財)香取郡市文化財センター
- 47) 大川清 1946「千葉県香取郡昭栄村第1号古墳」『古代』第9号
- 48) 黒澤哲郎 1991「地蔵原鳳凰遺跡」『事業報告Ⅰ』(財)香取郡市文化財センター

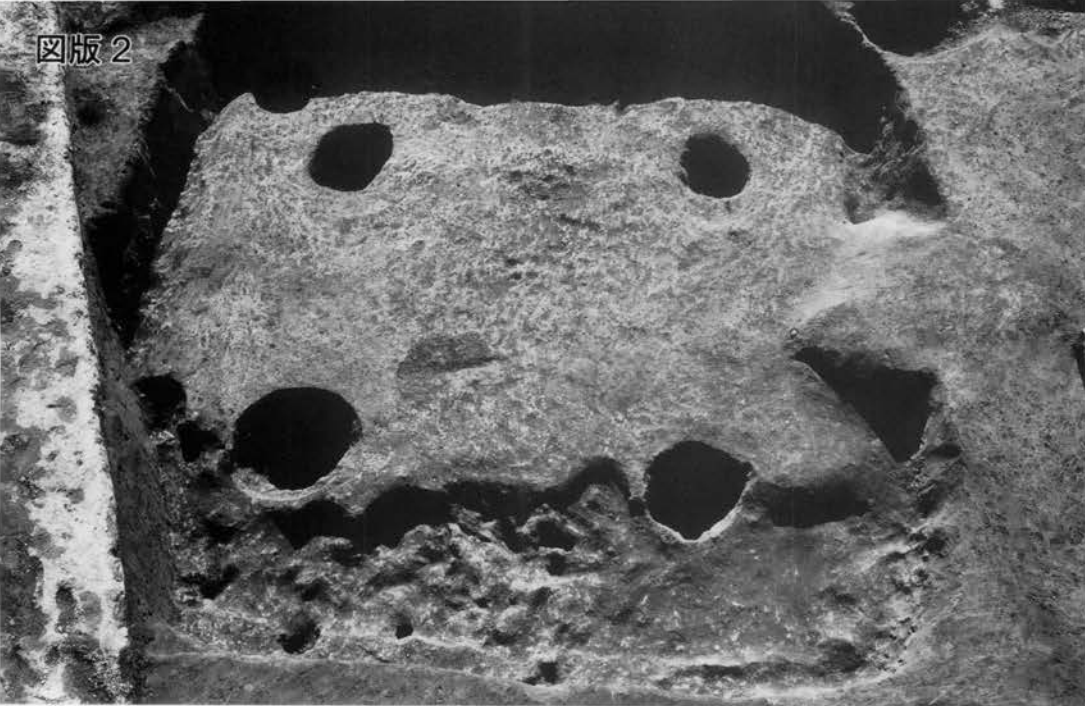
写真図版



旧石器包含層第 1 石器集中地点



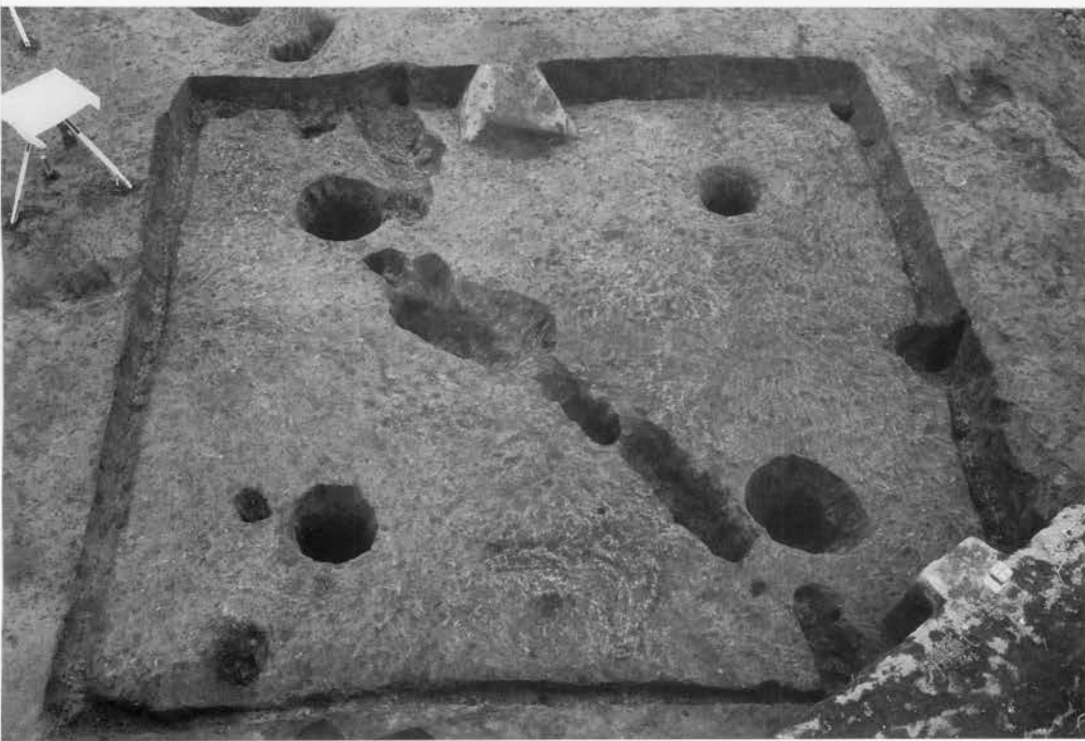
旧石器包含層第 2 石器集中地点



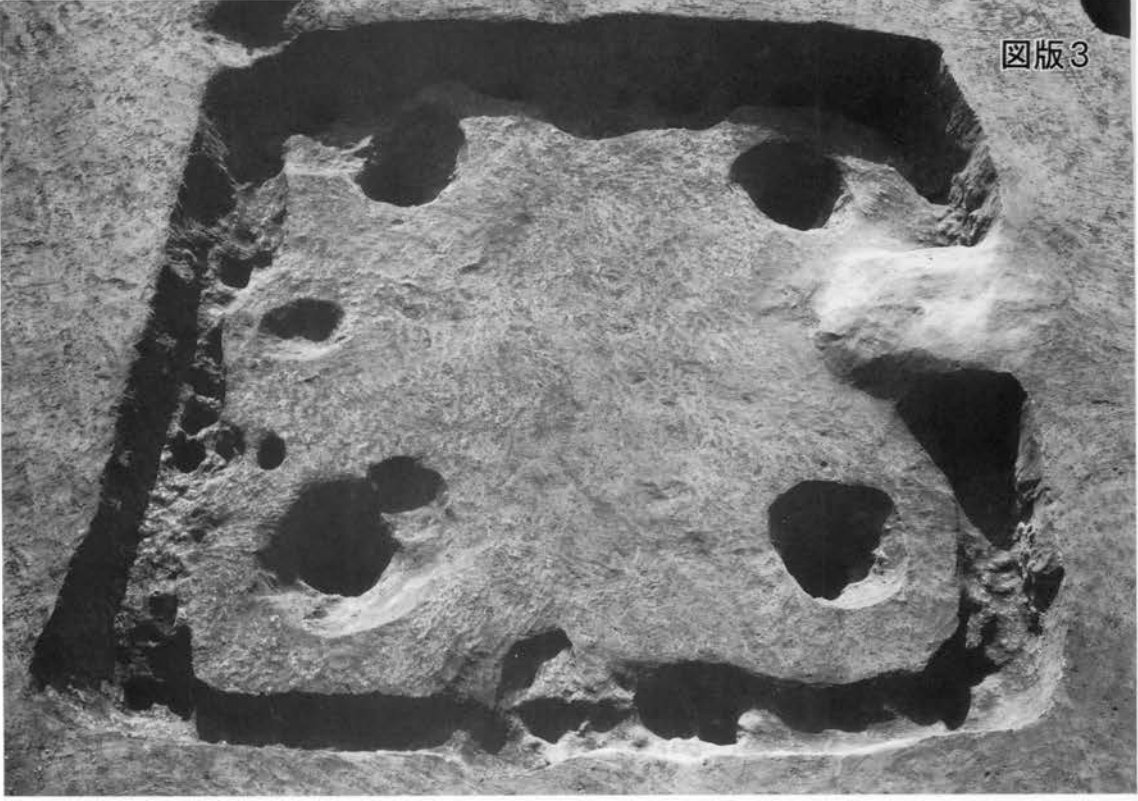
SI 1



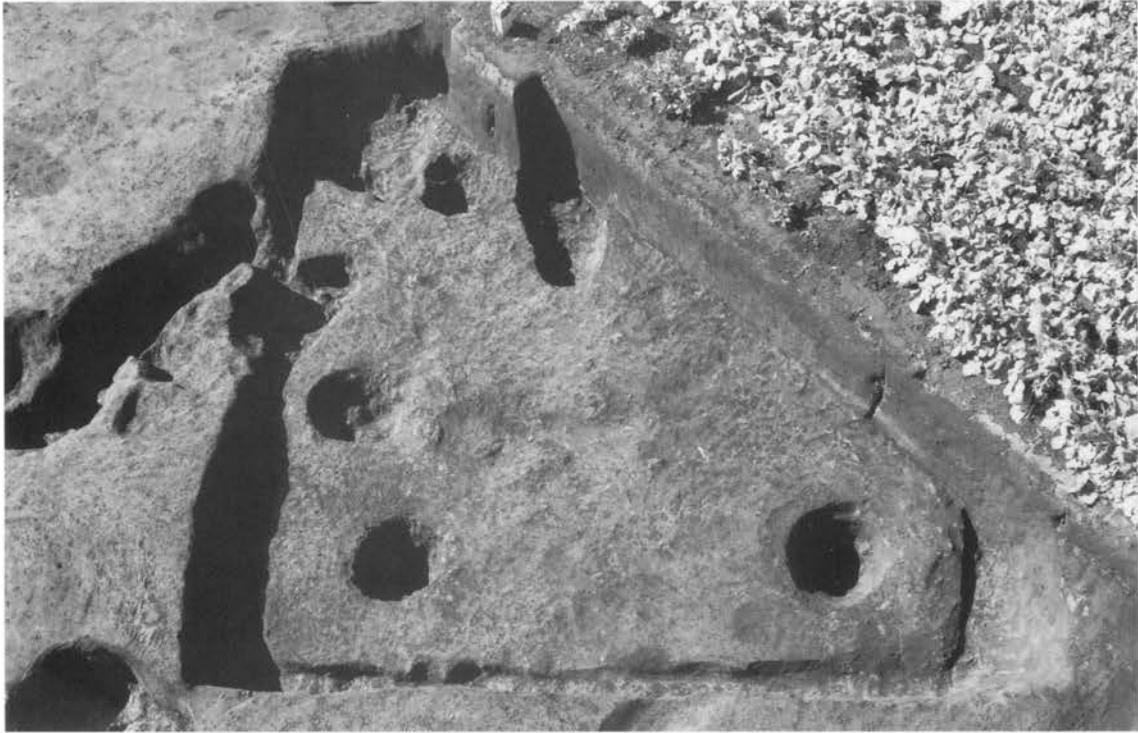
SI 1 出土遺物



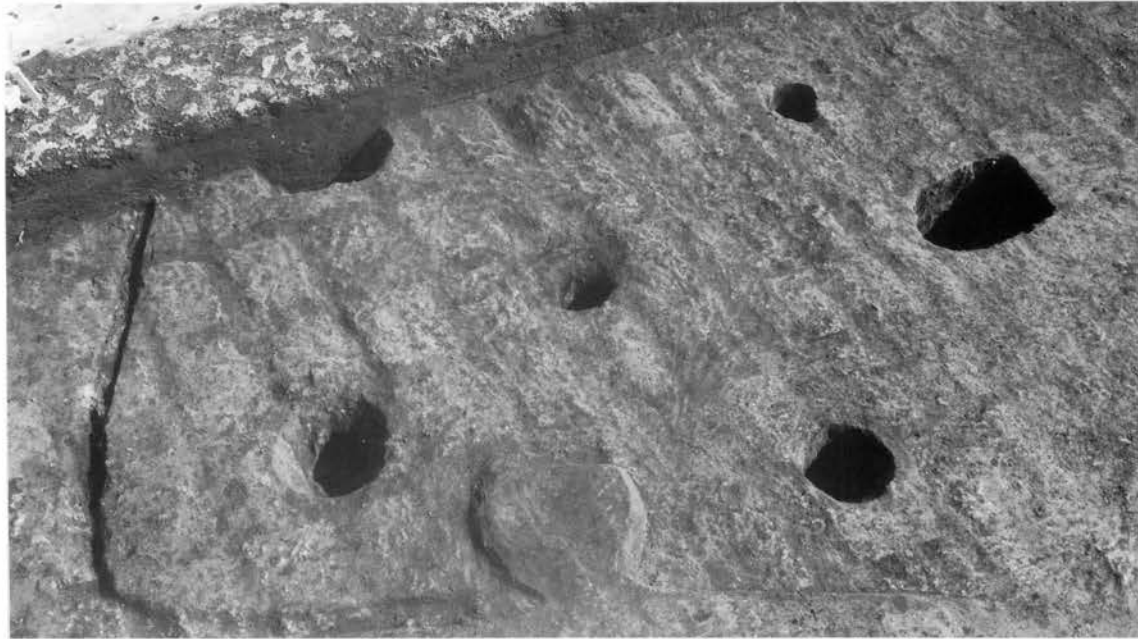
SI 2



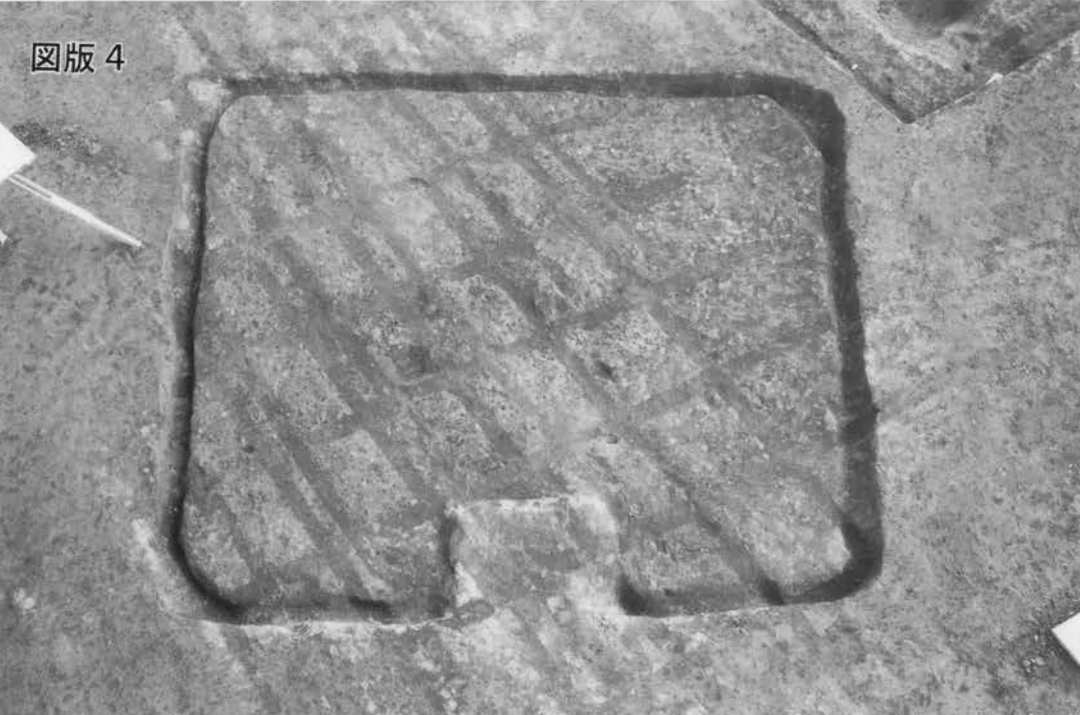
SI 3



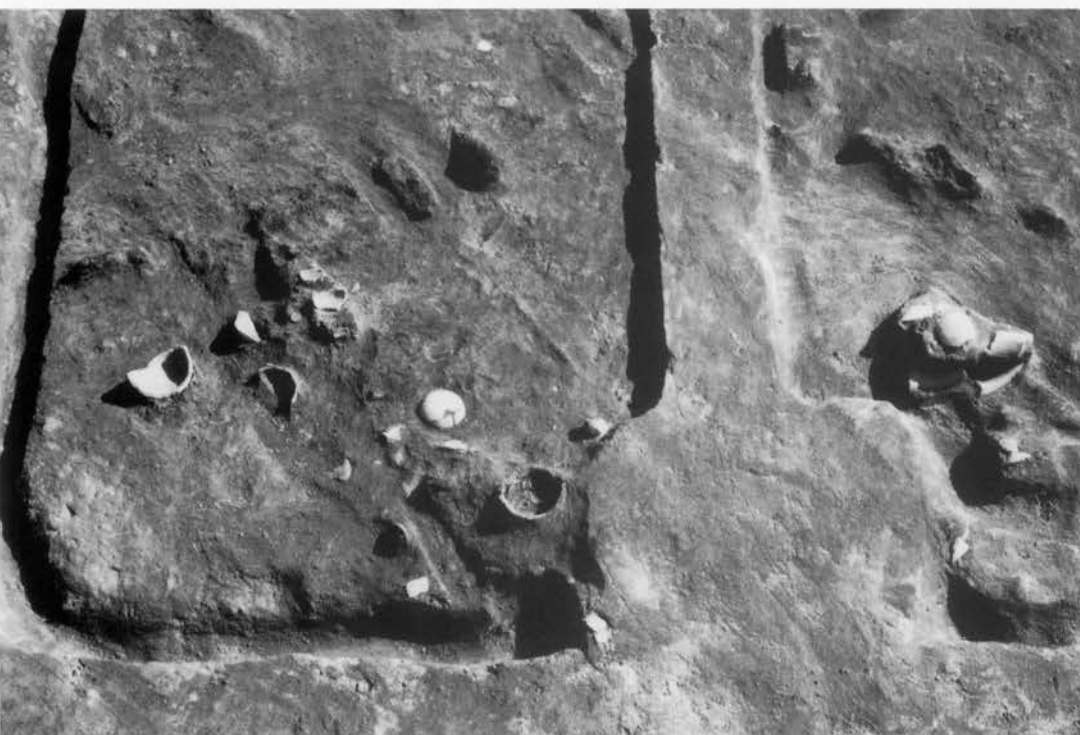
SI 4



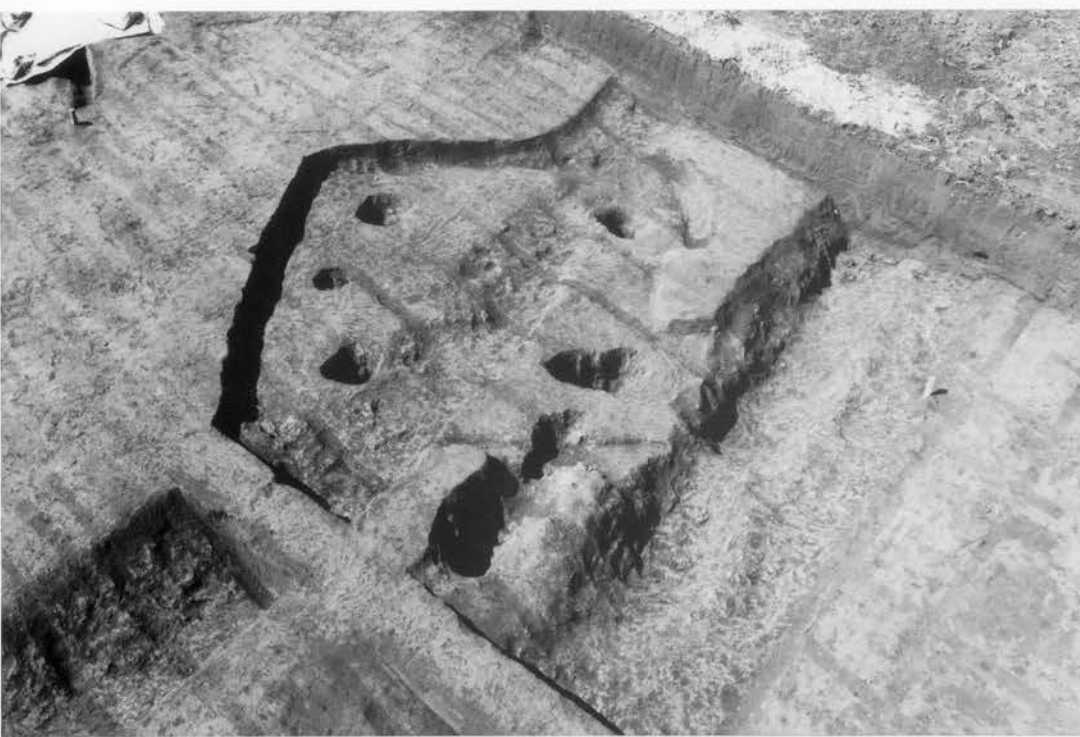
SI 5



SI 6



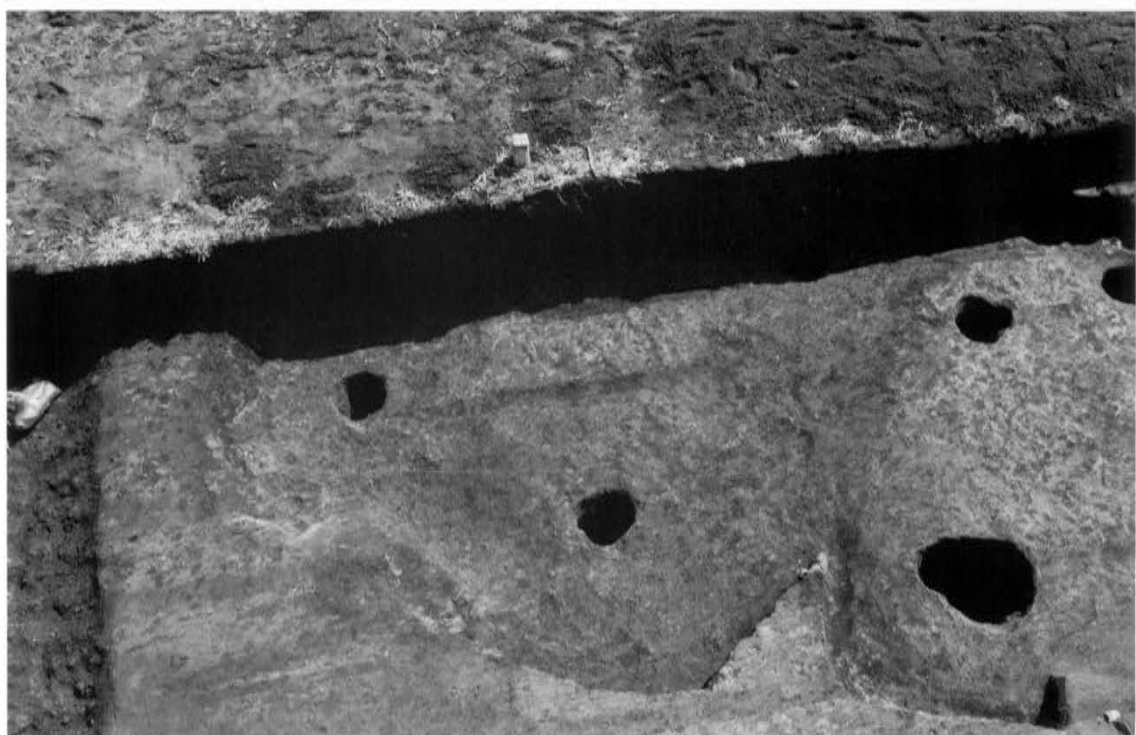
SI 6 出土遺物



SI 7



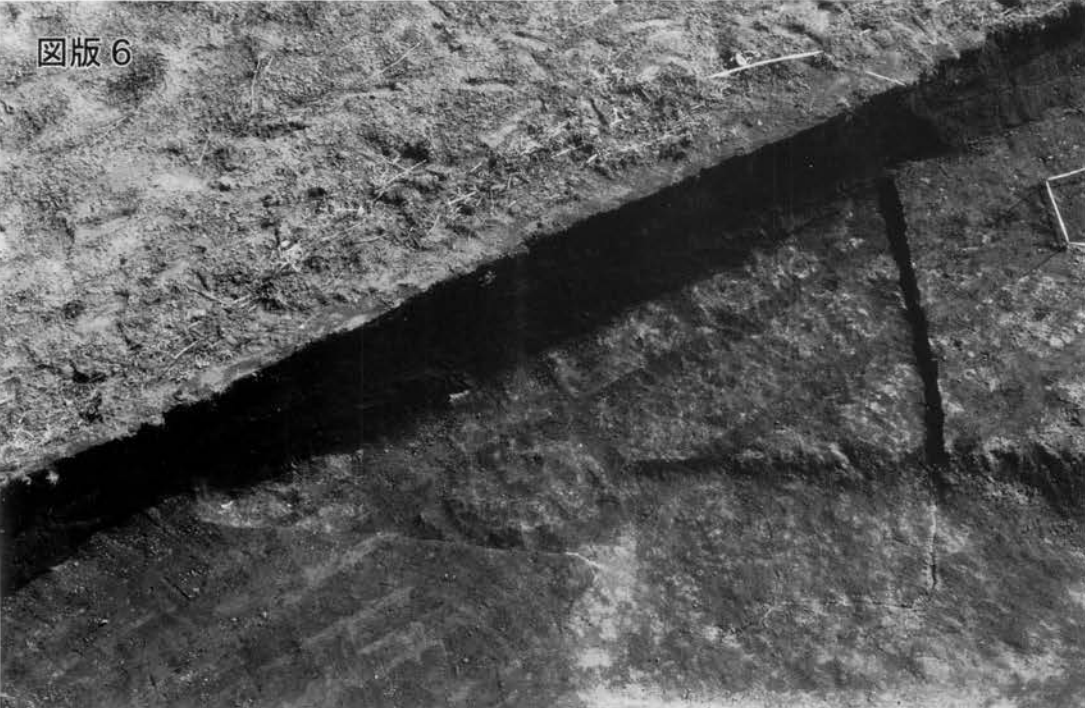
SI 8



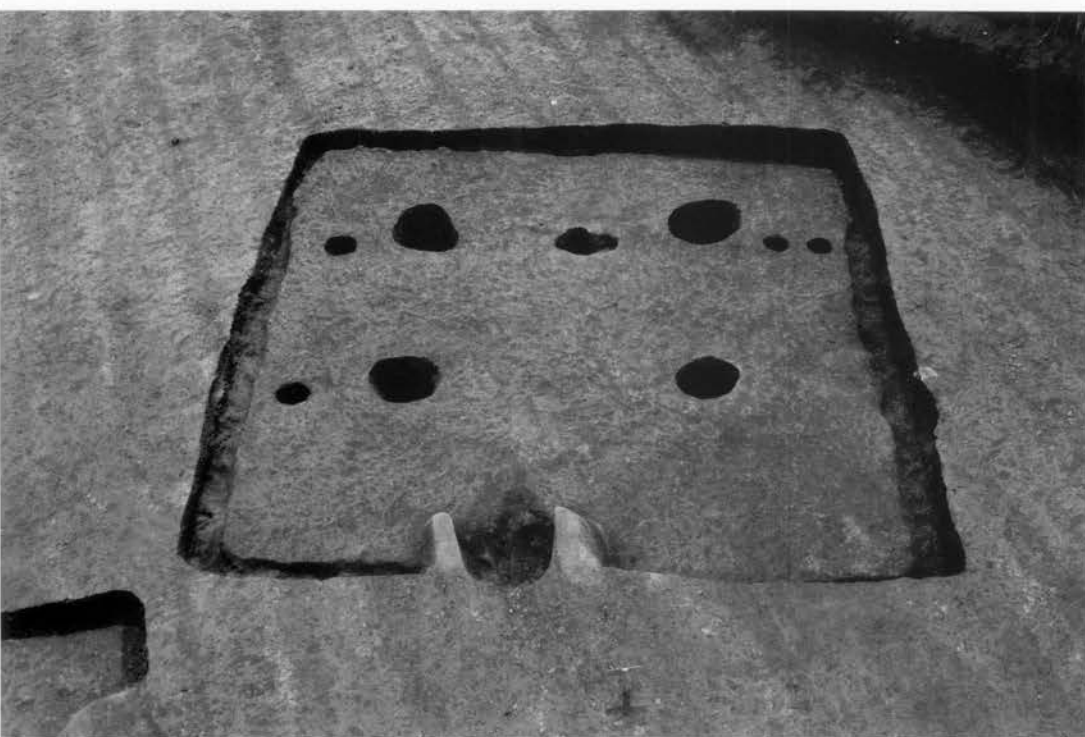
SI 9 · SI 10



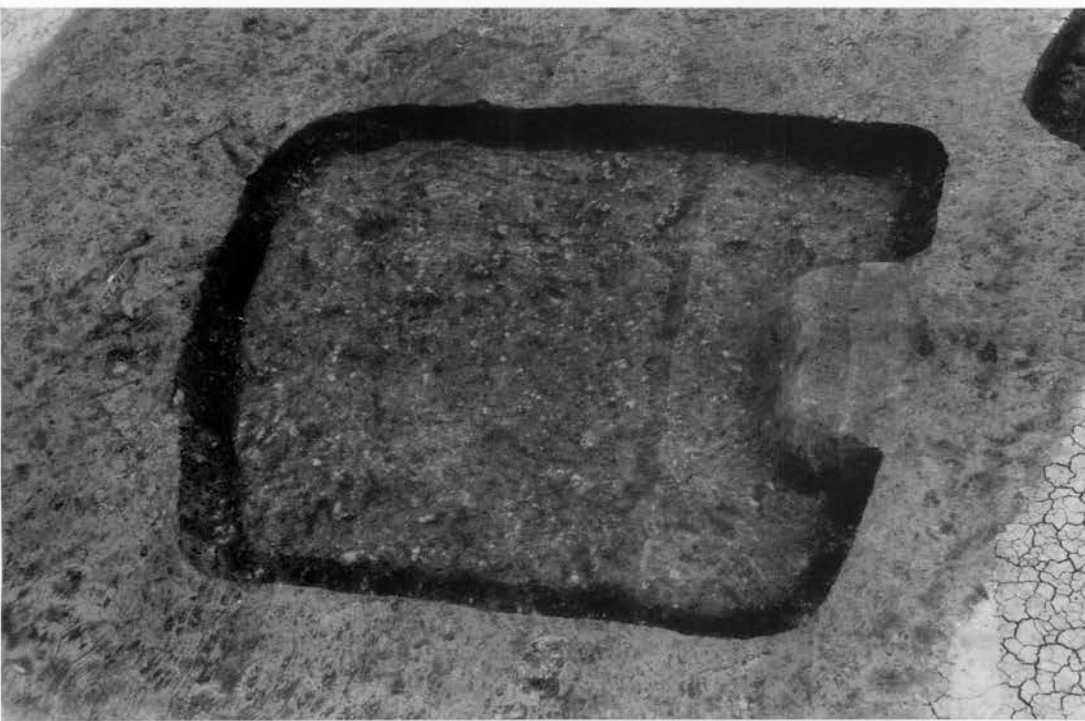
SI 10 竈出土遺物



SI 11



SI 12



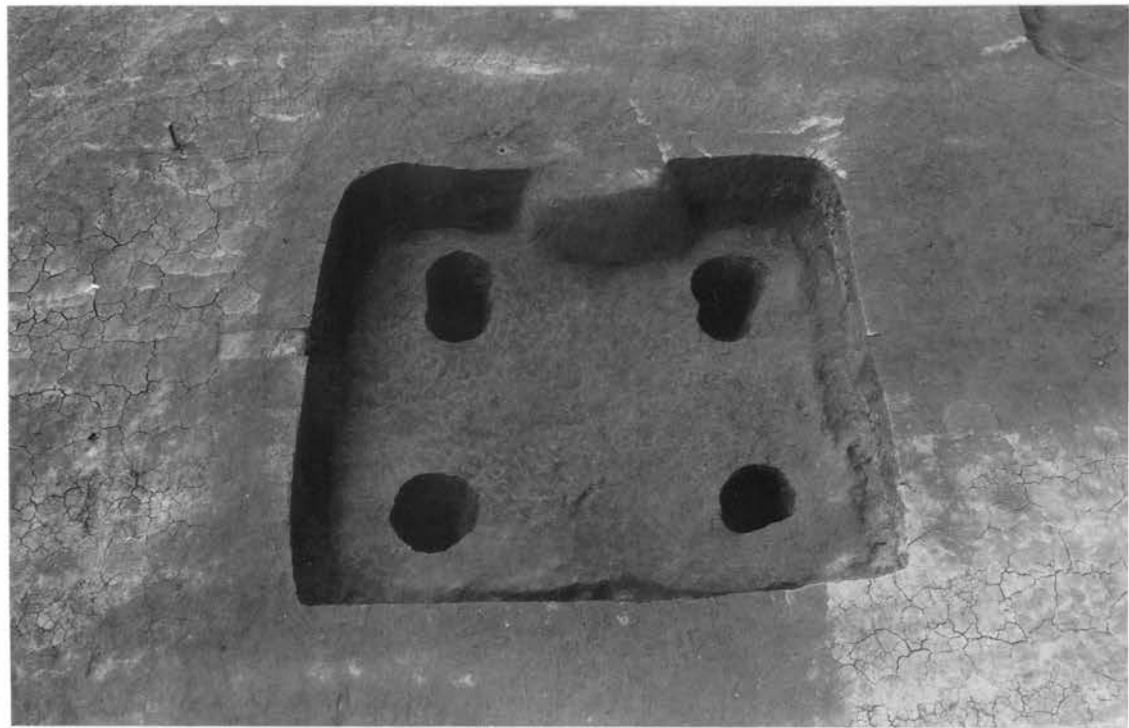
SI 13



SI 14



SI 14 出土遺物



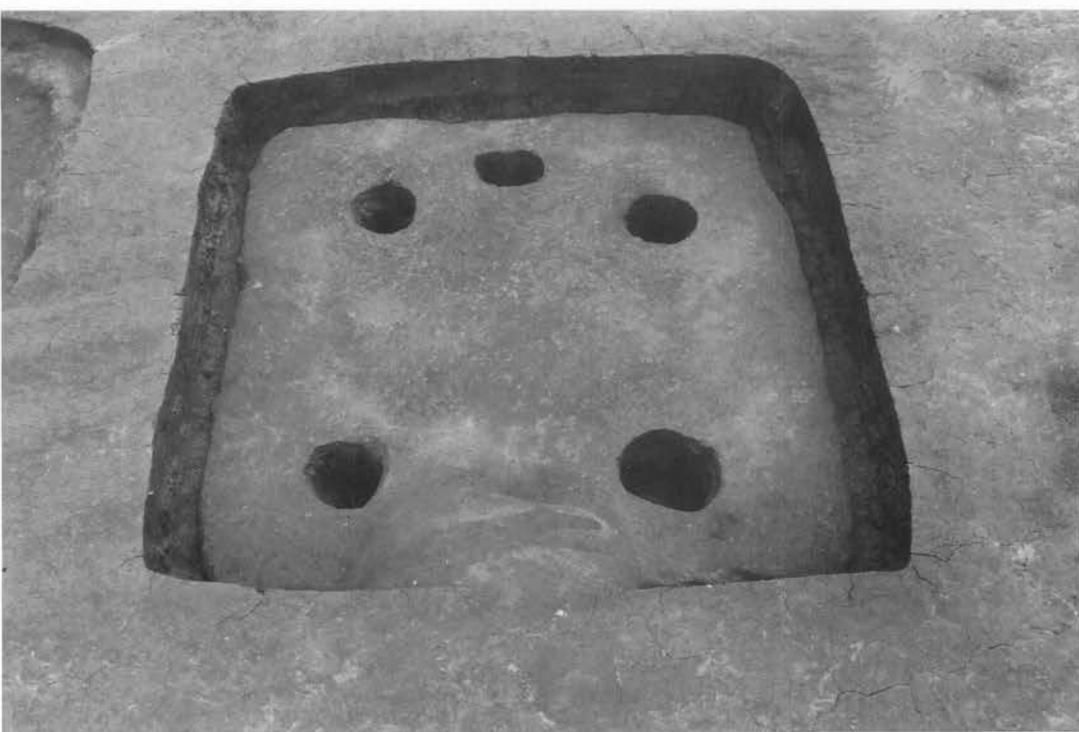
SI 15



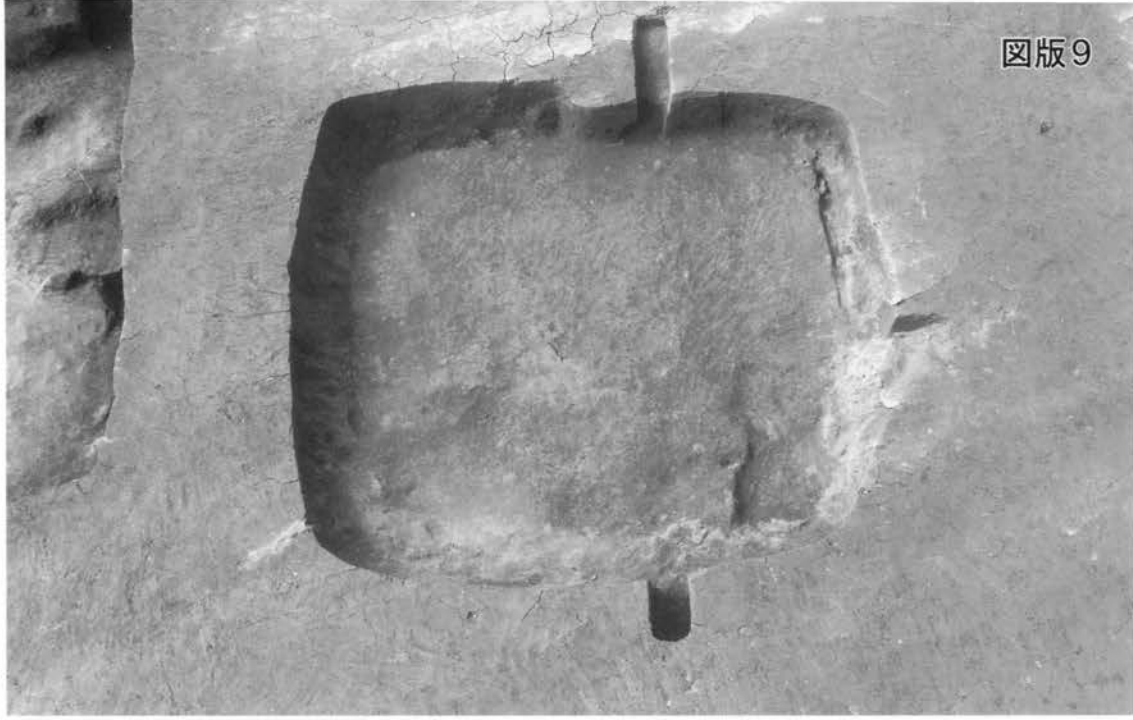
SI 15 出土遺物



SI 15 竈出土遺物



SI 16



SI 17



SI 18



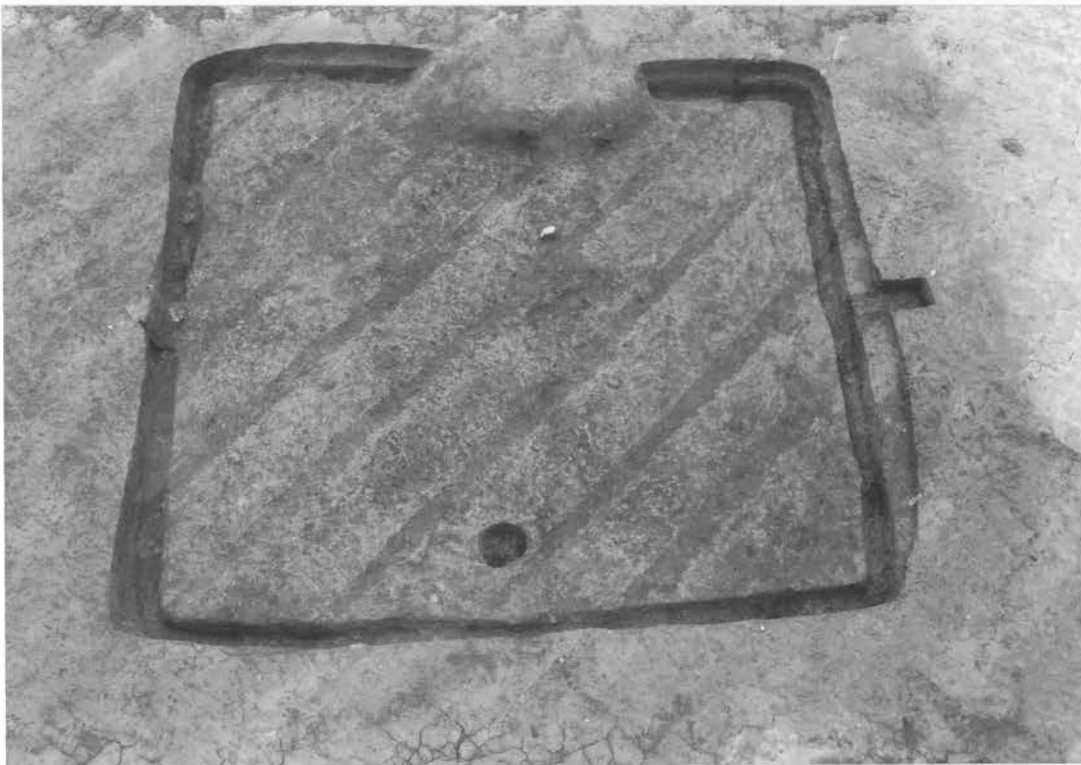
SI 19



SI 20



SI 20 出土遺物



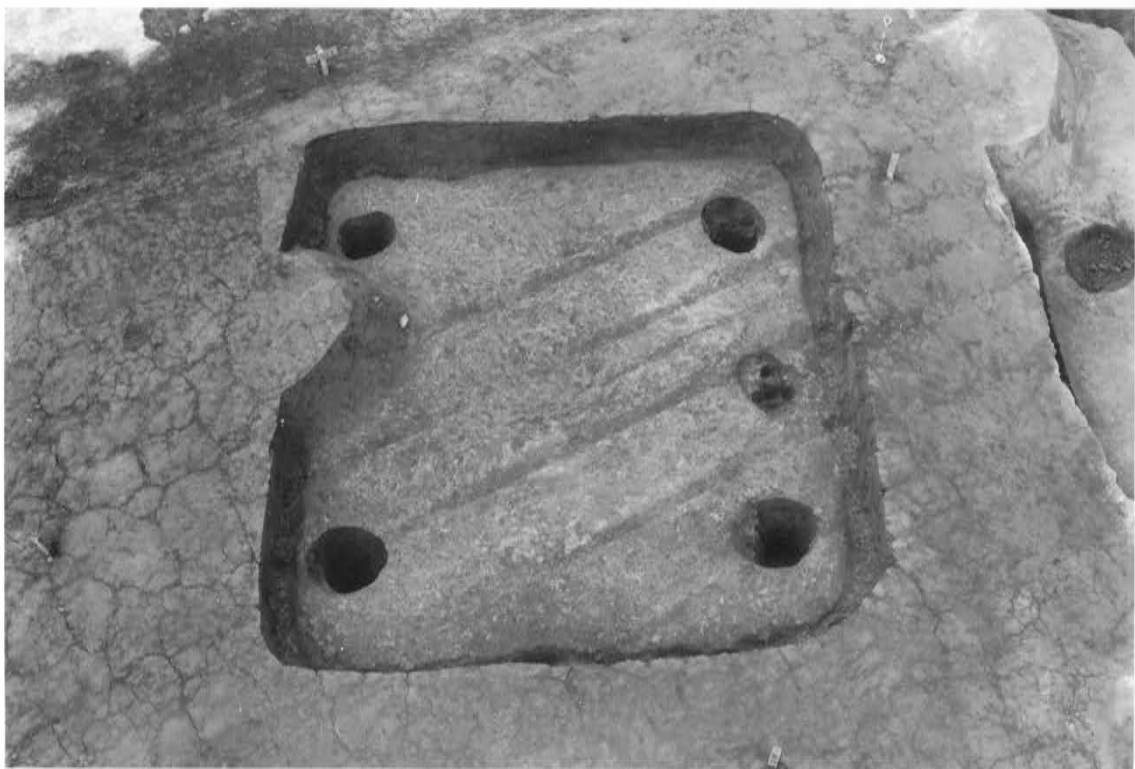
SI 21



SI 21 出土遺物



SI 22



SI 23



SI 23 出土遺物



SI 24



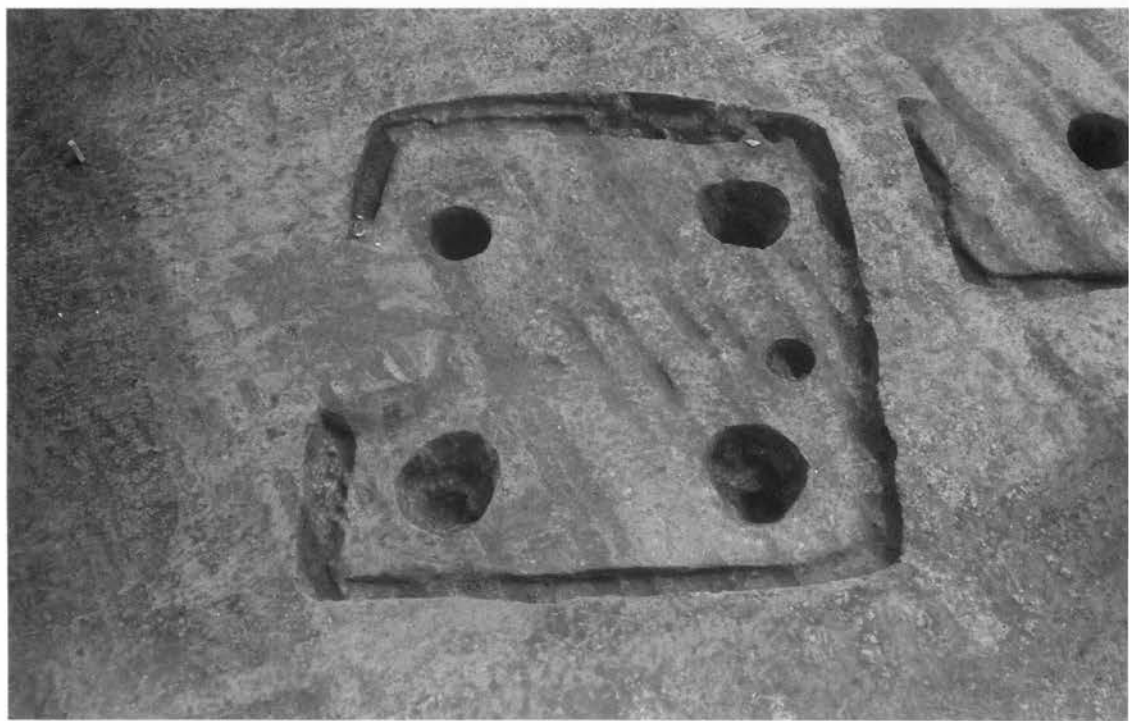
SI 25



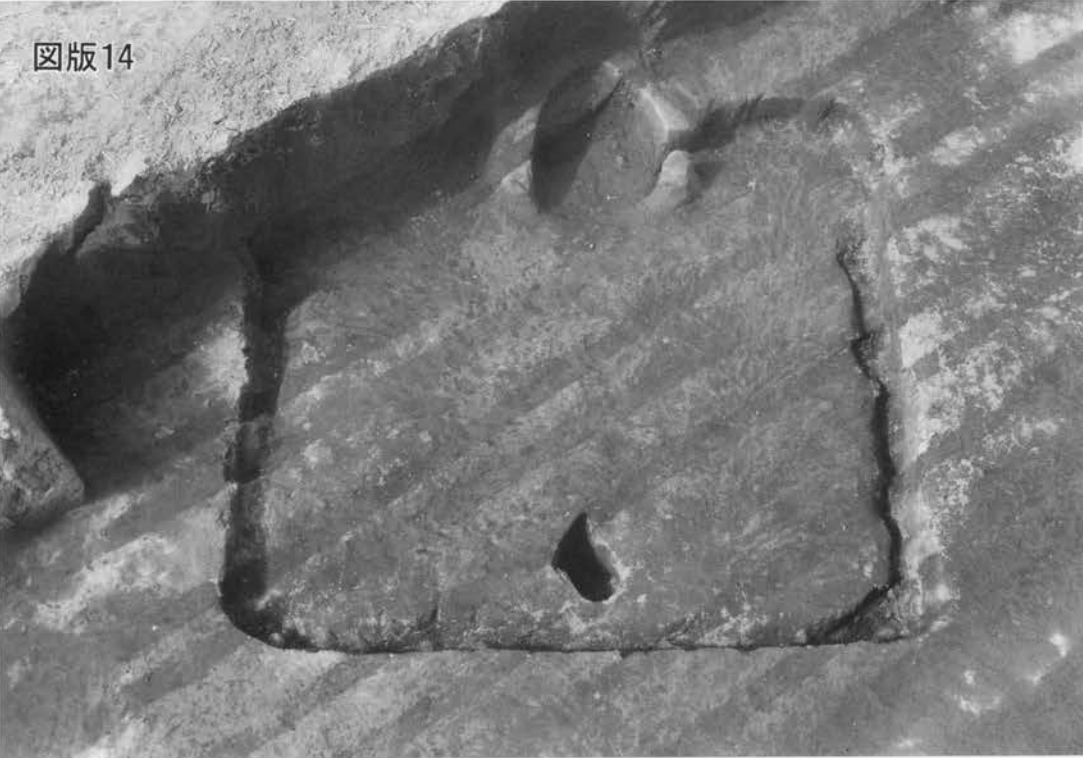
SI 26



SI 27



SI 28



SI 29



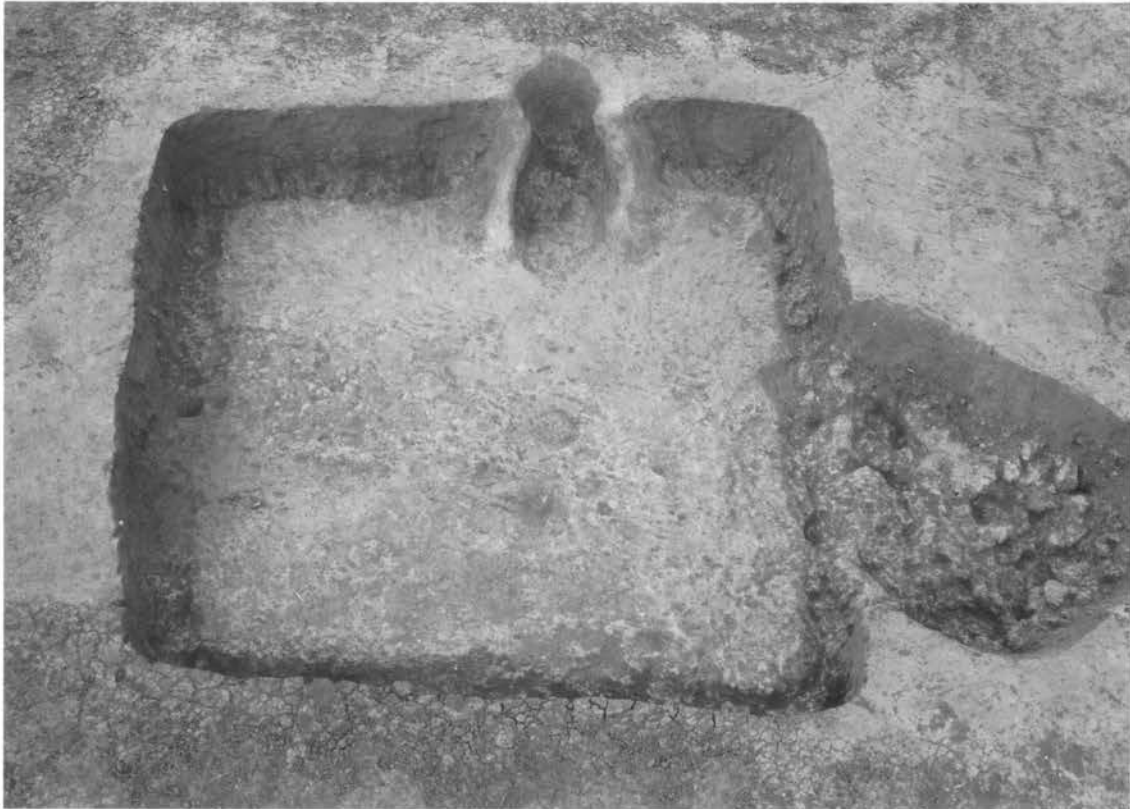
SI 29 竈出土遺物



SI 30



SI 32



SI 33



SI 34



SI 34 出土遺物



SI 35



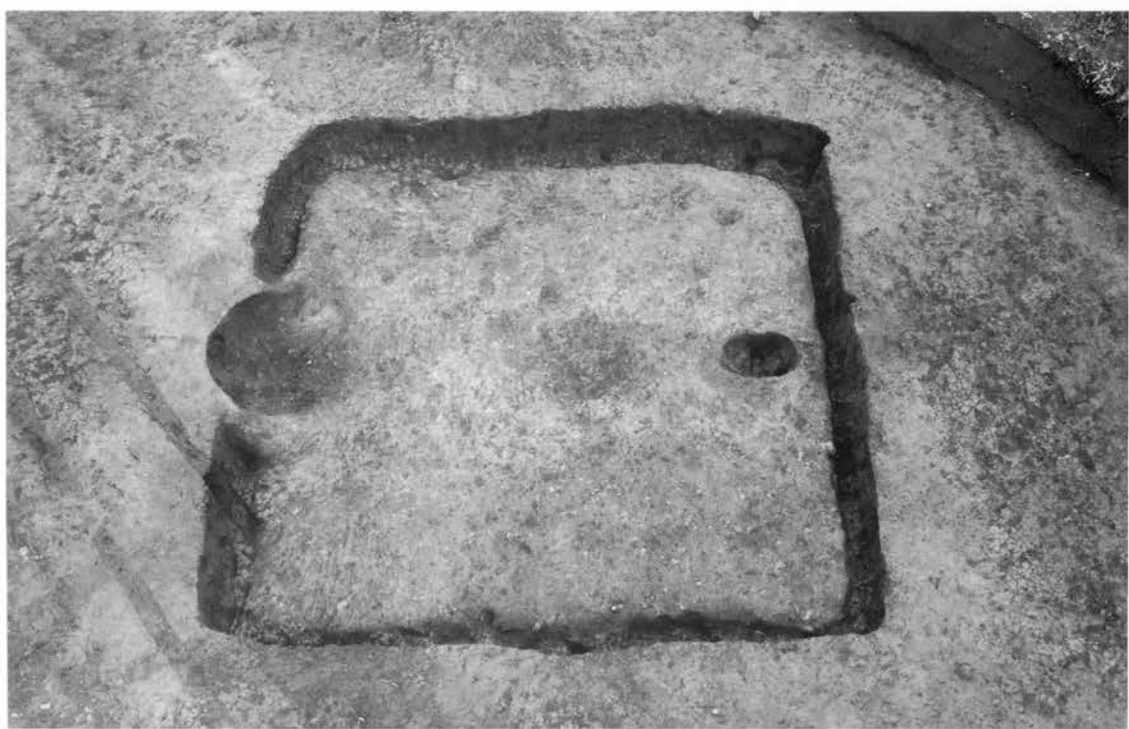
SI 36



SI 37



SI 38



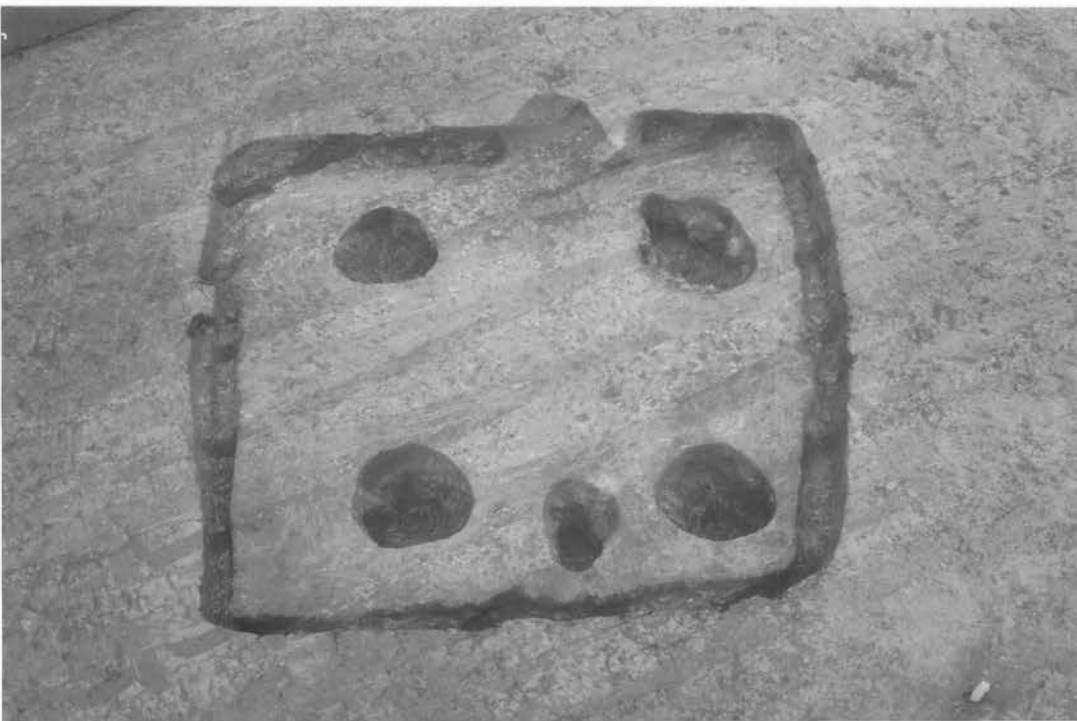
SI 39



SI 39 出土遺物



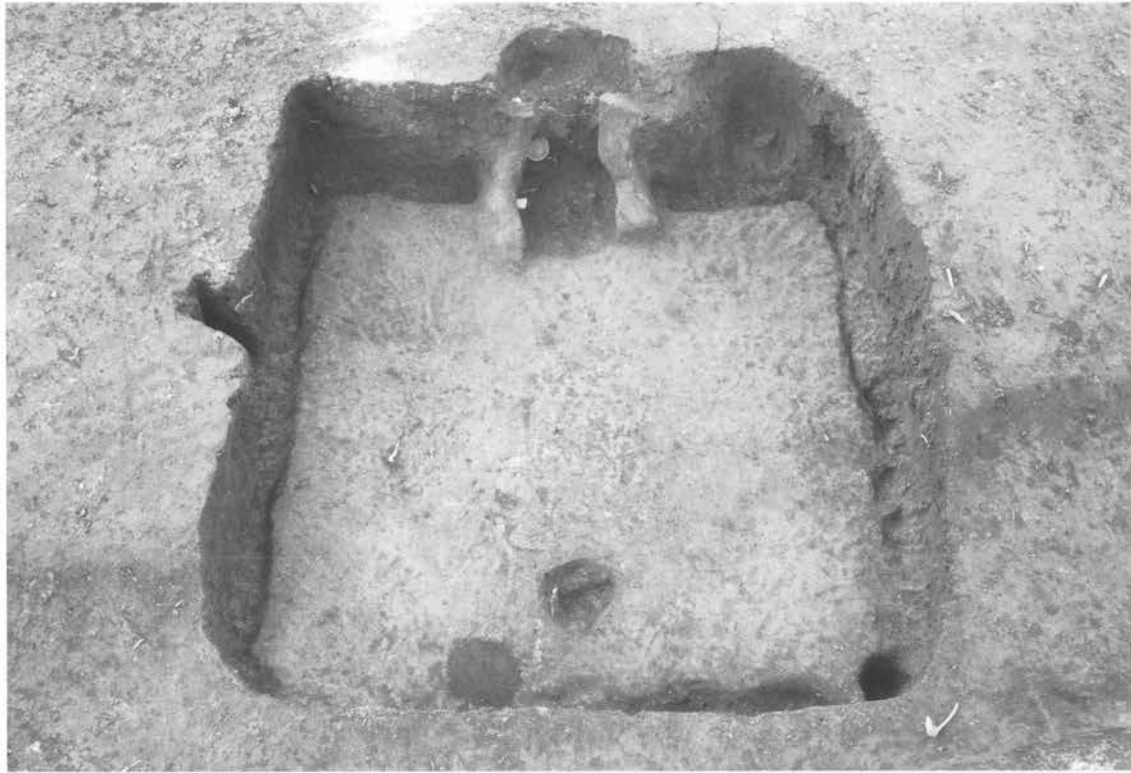
SI 39 竈出土遺物



SI 40



SI 41



SI 42



SI 43



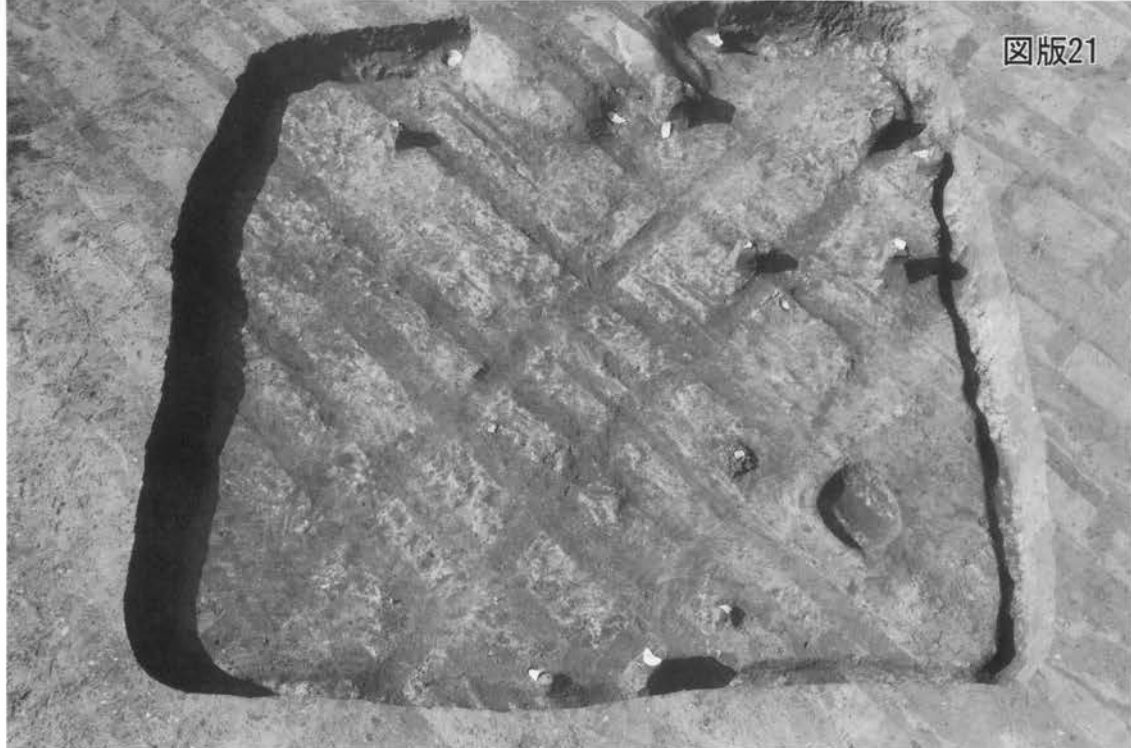
SI 44



SI 45



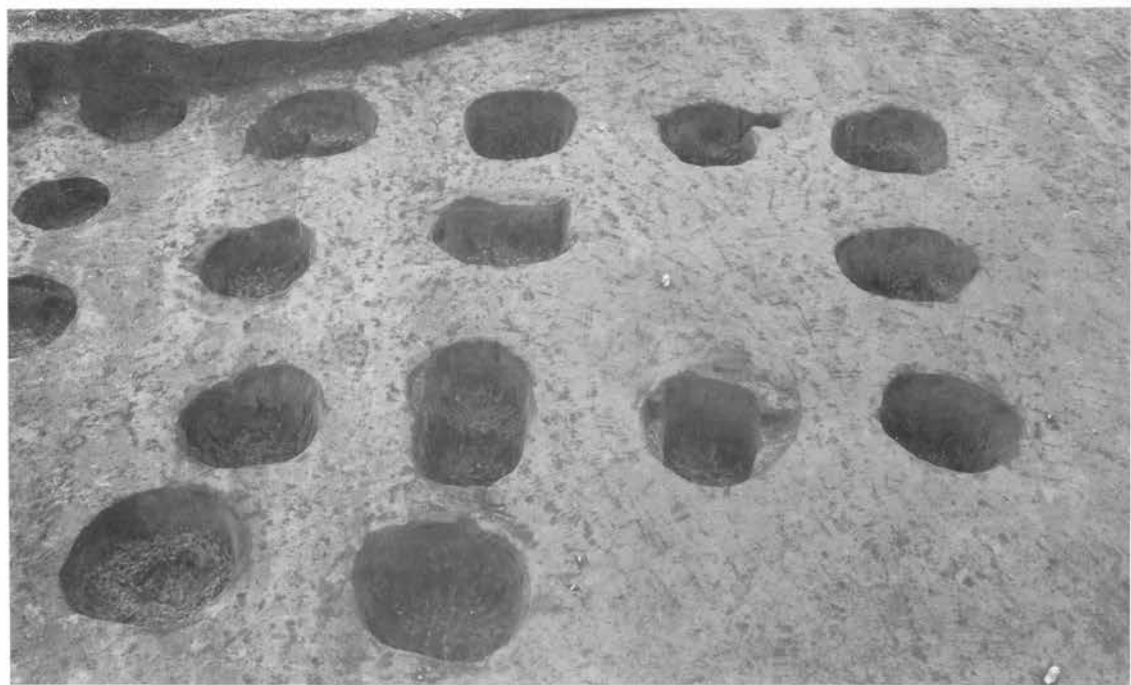
SI 45 出土遺物



SI 46



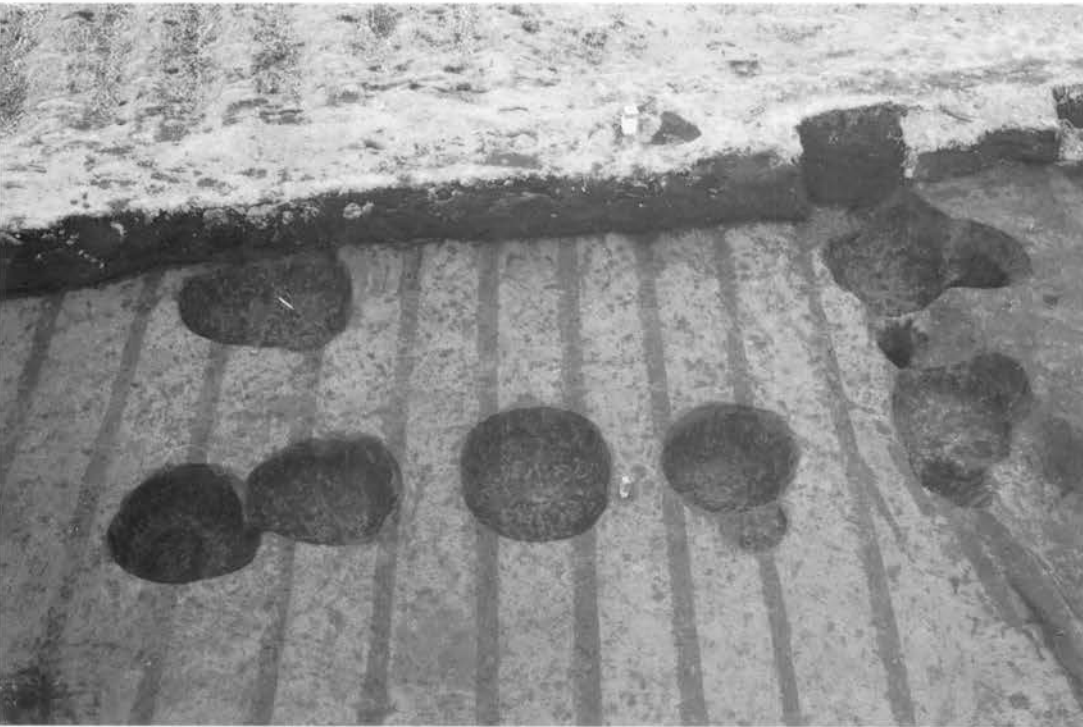
SI 47



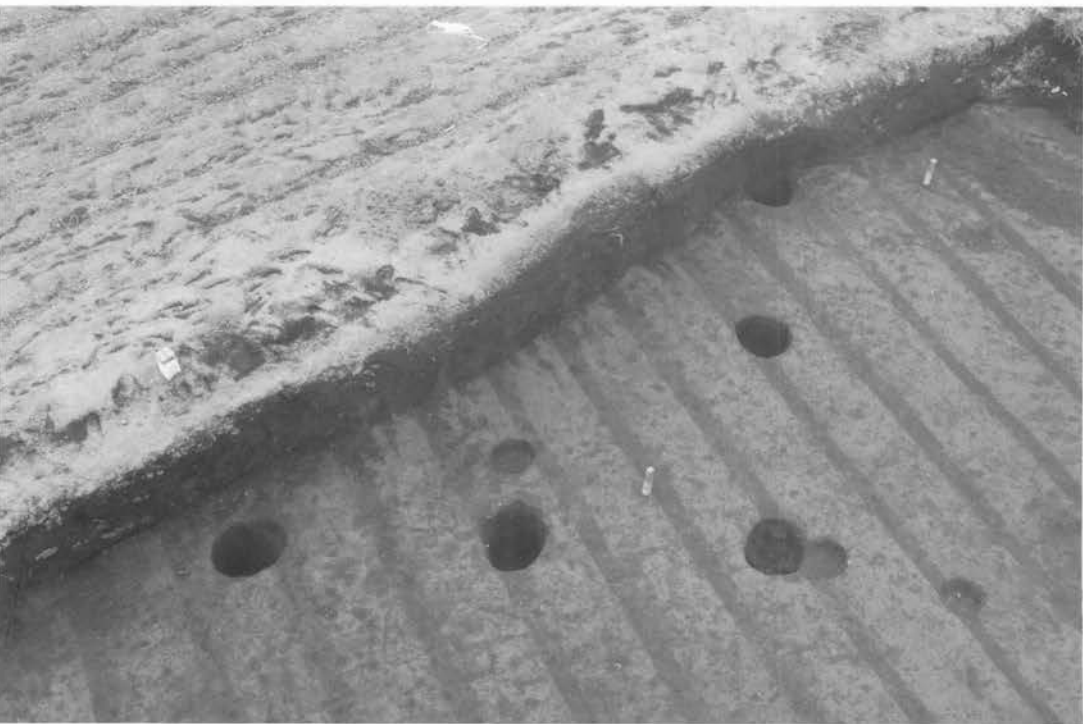
SB 1 · SB 2



SB 4



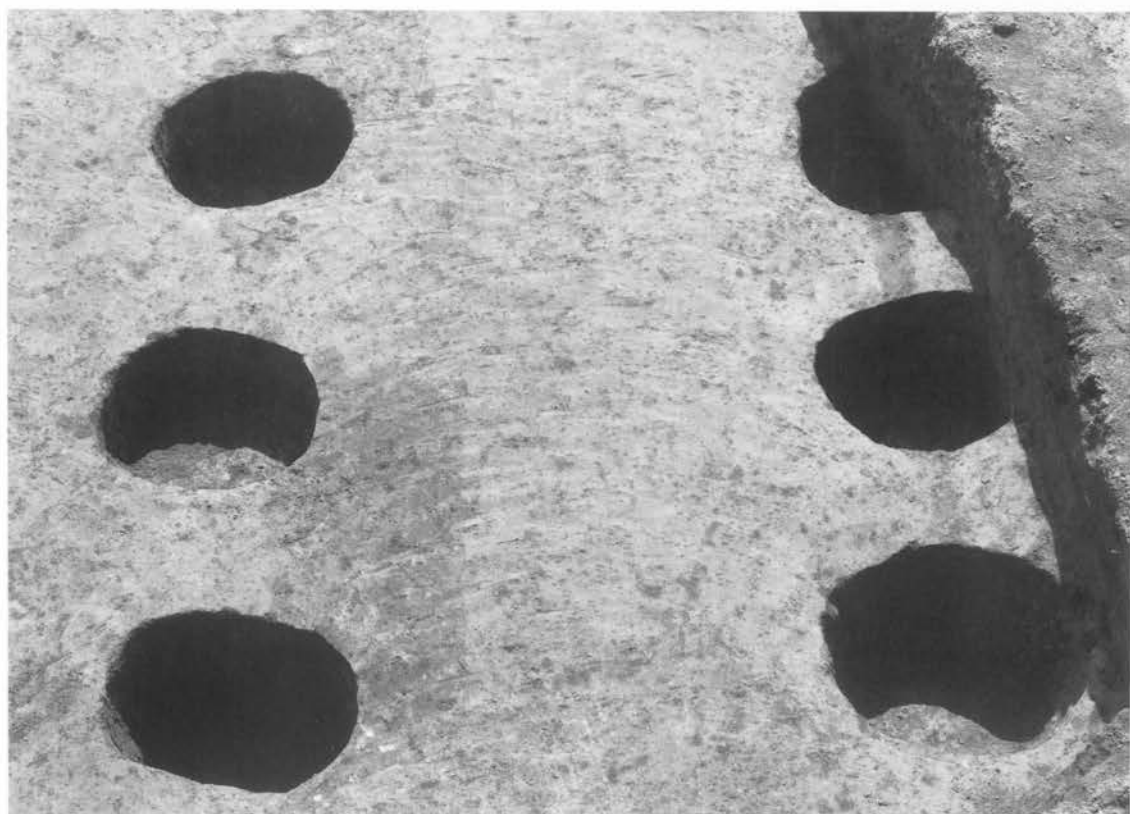
SB 5



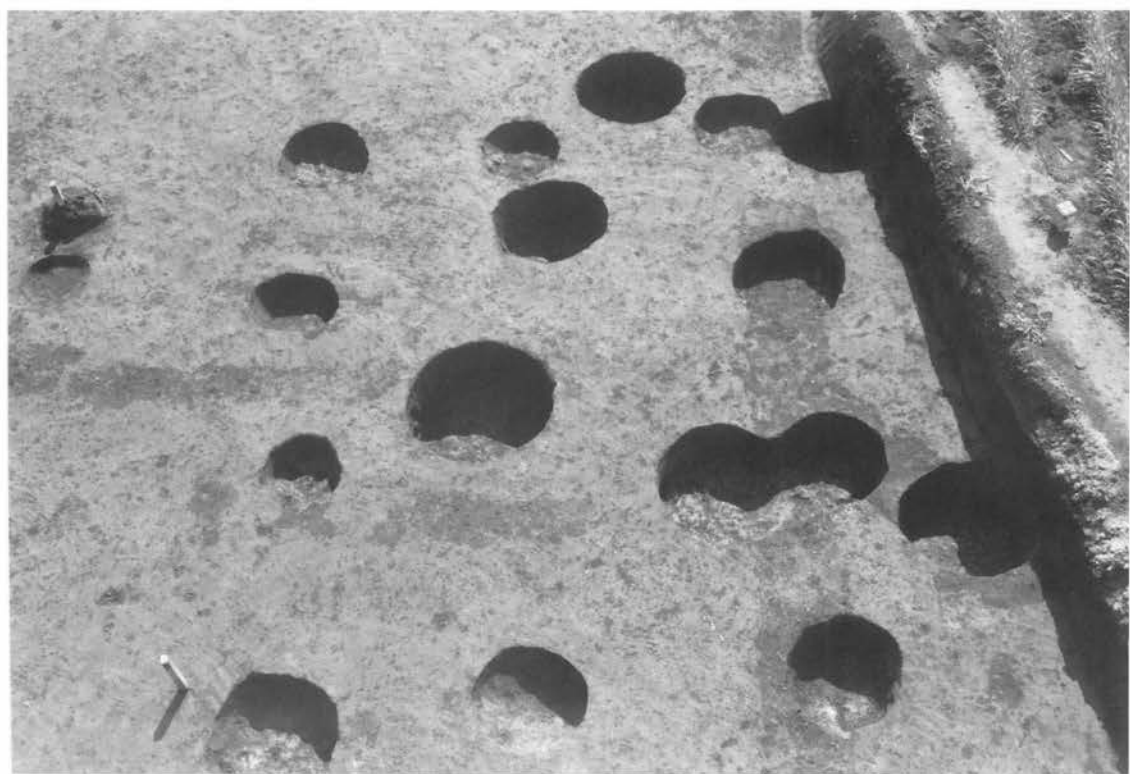
SB 6



SB 10



SB 11



SB 12 · SB 13



SB 14



SB 15



SK 1



SK 2 · SK 3



SK 4 出土遺物



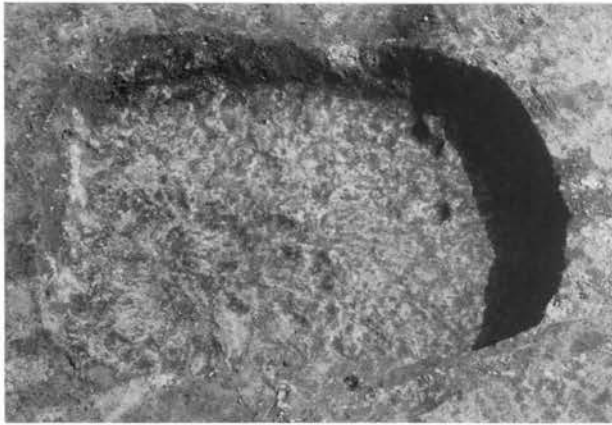
SK 6



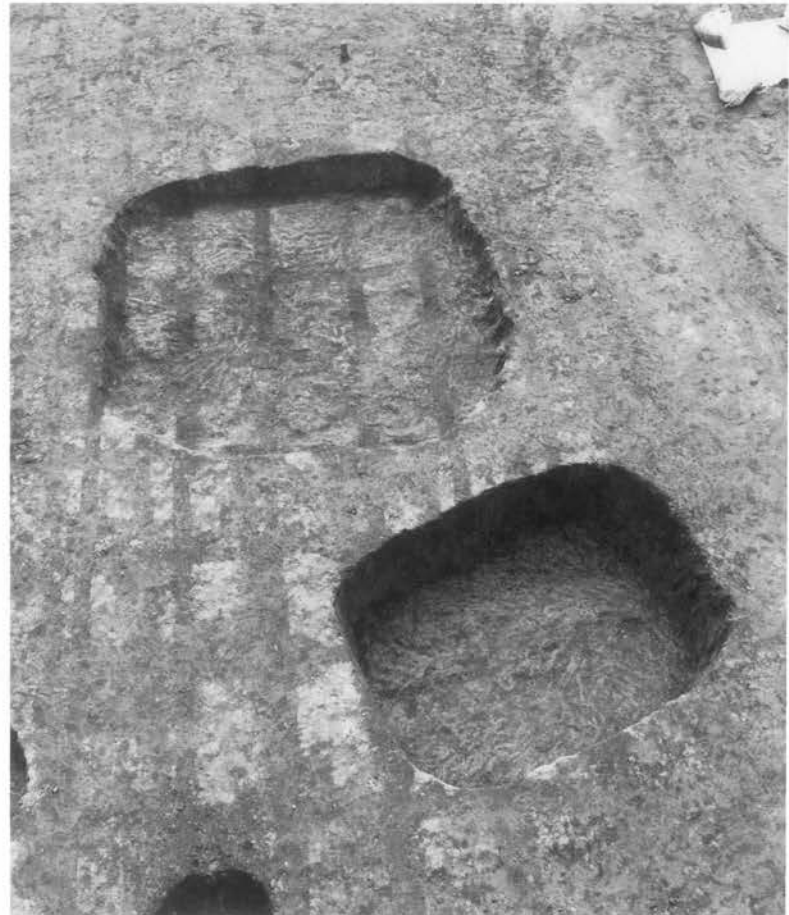
SK 7



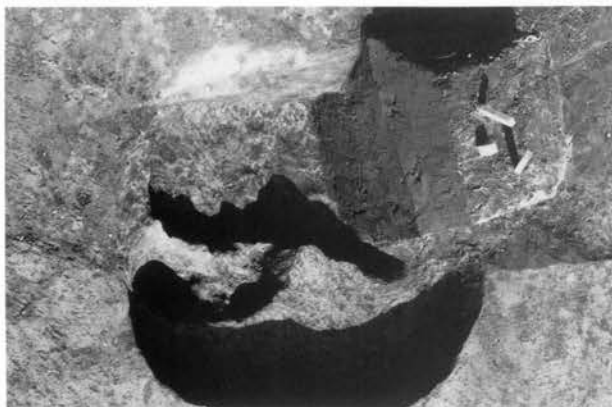
SK 8



SK 9



SK 10 · SK 11



SK 12



SK 13 · SK 14 · SK 15



SK 16 · SK 17 · SK 21



SK 24



SK 26



SK 30



SK 31



SK 33



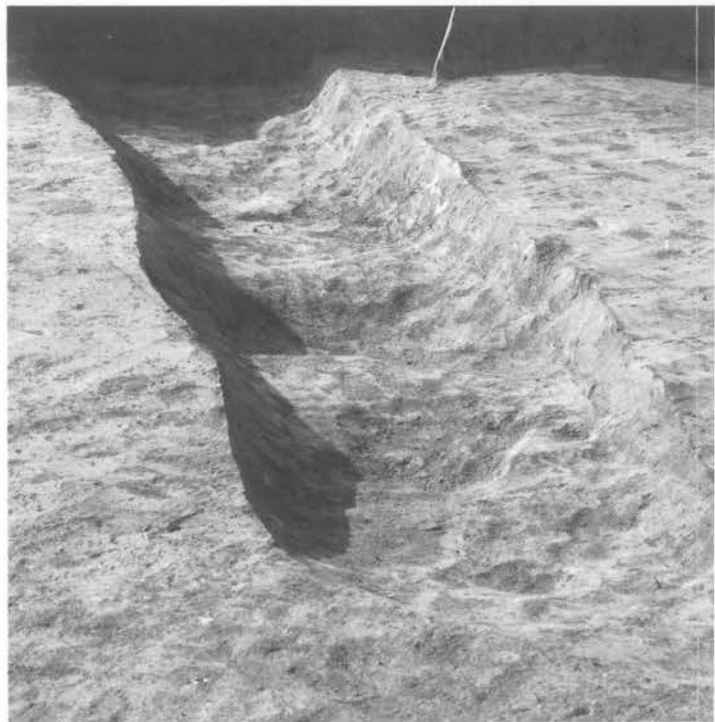
SD 1



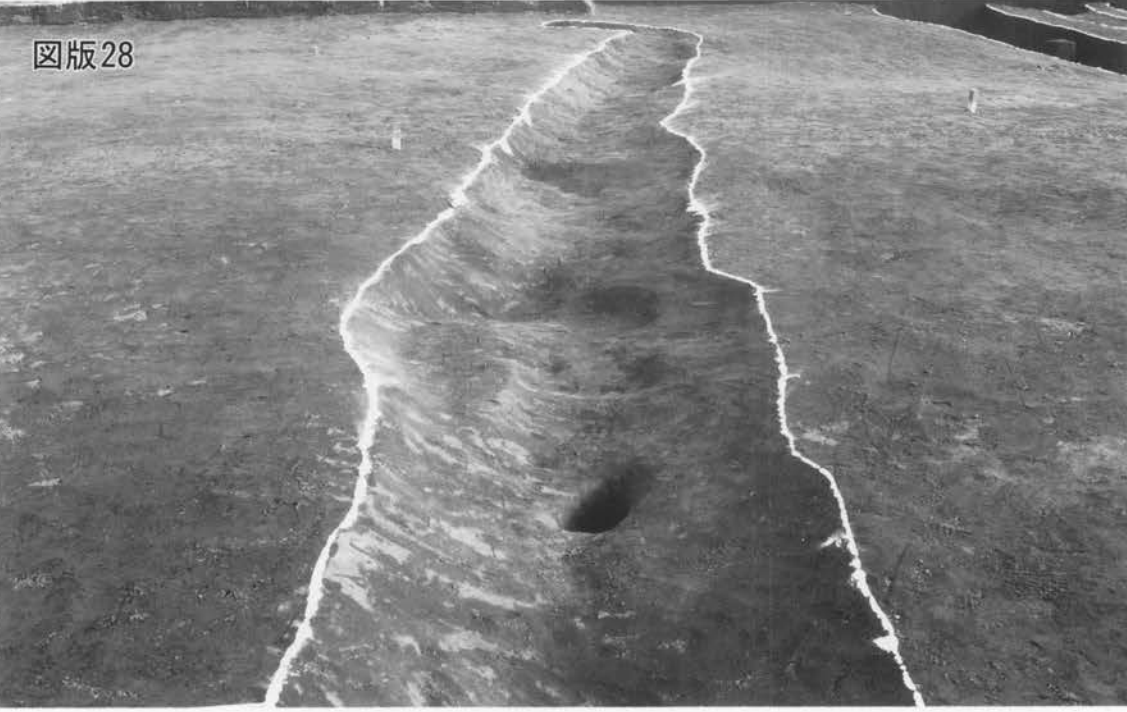
SD 2



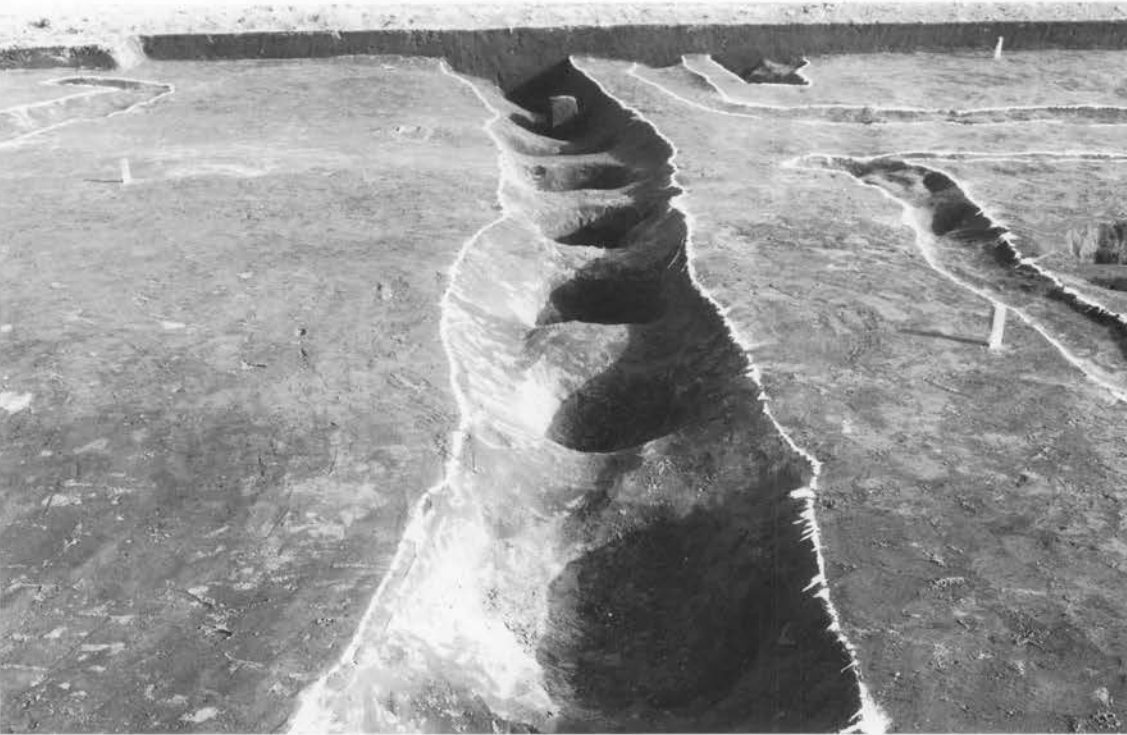
SD 3



SD 4



SD 5



SD 6



SD 7 · SD 8



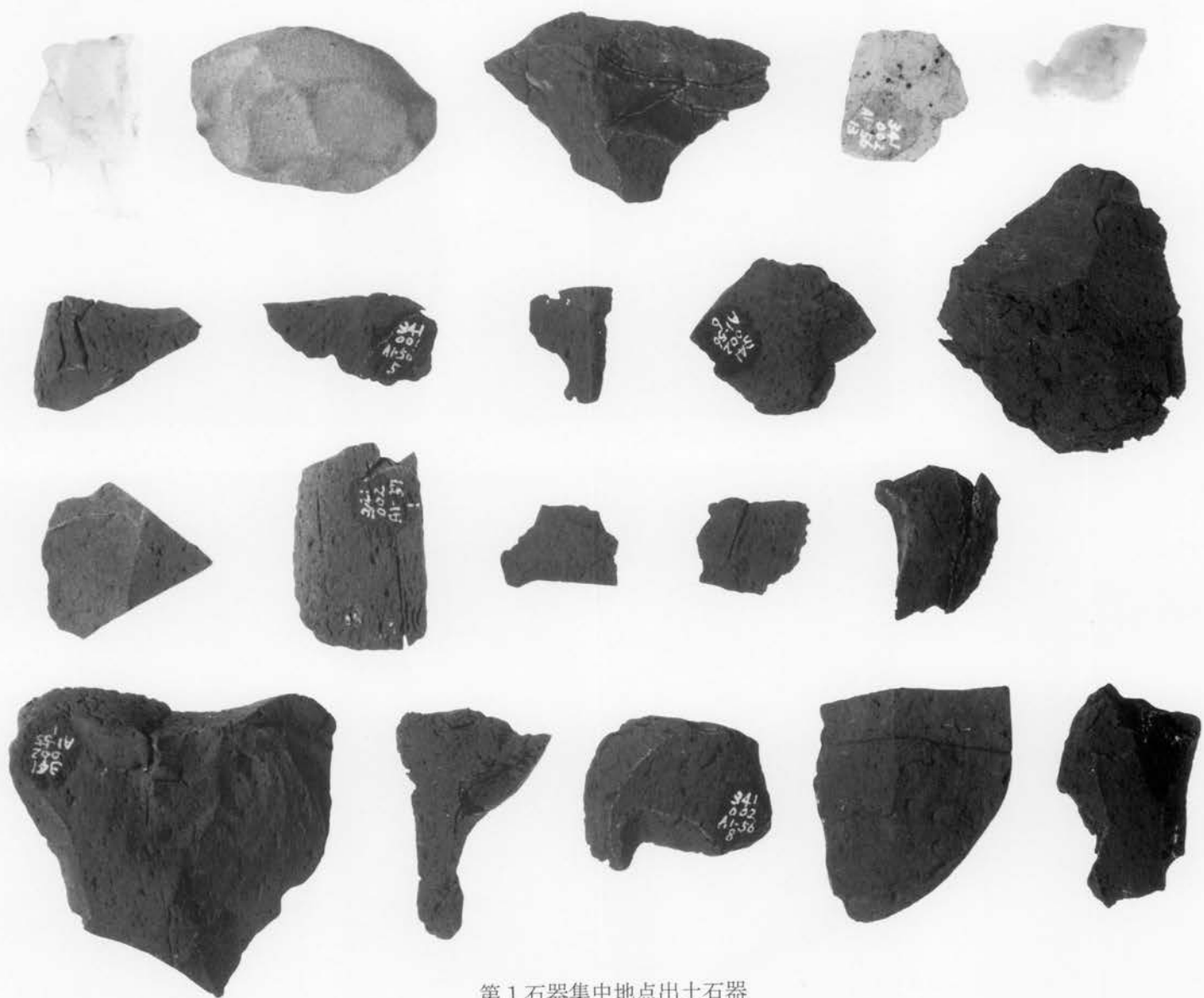
SD 10



SD 12~14



SD 20 · SD 21



第1 石器集中地点出土石器



第2 石器集中地点出土石器



SI 1-2



SI 1-28



SI 1-40



SI 1-6



SI 1-29



SI 1-41



SI 1-8



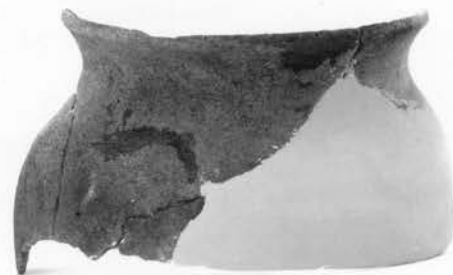
SI 1-30



SI 1-9



SI 1-36



SI 1-76



SI 1-14



SI 1-37



SI 2-2



SI 1-21



SI 1-38



SI 2-6



SI 1-24



SI 1-39



SI 3-7



SI 3-9



SI 3-11



SI 3-17



SI 6-1



SI 6-3



SI 6-6



SI 6-7



SI 6-8



SI 6-9



SI 6-13



SI 7-3



SI 10-4



SI 12-4



SI 14-2



SI 14-4



SI 14-5



SI 14-6



SI 14-7



SI 14-9



SI 14-10



SI 15-2



SI 15-6



SI 15-13



SI 17-4



SI 20-6



SI 17-5



SI 20-7



SI 16-1



SI 17-9



SI 20-10



SI 16-2



SI 18-1



SI 20-11



SI 16-6



SI 18-2



SI 16-7



SI 19-1



SI 21-2



SI 16-8



SI 20-1



SI 21-5



SI 17-2



SI 20-2



SI 22-2



SI 23-15



SI 29-5



SI 23-1



SI 25-1



SI 29-7



SI 23-3



SI 25-3



SI 30-1



SI 23-4



SI 26-1



SI 31-2



SI 23-7



SI 29-1



SI 33-2



SI 23-8



SI 29-3



SI 34-1



SI 23-10



SI 29-4



SI 34-2



SI 34-4



SI 36-4



SI 40-5



SI 35-2



SI 36-10



SI 42-1



SI 35-3



SI 37-3



SI 42-2



SI 35-6



SI 39-5



SI 42-4



SI 35-9



SI 39-9



SI 42-5



SI 39-10



SI 43-2



SI 36-3



SI 40-1



SI 43-4



SI 43-6



SI 45-3



SB 3-1



SI 45-4



SB 12-1



SI 44-3



SI 45-5



SK 4-1



SI 44-4



SK 30-1



SI 44-7



SI 46-2



SK 33-6



SI 44-8



SI 46-3



グリッド



SI 45-1



SI 48-1



グリッド



SI 45-2



土玉・石製品



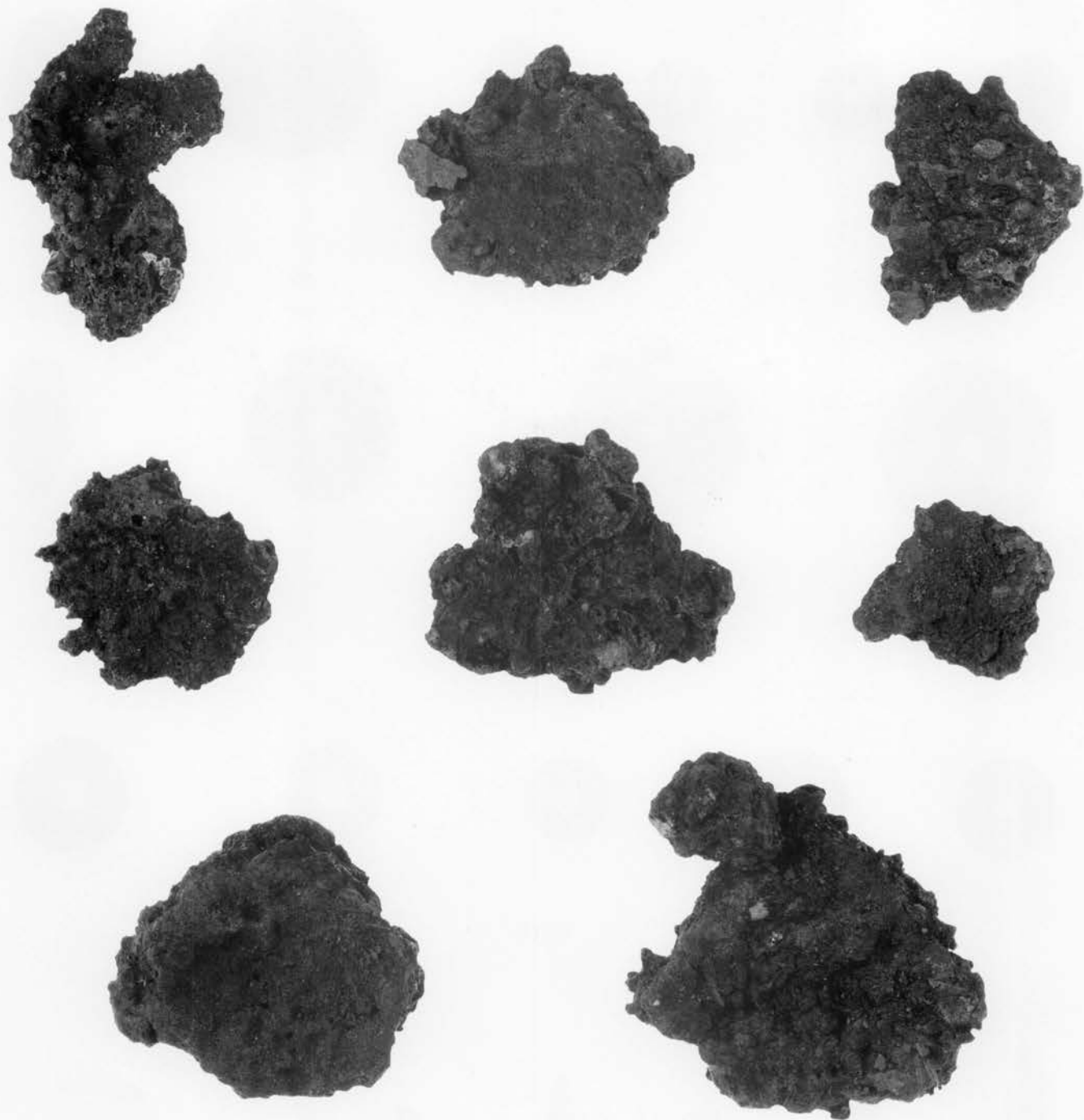
紡錘車



青銅銭



鉄製品



椀形滓

報告書抄録

ふりがな	しもふさまちなぎてんじんだいいせき							
書名	下総町名木天神台遺跡							
副書名	主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第371集							
編著者名	雨宮龍太郎							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なまてんじんだいい 名木天神台	かとりぐんしもふさまちなぎあざむか 香取郡下総町名木字向山 752-6ほか	341	002	35° 51' 53"	140° 24' 21"	19861104～ 19861125 19881027～ 19890330 19890706～ 19891115	8,362	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
名木天神台	集落	旧石器時代 奈良時代 中世 中近世	石器ブロック 1基 竪穴住居 48軒 掘立柱建物跡 12棟 土坑 30基 陥し穴 1基 井戸 1基 溝 18条 柵 6条	フレーク 土師器・須恵器・鉄器 銅銭				

千葉県文化財センター調査報告第371集

下総町名木天神台遺跡

主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成11年 3月31日発行

編 集	財団法人	千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2
発 行	千 葉 県	土 木 部 千葉市中央区市場町1-1
印 刷	財団法人 株式会社	千葉県文化財センター エリート印刷 成田市並木町44-20
